連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 13 No. 1

第49号

June 2022

対人援助学会

No.49　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
障害者福祉援助論	千葉　晃央	016-019
臨床社会学の方法（37）	中村　正	020-028
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団　遊	029-035
カウンセリングのお作法（31）	中島　弘美	036-041
エア絵本　－ビジュアル系子ども・家族の理解と支援－	岡田　隆介	042-055
配偶者を亡くして一年日記（4）	団　士郎	056-080
社会的養護の新展開（18）	浦田　雅夫	081-083
幼稚園の現場から（49）	鶴谷　主一	084-085
福祉系対人援助職養成の現場から（49）	西川　友理	086-091
ああ、相談業務	河岸　由里子	092-095
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	096-100
ドラマセラピーの実践・研究・手法（8）	尾上　明代	101-104
きもちは言葉をさがしている（46）	水野　スウ	105-114
ノーサイド(37)	中村　周平	115-116
路上生活者の個人史（6）	竹中　尚文	117-120
男は痛い！（43）	國友　万裕	121-127
役場の対人援助論（41）	岡崎　正明	128-131
臨床のきれはし（17）	浅田　英輔	132-134
発達検査と対人援助学（8）	大谷　多加志	135-137
講演会＆ライブな日々（31）	古川　秀明	138-143
立場が変わると何かが見える（1）	坂口　伊都	144-149
周辺からの記憶　－東日本大震災家族応援プロジェクト－（35）	村本　邦子	150-168
精神科医の思うこと（25）	松村　奈奈子	169-171
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	172-179
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	180-183
そうだ、猫に聞いてみよう（26）	小池　英梨子	184-193
先人の知恵から（36）	河岸　由里子	194-199
うたとかたりの対人援助学（22）	鵜野　祐介	200-203
ああ結婚（22）	黒田　長宏	204-206
PBL の風と土（21）	山口　洋典	207-212
接骨院に心理学を入れてみた（20）	寺田　弘志	213-217

現代社会を『関係性』という観点から考える	三浦　恵子	218-224
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（16）	迫　共	225-228
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（19）	杉江　太朗	229-232
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	233-236
生体肝移植ドナーをめぐる物語（17）	一宮　茂子	237-242
フリースクールでの SW 実践を考える	高名　祐美	243-244
かけだ詩（9）	川畑　隆	245-249
応援、母ちゃん（9）	玉村　文	250-254
HITOKOMART	篠原ユキオ	255-258
キャリアと文化の心理学	土元　哲平	259-263
新潟水俣病概論Ⅰ（歴史）	本間　毅	264-282
川下の風景	米津　達也	283-284
一語一絵	畑中　美穂	285-287
福祉教育への挑戦	高井　裕二	288-290
対人援助をリブートするこの一冊（6）	渡辺　修宏　他	291-296
中国のセクシャルマイノリティ支援	劉　強	297-298
島根の中山間地から Work as Life	野中　浩一	299-305
かぞくのはなし	きむらあきこ	306-307
新連載 ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（1）	高木　久美子	308-313
原田牧場 Note（9）	原田　希	314-315
対人援助学マガジン読書会報告＆トークライブ告知	編集部	316-317
編集後記	編集長＆編集員	318-319



ハチドリの器 32

見野 大介

Mino Daisuke



左上：コーヒーカップ
左下：ソーサー
右上：デザートカップ
右下：リムプレート





第 49号

執筆者@短信

高木　久美子　新連載

初めて投稿します。意思疎通支援の活動について書いていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。対人援助学会サイトのトップページに書かれている「研究だけに留まらない　実践だけにも留まらない」。この言葉に勇気づけられて思い切って入会しました。マガジンを読むのが大好きです。これからは自分も書けることがとてもうれしいです！

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P308～

きむら　あきこ

本編に記載しましたが、5 月に転居しました。転居後の生活が始まると、住宅の不具合が幾つか見つかって、その対応に追われているうちに、マガジン締め切りのことをすっかり忘れていました。転居前後で、体の不調もあって、通院や服薬の日々です。「老化だな」と思うことの一つに、大好きだったミスチルのアルバム購入や配信ライブの申し込みを後回しにしていること。興味関心がどんどん薄れていくのは、生活行動に精一杯だからだと感じます。夏はもう少し元気にありたい。

かぞくのはなし
P306～

原田　希

亡き母の思い出の椿。その挿木が北海道までやってきた。母が20歳の頃に購入した、お正月飾りの椿の盆栽。結婚後実家を離れた母の代わりに、母の弟（叔父）が地植えして育ててくれていた！叔父も終活を考える年齢になり、「あなたの母が気にかけていた椿だから、手元で大きく育ててください」、とのこと。初めて聞く話だった。54 年前の椿との再会に、私の中にいる母が喜んでいる。暖かい地域の木だし、挿木は赤ちゃんなので繊細なお世話が必要だけど、北海道で根をはらせてみようと思う。うまくできたら叔父に連絡しよう。私の知らない昔話をまた聞かせてくれるかもしれない。



休載

野中　浩一

フリースクール（高校生対象）を運営する中で、そのときどきのメンバーによる楽しみを一緒につくることを大切にしています。今年は「バドミントンとか卓球とか部」を結成。結成当初は「人集まるかな？」と半信半疑でしたが、ふたを開けてみると 29 人の生徒のうち 15 人が参加する一大イベントに。生徒たちに「正式な部にするかは、活動が継続するかどうかを見て決めよう」と伝え、活動をスタートしました。

そして1か月。毎週月・火の練習日は活況。高校生も職員も「一緒に活動」を基本としており、私も 44 歳ながら高校生たちと一緒に毎週バドミントン。やるからには上手くなって良い試合がしたいと、日曜もときおり体育館を借りて家族でバドミントン。張り切りすぎたためか、腰に違和感が・・・。

「島根の中山間地から Work as Life」
P299～

畑中美穂

娘に女の子が産まれてから結構、日が経つ。それなのになかなか“孫”という言葉が使えない。ちょっとした抵抗も感じるのである。使わないので「使い慣れない」でもなく。ところが一度だけ、使ったことがある。まだ産後一月も経たない頃、スーパーで買い物をして人を待っていたとき、たまたま傍にいた年配の女性に話しかけられ、雑談をするなかでつい。

「孫が産まれましてん」。

「あら！ 男の子？ 女の子？ どっち？」「女の子」「あら～、そらええわ。女の子はよろしな」

そして別れた。自分でもなぜ唐突にその話をしたのか、しかしこの時、私は「孫」と言った。もし男の子だったとしても、その人は「男の子はよろしな」と言ったのではないかなと思う。孫と言えば簡単に通じるのであり、だからそれが言葉というものの所以なのだとは思う。それなのになかなか、私は“孫”という言葉を使えない。まぁいいか、とも思うこの頃である。

一語一絵
P258～

渡辺修宏

皆様のおかげさまで執筆させて頂いております。こうやって「書く」ことによってはじめて、普段思っていること・考えていることが

「他者にどう伝わるのだろうか」という、新たな視点が強められます。これって客観？俯瞰？間主観？・・・うわっ！意外とはっきりしない💦

（小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲）

対人援助実践をリブートする
この一冊
P291～

米津達也

仲間と山を登る機会が増えた。これまでは、独りで登ることが多かった。山の天気は気まぐれだし、前日夕方に出掛けることを決めたり、逆に中止することも多々ある。そのたびに予定を調整するのが面倒で、ソロの気楽さを優先してきた。

いざ仲間と歩いてみると、煩わしさもあるが、いろいろ共有することが多い。そん

なメリットを中年になってようやく感じている。

川下の風景
P283～

高井裕二

知り合いから「対人援助学マガジンの記事、読んでるよ」と数名に声をかけていただきました。いずれも非会員の方でしたが、読者が一定数いるというのは嬉しく思うとともに身が引き締まりますね。これからもがんばります！！

福祉教育への挑戦
P288～

本間　毅

今回と次回、私は「幾度となく会い、語り合うことの意味」を改題し、「新潟水俣病概論Ⅰ（歴史）」、「新潟水俣病概論Ⅱ（症候と認定基準の変遷）」を書き下ろします。

本学会 HP のお知らせ欄でも紹介しましたが、近秋の第 14 回大会は新潟を拠点にオンラインで開催することが決まりました。テーマは『新潟水俣病と私たち』です。この「新潟水俣病概論Ⅰ・Ⅱ」で、会員や大会参加者の皆様が「新潟水俣病」を知るきっかけを作るというのが、大会委員長を拝命した私の目論見です。熊本で加害企業と対峙して自主交渉を続けた川本輝夫さんは、「水俣病の被害は、生命・身体の破壊、環境破壊、コミュニティの破壊に分けられる」と述べました。水俣病では、発生機序、原因究明、診断や認定の過程に、国の「高度経済成長政策」が影響したことで被害は多層的に拡大し、いまだ最終的な解決をみていません。

本大会は、会の詳細や演題募集の告知を例年より早く進め、第 26 回と 27 回の「研究会」で「新潟水俣病概論Ⅰ・Ⅱ」の、オンライン講演も行う予定です。

新潟水俣病について、私たち皆で考えてみましょう。

新潟水俣病概論　1（歴史）
P264～

土元　哲平

年度が変わり、私自身も、家族も、新しい生活に向き合っています。そうした中で、「未来が不確かである」とはどういうことなのかを考えたいと思い、今回の記事を執筆しました。書き終わった今、当初考えていた問いに答えが出たわけではありませんが、少しだけ考えが深まったと感じています。どういった着地点に行き着くのか分からないという「偶有性」があるからこそ、執筆は不安ですが楽しいのかもしれません。

キャリアと文化の心理学
P259～

玉村　文

2022 年 4 月に育休から職場復帰しました。仕事復帰してから一ヶ月。新鮮な気持ちで働きながら、子育てとの両立を楽しめています。一方で、職場の中堅職員の疲弊度がすごく高くて、自分との違いに驚愕してしまいました。中堅職員と私の間に、大きな違いはないはず。その疲弊感に染まらないように、自分の働き方をマネジメントしていかなければ。とはいえ、この社会を構成する一人でもあるので無関係には過ごせない。日々、しんどい大変なことが起こる中、自分をその中で消費しないで生きるために、何ができるのか模索していこうと思います。　　。



応援　母ちゃん！
P250～

川畑　隆

30～40 歳近く年下の人たちと一緒に仕事をするようになって、その人たちに助けられている感をとても強くもっています。

もともといいかげんなところがあり、そのうえに記憶力と注意力の減退が重なって自分自身のことが信じられなくなってきている分、頼れる人たちがいるというのは心強いものです。まだ 67 歳なのでそんなに老け込むことはないとは思うんですが、若者との差は出ますね。

老人の仕草やしゃべり方というか声の出し方を、わざわざ意識してやってるようなところが最近あって、演技とホントが混ざってるんですが、これもまだ自己防衛のあらわれなんでしょうか。頓珍漢なことを言って（それは演技じゃなくてホントなんですが）それが恥ずかしくて老人だからまあいいかと自分を納得させたり、頓珍漢な言葉を否定してもらって正しい道を選択してもらうのが頓珍漢の意義であり役割だと正当化してみたり、これって若い時に読んだ老人心理の本のどこかに書いてあったかな。

「若い者にゃ負けん」とか言いますが、負けてます。いずれにせよ、バトンタッチの時期は来ています、というかもう過ぎてますね。

かけだ詩
P245～

高名祐美

平日毎日勤務からパート勤務へ。週 3 日、週の真ん中、火・水・木と働く。土日をはさんで金曜日から月曜日まで休日。働く日数より休日の日数が多い。最初は物足りないような気分だったが、このサイクルになじんできたこの頃。

平日の休日。今までできなかったことができる。銀行や郵便局に出かけたり、図書館に出かけたり。時間を持て余すことがないのが不思議である。

今日は、朝から近くの山に行き、夫はタケノコを掘る。私は水ぶきを採る。藤の花や山つつじ、たにうつぎの花が美しい。緑の中にうす紫、オレンジ、ピンクの花。大きく息を吸い込み、花を眺める。家に帰り、水ぶきの葉をとり、大きな鍋でゆでる。きれいなグリーンに変わる。花は生け花にし、タケノコ・ふきはお昼ご飯のおかずに。あっという間に時間が過ぎる。

対人援助はやりがいのある仕事だが、こんなふうに言葉をもたない自然のものと向き合うのもまた楽しい。

フリースクールでのSW実践を考える
P243～

岡田隆介

今回は「独りでリフレクティング」をやってみた。「一人のリフティング」と違って形容矛盾だが、フリーイラスト素材の選択と調整が楽しくて没頭した。

「才能は“好き”の傍らに眠っていて、見つけられるのを待っている」らしい。パワポ

芸を天職に！遅すぎる転職か？

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P42～

一宮　茂子

【ロシア軍のウクライナ侵攻】

いま世界中で話題になっているウクライナ。SNS で調べるととても複雑な背景があることがわかります。1991 年ソ連崩壊後にウクライナが独立して誕生。以降、大統領選挙では親ロ派と親欧米派が争ってきたのですね。2004 年には親欧米派政権が誕生する「オレンジ革命」が起きましたが、次の選挙では親ロ派が勝利。その親ロ派政権も 14 年に崩壊します。ロシアが反発してクリミア半島に侵攻し、併合を宣言。それまでに数名の大統領が代わり、2019 年ゼレンスキー氏が NATO 加盟を公約に第 6 代大統領となりました。2022 年ロシア軍がウクライナに侵攻して連日メディアで取り上げられています。



平和な日本にいると TV 画面でその惨状は理解したつもりでいても現実はもっと凄まじいことが起きていると思います。私にできることはただひとつ「募金」くらいです。いつまで続くかわからないロシアの侵攻。心ばかりですがウクライナのために「日本ユニセフ協会」に寄付いたします。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P237～

松岡　園子

今年度から高校での金融教育が必修化されましたが、10 代、20 代で家族のケアを担っている若者だけに限らず、小学生の頃からお金の教育を受けているかどうかということが、その人の人生の質を左右することもあるのではないかと考えています。

私は 10 代から生活を支えるために働く必要がありましたが、ただ働くばかりでした。しかし、働いて得たお金を守っていくことの認識が薄いと、今号で描いたテーマのように一瞬で無くなってしまうことも考えられます。私自身もお金の教育を受けてきておらず、家庭内でもそうした話をすることはありませんでした。そのため、他の方よりもお金を守ることに関しての認識の甘さを感じることがあります。

計画的に使う、詐欺に遭わない、はっきりと断る。

ケアを担っている若者だけに限らず、知識や知恵として知っているだけでも自分や家族を守ることができることがあるのなら、今後、そうした若者への教育活動にも携わっていきたいと考えています。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P233～

杉江　太朗

福祉部門の行政機関で働く杉江と言います。少し前のお話ですが、カフェドゥスギエのコーヒーが手に入らない時期がありました。Am●zon で注文しようとしても品切れ、スーパーで買おうとしても売り切れ・・・。もともと輸入品らしいので、おそらくコロナ等の影響でしょう。同じような話で、施設を新設されている園の施設長さんも、木材が輸入されてこないから、工期が遅れていると話していました。それ以外にも、ガソリンの高騰、小麦製品の値上がりなど考えると、今後、カフェドゥスギエの仕入値も値上がりすることが十分に考えられ、ついにコーヒーも値上げをしなければいけないかもしれません。そういえば、1本 10 円の某棒が、12 円になったとか・・・。そのことを思うと、まだまだ短い商売。長く続けられる方法を考えていきたいものです。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P229～

浅田　英輔

青森県は、心理判定員の採用もなかなかがんばっている。R3 と R4 で 8 人の新採用がおり、児相にいる同年代たちはその育成にいろいろと苦労しているようだ。20 年以上前になるが、私も偉そうな新人だった。新採用 7 人が毎月集められ「心理テストカンファレンス」として検査のことを学んだ。第 1 回の題材は田中ビネー。「初めて田中 B をとるときに、ビデオ撮影しろ」という指令が下され、カンファレンスでみんなで見てみるものだった。偉そうな私は「ちゃんとやりました！」というが、実際の映像は手順や教示がおかしなものだった。これは非常に恥ずかしい。でもここで「うわー、はずかしい、偉そうにいってて間違ってるし！」とちゃんと落ち込むことは大事なのかなと思ったりもする。イマドキの若者は間違いたがらないというが、間違いを認めるってこんなことでも難しいのかもしれないなと思う。間違いを認められた若かりし自分はエライ！

臨床のきれはし
P132～

三浦　恵子

昨年2月に引き続き、3月16日に東北で大きな規模の地震が発生した。

当方は遠距離介護をしていた関係で週末に抗原検査をした上で仙台に戻ることが多い。週明けは「はやぶさ」の始発に乗れば8:30から業務が開始できる。しかし地震が起きた週は、新幹線に乗る直前に転倒し肋骨骨折により救急搬送という体たらくだった。骨折を繰り返していた箇所ではあったがさすがに痛みが強く、医師からの安静指示もありすぐには動かず少し安静にしてから勤務先に戻る段取りをした矢先の地震だった。

そうなると「変なスイッチ」が入ってしまい、どんどん片付けなどをしつつ仕事もし、挙句は夜行バスで勤務先に戻るという強行軍をやってしまった。気力でなんとか凌ぐ
つもりだったが、体は正直なもので、夜行バスの揺れで痛みをこじらせ長引かせることになった。反省しきりである。ただ、ロシアとウクライナの情勢が急速に悪化していた時期でもあり、資材が十分入らず修繕などは遅れがちである。損壊した物置一つを買い替えるにも今回の戦争の影響があった。

そういうわけで連休中もおとなしく読書に勤しむ日々だった。業務に関係する大きな法改正などもあったためチェックしておきたい専門書が山のようにある一方、「読みたい」本もこれまた多くある。

今回は「スープとあめだま」（ブレイディみかこ作）という絵本（といっても大人も十分考えさせられるもの）に魅かれた。実際に御子息が体験されたことがベースとなっ

た本である。フードバンク活動等の端に加わっているものとして考えさせられた。その一方で、配偶者が読んでいた「犬神家の戸籍 「血」と「家」の近代日本」（遠藤正敏氏）も、戸籍関係の研究が多い著者ならではの視点が興味深く、配偶者の読了を待っているところである。

更生保護護官署職員

（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える

P218～

迫　共

所属先が変わり、住まいも変わりました。3 月上旬に静岡から広島へ。2 日がかりで慣れない高速道路で車を移動させました。荷積みと移動と荷降ろし。職場と住まいを全部一気に。もう 2 度としたくないくらい疲れました…。

県をまたいでの転職・転勤は大きなギャンブルでもあります。

荷物を整理し、人間関係や仕事も整理して、多額の引っ越し費用と時間、労力を負担して行うのですが、自分が身近に置いてきたものやこだわってきたことの価値を見直すことにもなるので、「人生の棚卸し」にもなります。

「ストレス対策には環境を変えるのが一番」と言います。今のところ、その意味を噛みしめられる程度には新しい環境を楽しめています。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P225～

黒田　長宏

5月11日。4日前だったかな、健康診断の結果をみたら、乳首のような陰影が広がっているかも知れないというので、本日再検査をした。CT をした。スタッフ構成の関係で結果をみた当日から数日、不安ながら今日を待っているしかなかった。そして結果だが、乳首のようなというよりも、それは乳首だった･･･。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚

P204～

尾上明代

月に一回、文字通り身体を整えるために、整体を受けている。才能と技術を師匠である父から受け継いだ整体師 T さんは、毎回、最初に背骨を順に触るだけで、最近の私の生活状況や感情などがすべてわかってしまい、驚きを通り越して感動を覚える。ちょうど今日受けたのであるが、「食べ過ぎですね。特に甘いものが増えているようなので、何とか控えてください。」「目の疲れが酷いですね」と言い当てられた。最近、いつも以上に大量の仕事と取り組んでいて、一日、いや夜中まで PC の前に座っていることが少なくなかった。そんな自分を癒し喜ばせるものは、美味しいごはんとおやつ、夜中のデザートだった･･･。

そして、今日の私の身体には、その整体で言うところの「ねじれ」があると言う。それは一概に悪いものではなく、スポーツ選手などによくみられるとのこと。いわば「戦闘モード」でやる気が満ちて何かに立ち向かっている状態だと言われた。私が「その通りで、今、多くの仕事を頑張っているところ」と伝えると、T さんは、「では、ねじりはとらないでおきますね。とってしまうとやる気がなくってしまうので」と教えてくれた。あとは、水分が足りてないのでもっととること、お風呂に浸かるのは短時間にすること、足首をよく回すこと、そのとき内側に回して終了すること―もちろんこれは、「今の私の状態」用のアドバイスである。甘いものを控えるのが一番こたえそうだが、ハチミツは OK とのことなので、夜中はヨーグルトとハチミツにでもしよう。

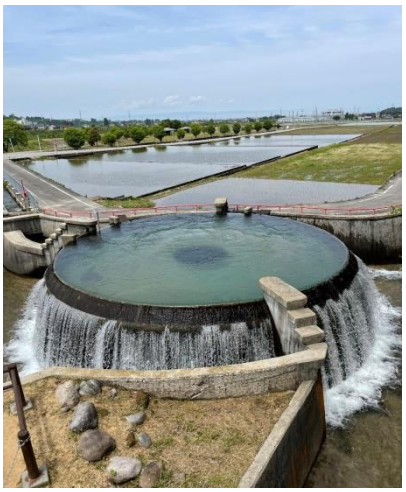
ドラマセラピーの実践・手法・研究

P101～

松村奈奈子

修学旅行生が再び訪れるようになって、京都の街はちょっとにぎやかに。なので、私も旅に行きたくなり富山県の東部にふらっと出かけました。

小さな街の小さな観光案内所を訪ねて、地元の方からいろいろお話を聞くのが好きです。魚津市の小さな観光案内所のおばさんは「東山円筒分水槽」を熱心にススメます。「円筒分水槽」って何かも知らないまま行ってみたら、ちょうど雪解け水で、流れはなみなみとして美しく、魅了されて1時間ほど眺めていました。日本一美しい「円筒分水槽」だそうです。やっぱ、旅っていいなぁ



精神科医の思うこと

P169～

柳　たかを

聖書から考えたこと

人の肉体は魂の入れ物、私たちは人の外面を見ているが、神は人の魂だけを見ておられる、その人の外面の美醜や富者か貧者かは関係ない。

聖書にあるアダブとナビブの滅びとその死の意味、モーセの兄アロンは主(神)につかえる司祭でアダブとナビブの二人は司祭職を継ぐ長男と次男。

ある日、二人は酒に酔い、主にささげる聖なる火のルールを自分の考えで無視して行なったため、主の怒りを受け焼き殺されてしまった。

これだけを聞くと主のなされることは厳格過ぎるようにも思えるが、作者(創造主)にとって被造物(人間)が粗悪ならば躊躇なく取り除くのはむしろ当然で、ましてや創造主のされることならば、被造物である人間が反論する余地もない。

主に敵対する悪魔が成した最大の仕事は、人間に自分本位に物事を考えるようにさせたことだという。だから人間は飽くことなく偶像崇拝(人造神を信じる)をくりかえす。

生きることは一寸先の未来が見えない不安と背中合わせ。

この世で進もうとする道が安心安全なゴールへの道だとの保証はなかなか見つかるものではない、生命保険など各種保険が繁盛するのも、人が自分本位の考え

方をしているため生じる不安から解放されないのが大きな理由だと思う。

ならば自分中心・自分本位をやめればいいのではないか、でもどうやって？

自分からはなれる、握って離せないものを手放し代わりの何かを掴む、何かに掴まる。

ボンヤリとその掴まるべきものが見えている感じはあります。でも一、弱い自分はここで言ってしまわず胸の内で反芻するだけにさせて頂こうと、、、答えは聖書にということで。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P172～

団遊

まだブログが目新しかった頃の話。

アソブロック株式会社を立ち上げた当初のぼくは、暇だったことと、ホームページを見てもらいたい気持ちもあって、団遊日記という名で、どうでもいいような小噺を書き連ねていました。

ライバルが少ないこともあって、しばらく経つと「読んでいますよ」「笑いました」なんて声が届くようになり、調子に乗って「何か事件に遭遇しないか」と、毎日アクシデントが起こりそうな方へ足を向けては、ネタを拾っていました。ラジオの帯番組をしているパーソナリティってこんな気分なんだろうなあと思いながら。

やがて社業が忙しくなり更新頻度が減り、さらに何度かホームページを改修するうちに、バックナンバーもどこかへ行ってしまいました。当時は前しか向いていませんから、そのことを気にすることもなく、20 年が経ち、先日久しぶりに気分が乗ったのと、書きたい出来事に遭遇したので、当時のリズムで原稿を書いてみました（ https://note.com/danasobu/n/n9dd2f22eb148 ）。



すると、「ああ、これだ。これが俺には向いている」と再認識。改めて時々書き連ねようと心に決めたのですが、そうなると過去の原稿が惜しくなってきました。「あれがあれば、何らかの形で公開できるのに」。もう読めないがゆえに、何か「ものすごく面白いことを書いていた」気もしてきます。それで、そんなことをフェイスブックに投稿してみたところ――。

「ぼく、全部持っていますよ」と、古い友人からリプライが来ました。書いた本人ですら持っていない原稿を、綺麗にそろえて保管している友人。おかげで無事手元に 40 本余りの原稿が手に入ったのですが、同時に「これがデジタルタトゥーか！」と思い知った瞬間でもありました。

人を育てる会社の社長が
今考えていること
P29～

村本邦子

コロナ禍の状況がどうなのかもうさっぱりわからなくなってきたが、2022 年度を迎え、大学は基本的に対面授業と決まり、日常が戻りつつある。3月にブルース・ウィリスが失語症で俳優を廃業という記事を読み、「自分もこれかも･･･」とかなり真剣に気になっていた。一定の年齢過ぎてから、人の名前が覚えられないとか、単語が出てこないとかいうことはよくあって、脳の老化は仕方ないとあまり気にしてなかったが、本当に何でもない単語が出てこなくなって（たとえば「玉ねぎ」とか！）困っていたのだ。春から対面授業となり、症状が少し改善したのを感じて、内心ホッとしている。この2年間、なんとなくのんびりしていたような気がするが、やはり人と会わない、話さないで、言語脳が錆びれてきていたのか!?　このひと月、忙しくなりすぎて仕事に追われているが、それはよいことなのかもしれないと自分に言い聞かせている。ほどよく忙しさを加減するのは難しい。

周辺からの記憶　―東日本大震災
家族応援プロジェクト―
P150～

國友万裕

今日は教会に行きました。そこで思いがけず、かつてお世話になった先生が亡くなったことを知らされました。その先生は 80 歳くらいだったはずなので、早死にというのではないのですが、やはり一人亡くなると寂しいです。

これから徐々に周りの人が死んでいくと思います。僕も徐々に人生が先細りになっていくのを感じます。僕の母は 60 過ぎてから人生がひらけた人ですが、僕にはどういう 60 代が待っているのでしょうか。

これから洗礼を受けるために勉強を開始します。洗礼は「天国へのパスポート」とも言われるとのことです。僕も天国に行きたい。しかし、死んだ後のことは誰にも確実にはわからないので、神に祈って、日々を精進するしかありません。

僕は僕自身が傷つきやすい性格なので、できる限り人を傷つけないように生きているつもりですが、でも、どこかで誰かを傷つけてきているんですよね。僕を傷つけてきた人たちも、僕のことなんか忘れている。傷つけられた方は死ぬまで続くトラウマを背負うけれど、傷つけた方はほんの些細な気まぐれ。

僕の知らないところで僕を恨んでいる人もおそらくいるでしょう。天国に行ったら、それが誰かわかるのでしょうか。

人間って悲しいです。

男は痛い！
P121～

古川秀明

久木山さんとはじめたオープンダイアローグが少しずつ広がってきています。こんな嬉しい事はありません。私も年齢を重ね、気がつけば先輩という年上の人と一緒に仕事ができる機会がめっきり減った今日この頃。貴重な先輩にご指導いただく機会に恵まれ、とても幸運だと思います。まだまだおじいさんが二人でがんばりますよー。皆様もどうかご安全に。

講演会＆ライブな日々
P138～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

5 月 20 日、対人援助学マガジンの読書会で、私の文章を取り上げていただきました。そして今回の文章はほぼその時に皆さんとお話させていただいたことです。

創刊号から連載する中で、本当にこのマガジンに育てていただいてきたんだなぁ

と思いました。なぜだか、何がそうさせるのか、といったことはよくわかりませんが、この場に書くことで多くのことに自ら気づかせていただく環境に居らせていただいたのはもちろん、近年では「長く続けていると気づくことが増えるなぁ」というメタな気付きも生まれてきています。原稿料も出ないのに、レスポンスだってそんなに返ってこないのに、私だけでなく、60 人近くの人がこんなこと（連載）を続けている、不思議な場所です。

お金じゃない、何かを提供して、何かを得ることが出来て、何かが回っているのです。名付けるのなら、「知と心の豊かさ」とでもいうものだと思います。たぶん、お金よりも、豊かで、美味しいものです。

読書会を企画運営されたマガジンの編集部の皆さま、参加された皆さん、ありがとうございました。13 年目もどうぞ、よろしくお願いします。（とかいいつつ、やめる時は突然やめると思います笑）

福祉系対人援助職養成の
現場から
P86～

坂口伊都

最近、ラジオを以前よりも聞くようになりました。この番組と決めてはいないのですが、いろいろなテーマの話をしていることが面白いです。普段気にもしないような風力発電のことを聞いたり、家で上手く作れないなと思っていたチャイの作り方を聞いて、試してみたら、意外と美味しくできて嬉しくなっています。

番組途中に曲が入ったりしますが、長時間よく話が続くなと感心したり、言葉が詰まったり、あの、えーと、というような話す時の癖も出ず、話のテンポや声のトーンも聞きやすい。練習しているのでしょうか。言葉が次から次へと出てくることに羨ましさを感じます。いろいろな人の話に興味津々な今日この頃です。

家族と家族幻想
P144～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

【久しぶりの海外】前回体調が悪かったと書いたことで多くの方からご心配いただいたが、3 月 11 日にブースターを打ったら（そのせいかどうかはわかりませんが）突然湿疹が治った。そして新年度を無事に迎えることができた。5 月にはアメリカに行く予定だったので、コロナ感染が再び拡大し始めて、やきもきしたが、何とか行くことができた。滞在は友人の家に泊まることになっていて、いろいろお土産やら準備していざというときになって、彼女の旦那様がコロナにかかったという。彼女自身は陰性だと言うが、一緒に住んでいる以上、いくら階を分けても心配である。（実際その後彼女も感染した。）そこでホテルを取ると伝えたら、別の友人と調整してくれて、彼女の家に急遽泊めてもらえることになった。

13 時間余りのフライトはちょっときつかったが、無事に到着し、順調に友達との再会を楽しんだ。ところが、途中で携帯をなくしてしまった。おそらく車から降りるときに落としたのを気づかず、誰かに拾われてしまったのだろう。いくら探しても見つからないので連絡して止めてもらった。止めたのは良いが、日本に帰るにあたって、MySOS という検疫用のアプリと、COCOA という追跡アプリを入れねばならない。予防接種証明書も携帯に登録されている。すべて整っていたのに、使えない。

さて困ったどうしよう･･･。　　。



すると友人が、2 年前に亡くなった母親の携帯を持っていけばよいと提案してくれた。そんな大事なものをもらってよいものか、確認すると、母親との別れの一つとして是非持っていってほしいという。彼女曰く、これはきっと彼女の母親がそうして欲しいと言っているのだと。そこで、その携帯を譲り受けることにした。そこから、MySOS や COCOA を入れるのに四苦八苦したが、何とか出来て、こうして日本に帰ってくることもできた。新しい携帯を買い、一安心したところで、友人から連絡。私の携帯が見つかったので送ってくれると。さて、iphone が 3 台になる。どうしたもんか･･･。

ああ、相談業務
P92～

先人の知恵から
P194～

岡崎正明

推し活という言葉を時々メディアで聞くようになった。マニア、フリーク、趣味。どんな言い方をしてもいいが、昔からその概念がちょっと苦手というか、どうしていいか分からないところがあり。その理由は「どこまでそれに関して詳しくなったら、そう名乗っていいんだろう？」ということ。例えば中高生の頃、趣味を映画鑑賞と言いたくて。半分は興味もあったが、半分は義務のように往年の名作を観た時期がある。長くて全然楽しめない小難しい映画も、古臭くて理解できない作品も、なんとなくしたり顔で観たりして。おかげでチャップリンや七人の侍など、心から楽しめる映画にも出会えたのはよかったけれど、最後まで胸を張って映画マニアとは言えなかった。

結局自分が好きなものを楽しむのではなく、他者評価にばかり気を取られていたのだろう。若さもあったと思う。最近そんなことに気づけて、純粋に好きなことを愛すればいいだけで、別に名乗るかどうかは二の次だと思える。

そんな最近の私の推しは、旅と落語と歴史、ヨシタケシンスケ、大河ドラマ、進撃の巨人、一口馬主、愛猫といったあたりか。多動傾向は昔から変わらずである。

役場の対人援助論
P128～

大谷多加志

ウクライナでの戦争状態が、今号の発行まで続いていることをあまりイメージできていなかった気がします。コロナの時もそうでしたが、どこか事態を過小評価してしまう傾向があるようにも思えます。

先月の 15 日、対人援助学会の研究部会と研修・交流部会の共催企画で、「対人援助職者は戦争とどう向き合うのか？ まずは気持ちを持ち寄る会」が開催されました。

学会副理事長の村本先生から、以前ウクライナを訪れた時のお話をお聞きし、次に参加者がそれぞれ自分の思いや感じていることを言葉にしていきました。感じていることも思いも、もちろん人それぞれですが、まずは自分の思いを言葉にすること

ができたことにホッとしました。

人々の日々の営みや、これまでに信じてきた価値観が一気に崩されるような思いがしたこの数カ月でしたが、急激に勢いを増した勇ましい言説に流されるのではなく、平和を希求し、平和を擁護することを、愚直に続けていくことを改めて確認する機会となりました。

参加して下さった全ての皆さんに、感謝申し上げます。

発達検査と対人援助学
P135～

馬渡徳子

いよいよ修士論文の提出期限が後わずかと迫り、お尻がカチカチ山の状態で、今回は、本文をお休み致します。

以前に、三月発行号を二年連続で、ギックリ腰となり、本文をお休み致しました。

先輩方から、最終三か月の過ごし方のコツも伺い、コツコツと準備してきたつもりでしたが、五月に入り、校正にて、想定を遥かに超えた修正が生じ、あたふた致しております。

自分の文章の特徴に、今更ながら、こんなにもご指摘を頂くとは、最終年度に及んで、ただ情けない限りです。

連れ合いの家事分担が一気に増えました。

時々独り言のように、ぶつぶつつぶやいてますが、七月に鰻の特上でお返しすることで、どうやら納得したようです。(笑)

七月末には、いしかわワークショップで団さんにもお目にかかれるし、久しぶりの対面です。これを励みに、気張ろうと思います。それでは、皆様、9月号でお目にかかりましょう。ごきげんよろしく。

馬渡の眼
休載

団士郎

三月下旬から五月中旬まで、漫画家業にほぼ専念していた。いつもとちがう頭や体の使い方を、75歳近くになってやってみると、自分の日常の体内リズムがどうであるのかがよく分かる。

たとえば「木陰の物語」の描き方は4頁34コマで体にリズムが染み込んでいて、長いものを描くととても疲れる。

いつもなら気分転換に文章作業をしたりするのだが、今回は別の新刊本の扉イラスト制作がそれになった。イラストレーター仕事というか、結局根をつめて描いてしまうことになった。漫画家専業は向いていないなぁと昔から思っていたが、やっぱりそうだった。

でも、そう思う割には、通常の新作(4月号4頁、5月号4頁)以外に6頁と8頁の新作、そして12頁位になりそうな三本目の下描きをしている。

新作は多分来年、「グラフィック家族理解入門」として、家族理解のための講義・授業などのテキスト用仕立で刊行の予定だ。

この期間、籠り仕事の意思確認に、ひげを伸ばしてみた。去年もこんなことをしていた記憶があるが、春はそんな季節なのか？

とにかく二ヶ月弱の間、ひげのある感覚を楽しんで、五月十日に終了した。



配偶者を亡くして一年日記(最終回)
P56～

鶴谷　圭一

コロナになってから、土曜日に人を集めるイベントをやらなくなった。お陰で毎週コンスタントに海にサーフィンにいけることが嬉しい。寒い 12 月～3 月頃まではお休みしてるけど、この期間にガクッと筋肉と体力が落ちる。なので春からは毎年リハビリ状態でキツイ。このキツイを乗り越えないと夏にいい波に乗れないので頑張るしかないのであります。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P84～

水野スウ

2月に私がケガしてアゴを骨折してしまったことから、前回はマガジン原稿をお休みしました。今号は、私のケガも含め、去年の夏に大きな病気をした娘のこと、手術を受けた夫のこと、あらためてゆっくりふり返りながら綴った、家族の物語の記録です。

その中で書いた娘のリカバリーのプロセスについて、5月に開かれたクッキングハウス総会後の記念講演で「リカバリーと対話は友だち」と題して、娘と私の親子対話で語りあいました。

娘が倒れるまでの日々のこと、発病、そして退院後に自分からクッキングハウスの講座に通い出した娘が、自分にとってのリカバリーを次々発見しては言葉にしていく。

そんな親子対話が 10 分～15 分続いたところで、はい、そこでいったん一区切り、とクッキングハウスの松浦さんが言う。隣のテーブルの松浦さんとほか 2 人のあわせて 3 人が、今の対話からそれぞれに感じたことを短く言葉にする。それがリフレクティング。そこからまた親子対話の続きがはじまり、リフレクティングを受けて、また対話。それを何回か繰り返していくのを、全体で通して聴いているその日の参加者のみなさん。

「話す」と「聴く」をわけて対話を重ねていく、こういったやり方は、フィンランドの精神医療から学んだオープンダイアローグ、開かれた対話、というものだそうです。注意を傾けてていねいに聴いてもらうこと、リフレクティングもあること、それ自体が贈りもののように感じる時間でした。対話は完結させない、これからも続いていくのですからね、と最後に言った松浦さんの言葉がとても心に残っています。

きもちは言葉をさがしている
P105～

脇野　千恵

若者の居場所「まちの保健室『ちむちむ』」を始めて3年目に入った。最初の2年は、まさにコロナ禍でもあり、手探り状態だった。「性と生」に特化した情報の提供と相談業務。地域では様々な子どもの居場

所があるが、私たちの目的は、思春期にある子どもたちに、より正しく、科学的に性の知識と情報を伝えることだ。しかし保健室には、若者より対人援助職に関わる人たちからの相談が実に多い。現場での「性」の問題への対応など、関わる大人の知識不足が課題だと感じる。時代とともに、「性」の問題も変化している。

そこで、4月から「基礎からわかる大人のための「性と生」の学習会」を企画した。6回シリーズだが、参加を呼びかけたところ、一般会社員、学生、障がい者など様々な人からの申し込みがあった。講師は、性教育を長年研究・実践してきたスタッフ達。得意な分野を担当するが、スタッフ自身の学び直しになっていることが何よりだ。

こころ日記「ぽちぽち」part Ⅱ
休載

中村正

大学院の授業や演習に修了生を招いて「ようこそ！先輩」という名のゲストスピーチをお願いしている。毎年のように何人かを招待する。対人援助や臨床の現場の取り組みの最新の課題を報告して質疑応答をしてもらう。これがすこぶる評判がよく、受講生には刺激となり質問がたくさんだされる。非常勤も含めてカウントすると教師としては35年程になる。その間にずいぶんと多くの修了生がいる。応用人間科学研究科だけでも 20 年程になる。社会人院生が多かったこともあり、現場は実に多様に存在しており、直接の対人援助学ではなくても対人援助的に機能している仕事もあるのだと教えられるし、既存の対人援助や臨床の場にあっても教科書通り、理論通りではない創意工夫をもとに仕事をしている様子が伝わる。

他にも、阪神淡路大震災の後に活発になった NPO 分野の開拓もしてきて、「きょうとNPO センター」を創設したのが 1998 年だった。当時、大学院生だった活動家たちはもう 40 代半ばのベテランとなった。この連載で書いているような分野で多様な NPO 活動をしているのでここでも人が育っている。フォスタリングソーシャルワーク講座のような社会人向け講座もしている。つくづく人を育てることが好きなのだなと思うし、そう言われることが多い。

しかし私は教師の免許もないし、何の資格もない。授業でも教科書は使わないし、定型的な教育はとても嫌いだ。教科書に書いてないことを一緒に考えることが楽しい。もうしばらくこうした作業をつづけながら、次は何をしようかと思案している。私にとっての教科書は暴力を振るって悩む男性たちや、そのことでうまく何かがいかない家族たちなので、学びは終わらない。今日もまた困難や苦労の相談があり、一緒に考えた一日だった。大学で何かを究明するためにわざわざ苦労しにくる学生や院生の姿とも重なる。考えるということの苦労のあとには解放が待っている。

臨床社会学の方法
P20～

千葉晃央

車生活を辞めてみた。理由はたくさんある。皆さんが浮かぶいろんな理由で大体あっている。加えて、父が死のギリギリまで運転を辞められなかったのを見てきたのも大きい。ヨレヨレでも車で出かけ、死の少し前ぐらいまで運転していた。秋田の母からは何とか止めて！と京都に電話が数回あった。父はモータリゼーション世代、真っただ中。一度も免許取得後は車がない状況はなかったと思う。

私は違うことをしてみる。いきなりスマホの 1 日平均歩数が格段に増えた！乗り鉄になったり、買い物をネットに切り替えたり。変わらざるを得ない中での変化ではなく、自主的な変化を作ってやってみた。いろいろなかたちで生活できることをしてみておくことが、想定外を少なくできるのではという思いもある。

ヨガを始めた。仕事が変わり、体のメンテナンスが課題だった状況で熱心に誘ってくださる方がいた。誘われたらやってみるのが基本！完成度を目指し過ぎない姿勢、ヨガの世界観、そしてフロアでのヨギー同士のフラットな雰囲気がいい。その展開で、大学のヨガ部活の世話人にもなった。学生も教員も職員も OG も関係なく、ヨガをしている。ヨガができることに感謝する時間をもつのが、いつものヨガ・セッションの最終段階。戦禍のニュースを見ると心から感謝である。ヨガの起源は紀元前。こういうことも内包されていることが初心者にも伝わってくる。いい先生に出会っているんだなぁ。おかげで体の調子も改善傾向。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P16～

篠原ユキオ

想い出の熟する頃

若い頃、大阪府下の公立中学校で美術の教員をしていた。

とても荒れている中学校だったのですぐに辞めたくなったが最終的に 17 年勤めて 40 歳を前にして脱サラ、漫画家の1本の生活に入った。

それから33年目の今年、最初の教え子たちが中心になって勤務した中学校のすぐ近くの会場で3日間限定の個展をした。

天気には恵まれなかったが、すでに還暦を超えた教え子を中心に卒業年度やクラスも全く異なる人たちがそこで僕を中心に新たな出会いや再会を果たしている光景はこれまでの個展会場にはなかったもので会場はいつも和やかな空気に包まれていた。



思い返せば退職のきっかけは当時の管理職への不信感だった。結果的にはそれが現在の自分につながっているわけで、いつも口癖のように『持つべきものは出来の悪い上司』と言っていたが、最近は『持つべきものは出来の良い教え子』ということにしている。

HITOKOMART
P255～

鵜野祐介

「今回、手話民話の語り部・半澤啓子にZOOMでインタビューをしました。手話を交えたお話だったので、簡単に録画もでき、

繰り返し再生して翻字もできる ZOOM の便利さを痛感した次第です。

うたとかたりの対人援助学
P200～

中村　周平

現在、これまで私自身が活動してきたことをかたちにすべく、行動を起こしました。この思いに共感してくれたメンバーと一緒に頑張っています。また、それについても報告させていただきます。

ノーサイド
P115～

山下桂永子

ここ数年の執筆者短信を読み返してみましたところ、3 年前のゴールデンウィークは雨漏りで家が水浸しになり、一昨年度のゴールデンウィークは献血したら血圧が下がってぶっ倒れ、昨年のゴールデンウィークはギックリ腰になっていました。今年のゴールデンウィークはじっとしてはいけないなと久しぶりに友人とお出かけして 30 キロほど歩いたんです。そうしたら、ゴールデンウィーク最終日にやっぱりぎっくり腰になりました。

何をどうしても何かが起きるゴールデンウィークが終わり、飛行機のセール情報を見て急に旅に出たい気持ちがうずうずとしてしまい、湿布と痛み止めを飲みながら涅槃の姿勢で飛行機の予約をポチっと取ってしまいました。泊まりの旅行は 2 年半ぶり。ガイドブックを見ながらワクワクするのも 2 年半ぶり。旅へのカウントダウンを楽しみに日々のお仕事を頑張れるのも 2 年半ぶりです。

そういえば、今書かせていただいている対人援助マガジンの内容は、10 年近く前の話になるのですが、そのころは年に 1 回ほど海外旅行に行っていました。南米やら中東やら、今は遠くになりにけり。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P180～

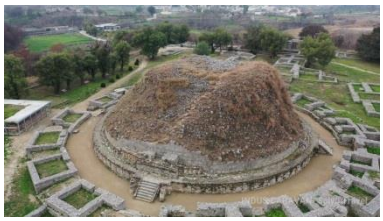
中島弘美

対人援助学会の 2022 年度以降三年のテーマが示されて、あらたに、「研修・交流委員会」の委員を担当させていただくことになった。今後、300 名以上の学会員の交流が少しでも深まるように、研究会や、年次大会において工夫をしていきたいと考えている。が、そんなすばらしいアイディアを持ち合わせているわけではないので、いろいろな方に地道にお声がけをして、つながりづくりを進めていく予定！

カウンセリングのお作法
P36～

竹中　尚文

今回も「ホームレスの個人史」を書けなかった。コロナ禍が続く中、ホームレスにインタビューができない。ネタが尽きたので、今回も本文は閑話休題。



◆もう40年程まえのことだ。私は仏教遺跡を調べたくてパキスタンを訪れた。到着した空港でパキスタン人の列がとても気になった。彼らはパスポートを握りしめて着の身着のままの姿だった。いったいどうしたのかと尋ねると、これから湾岸産油国に働きに行くのだという。パキスタンはイスラム教スンニ派が多く、アラブの産油国にとっては受け入れやすい労働者だった。私は彼らの虚ろな眼差しを鮮明に覚えている。 ◆20年程まえに仏教伝播を調べたくてアメリカ合衆国を訪れた。受け入れ先が大学院生の寮を用意してくれたので、経済的に生活がとても楽だったと記憶している。調べてみると 1997 年に日本の平均年収は OECD 諸国中 3 位だったそうだ。2019 年には 20 位だそうだ。今や日本の一般的な年収は北京や上海の年収を下回るのではないかという。かつて中国から法を犯すようなリスクをとりながら日本に働きに来る人たちがいた。今はもうそんな人たちはいない。 ◆これから子どもたちが成長して働くようになったら、パスポートだけを握りしめて外国に働きに行くようになるのかもしれない。自分の子どもや孫はそんなことはないだろうというのは思い上がりだろう。政治家や官僚や企業経営者の無能さを嘆いても仕方がない。学者が学問の世界に酔いしれていてはならない。宗教家が塀の中で自己研鑽に励むのも同じである。二千年も前から、宗教を支え発展させたのは社会の中間層だったのである。次の世代のために物心とも豊かな社会をつくる努力をしなければならない。私たちはそんな意志を持ち続けたい。

路上生活者の個人史
P117～

寺田　弘志

全英女子オープンで、渋野日向子選手が優勝するところを見てから、ゴルフが面白いと思うようになりました。

テレビでゴルフの試合を見るようになりましたが、コースを回ったことはありませんでした。その後家内がゴルフを始め、誘われて私も始めました。ちょうど60歳で、60の手習いとなりました。

止まっているボールを打つだけなのに難しく、見るのとやるのは大違いでした。ゴルフ練習場やショートコースに通いました。技術的にはまだまだなのですが、ゴールデンウィークに初ラウンドを回ってきました。

渋野日向子選手がアマチュアの時通っていた長船（おさふね）カントリークラブです。しぶこファンの聖地だけあって、ロビーでは渋野選手が笑顔で出迎えてくれます。

（写真ですけどね）

エイジシュートどころか、ダブルエイジシュートになってしまいましたが、渋野選手のプレーを想像しながら、初ラウンドを楽しみました。

ゴルフと、接骨院での施術に共通していると思うこと――無理をすれば失敗する。しかし、思い切ってやらなければ良い結果は出せない。

接骨院に心理学を入れてみた
P213～

山口洋典

新年度に入り、「3 年ぶりの」という言葉をよく耳にします。確かに、新型コロナウイルス感染症が 2019 年 12 月 8 日に中国の武漢で初めて確認されたことに基づき、COVID-19 と名付けられていることからも、

2020 年度当初から、多くの事柄に制限がもたらされることになりました。それから 2 年あまり、いつしか「ニューノーマル」といった言葉も聞かれなくなった 2022 年、まだまだマスクのある生活ではあるものの、「しない」「できない」が前提ではなく、「どうしたらできるか」を工夫しているように思われます。最早「ニューノーマルとは言わないニューノーマル」となってきたのかもしれません。



先日、新潟県小千谷市の塩谷集落へ 3 年ぶりの田植えに行ってきました。新潟県中越地震で大きな被害を受けた災害救援に携わった恩師らの動きに合流して、2012 年度以降は立命館大学の学生もまた集落復興の支援の一環として、田植えから稲刈りまでの過程に参加し、交流を重ねてきていました。3 年ぶりの田植え交流会では、「あと何年こういうことができるか」「家の解体のためのお金は残してある」といったつぶやきに象徴されるように、例えば発災直後からの 2 年間、また東日本大震災をはじめとして中越からの支援のリレーが行われた 2 年間などとは全く異なる時間が流れたのだろうと容易に想像できました。裸足になって手植えをしたことにより、田んぼの中でヒルに血を吸われた部分の痒みが数日は消えなかったものの、3 年ぶりの交流を通じて感じた集落を包み込む雰囲気の変化はきちんと覚えておかねば、と胸に刻む交流機会となりました。

PBLの風と土
P207～

見野 大介

GW の信楽作家市も無事終わり、引っ越しのために片付けや荷造りを。正直、2 週間くらいで目処が立つと思っていたけど、全然終わらない。これを書いているのが23日、1週間後には新居で生活が始まっているなんて想像がつかない。住居と工房を移すことの大変さを痛感。絶対に今回が最後の引っ越しになることを願うばかり。

ハチドリの器
P4

浦田雅夫

私事、2022 年4月より再び本拠地、京都へ戻り、京都女子大学へ異動しました。前任、大阪成蹊大学の皆さんには、大変お世話になりました。2022 年度は、引き続き、大阪成蹊大学の4年ゼミ生を持たせていただいておりますが、なかには児童養護施設へ就職する方もおられます。本当にうれしいことです。

社会的養護の新展開
P81～

小池英梨子

魚屋さん。新しく引っ越したちょっと田舎の家には魚屋さんが来る。毎週水曜日と金曜日。

だいたいお昼の12～13時の間に来る。「塩焼きで食べたいです。」とか「大根と一緒に煮たいです」と希望を言うと、それにあったお魚を見繕って、その方法で調理しやすいようにした処理までしてくれる。

最近は、名前を聞いたことがない魚を食べる。という方法にハマっている。



そうだ、猫に聞いてみよう
P184～

劉　強(リュウ　キョウ・ LIU QIANG)

最近、この先どのように進めば良いだろうと悩んでいる。本来の予定であれば、今の私は研究調査のため中国に渡航し、どこかのホテルで隔離しているはずだが、コロナの関係で予定した研究調査ができなくなり、結局渡航することをやめた。これからはクリアしないといけない課題がたくさんあるが、一つずつ片付けていきたい。

また、友人に文書がつまらないと言われたので、これからもっと面白く書くように工夫していきたい。

中国のセクシャルマイノリティ支援
P207～

荒木晃子

2018 年の秋以降、3 年 6 か月に渡り、実務家として研究分担者と事務局を務めた科研の研究プログラムが終了した。本学の法学研究者を代表に、他大学から、法学者を中心に医師、生命倫理学、心理学、社会学など研究者 12 名、他に研究協力者を合わせると総勢 30 名ほどの大所帯で進めたプログラムである。LGBTQ 当事者の多様な家族形成の調査に当事者の協力は必須で、当事者への協力要請や対応は研究協力者である女性医師と共に担当した。調査で出会ったたくさんの当事者の皆さんとは、その後も交流が続いている。研究期間を通して開催した数々の研究会、ワークショップ、意見交換会、報告会、海外調査、フランスから招聘した研究者との公開シンポジウム、最後は 2 月の成果報告会を兼ねた公開シンポジウムと研究企画を無事終了し、安堵の日々を迎え、今は 3 年半ぶりに長期休暇を取っている最中である

その間、プライベートでも大きな変化があった。2 年半ほど前には、長く暮らした豊中のマンションから奈良の実家（築 30 年ほどの戸建て）に転居し、転居直前に 15 年以上共に暮らした愛犬を看取った。現在は 2 匹の愛犬（一匹は元保護犬）と暮らすにぎやかな日々を送っている。引っ越し時に開封できなかった段ボール箱も、そろそろ片付けができそうだ。奈良には、多くの神社仏閣、美術館以外にも、吉野山をはじめとする美しい自然が残っていて、（自慢じゃないが）まだどこも訪問できておらず、お楽しみはこれからである。

この春、65 歳を迎え、年金生活者となったが、まだ現役の身。必要としてくださる方々がいてくれることが、こんなにありがたいとは･･･。島根のクリニックもコロナ禍でしばらく足が遠のいていて、院長や可愛いスタッフ、クライアントさんとは、PC の画面越しに会話が続いている。最近では、様々な活動を通し新しい友人もできた。互

いに選びあった人間関係は大切だと実感している。まことに残念ではあるが、関わりたくはないけれど、やむを得ず関わらざるを得ない人との関係が続くことは、どれだけ自身の体と心が疲れるかということも、この間の活動から学んだことのひとつである。

生殖医療と家族援助
P96～

工藤　芳幸

高槻では 2 年ぶりに芥川にたくさんの鯉のぼりが泳ぎ、季節の催しが戻ってきました。職場の大学でも、90 分の対面授業が全面的に再開し、強まった管理の下でどうしても人間関係が希薄になりがちだった日常から、学生間の交流の回復が見られています。私が所属している学部は医療機関での臨床実習を全ての学生に準備する必要があり、世間の動きとは少し温度差があって感染対策を緩めるわけにはいかないところもありますが、それでも学生の表情がだいぶ違ってきたように感じます。良い傾向です。

中学のうち2年間長期欠席していた次女は通学タイプの通信制高校に進学して新たな場に出ていきました。長女もほぼ 3 年間のフリーター生活を経て、やっぱり大学を卒業して就職したいという結論に至り、この春から大学生になってせっせと京都まで通っています。私も先日 2 年半ぶりに宮城の実家に帰省しました。この期間に母が難病にかかり、久しぶりに顔を見に行ったのでした。昨年は義父の脳梗塞もあり、親世代の変化も大きくなってきました。仕事上の役割も変化し、毎日大量の文書を書いているのですが、書きたいものほどなかなか進みません。ただ、今のところはそれで良いかなとも思っています。進みませんが、止めてはいないので。今回は休載します。



みちくさ言語療法

休載

両角　晴香

某ドキュメンタリー番組で夫婦間腎移植について取り上げてくださるとのことで、ここ1ヶ月取材・撮影の日々を送っています。昨晩は夫婦でランニング。カメラマンさんがカメラを抱えて我々に並走してくださる姿に胸を打たれたり、ディレクターさんが夫婦間腎移植を掘り下げてくださり、ときには心をえぐられることで、新たな発見をいただいております。

夫の腎臓と笑う私
休載

障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第７回

脱・思考停止。現実を考える。

千葉 晃央

今回も、今から現場に向かうあなたにお届けします。今日は「表記」について、取り上げます。今回も私風です。諸説あるのはもちろん、私も一説ここで述べます。諸説の一説に触れることで、ぜひご自身で考えるところから始めてください。

野郎供！やっちまえ！

福祉領域を学び始めた方が初期に迷うこととしてよくあるのが漢字の使い方です。その一つは「コドモ」です。世間では「子供」と表記します。福祉の初学者の方のレポートでは、漢字で書かないと！と思い、「子供」と変換していることもしばしばあります。福祉の領域では『子供』は使わないことが多いです。「子どもの権利条約」なども平仮名表記をしています。この「供」の意味がそぐわないということです。

「供」

そなえる。ささげる。
神仏などにささげそなえる。
差し出して役立てる。
主人に仕え、つき従う人。
従者。御供を引き連れる。

以上の通り、主体性はなく、従属させられたり、ささげられたり、誰かの役に立てるなど、そういった意味があります、そのため、「ども」は平仮名表記を採用していると聞いています。福祉的な価値観から考えると当然かもしれません。

名前って、大事…？！

「名は体を表す」という言葉があるように、名はそのものの実体を言い表しているといわれています。「言霊（ことだま）」という言葉も近いかも

しれません。「最後は名前に引っ張られる」というセリフもよく聞きます。「そもそも、どうなんですか？」のような議論になった時に、名前に引っ張られることは想像できます。こうした原点に立ち返らないといけない場面はある種のピンチです。そんな時が名前が作用する場面でもあります。

私の印象では、「障害」の表記の仕方も、90 年代後半から「障がい」、2000 年代「障碍」という表記が目に付くようになった気がします。確かに、福祉の転換期である社会福祉基礎構造改革、障害者自立支援法のあたりが契機となったのでしょう。そうした時代のムードがあったのかもしれません。当時はすでに、障害者福祉の現場にいたのでそうした話題がでたり、実習生がそういう話題を現場に提供した記憶があります。それでも、私の周りでは「害」という字を使っていましたし、今も使っています。

障害者とは誰か？障害はどこにあるか？

「害」という字の印象が良くないという声から他の表記による代替が始まったといわれています。「交通障害」「電波障害」「通信障害」「被害者」という言葉に「害」が使われている。それらが連想されて良くないという指摘です。そこでは、いわゆる障害者とされる方々から、「害」を被るのは「社会」側、「障害者とされていない」側というイメージがあったかもしれません。実際イメージだけではなく、歴史を振り返ると社会防衛のために障害者を隔離してきた事実は隠すことはできません。

「害」には「妨げ」「悪いこと」「損となるようなこと」そんなこともこの漢字の意味にはあるとされています。そして、反対語は「益」だそうです。「人や世の中の役に立つ」「為になる」「利益」…という意味と。こうなると「害」という言葉への嫌悪は自然かもしれません。

救世主的に代用されはじめた「碍」という字は明治期にも使っていたそうです。この「碍」も「邪魔をする」「さまたげる」「邪魔をして止める」という意味を持つといわれています。

千葉君！「障」の字も微妙なんだよ…

こう私に話してくださったのは、ご自身も当事者である先生です。先生は「障」は「差し障る」という字ですよ、と繰り返し話してくださいました。「邪魔になる」「妨げとなる」「体に悪い影響を及ぼす」「害になる」という意味もあるそうで…。ここまで見ると「害」と何が違うのか？です。「害」をいうなら、「障」もだよ！と先生はいろんな方に問いかけてくださっていました。

そして、一部の人はこの表記にこんなに力を注ぐ…。それよりも、生活実態の改善にせめて同じぐらいエネルギーを、時間を傾けて欲しい！と私に、聴衆の方々におっしゃっていました。繰り返し。言い方の変更は、表記の変更、看板の掛け替え仕事になってしまう可能性があります。それだけでは実態は変わらない。何なら看板掛け替えだけで、相当のお金がかかる。そのお金をもっと生活に直結することに使って欲しい！と話しておられました。

「障」

「へん」は、山。
「つくり」は墨だまりつき入れ墨用の針。
入れ墨をするのは昔は罪人。一生償う意味。
山の向こうに隔離して、
入れ墨のある人々、という成り立ち。

「障」という漢字の成り立ちにもこんな意味が

あると知ると、なかなかこれでいいとは思えません。「害」は「×」で、「障」は「○」。果たしてそれで考えることを辞めてしまっていいんでしょうか？

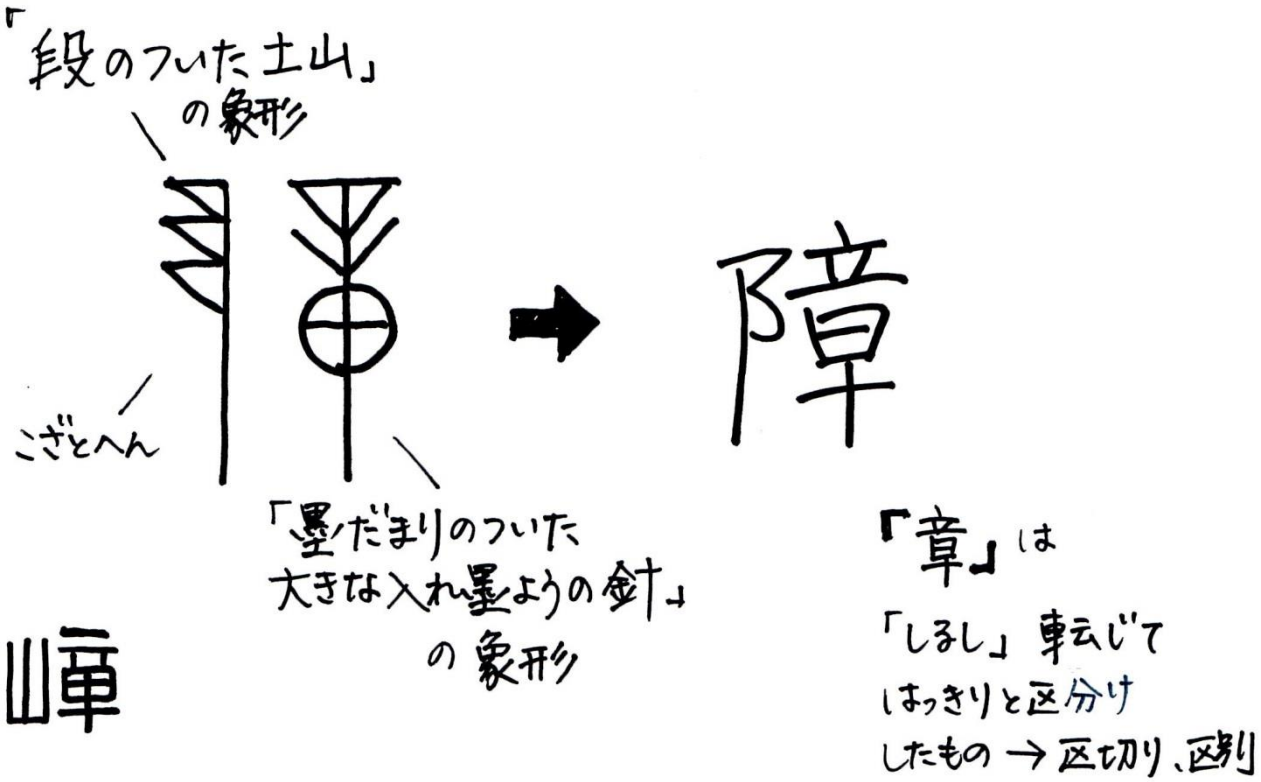
誰が言うのか？の視点！

「障害は個性か？」こういったことも福祉初学者で議論になることがあります。「障害は個性である」という言葉もよく聞くようになりました。私は使わないセリフです。そんな単純な言葉で片付けられないと思っています。

「障害受容できる/できていない」というセリフもあります。ハンデをもったお子さんを産んだご両親がそのこと自体を受け入れることができているかできていないかというところです。研究テーマとしても未だに取り上げられてきました。しかし、私はこれも受け入れて終わった！なんかで片付くことではないと思っています。常に行きつ戻りつしながらの状態が常にあるものではないか。思わぬことでぐっと戻ることもある。この話題について、どこかでの扱われ方に触れて、とても嫌な思いをする。こんなことも起こり続けるのは当然ではないかと思います。

「誰が言うか？」です。ご本人が言う、そのご家族が言う分には自由です。しかし、支援者が言うべきことではない。忘れてはいけないのは、「誰が言うか？」「誰が発しているか？」です。ご本人さんが「個性と思って切り替えて、生きてきました」というのであれば、それがご本人にとっての事実です。支援者が「障害は個性である」とか思ったり、言ったりする類のものではないと考えています。

障害受容に関しても、端から見て「受容できてる」「受容できていない」とかいうこと自体も、そういう問題ではないと私は思っています。それは個人に属することではないかと思います。一般論で押しなべて語ることができるとは到底思えません。支援者はあくまでそうした語りを聞く立場です。言う立場ではありません。



「千葉君、ショウガイの『障』の字も微妙なんだよ。そう思わない？」先生は当事者でもある自らの存在もかけて多くの人にその問いを伝えてくれました。「私は言ってもいいでしょう」そんなこともユーモアも交えて投げかけてくださいました。

「子」という意味だって、調べなくてもいろいろありますよね。子会社、子分…。

私に表記や呼称への議論もいいけど、それと同じぐらい、もしくはそれ以上に生活実態への関心や改善への議論が高まって欲しい！と話してくださったことが忘れられません。現実実態を見ながら、考え続けていきましょう。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

1～7連載中！

対人援助学マガジン 43～49

2020 年 12 月～2022 年 6 月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号

2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号

2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号

2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号

2010 年 6 月～2020 年 3 月

臨床社会学の方法

(37) 男性学のすすめ

—コンネル『マスキュリニティーズ—男性性の社会科学』刊行の意義—

中村 正

1. 27 年目にして日本語版

男性学の世界的な牽引者であるレイウィン・コンネルの *Masculinities* 第 2 版がようやく翻訳刊行された（レイウィン・コンネル著/伊藤公雄訳『マスキュリニティーズ—男性性の社会科学』新曜社、2022 年）。私も下訳を担当し、解説を書いている。原著初版は 1995 年だ。その時、私はアメリカのカリフォルニア州サンフランシスコ市と湾をはさんで東にある大学の街、バークレー市にいた。カリフォルニア州立大学バークレー校（UCB）で客員研究員をしていた。著者のコンネルは同じ UC サンタクルツ校の教授を務めていた。コンネルとはその時アメリカで出会うことはできなかったが後に男性学の集いでお会いすることになる。本書は世界各国語に翻訳されている。日本語版の刊行は大幅に遅れた。出版直後に翻訳を決意し監訳者の伊藤さんに相談してから 27 年経っている。

コンネルは 1944 年生まれ。これまでマッコーリ大学（オーストラリア）、カリフォルニア州立大学サンタクルツ校、ハーバード大学などで教鞭をとり、その後母校でもあるシドニー大学に勤務し、現在は名誉教授となっている。社会学を主たる専攻としながらも、その学問的経歴は多彩である。学部から大学院にかけて、心理学、歴史学、政治学、教育学などを修めた。文字通り、人文社会科学的な幅広い知識に裏打ちされた研究であることは本書からも読み取れる。経歴からその総合的な視野形成がわかるので、翻訳のサブタイトルを「男性性の社会科学」と総称した。

翻訳を精査している最中、彼がホスト教授になってくださりシドニー大学にて客員研究員をさせていただいた。2003 年から 2004 年のことである。同じ時期に翻訳を担当した男性学研究者の多賀さん（関西大学）もシドニー大学で一緒だった。訳語の意味を明確にするためにコンネルに質問をすることもできた。贅沢な時間を過ごした。最終は監訳者の伊藤さんが点検してくださった。書物の構成は次の通りである（目次を抜き書き。下線は章のタイトル）。

研究領域の拡大/論争と諸困難/グローバルな局面/結論。第Ⅰ部 知識とその問題—第一章男性性の科学（対抗する知/臨床的な知/男性役割/新しい社会科学/政治的な知/知の対象 、第二章 男性の身体（真の男性性/機械、風景と妥協案/逃げることのできない身体/泥と血の複合/バンクォーの亡霊—身体—再帰的実践/世界の形成 、第三章 男性性の社会的組織（男性性の定義 /社会的実践の構造としてのジェンダー/男性性の間の諸関係—ヘゲモニー・服従・共謀・周辺化/歴史的ダイナミクス、暴力そし

て危機傾向。第 II 部 男性性のダイナミクスに関する四つの研究—第四章 生き急ぎ、そして若くして死ぬ（グループと文脈 /抽象的労働 /暴力と国家 / 男性にとっての強制的異性愛/集合的実践としての男性性 /抗議的男性性 /他の道筋 /逸脱した男性性とジェンダーのポリティクス、第五章 完全なる新世界（関与のモメント /距離をとること /環境保護運動 /フェミニズムとの出会い/分離のモメント /男性性の消滅 /争うモメント 、第六章 とてもストレートなゲイ（関与のモメント /砂の粒–セクシュアリティ/ゲイになること–アイデンティティと関係性/複数の男性性の諸関係 /変化に直面する /投企と歴史としてのゲイの男性性、第七章 理性の男たち（男性性を構築する/理性をつくりあげる /キャリアと職場/非理性的であること/理性と変化。第 III 部 歴史とポリティクス—第八章 男性性の歴史（近代的なジェンダー秩序の形成における男性性の生成/変容/現在のモメント、第九章 男性性のポリティクス（男性の政治と男性性のポリティクス/男性性のセラピー /銃のロビー活動–ヘゲモニックな男性性の防衛/ゲイリベレーション /脱出のポリティクス、第十章 実践とユートピア（歴史的意識 /行為の目的 /脱ジェンダーと再構成 /アクションの形態 /教育 /今後の展望。補論 男性性をめぐる現代のポリティクス—現代の家父長制への男性の関心——バランスシート図/バックラッシュ——変化に抗しようという男性たちの関心を動員する/新自由主義と男性の利害 /暴力の問題——対人的暴力と国際的暴力/世界規模での男性性のポリティクス。解説（中村正）—グローバライゼーションとマスキュリニティーズ。

少し整理すると、本書は次の 5 つのことを体系化し、男性学創生に向けた研究書と言えるだろう。頻繁に引用されるようになっている。

1）男性性についての近代西欧の歴史を概括すること（第 1 章）

2）ジェンダーの社会理論に具現されている男性性の理論を提示すること（第 2－3 章）

3）変化の過程にある 4 つの男性グループの生活を記述すること（第 4－7 章）

4）西欧の男性性の歴史とそれらの政治的表現を統合すること（第 8－9 章）

5）ジェンダー平等のポリティクスの戦略を提案すること（第 10 章）

2. 男性学創生の書として

コンネルは世界を渡り歩いている。何度か来日している。学術会議、国際学会、国際機関の会議組織、世界各地の大学院での集中講義などである。シドニー大学にいる間は、研究室や図書・資料の閲覧などの便宜を図る労をとってくださるなど常に配慮をしてくれた。シドニー大学の広いキャンパスのなかに点在するオープンエアーのカフェで質問に応えていただいた。大学門前の学生街・グリーブ通りにも出かけ、書店、カフェ、レストラン、公園等で話をしてくださった。こうした機会を利用しながら翻訳作業が進められたことは幸運だった。著者と時空間を共有しながらの作業は本書の理解に臨場感を与えてくれた。

その話のなかで、原著から当時ですでに 10 年経っていたので、その間の研究関心や男性・男性性をめぐる研究動向について記したものを、是非、日本語版序文として寄せて欲しいと依頼した。すでに本書の第 2 版を準備しているということだったので、それを補論として日本語版に追加することにした。訳出したように 10 年の間の研究経過を詳細に追記した補論である。

本書刊行後、コンネルは男性・男性性をめぐる応用的な問題領域の開拓や批判に応答

しながらジェンダー研究の視点をさらに深める研究を展開している。ここでは簡単にこの翻訳書刊行の意義とともにコンネルの研究を紹介しておきたい。

翻訳のための会話をしながらも話題は常に世界の男性性研究のことへと展開し、私がいろいろ教わることになった。そのなかで、私が話題にできたことは、日本の男性性研究やアジア社会の男性性研究のことである。つたない英語での説明だったが深く関心を示してくださった。アメリカのアジア戦略やアジアにおける戦争の歴史、日本の位置などが刻み込む地政学的な男性性のあり方は、たとえば戦争体験者の聞き取りについて男性性の見地から取りくむことが必要だろうと話した。加害（アジア・オセアニア諸国への）と被害（アメリカによる原爆や沖縄での市民の犠牲）の二重性を戦争体験として男性性の視点からいかに語ることができるのか、そしてそのことが戦後日本の社会変動を導いた男性性とどのように連続しているのか不連続なのかなどの論点を紹介した。

グローバル化の社会変動は激しく、それとともに男性性の様相も多様化している。ではアジアあるいは日本の男性性はいかなる国際的な特徴をもつのだろうか。非西欧圏での研究についてはオリエンタリズムの影響が回避できない。その言説を内面化しているかもしれないという内なるオリエンタリズム意識をいかに相対化できるだろうかという関心から、アジアの男性性を語る言葉を自生させるべきことを話した。しかしなお西欧出自のジェンダーやセクシャリティ、社会学や社会科学の言説それ自体をとおしてしか認知できないことのジレンマに陥りながら、苦しい翻訳作業となることも話した。こうした独自な文化圏にある認知の仕方の特性が翻訳にはつきものだ。この立場をよく理解してくださり、だからこそ、西欧文化出自の本書の内容とは異なる男性性があるのだから、翻訳はそれを重ねるためのよい機会となるとも語ってくださった。

話の共通点は、男性と男性性を対象にすることへの期待・可能性と男性学がバックラッシュに利用されていくだろうからその準備もしておくことが大切だということもすでにその時話されていた。

本書をとおしたコンネルの男性性ジェンダー研究への最大の功績は、「覇権的な男性性」の概念を展開し、男性学のダイナミズムをつくり出したことである。これはイタリアの思想家、アントニオ・グラムシのヘゲモニーとマスキュリニティーズをつなげた概念だ。この「ヘゲモニックなマスキュリニティ」という概念がその後の男性・男性、ジェンダー研究で引用される頻度は格段に高い。

私もグラムシのヘゲモニー概念について検討したことがある。「地平としての文化―グラムシの文化社会学」（松田博編『グラムシを読む-現代社会像への接近』法律文化社、1988 年）、「市民文化とヘゲモニー―グラムシと現代文化」（松田博・鈴木富久編『グラシム思想のポリフォニー：現代性と古典性のインターフェース』法律文化社、1995 年）を寄稿している。

次に、本書の理解のためにも日本での男性・男性性についての議論の経過を整理しておこう。男性学は女性解放運動の波から起こった。70 年代には、「男性の性役割」を

改革しようとする小さなメンズリベレーション運動さえ起こった。日本は 90 年代だった。これは男性、権力、変化についての興味あるポリティカルな議論を引き起こした。しかし、現実の男性や少年とは何であるのかについての多くの研究を直接に産み出したわけではなかったと語る。そしてジェンダーの概念的な混乱に深く苦しんでいたとコンネルはいう。それは男性研究としてではなくこれまで無意識に語られてきた男性論が作り上げていた擬似的な男らしさ論を俎上にのせるやっかいさのことだ。「何故なら、かなり一般的になっていた『男性についての本』というジャンルがすでに存在していたからである。このジャンルは、大衆心理学、素人の歴史学、気短な神話生成から成る混合物であり、私はそれらを嫌悪していた」と吐露している。

コンネルは言う。「男性性についての書物を書くことで、こうした男性についての本のジャンルの存在によってまさに創り出されている男性についての想像上のアイデンティティを強化することに荷担するようなことはしたくなかった」と。

しかし徐々に、女性学的なジェンダー論の深まりと、社会制度における不平等是正と、それらに対する男性の貢献や役割、男性性のもつ課題を理論化するためにも、そして男性の間でのジェンダーのパターンの多様性を記し、説明するためにも、男性研究のための一冊の書物には価値があるのだと納得していったと語る。こうして本書は編まれた。

3. 日本でも男性性ジェンダー研究が活発に

日本でも男性性ジェンダー研究が活発になっている。男性が引き起こす事件が散見されるからということもある。なんでもランキングにするのはいかがと思うが世界比較のジェンダーギャップ指数で 120 位（2021 年）の社会だと不平等が強調されたからかも知れない。男性と男性性の研究、男性学は、私も 1990 年頃から取り組みはじめたのでずいぶんと時間が経つ。

その当時に組織された関西を中心としたメンズリブ研究会に集う男性たちが、当時は女性学、フェミズム、ウーマンリブとされていたことに応答して男性の体験を語る会を行っていたことが始まりである。さらにメンズリブ研究会のなかにフリーメン研究会をつくり、米国の臨床心理士、ダニエル・ソンキン（Sonkin, Daniel Jay &, Durphy, Michael, Volcano Pr,1989)の書物を輪読していた。1990 年頃である。*Learning to live without violence* という書物である。これはアメリカの脱暴力プログラムで使用されていたテキストである。後に私も解説を書かせていただき、翻訳された（＝2003.中野瑠美子訳『脱暴力のプログラム—男のためのハンドブック』青木書店)。

また、男性問題に取り組む仲間たちと「男のための非暴力研究会」と名付けて「一日グループワーク」を実施したのは 1995 年だ。メンズセンターが主催していた男のフェスティバルのなかで開催した。それ以降、この研究会名でグループワークを定期的に開催した。専門家主導ではなく当事者たちの試行錯誤だった。このときの模様は NHK「クローズアップ現代」等で番組になった。その後、メンズサポートルームと名付け、現在もその時以来の仲間たちが持続的に開催している。

こうして 1990 年代とおして男性問題に

取り組む気運を高めてきた。その頃、『男がみえてくる自分探しの 100 冊』(かもがわ出版 1997 年、中村正／中村彰）を編集した。その時までに書かれていた男性を主題にした書物を一冊一頁で紹介した。かなりの数の書籍をリストアップし、セレクトしたので 200 冊くらいは目をとおした。しかしそれらは数冊を除き男性研究を主目的にしたものではなく、男性・男性性（男らしさ）に関連することが書かれていると私が恣意的に判断したものを選書した。しかし作業としては楽しいものだった。

日本の男性学は女性学・フェミニズムに随伴してきた。その象徴が『男性学（新編日本のフェミニズム 12)』（岩波書店 2009 年）である。これは日本のフェミニズムシリーズの一環で、しかも別冊扱いだった。内容は次のようだった（下線部分を私が執筆した)。

I メンズ・リブ●メンズ・リブのすすめ●フェミニズムへのとまどい●シングルの権利●男らしさの神話—「リアル マン」って，どんな奴？ /II 男性学の誕生●男性の自己探求—男の性もまたひとつではない●抑圧された男性●男性の性アイデンティティ〈男〉と〈非男〉—性差による言葉のポリティクス/III 男のセクシュアリティ●「攻撃性」神話—「戦争と性」にまつわる神話—兵士は殺し殺されるために女を犯す●性的他者●買春と男性/IV　家事・育児する男たち●主夫革命●男の子育て●「半分こ」イズムの実践/V 企業戦士たち●企業中心社会の抑圧●捨てられる夫たち●滅私奉公のツケ/VI　ゲイ・スタディーズ●男性同性愛者の社会史●カミング・アウト両親への手紙●ゲイの対幻想/増補編 I 男性学の発展●メンズ・リブ日本の男性運動のあゆみ●男性学の発展「男」をどう見るか●ゲイ・セクシュアリティ同性愛者の声が聞こえるか●男性史『男性史』刊行にあたって/増補編 II 暴力と男の身体●脱暴力の技法—DV 加害者をどうするのかという問題が問いかけること●同時代の男性学—殺す男たち●身体の声に耳を澄ます—男性更年期●ハゲとからかいの政治学★

男性学と呼ぶにはまだ歩みだしたばかりの感がある内容だ。しかしここ数年、男性学的な研究、男性・男性性に関する書物が増えてきた。恣意的ではあるがランダムにセレクトすれば次のようなものが浮かぶ。

★工藤保則他編（2016)『〈オトコの育児〉の社会学:家族をめぐる喜びととまどい』ミネルヴァ書房★アラン・コルバン他監修/鷲見洋一他訳（2016～2017）『男らしさの歴史 1～3』 (男らしさの歴史・全 3 巻/「男らしさの創出 〔古代から啓蒙時代まで〕」「男らしさの勝利〔19 世紀〕」「〔男らしさの危機？20-21 世紀〕」(男らしさの歴史/全 3 巻) ★武田砂鉄（2017)『マチズモを削り取れ』集英社★斉藤章佳（2017)『男が痴漢になる理由』★平山亮（2017)『介護する息子たち:男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房★巽真理子（2018)『イクメンじゃない「父親の子育て」—現代日本における父親の男らしさと〈ケアとしての子育て〉』晃洋書房★レベッカ・ソルニット著/ハーン小路恭子訳(2018)『説教したがる男たち』左右社★斉藤章佳（2019)『「小児性愛」という病—それは、愛ではない』ブックマン社★レイチェル・ギーザ著/冨田直子訳（2019)『ボーイズ 男の子はなぜ「男らしく」育つのか』DU BOOKS★グレイソン・ペリー著/小磯洋光訳（2019)『男らしさの終焉』フィルムアート社★ロバート・ウエッブ著/夏目大訳（2921)『「男らしさ」はつらいよ』双葉社★清田隆之（2019)『よかれと思ってやったのに 男たちの「失敗学」入門』晶文社★熊谷謙介（2020)『男性性を可視化する〈男らしさ〉の表象分析』(神奈川大学人文学研究所、青弓社★ぼくらの非モテ研究会 (2020)『モテないけど生きています—苦悩する男たちの当事者研究』青弓社★齋藤早苗（2020)『男性育休の困難 取

得を阻む「職場の雰囲気」』青弓社★杉田俊（2021）『マジョリティ男性にとってまっとうさとは何か—#MeToo に加われない男たち』 集英社新書★周司あきら（2021）『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』大月書店、★松岡宗嗣（2021）『あいつゲイだって アウティングはなぜ問題なのか?』柏書房★ラファエル・リオジエ著/伊達聖伸訳（2021）『男性性の探究』講談社、★エマ・ブラウン著/山岡希美訳（2021）『男子という闇—少年をいかに性暴力から守るか』明石書店 、★赤川学他著（2021）『なぜオナニーはうしろめたいのか』 星海社新書、★斉藤章佳（2021）『盗撮をやめられない男たち 』扶桑社★西井開（2021）『「非モテ」からはじめる男性学』集英社新書★國友万裕（2021）『マスキュリニティで読む 21 世紀アメリカ映画』英宝社★津止正敏（2021）『男が介護する-家族のケアの実態と支援の取り組み』中公新書★澁谷知美（2021）★清田隆之（2021）『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見えた生きづらさと男らしさのこと』扶桑社★高橋愛（2022）『「男らしさ」のイデオロギーへの挑戦—ジェンダーの視点からメルヴィルを読む』晃洋書房★多賀太（2022）『ジェンダーで読み解く—男性の働き方・暮らし方: ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために』時事通信出版局

翻訳書も含めてずいぶんと男性研究を意識した書物が多くなってきた。コンネルも懸念していた無意識な男性論、「一般的になっていた『男性についての本』というジャンル」ではない。もちろんそうした書物もビジネス書、啓蒙歴史書、説教本を中心にして相変わらず量産されているが、それらとは異なる傾向が顕著にみてとれる。先に紹介した『男がみえてくる自分探しの 100 冊』は 1996 年までの書物だけなので、それ以降を対象にすればさらにかなりの数の男性学的な書物が浮かびあがることになる。戦争・兵士、暴力・体罰・ハラスメント、ケア、少年・男の子、セクシャリティ、労働・働き方、家族問題、白書・黒書のようなデータ集等と領域毎に区切っていけば、明示的に男性学や男性性をうたっていなくても内容が男性研究的である書物がかなりある。こうしたものをストックしていくビブリオアーカイブスがネット上にあってもいいだろう。公刊されてはいないが、博士論文・修士論文や学士卒業研究にも秀逸なものがある。そのなかの男性研究書のひとつ、末尾に掲載した『現代思想』（2019 年 2 月）が「男性学特集」だったことは特記できる。そこに私は「暴力の遍在と偏在–その男の暴力なのか、それとも男たちの暴力性なのか」と題して寄稿した。

4. 男性学研究をとおして深まる研究課題があること

男性性は、時代や文化によって多様なだけでなく、ひとりの人間の内ですら矛盾した様相を見せる複雑な概念である。男らしさの複数性や相互の権力関係、男性性と社会構造との密接な関連性等、多岐にわたる争点がある。男性学は、男性を集団カテゴリー–としてはひとくくりにして論じることになるが、そうすることの限界もある。ジェンダーの二元的な把握を強化することになるからだ。だから男性だけではなく男性性（男らしさ）という並べ方をする。さらに原著もマスキュリニティーズと複数形である。

しかしジェンダーの非対称性の極には男性・男性性があることを指摘しないとジェンダーの基本的な問題はクリアにならない面もある。集団的なカテゴリーとしての男

性と、いろいろな交差性のなかで特性をもつ男性諸個人とを区分けして論じることになる。非対称性のなかの権力勾配・資源配分の差異があるので、マジョリティではあるが男性も個人としては多層的である。

その交差性の原理のなかにヘゲモニックな男性性は作用し、男性としての行動や意識を枠付ける。そうした男性的なるものを把握する概念として、ホモソシアル（男同士の絆)、ミソジニー（通例は女嫌いと訳されるが正確ではない)、マッチョ・マチズム、男性中心主義社会等がある。ジェンダーは秩序として存在しているので非対称性という権力勾配があり、男性をそこに拘束する。ヘゲモニックな男性性もそこに係留して構築される。この関係性のなかで多様な男性が構成される。こうした非対称な権力勾配に抗うには力がいる。日常生活のジェンダー的相互作用から国家間の暴力まで、男性的原理が作動するからである。

こうして、ヘゲモニックな男性性を中軸にして複数の男性性（マスキュリニティーズ）がそこに布置されていく。目次で示した例としては四つの男性グループがこの書ではインタビュー調査されている（4 章から 7 章)。

さらに応用的な研究が必要な領域と主題群が指摘されている。それは政策形成や専門的実践に関するものである。次のようなものが示されている。

①教育－この仕事は、学校、若者のアイデンティティ形成、学校でのしつけやハラスメントの問題そして少年の学習問題に関わって男性性の形成について考察している。

②健康－ジェンダーの形成は男性と少年の健康と安全、さらに再生産と性的な健康問題における男性の役割に関連している。

③暴力－男性性についての知識は、DV や性的暴力から制度的な暴力、戦争にまでわたる広範な男らしい暴力の防止に関連している。

④父親－この課題は特に父親としての子どもへの男性の関わり方を考察している。つまり、伝統的な男性性の諸困難、父親になる過程と家族関係における新しいモデルの探求である。

⑤カウンセリング－男性性の構築を理解することは男性のカウンセリングやサイコセラピーを効果的なものにする際に重要となっている。個人カウンセリングでもグループカウンセリングでも同じである。ジェンダー関係やジェンダーの特有性に関心を払うという方法である。

男性・男性性と関わる中範囲の領域固有性のある主題群である。男性性ジェンダーの視点も加味してそれぞれの領域で議論されている諸課題と交差させる。別言するとこれらの問題に男性性ジェンダーの視座を組み込むことでより鮮明になることがある。この連載では暴力の話題が多いがそこに男性性ジェンダーの作用を交差させることは必須の作業である。性犯罪、性虐待、セクシャルハラスメントの加害は男性がほとんどだからである。①から⑤まで各領域に男性性ジェンダーの作用の視点を欠かすことはできない。特に④の父親問題は男性性と直接関連しているし、虐待を介して暴力と交差する。⑤のカウンセリングに男性心理学的な理論と実践が反映されるべきだろう。ジェンダー秩序のなかではヘゲモニックな男性性が磁場のようにして動態をつくりだす。教育と健康についても男性性ジェンダ

ーとの交差は実りある議論となる。

この 5 つの論点設定には共通性がある。同じジェンダー秩序のある社会に生きていても男性諸個人のジェンダー体験の差異があることを視野におさめて理論化する必要がある点だ。非対称性権力勾配のなかにある多様性であり、ヘゲモニックな男性性のなかでの異なりがあり、脱ヘゲモニックな男性性の戦略を組成させることの論点という意味である。とくに暴力から脱暴力への研究は本連載とも関わり一貫して関心を寄せてきた点である。

例示をしておこう。本書の補論のなかに「暴力の問題－対人的暴力と国際的暴力－」という記述がある（以下の引用はすべてこの補論から)。暴力と男性の関係の事実は徐々に問題として認知されてきた。「たとえば湾岸戦争のような軍事的対決であれ、家族のなかであれ、暴力を正統化するような支配的形態の男性性はどんな役割を演じているのか。ジェンダーは暴力の文化においてどんな役割を演じているのか。いかなる人格発達のパターンが男性や少年を暴力へと導くのか。これらは現在、平和を維持するためにその問題や含意について積極的な論争となっている」と語る。「しかし、私たちはその結びつき、つまり心理社会的、構造的、言説的解釈のこれらすべてが暴力を促進させるものしてどのように関わりあっているのか」にまだ応答できていないという。もちろん「ジェンダーは暴力を理解する単純な鍵を提供しているのではないことは明らかである。暴力は多元的な原因をもち、社会的文化的に変化し、時代を超えて変化することは知られている。殺人の比率と地域的な貧困に関係があるという重要な事例も知られている。つまり、男性性は暴力の固定した説明変数としては解釈できない」とも指摘する。

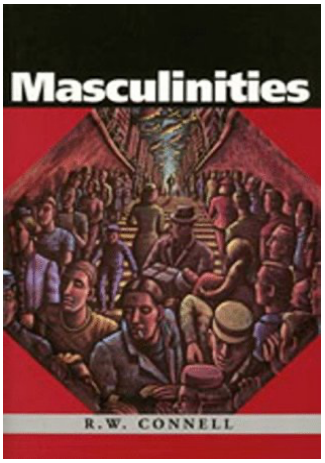
本書が示しているように、「男性性は多様であり、歴史的に変化する。オーストラリア、ドイツ、日本の比較研究は、暴力犯罪の変化する比率が異なる文化における男性性の特定の歴史に結びついていることを示している。こうして私たちはいかに社会的緊張が特定の担い手によって暴力として表現されるのかについて理解するために、特定の男性性を探求しなければならないことになる」と解説している。若い男性によるホモフォビア的な殺人の事例を扱った研究として「異性愛的パニック」という概念を紹介している。暴力の解釈について男性性ジェンダーを介して中範囲の概念を構成すべきという視座である。ジェンダーの二項対立を回避する男性学の提唱ともいえる。社会構造としての暴力問題ではなく、個々人が振るう暴力を扱う社会病理学的な暴力研究においてこの中範囲の概念は不可欠となる。「行為としての社会病理」は、たとえば暴力を振るわない男性がいることの説明、男性同性愛関係における DV の解釈、親密な関係においてだけ暴力を振るうことの説明等として考察をしていくことになる。

コンネルは「ある暴力防止のプログラムは 1990 年代に男性性の研究からの概念を用いて始まった。それは広範な公共的キャンペーンと若者たちや刑務所入所者のような困難なグループへの対応の戦略の開発という双方を含んでいた」とし、男性性ジェンダーについて中範囲の領域を設定して暴力論として解くことの必要性を強調した。「この戦略は拡大されるべきことは重要な

ことだが、男性性の理解の刷新によって支えられることも大切だ。この作業への鍵は暴力と暴力防止など、男性性の状況的な特殊性を把握する能力である。また、個人のレベルから制度や国家のレベルへと移動していく能力である。今後もなお男性性についての理解を深めることは、平和的で生き残りうる社会を構築するのに必要な知識の重要な部分となっている」と言う。単に暴力や平和を語るだけではなく、男性学研究を介してこそそれらの主題も深まると指摘するのだ。男性学研究を介してこそ深まる領域がある。そうした刺激的な論点に満ちた書物となっている。

しかし申し訳ないことに本書は高額である。税込みで 8580 円だ。図書館に購入請求して読んでいただくことを切に願う次第である。

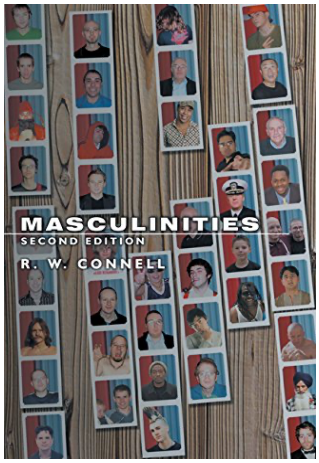
巻末資料（書影）



1995 年第 1 版



翻訳本 2022 年



2005 年第 2 版



男性学の変化：独自に男性学 2019 年『現代思想』　　2011 年フェミニズムの中の男性学研究

なかむらただし（立命館大学/臨床社会学・社会病理学）

人を育てる会社の社長が
今考えていること
vol.13

執筆者トークライブのアフタートーク

3か月ほど前になるが、22年2月24日の夜、「対人援助マガジン執筆者トークライブ」のゲストに招かれ話をした。テーマは「人が育つ仕組みと仕掛け」。今号は、その内容を少し振り返りながら、当日話せなかったことを書き加えておきたいと思う。なお、聞き手は本誌編集委員の大谷さんと千葉さんだが、文中は「★」で示させてもらった。

＊＊＊

★団さんは自ら立ち上げたアソブロック株式会社の社長を「自分がいない方がいい」という理由で先日辞められましたが、それはその、いったいどういう発想なんですかね。

ありがたい事なんですが、ある程度会社が経済的にも豊かになって、できることならこの状況が続けばいいよねっていうふうに、組織自体が考え始めているなと思ったんです。それは、私が会社を経営する上で一番大事にする「会社は人が育つ場である」ということに対してはマイナスに作用することも多くて。じゃあどうしたらそうではない状況に、ある意味土台を作り変えることができるだろうと考えたときに、私が辞めるのが一番かなと。それで。

★会社としての価値、ですかね。それがアソブロックは普通の会社とかなり違うのかなと思っていて。それこそ安定したり、収益がきちっと上がりだしたりすると、普通はそれを強化しようと思う。儲かる仕組みができたのであれば、それを維持したり増強したりしようと考えるのが一般的だと思うんですけど。その状況を「やばい」と思ったってことです

よね。

そうです。やっぱりお金の力は怖いですから。ちょっと脱線しますが、「社会をより良くする」という目標に対しては、小金持ちが一番役に立たないと思っていて。大金持ちになると、それは全然景色も変わると思うんですけど。
経済的に豊かではないっていう状況は、それ自体が打開に向けた挑戦を生むでしょ。大金持ちは、なったことないから分からないけど、良くも悪くもまた別の動機が発動すると思うんです。ところが小金持ちは、どうしても保身に走りがち。この状況をいかに続けるか考えてしまう。組織全体が、そんな状況になりつつあるのかなって、思ったんですよ。やっぱり人の成長支援を志向するのなら、それぞれができる最大の挑戦をし続ける組織にしておかないとなって思って。私自身も、このままではあかんのちゃうかなっていう感じがありました。

＊＊＊

これをやっておけば経済が回る、という仕組みを手にすると、人はその仕組みが少しでも長く続くようにと、願ってしまう。一旦手にすると、その仕組みがさらに効率的に回るよう工夫を重ね、リスクを減らす意味で属人的な要素を排除しようとする力も働きやすい。その結果、多くの人は仕組みを支えるパーツに成り下がる。これが、会社の繁栄が多くの人の成長を妨げてしまうパラドックスの要因だと私は思う。そんな流れの中で、働き手自身が「このままではいけない！」と声を上げられればまだ良いのだが、下手に豊かな経済が担保されてしまうと、未来のリスクに目を向けることなく、知らず知らずのうちに環境に飼い慣らされていってしまう。終身雇用を約束できた時代は、それでも幸せに一生を終えられた人がたくさんいたのだと思うが、今は難しい。X デーが来た時に、投げかけられる言葉は「自己責任」である。そんな時代だからこそ、それを乗り越える知恵や手段を持たないといけない。「アンラーン」などという言葉が流行するのも、根本原因はそこにあると私は思う。

＊＊＊

★人が育つことが会社の価値だっていうのは、いつくらいから思われるようになったことなんですか。

前提から少しお話すると、まず成長の捉え方って人によって多様だと思うんですが、私が考える成長は「選択肢が増えること」です。そう定義したことがまず大前提です。
例えば子どもって基本的に親元で過ごすしかないですよね。仮に、自分の環境が不遇だと

思えても親元にいるしかない。生存本能的な振る舞いでしょうし、そもそも自分の置かれた環境を客観視することも、子どもには難しいでしょう。それが大学生くらいになると、バイトで金も稼げてやや緩むというか、選択肢が増えた気持ちにもなるんですけど、社会人になると、一人の働き手として、無力感とかに苛まれることも多いと思うんです。つまり、また選択肢が減るんですよね。労働市場において発揮できる価値も少ないし、今転職活動したってこんな俺を雇ってくる人はいないだろうというような気持ちになったりとか。そこからキャリアを積み上げていくわけですが、キャリアとはつまり「できることの数」で、キャリアアップとはそれを増やしていく作業。その結果、選択肢が増えるわけです。なので、成長とはできることを増やし、自身が取り得る選択肢を増やすことだと位置付けたんです。

★なるほど。

じゃあどうすれば成長するかというと、成長には三つのきょうが必要だと思っていて、それは熱狂と越境と逆境だと。越境っていうのはここではないどこかに常に自分の身を置く、っていうことです。環境が変わらないと成長は停滞する、アソブロックで言うと、だから兼業必須なんです。越境を担保する制度として、兼業必須を取り入れたんです。
熱狂っていうのは、今やっている自分の仕事に熱量をもって打ち込むこと。逆境っていうのは、ちょっとうまくいかないかもしれないという、ある種危機感を持たざるを得ないような、そういう修羅場に身を置かせること。この三つのきょうが担保されれば、人って「自分がまさかこんな風になれるなんて」みたいな、自分自身も驚くような速さで成長する可能性が高まるんだって、経験的に確信してきたんですよ。
ところが、先のアソブロックの場合ですが、小金持ちって熱狂しにくいんです。小金持ちを続けるぞ、いうて熱狂する人ってなかなかいないでしょ。要するに、本当はもっとできるはずなのに、この辺でいいかっていう、ある種自分との折り合いを上手につけてしまっている状態だなと思って。それが経済合理性も高い振る舞いだから。その結果、組織全体が熱狂不足に陥る。そんな印象を 4 年前くらいから感じていたんです。それで、逆境と熱狂を、私が辞めることで一気にセットしようとしてみた、というからくりです。

★コロナでも逆境にならなかったんですか。

ならないです。コロナで逆境になる会社っていうのは、コロナになったときに取りうる選択肢が少ないから逆境に陥るんですよ。吉野家が牛丼だけでやったとき、狂牛病で牛肉が入ってこなくなったら大ピンチになりましたね、あれと同じ。なので、選択肢をどれだけ持っておけるかっていうのは、経営もそうだし、個人のライフマネジメントに関しても肝要だと私は思っているんです。

コロナってやっぱそれはすごいインパクトでしたけど、コロナになったからめちゃめちゃ会社やばいなっていう風にはならないように、リーマンショックのとき学びましたからね。世の中何が起こるか分からないけれど、何が起きても何とかなるっていうことを仕組みとして持っているところが、結果的に 100 年企業になるんだなって思ってますから。

★なるほど、成長を選択肢が増えることだと定義するっていうのは、ものすごくなるほどと思いました。働く中でその選択肢が、むしろ年齢とともに減っていく人もいるじゃないですか。もうここで最後潰れるまで留まってくしかないっていう風になる人もいたりするので、選択肢が増えることって、本当そうだなと思ったんです。ただそれは、会社で働く従業員のメリットとしてすごく大きいのは分かるんですけれど、経営者の立場からすると、働く人たちの選択肢が増えるのは、流出リスクが高まることになるので一般的にはあまり好まなかったりするんじゃないかと思うんですけど、そのあたりってどういうふうに考えていたんですか。

＊＊＊

個人の利益と会社の利益が相反しませんか？という問いは、アソブロックの社長時代に何度も受けた質問だ。私は、そのような発想自体が、短期成果主義の風潮に呑まれたものだと思う。
私のこれまでの人生の中で印象的だった経験のひとつに、長男の保育園時代の親としての経験がある。その園の園長に惹かれて引っ越しをしてまで入園させたのたが、園長が度々口にしていたのが、「お友達が楽しそうならあなたの子もきっと幸せだ。だから全員をわが子と思え」と「あなたが会社にいなくたって、例えあなたの会社が無くなったって、世の中は何の影響も受けない。あなたの社会における価値なんてその程度だ。だが、あなたがいるかいないかで、あなたの子は大きな影響を受ける。あなたの家族も同じだ。どちらを優先すべきかは、言うまでもない」という二つだった。特に後者は多くの働きマンたちが非難し、言い争いになることも度々だったが、私は園での 5 年間を通じて腹落ちした。社員が幸せそうなら、あるいは独立したとしても元社員が幸せそうなら、経営者もきっと幸せであり、我が社がなくなったって社会は何の影響も受けない。そういう心持ちは謙虚なのではなく、リアリズムなのだと思う。そうであれば、辛うじて生き延びているうちは、社員の幸せを一番に考え行動するのが合理的であり自分のためでもある。そういう意味で、「世の中になくてはならない会社にする」などというビジョンを掲げる法人が、一番保身的で進歩を遮るとも思う。

＊＊＊

★ちょっと私の個人的な話も入るんですけれど、アソブロックの特色の一つとして、年俸の自己申告制っていうのが、あるじゃないですか。

はい。

★私も大学院を出た後にずっとひとつの職場で、固定給で働いていたので、自分のお給料は向こうに値段をつけてもらって働くことしか経験してなくてですね。ところが去年仕事を辞めて、フリーで仕事をしたときに初めて「仕事をお願いしたいんですけどいくらですか」って聞かれて。すごく戸惑うというか、単発の仕事なのに、自分で自分に値段をつけるってことにすごく戸惑うってことがあったんです。
でも、それが自分にとってはすごくいい体験だったなっていう風なことを思って。なので今、この 4 月から大学に移って、3 年生のゼミとかも持っているんですけれど、その中で就職活動とかね、今後の進路とか、そういうことを考えている学生さんも多かったりするので、アソブロックのことをちょっと紹介したりするんです。こういう会社があってね、みたいな。皆さんだったらじゃんけん採用を受けますかとか、コンビ採用だったらこいつと一緒に行こうと思う人はいますかとか、そういうことを聞いたりするんですけど。でも一番みんなが考え込んで盛り上がるのが、年俸の自己申告制のとこなんですよね。その子、その人らしさも出るなという、ね。お給料の高い会社に行きたいっていう風な言い方をしている子も、じゃあ自分で値段つけてくださいって言われるとすごく、「うっ」っとなったりするみたいですけど。実際これ、自分の値付けをする人たちっていうのはどんな感じなのかなあと。あと、このことについて遊さんとしてはどういう意味があると思っておられるのかっていうのをちょっと改めてお聞きしたいなと。

誤解がないように言うと、新卒 1 年目に限って給与は決まっています。21 万円。それは募集時に条件を明示しないといけないし、ナビサイトに出すにしてもそれがないとダメなんで。ですから、新卒の場合、宣言するのは 2 年目からなんですね。1 年間は 21 万円で業務が走り、2 年目に「年俸どうすんの」って聞かれるんです。で、だいたい下げてくるんですよ、みんな。
別に「下げてくれ」って言いませんよ。何なら上げろというのが会社からの普遍的なメッセージです。ただ、授業で学生さんが盛り上がり悩んだっていうのと同じで、本人すごく悩むんです。一体 21 万円っていうのは、何の根拠があって 21 万円だったのかっていうことを考えるんですよね。その結果、面談で「どうする」って聞いたら「18 万ぐらいで」っていう、よく分からない謎の 3 万円くらい値引きが発生することが多いんです。
理由を聞くと、自分がこの場所で、このくらいの生活をするために、これぐらいはっていう必要予算と、それから自分の仕事に対する対価としてこれぐらいもらってもいいんじゃないかっていう、葛藤がありつつなんですが、その妥協点としての 3 万円値引きです。そ

れで、大事なのは、その決断過程です。なるほど、社会から、会社からというよりは社会からお金をいただくということは、つまりそういうことなのだっていうことに気付く。そこに考えが巡るっていう、まさにその内省に意味があると思っていて。だから結論 18 万円に下げるわけじゃないんですけど、お金ってなんだ、給料ってなんだっていう話ができることが大事なんです。特に新卒の場合はね。

＊＊＊

一時「父が娘に語る経済の話」（ダイヤモンド社）という本が話題になった。先進国に追いつけ追い越せで一致団結できた時代が過ぎ去った今、お金って何だろうということについて、改めて考え直す必要があると思う。その評価は、組織ごと、コミュニティごとに違っていていいが、「もらえるならば幾らでも」というのが共通認識ではないことに、少なくともマネジメント層はいち早く気付く必要がある。
仮に「より稼ぐことが幸せ」が真ならば、お金持ちから幸福度が高くないと筋が通らない。確かに金銭不安が幸福度を下げることは間違いない。ただ、人によって、あるいは住環境によって、金銭不安を感じるラインやたくさん稼げたと思えるラインは違う。
先日、とあるバラエティ番組で「稼げるようになった」と感慨深かったのは月給がいくらになった時だったか？というのを芸人が告白し合う企画があった。ユーチューバーがお金をネタにする企画を投稿することも多い。古い世代は、それを「はしたない」と言う人もいるだろう。だが、お金との距離感が古い世代のそれと若い世代のそれとでは変わってきているという見立てもでき、私は後者の方が実態に近いのではないかと感じている。
形式的には「年俸協議」をしていることになるアソブロックの年俸宣言制度だが、仕掛けた側は「社長が社員と語る経済の話」（アソブロック社）をしているという感じで、これまでずっと運用してきた。

＊＊＊

★アソブロックの社長を辞められたのは、これからの 20 年を見越してっていう部分もあると思うんですけれど、何か今の抱負とか、今後に向けて持っておられるビジョンみたいなものがもしあれば教えていただけたらと思うんですけれど。

私、自分は編集者だと思ってずっと仕事をしてきたんです。経営者って言われることもあったけど、いや編集者ですって心の中で思っていて。編集って、0 から 1 を発明するのではなく、あるものをうまく組み合わせて新しい価値を生んでいくことなんですが、それが好きなんですよね。これだけ物があふれている世の中だから、編集の力でもっと世の中を良くできるんじゃないかと思ってるんです。だから世の中を編集することが私のやりたい

ことで、それをそのまま「ヨノナカ編集舎」と新しい屋号にしました。
それで、未来にどうなりたいかっていうと、例えばですけど、
「団、ウクライナとロシアの話、知ってるやろ、あれ止めてきてくれ」
「しゃーないな、わかったわかった」って言えるようになりたい。
これも、編集だと思うんです。もちろん外交活動だとラベルも貼れるんですけど、国の関係性の編集ともいえると思っていて、つまり編集者は世界平和を実現できるんじゃないかって思っていてね。
だから今日も、ウクライナで爆撃が始まって実質戦争が始まったみたいなことを見ると、自分には何もできなかったんですけど、何かできなかったのかなと思うし。いつか、そういうときに声かけられるようになりたいと思います。それが私的には編集者として成長できているかどうかの一つの指標。持ち込まれる課題が変化することが、私の編集者としての成長で、同じような課題しか持ち込まれなくなったら、自分はもう世の中から見限られている部分があるのじゃないかって思ってやってます。

★編集できるもの選択肢を広げていくということですかね。

編集者って、自分では何もできないんですよ。これがミソで。何にもできないところがいい。だから何かをすごくやれるようにならない方が、編集者としての腕は広がるんです。例えば、自分でいい原稿が書けちゃうと、本当にすごいライターとは出会えないんです。自分でやった方が早いから。そうすると結局は自分の世界が狭まってしまうんです。ただ、何かを頼まれたときに、募るメンバーが頭に思い浮かばないと引き受けられません。当たり前ですよね。なので、何を頼まれても答えを出せるメンバーが思い浮かべられるようになるのが編集者としてスキルアップだと思ってて。その最高峰が、「団、悪いけどあの戦争を止めてきて」かなと。
しばらくしたら青天の霹靂で停戦合意が行われて、世の中は「なんでだなんでだ」ってなるんだけど結局要因は分からなくて。でも 100 年後くらいに「実は団遊ってのがいたらしい」ってささやかれたら、編集者冥利に尽きると思います。

文／だん・あそぶ（団遊ヨノナカ編集舎　主宰）　https://www.danasobu.net/
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な会社の経営に携わる一方で、贈与型社会の実現に向けたプロジェクトに取り組む。元は雑誌の編集者。21 年 9 月に第一線を退いたが、アソブロック株式会社で貫いた独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国でワークショップや講演も行っている。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

カウンセリングのお作法　第三十一回

CONカウンセリンオフィス中島　中島(水鳥)弘美

★家族面接　初回の問題確認段階　状況を知る「状況を詳しく教えてください」

前回は家族面接初回の社交的段階について話しました。

今回は、「問題確認段階」において、大切にするべき点について話します。

初対面で困りごとを話す緊張

初めて訪れる場所は、落ち着かないものです。初対面、とくにカウンセリングの初回面接は、相談に来られるクライエントさんとそのご家族が、程度の差こそあれ、緊張状態で来所されることが予想されます。なかには、早めに到着して、場所を確認して時間調整をしてから来られたり、予約時間の何分前にうかがったらいいでしょうかと、事前にたずねられたりする場合もあります。

問題は問題？

カウンセリングの本題へ入る問題確認段階、ここで「問題」という表記になっていますが、実際の場面では、問題ということばはできるだけ出さないようにしています。

問題(＝良くない事)とレッテルを張ることが、不必要な意識につながり、影響が及ぶ可能性があるためです。面接では、解決したいと希望している事柄、課題、状況、困っていること、という表現を使用します。

「状況を詳しく教えてください」

カウンセリングを希望して来所されたご家族にあいさつなどする社交的段階から、次のステップである、状況をきかせていただく段階に移ることを明確にするために、切り替えます。

「今日はどういったことで来られましたか」

「ここで、話し合いたいことは、どんなことですか」

あるいは、

「事前に、電話で少し様子をうかがっています。子どもさんのことですね。それでは、様子を詳しく教えていただけますか」

「どなたからでも、どんなことでも結構ですいまの状況をきかせていただけますか」

などと、できるだけ、家族に自由に話していただけるように問いかけをします。

家族のうち誰が話したそうにしているのか、誰が誰に話すように合図を送っているのか、誰かがいきなり話し始めるのか、どのようなプロセスを経て、語られるのかを確認しながら、状況理解につとめます。

初対面で困りごとを話す緊張



カウンセリングで解決したいことは
すらすら話せるわけではない

・問題確認段階では問題という言葉は面接場面では
あまり使わない
→「どういったことで来られましたか？」

・事実の把握
あいまいな内容は明確にきく
→「例えば？」と確認する

家族面接　初回面接の４段階　ジェイ・ヘイリィ

1	社交的段階	あいさつを含む社交的段階
2	問題確認段階	主訴を中心にやりとりが行われる問題確認段階 困っていること　何とか改善したいこと
3	相互交渉段階	家族がお互いに話すように要求される相互交渉段階
4	目標設定段階	何が変わるのかを細かく話す目標設定

家族面接　初回の問題確認段階　状況を知る

来所者の家族全員が話せるように

家族の話

事前にメモなどを用意して状況を話される場合もありますが、みなさんがすらすらと説明されるとは限りませんので、話し手のペースにあわせます。

ただし、あいまいな内容は、必ず具体的な事実がわかるようにします。

「うちの子、優しいけれど、弱いのです」

と、話された場合は、

「優しいけれど弱い、というと例えばどんなふうになのか、教えていただけますか？」

ときかえして、さらなる説明を待ちます。

あきらめている、どうしようもないなどの感想ばかりが語られることがあります。少し混乱している感情も受けとめつつ、全体像の把握を心がけて、お話をうかがいます。

クライエント　三つのタイプ

クライエントについて、スティーヴ・ドゥ・シェイザーと、インスー・キム・バーグは、来所動機は三つのタイプがあると説明しました。

カスタマー・コンプレイナント・ビジター

カスタマーとは、問題解決に対して，いろいろ取り組む動機を持っている人です。

コンプレイナントは、不平不満つまり、問題があると認識はしているけれども，自分で問題解決に取り組もうとしない人を示します。

ビジターは、ただカウンセリングに連れてこられた人、やってきた人という意味です。

大切な視点は、問題解決への動機づけというものが、個人の内側にあるのではないこと、カウンセラーとクライアントとの関係性によって変わる点です。初回面接での動機は面接を重ねていくにつれて変化することが可能です。それぞれの動機がどのようなところにあるのかを推測しつつ、話に耳を傾けます。

全員が話す

子どもさんに関することで家族が相談に訪れたとします。両親がこれまでの状況などを話したあと、全員に話をしてもらうためにも、子どもさんに話をうかがいます。

その場合、慎重にすすめていく必要があります。

「ご両親から様子を少しずつ教えていただいています。今の気持ちとして、これからどうなったらいいと思いますか、どうなりたいですか」

と、今後に焦点をあてた問いかけをします。

初回来所のクライエント３タイプ

スティーヴ・ドゥ・シェイザーとインスー・キム・バーグ

カスタマー	問題解決に対していろいろ取り組む動機を持っている人
コンプレイナント	不平不満つまり問題があると認識しているけれども、自分で問題解決に取り組もうとしない人
ビジター	カウンセリングに連れてこられた人、ただやってきた人

動機は

クライエントとカウンセラーのその後の関係性により変化する

家族カウンセリングにやってきた子どもの気持ち



「カウンセリングは必要ない、何も悪くない」

家族全員に話しかける

「どうなりたいですか？」

家族面接　初回の問題確認段階　状況を知る

初回来所者の希望や動機に沿う「どうなりたいか」

どうなりたいか

子ども自身がどうなりたいのかについて、問いかけるには、目的があります。来所に関して不本意な気持ち、ひそかに傷ついている可能性のある子どもに対して、何を希望しているのか、共通の方向性を明確にすることによって、家族、カウンセラー、関係者が協力をして問題解決をする応援の姿勢を示します。

なんでこうなったと思うのか、原因をさぐるような話は決してしません。もちろん、責めるような質問もしません。

解釈やコメントをしない

もうひとつ大切なことは、事実確認や状況を把握しているときには、家族に対して、カウンセラーから解釈やコメントはしないことです。がんばりましたねとねぎらいたいところですが、何よりも解決につながる情報を整理できるようにすることが最優先です。

どうしたらいいでしょうか？

「もうあきらめています、どうしたらいいでしょうか、どうにかなりますか」

ご家族から逆に質問をされることもたびたびあります。これまでの状況を説明すると、すぐに、カウンセラーから何かの対策説明があると期待していることもあり、早く示してもらいたいとの思いが高まります。

初回面接の流れを最初にご家族に示したにもかかわらず、家族が次々に話し続けて、

「こんな状況にもかかわらず、学校側はあまり協力してくれない、それは本人が変わるしかないと言われました」

など、まわりの協力がないことが原因ではないかと家族なりの判断もよく語られます。

そのような家族なりの思いが表れる場合は軌道修正をして、

「これからどのようにしていくのが良いのかを考えるために、先ほどおっしゃっていた、子どもさんが学校に行くことができたときの様子と、帰ってきたときの様子をもう少し聞かせていただけますか？」

と巻き込まれないように配慮します。

この時点で、少しでもうまくいった成功例が示された場合は、何がいつもと違ってよかったのか、解決につながるポイントを見逃さないようにたたみかけます。

すると、再びご家族は、

「そういえば」

と、これまでのことを思い出して話しをすることにつながります。

このように状況を確認する段階では粘り強く情報把握に努めます。

家族の思い　家族なりの判断

どうしたらいいでしょうか？
学校があまり協力してくれない
本人が変わるしかないと言われた



知りたい　すぐにでもこたえがほしい



CON子さん　心理カウンセラー

家族の話を粘り強くきき、事実を確認します



はてな子さん　カウンセリング初学者



問題確認段階っていろいろ気をつけることがあって
初回面接は重要なんだぁ

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

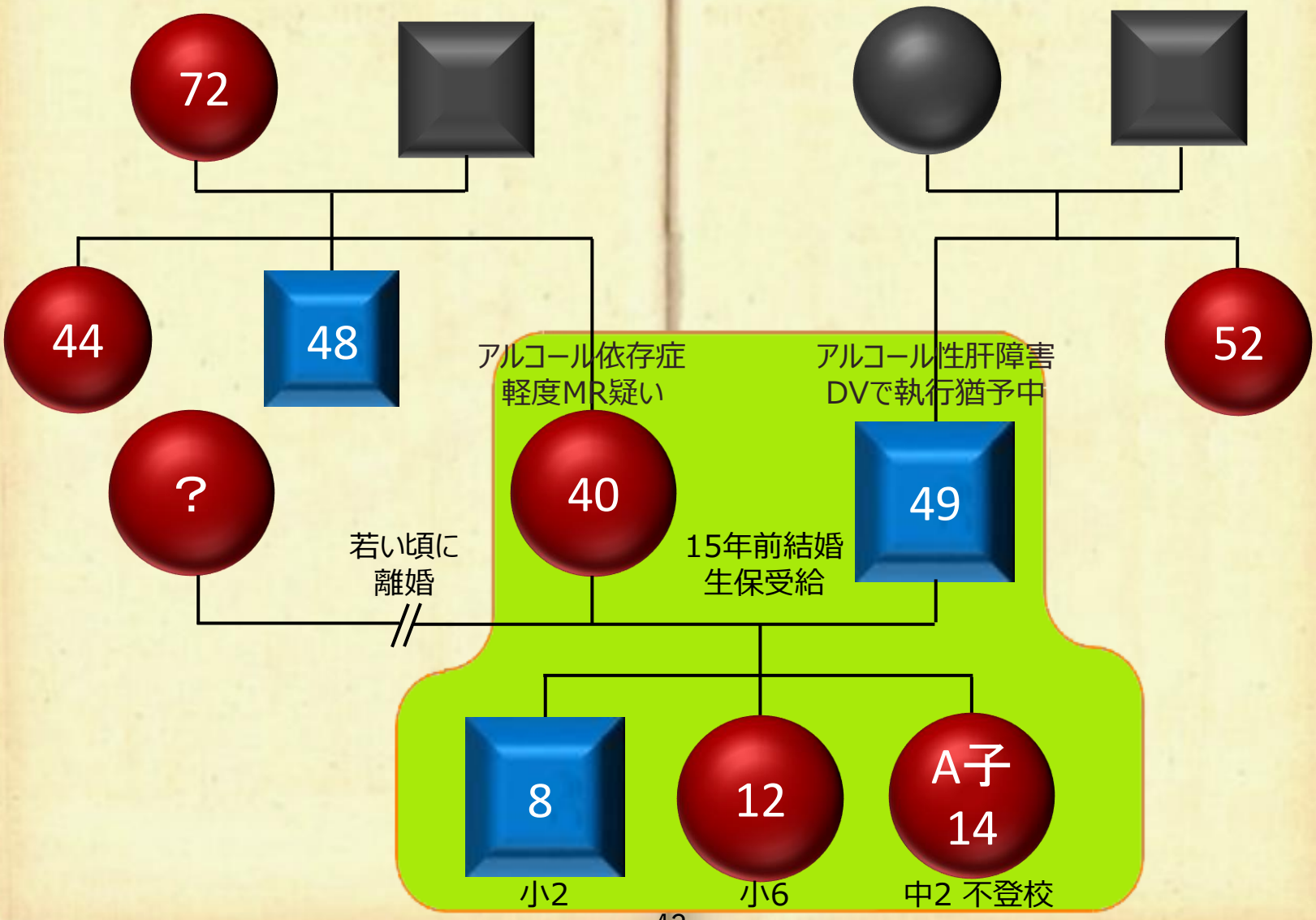
十五　仮想事例検討会③

～ひとりでリフレクティング～

※　間隔があいているので、事例を再掲します。



お断り：事例検討のために作成された家族です。



両親について

母親は、三人兄弟の末っ子。幼少時に父親が死去し、その後、生保受給。高校を中退し、様々なアルバイトした。25歳の頃、友人の紹介で働いていた飲み屋で現在の夫と知り合う。三人目が生まれ、手が回らなくなるにつれて酒量が増えた。最近は昼ごろに起きることも多く、家事も滞りがち。軽度の知的障害が疑われている。母方兄、姉はそれぞれ結婚しており、ほとんど行き来はない。

父親は、若い頃に離婚歴のある建具師。結婚後、妻と飲酒することが習慣化し、アルコール性肝障害になる。現在は断酒している。半年前、酔った妻への暴言・暴力と止める子どもたちを突きとばしたことで逮捕・起訴され執行猶予中。

母親はよく離婚を口にするが、一人で子どもを育てる自信がなく具体的に動くことはない。父親も、自分がいなければ子どもたちが困るからと離婚は考えていない。

子どもたちについて

長女は、中学2年。小学校時代は、担任から食事・洗濯・宿題等のサポートを受けて登校していた。成績も悪くはなく、いじめもあって休入ると学校の配慮はなかった。中学に む日が増えていった。現在は週1～2回、昼ごろにふれあい教室をのぞく。家事や妹たちの世話が行き届かない母親を嫌う。父親が家事をするときは、すすんで手伝っている。

小6次女・小2長男（いずれも怠学傾向）は、身なり・宿題・登校など、父親に強く言われるとしぶしぶ従う。両親が口論すると必ず母親をかばう。2人とも通常学級で低学力、学校は様々な配慮をしている。

今回の経緯

母親の飲酒を父親が叱っているとき、長女が「いい加減にしてよ！」と言い、それに父親が「学校を休むやつが偉そうに言うな」と怒鳴った。父親の態度に驚いた長女は、発作的にリストカットをして家を出た。しばらくして近くの交番に行き、家に帰りたくない、生きていても仕方がないと訴えて児相で保護された。

母親は、児相に呼び出されて事情を聞かれたうえに長女からは帰宅を拒まれ、飲酒に歯止めがきかなくなった。激高した父親が手を上げそうになり、心配した次女が児相に電話。結局、子ども全員の一時保護となる。

話し合いの結果、母は断酒のために通院する、父親は暴言を控えると約束。次女・長男は家庭引き取りとなった。長女は迷ったあげく父親の提案を受け入れ、保護所で今後のことを考えることになった。

A子さんには、日々のゴタゴタそれ自体のしんどさと、それに結びつけた自責の辛さがあると思います。その肩の荷を軽くできそうなのは、どちらかというと後者でしょう。

そこで提案ですが、その自責ストーリーの文脈変化をめざして、ケース担当者役と心理相談員役とわたしとでリフレクティングチームってのをやりましょう。協力していただける方、前に出てもらえますか？

それから、各グループのA子さん役をされた方々は、話に加わらずに椅子に座ってライブでわれわれチームの振り返りを聴いていてください。で、後ほど感想をお聞きします。



一時保護以降、A子さんからはいろんな話をうかがったわけですが、ここでちょっと私たちスタッフで意見を出し合いたいと思います。ここでそれを聴いてもらって、後で感想とか意見をきかせてください。

ではまず、家族関係というか、つながりについてどんな印象を持ってる？



最初はバラバラの家族かなと思ったけど、実はそうじゃなかった。たとえば母親は次女・長男から慕われているし、夫だって離婚なんてぜんぜん念頭にない。

父親は、A子さんの家事分担で支えられてきたし、それに応えて飲酒を控えていたしね。

A子さんについていえば、今後のことを保護所で考えようと決心をしたのはお父さんの助言があったからだろう？今回、父親が厳しい言葉を発したわけだけど、初めてのことだったからショックを受けたわけだ。これまで父親は無理な登校圧力をかけておらず、二人は自然に信頼しあっていたと思う。

次女・長男が比較的安定しているのは、母親とのつながりがあったからでしょう。もちろん、学校の手厚いサポートもありますが。



こうしてみると、家族はそれぞれにいろんな組み合わせで支えあってる。それに、親戚とかの外圧や近隣等との軋轢がほとんどないのも、この家族の強みだと思う。

確かにね。じゃあ、次に、今回のことについて振り返ってみよう。

なによりも、一時保護所でこうやって考える機会を持てたのはよかったと思います。



そのきっかけを作ったのは、間違いなくA子さん自身だけど、他人に家族のことを話すのは、とてつもない勇気が必要だったでしょうね。

その背中を押したのは父親だよ、結果としてだけど。

そのことだけど、父親は今まで一度も学校のことなんて言わなかったわけでしょ。あれはどうしたんだろう？

よくわからないけど、父親がカッとなったのは、学校とは関係なくて、ほかに理由があったんじゃないだろうか。



他のことって？

家事も養育も自分がやってるという父親の自負、アルコールを断って頑張ってるという意地ね。そこに、よかれと思って、あるいは見かねて、A子さんが手伝い過ぎた。それでカチンと、ないかな？

いや、なんかわかる気がする！

A子さんの学校のことについてはどう？

「家には自分にしかできないことがある、それは学校に行くよりずっと大事なこと」というA子さんの判断は間違ってないと思う。無意識的なものかもしれないけど。



その英断はどこから生まれたんだろうか？

よくわからないけど、父親がアルコールを我慢して家事をしている姿をずっと見てきた、それは無関係じゃないと思うけど。

自分だったら、逆に学校生活に逃げたと思う。家のしんどさからから逃れて、部活に熱中したり。

それはよくわかります。でも、自分を必要としているのは学校じゃなく家だ、という思いの方がずっと強かったんでしょうね。

そうそう、ということは現在の登校の仕方はベストだよね。



結局、A子さんと父親って、私たちが思う以上に強い絆があるんじゃないかなぁ。暴言のショックが大きかったのは、そのせいだったんだ、きっと。

振り返ってみれば、A子さんが家で踏ん張って、父親がお酒を我慢して、そして母親が通院する決心をしたってことよね。

家族って、そういうふうに相互に影響しあっているんだなぁ。お母さんの通院は、そうしたつながりの一つだってことか。



ってことは、A子さんは今のままでいい、いや、いまのままがいい、必要とされている家に居ることが。

でもさぁ、それはそれでしんどくない？登校が息抜きになったら最高だと思わない？学校がそういう場であったら。

息抜き登校か、それすごく大事なポイントだと思う。

学校の支援目標が具体化して来たね。学校が息抜きの場になる過ごし方ってどういうのだろう。そこを学校と話し合ってみたい気がする。



われわれの課題も見えてきたけど、予定の時間がきたので終わります。A子さん、横で聴いていて、どんな感想をもたれましたか？

配偶者を亡くして一年日記（４）

団　士郎

二年前のGWは、体調不良を訴える妻の横で、コロナ禍対応で繋がりにくい電話を保健所に何十回もかけていた。やっと許可がおりて大津日赤に駆けつけ検査入院。GWあけには胃がん、腺癌のステージⅣと診断された。

そして８月１２日に亡くなるまで、結果的に僅か三ヶ月の病床生活だった。コロナ禍で出張仕事はキャンセルや延期が相次ぎ、私は自宅に居られたので、セルフイメージにはなかった看護人生活を過ごした。

夫婦で過ごしたこの間は、今思い出してもいい時間だった。高齢期にさしかかったとはいえ、夫婦の晩年をいくら考えたところで、なかなかリアルにイメージできるものではない。それが現実になった時、結果的に悔いも心残りもない迎え方ができたのは、運がよかったというほかない。妻が亡くなっているのに運が良いもないものだが、それでも多分亡妻もそう思っていたに違いない。

もう2年も経ったのか・・・とも思うが、ストレスを抱えることもなく暮らしている。お骨は我が家に置いたままだし、夢にもよく現れてきたので不在感もそれほどなく過ごしてきた。それがこの春あたりから、さっぱり登場しなくなった。そういう時期が過ぎたのか？

さて、次号からの連載はどうするかなぁ。新企画を考えるか、日誌まとめの二年目に入るか。まぁ、ゆっくり考えてみよう。

2021/5/14

最近参入の併読本三冊。一日中自宅にいると、家事全般をしながら、読書して、映画見て、雑用して、週末の講座の準備して、対人援助学マガジンの原稿書いて、東日本大震災10 年の振り返り原稿を少しずつ書いていても、時間はある。暑くなって、天気が不安定なまま梅雨入りか？と思う初夏。



5/16

日曜日の午後から石川家族面接を学ぶ会WS。三時間に縮小して zoom で。

17 年も続けてきているものだから、状況の変化には対応して出来ることをする。

初めての参加者もあり、どう伝わったかまでは支配できないが、こちらとして今出来ることを、やり切ったかどうかは分かる。



5/17

2 年前の今頃は、機会があって蘇州で開催することになった漫画展の準備に精出していた。その展示がきっかけで出版の話になり、作品数の関係で企画は上下巻ものから、4 冊組の本にスケールアップした。それがいよいよ大詰めで、前書きや著者プロフィールを求められている。発売が楽しみだ。

5/18

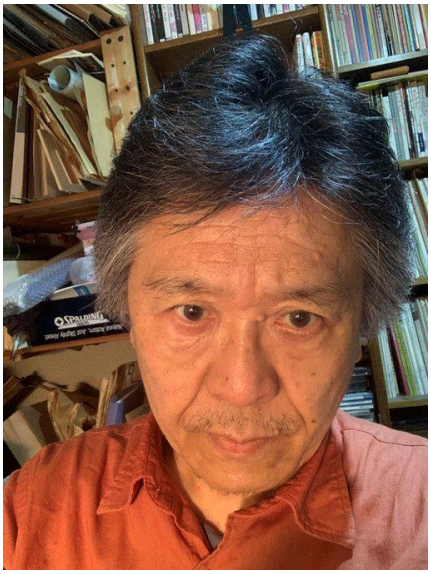


夜更かししながら、たっぷりこれを堪能した。最近何冊か、近年の大衆小説古典と言えそうな物に手を出した。そんな中で、古さが滲み出て挫折してしまったのが松本清張作品。「ゼロの焦点」も中断した。時代小説には全くそんなこと感じない。マンガ作品を創る者としては、気になるところだ。

5/20

74 歳になった日に、あちこちからおめでとうメッセージを戴いた。無事、今日を迎えられたのが良かったということだろう。

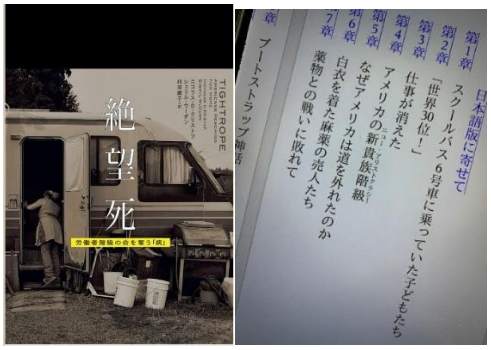
いつまで繰り返せるかは自分では決められないのが理解できているので、コロナ禍にもジタバタはしない。自分への祝いに髭を伸ばしてみた。これもいつまで続くかわからんが



5/21

昨日からこれを読みながら、米国の話なのに、日本の今が思われてならない。政治が結果に責任を取ろうとせず、自己責任だと押し付け続けた結果の格差社会。

アメリカはもう、誇れるものの少ない低ランクの国になっていることを明らかにしている。日本の話そっくりじゃないか。



興味深く明け方まで、これを読んでいて寝た。二時間もたたないうちに、激しくスマホが騒いだ。緊急避難情報。仕事場泊まりだったから、京都市からの通知。確認してまた眠りについたら再度警報。結局、三回。山沿いの地域へのもので、市内のマンションには関係がない。でも、有難いと思って寝直した。

5/22

無理することもないので連日、自宅や仕事場で原稿、zoom、読書、映画鑑賞の暮らしになる。

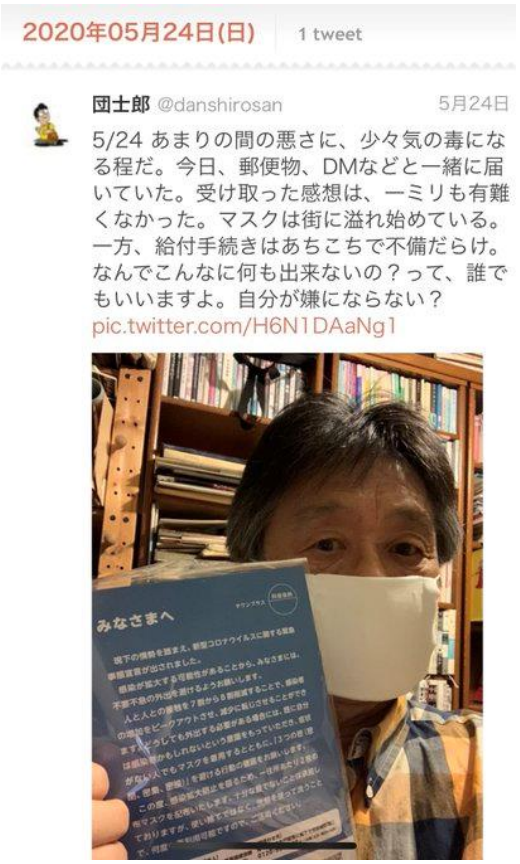
　すると腕を上げると肩の辺りが固まってちょっと痛かったりするので、ネットで見つけて久々にラジオ体操をやってみた。忘れてないものだなぁ体操と思って終えてしばらくすると肩が軽い。ラジオ体操恐るべし。

5/23

　20 年近く通い続けてきた札幌 WS。昨年 10 月には隙間を縫って開催できていた。だが今回はやむなく zoom になった。ところがこうなったことで、初参加の人が増えた。何がどう転んでいくか、わからないものだ。

　この先のポストコロナ禍時代にに期待しよう。

世の中は未知なことが起きるものだ。



5/24

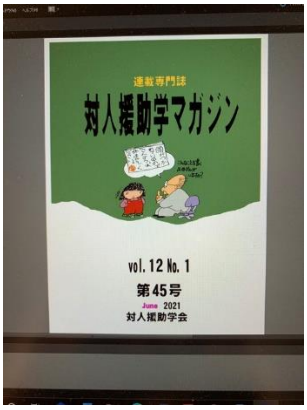
　反省。1 年前、こう書いていた。今年、ワクチンについて同じことを書くことになる状況だ。こんなことを続けていて何も感じないのが同輩、高齢の男どもだ。面目ない。

　若い世代は、邪魔だと思ったら居座っている上世代を駆逐する権利がある。未来はあなた達が生きる世界なのだから。

5/25

　対人援助学マガジン第 45 号の締切日。原稿が続々と届く。まだ今からも夜中まで届き続けるだろう。連載執筆者は 60 人程にもなっている。しかし原稿の督促が基本的に不要というのが自慢である。

　各担当に仕分けし、執筆者短信は一覧に流し込んでゆく。PDF 仕上げの方は月末締切。6.15 アップ予定。



5/26

昨日は午後からずっと、近頃なかったほど沢山の用件をこなした。

興奮していたのだろう。午前 3 時を過ぎても眠気が来ない。一度は横になったのだが、起き出して kindle で藤沢周平を読んでいる。ノルマのない老人だ、こんな徹夜明けも楽しい。

5/27

　こんなに･･･と思うほど雨が降る。梅雨らしさはあまり感じない雨だ。雨読というわけでもな

いが、藤沢周平にはまっている。どれにも少々の違和感というか、自分の感覚にピッタリではないなぁと思わせる何かがあって、それがはまっている理由かもしれない。
この隠居の言い草もそうだ。



5/27
対人援助学マガジンの原稿到着チェックをしながら、執筆者短信をまとめる。今号から復活の人複数。新連載開始の人も三人ある。
そんな最中に山積の本から、2012 年 7 月号の小説新潮を発見。原田マハ氏山本周五郎賞決定発表のこの月刊誌、なんと 700 頁ある。マガジンは 350 頁。まだまだである。



5/28
この中の一作、「海辺の叙景」をみていたら、映画を見ているような気になった。
波乱万丈の物語や、起承転結が前面に出てこないものの味わい方に鈍いところがあると思っていたので、好みじゃなかったつげ義春に興味が湧いた。
不思議だなぁ、他作品も自分の読め方に変化を感じる。



5/29
久しぶりの快晴。こんな朝の出発は気持ちがいい。午前中、亀岡の学びの森で、少人数に向けた二時間半の雑談講演。去年、コロナ禍になってからの開催だが三回目。対策したキレイな空間で、私は気持ちよく喋っている。



5/29 昨日夕刻に書店で目にして、今夕読み終えた。坪内祐三さんの妻、佐久間文子さんが夫の思い出を書いたもの。坪内さんの本は何冊かと雑誌連載や、en-taxi なども見ていたので、登場する話題に知っていることも多い。亡くなった人のことを、奥さんがこんなにたくさん語れるのは良いなと思った。
5/31
　昨日日曜日は、家族面接をバックスタッフとして見に出かけて、少人数でいろんな家族話をして楽しむ。
今日はマガジンの原稿 PDF 版の締め切りで、大方の原稿が揃いつつある。ざっと見て、執筆者 60 人、400 ページ近いものになるのではないか。読めねーよ！と呟きながら、自宅で楽

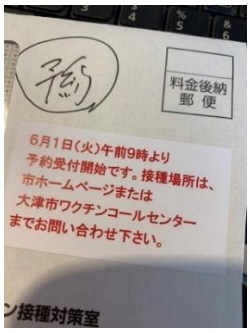
しく編集作業。執筆者短信蘭、これだけで 12 頁もある。

間に食事の用意。昨日から煮込んだチキンカレーは味見だけして冷凍。今夜は調理だけすれば良い無印のアクアパッツァ。大盛りの大根サラダと卯の花。風呂で読み始めた文庫が面白い。前は単行本で読んだもの。



6/1

コロナワクチン予約騒ぎに参加。当然電話はつながらず、QR コード予約にトライ。しかし接種会場情報はそこになかったり、体育館の建て替えで、二回目から会場が変わるとか、いろいろ言ってくれる。やっと予約日一覧が出たら全日✖印。70 歳以上の予約開始初日だだろう、またにしよう。



6/1

原田マハさんの本は結構読んでいるがこれは未読だった。

ドンドン既読が増えていって、併読本がなくなってきた。文庫、単行本、kindle の三本立てで、読書の捗る緊急事態宣言下を過ごしている。

ザ・ホワイトタイガーを Netflix で観た。まぁまぁかな。そして今から自治会ニュース作りだ。





6/2

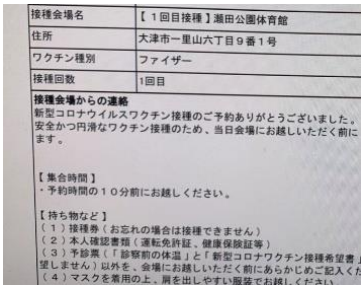
ワクチン接種予約 2 日目。昨日、今日で五十回以上かけている。

HPからとの案内もあって、そちらもしてみるが、最後の正しい日程表がでず失敗。

別の郵便が来て、市民検診のお知らせ。こちらを人間ドックに変えて大津日赤に予約。こちらは実にスムーズ。グズグズしてたドック受診に弾みがついた。

夜中に鎌倉の長男の助けを借りて、web でやっとワクチン接種予約完了。一度も行ったことのない遠くの体育館に、公共交通機関を使って行かなくてはならない。

免許返納を呼びかけてる人たちに、遠くまで来いと言っている。二回目の日程が、窮屈な予定の間に入ることに。



接種会場名	【１回目接種】瀬田公園体育館
住所	大津市一里山六丁目９番１号
ワクチン種別	ファイザー
接種回数	1回目

接種会場からの連絡

新型コロナウイルスワクチン接種のご予約ありがとうございました。安全かつ円滑なワクチン接種のため、当日会場にお越しいただく前にます。

【集合時間】
・予約時間の１０分前にお越しください。

【持ち物など】
（１）接種券（お忘れの場合は接種できません）
（２）本人確認書類（運転免許証、健康保険証等）
（３）予診票（「診察前の体温」と「新型コロナワクチン接種希望書」望しません）以外を、会場にお越しいただく前にあらかじめご記入くだ
（４）マスクを着用の上、肩を出しやすい服装でお越しください

6/3

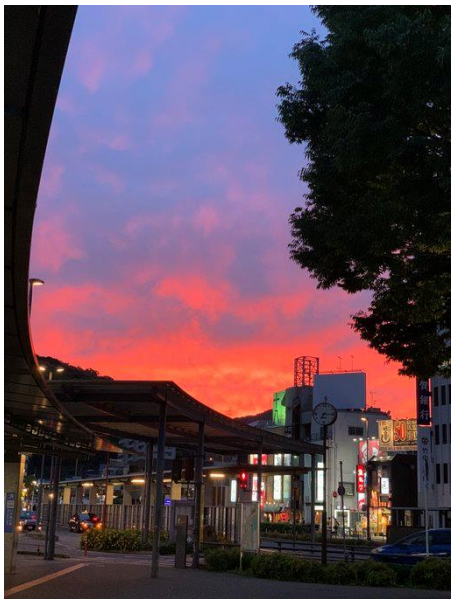
ちょっと久しぶりに書店をのぞいた。目についた三冊を購入。二冊は今読んでる作家繋がり。

仕事場に持ち帰ると、他用件に取り掛かって、放置になるので、巻頭から少しずつ全部読む

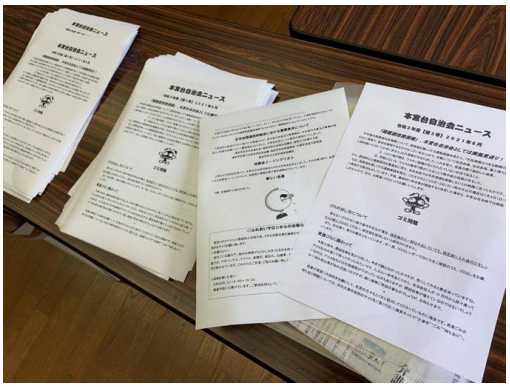
ことにした。初めてのやり方だ。
それでわかったのは、ご挨拶済んだ感が生じることだ。ただの積読にはならないぞ。



6/5
昨日は前夜から妙に暑くて、眠りが浅かった。夜中に何度も目覚め、水を飲んだ。コロナか？熱中症か？過労か？思いつくレパートリーがいかにも流行り物なのにうんざりする。とにかく休養と睡眠だと、予約のキャンセルと編集会議を zoom に変更。無事済ませた後、今朝までぐっすり眠る。復活。
6/5
今日の夕焼けは、思わず足を止めてスマホで。これは大津駅前の 19 時頃かな。
あちこちで撮った人があるだろうな。



日曜の朝は、地元自治会館で、作成した自治会ニュースの印刷作業。外では有志の方達が会館周囲の花壇の手入れをしている。
印刷上がりを配布担当の役員宅まで届けて完了。



6/6
日曜の午後は、デスクワークを避けるため、キッチンワークに。ビーフシチューの二回目。美味しかったんだけど、今回は前とは違う作り方で。最後はスロークッカーに委ねて一晩待つのは同じ。陶芸気分だね。一人で楽しく遊ぶもんだ。



。
原作は有名な児童文学だそうだがよく知らない。たくさんの録画 BD の山の中から、手書きタイトルを頼りにどれを観ようか考える。ここしばらくは感が冴えていて、いい映画を観続けている。
これは今の自分に染み込んでくるものの多い映画だった。子供向け？なのに、大人向けファンタジーだよね。



夜中にとんでもないことが判明。全国のこれまでやっている WS プログラム用レジュメの USB が壊れたみたい。

あらら、どうするんだよ。バックアップは直近まではないぞ。あっちの PC のはだいぶ前。USB コピーも最近していない。不都合が起きるだろうなぁ。なんとかする方法、教えてくれぇー。



6/7

早起きして JR、地下鉄で仕事場を経由して、京都駅に。久しぶりの新幹線で東京の仕事に出かける。

道中の人出で、緊急事態宣言延長中とか感じさせるのはマスクと新幹線京都駅だけ。あぁ混雑してても、人が身体接触してこないね。



6/7

今夜はこんな夕景の見える場所のビジネスホテルに泊まる。コロナの時期だと言うことで、東京のホテルが 1 泊 3700 円だって。驚いてしまう。普通に綺麗なビジネスホテルだ。夜食におにぎりと味噌汁までつけてくれている。ほんと、厳しいんだろうなぁ。



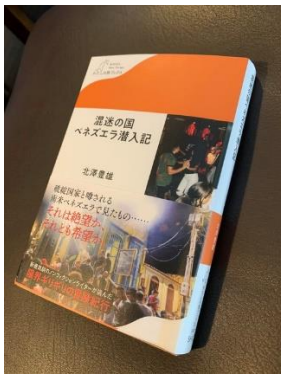
6/8

午後、講座素材 DVD の収録を蔵前のスタジオで済ませて帰路に。東京駅に来て、慣れたところで早めの夕飯。ウロウロせずに、要所だけ。最後は丸の内の丸善で気になる本のまとめ買い。今日は五冊。新幹線出発。まだ、暗くなる前。

6/9

毎日いろいろある。夕刻から、草津市の家族理解勉強会。USB が壊れた対応も必須でせっせと励む。今日、届くはずのリース宅配が遅れていて、出発時刻にらみながらヤキモキ。

昨日購入本から、これを読み始めたが、不安定な国の緊張感と、そこに暮らす市民と訪問者のギャップに、ドキドキする。



6/10

相談室が直接面談解禁になった担当日。さっそく、良い経過報告に来てくれた人と、新規の若者の二件。いろんな問題があり、悩み方もある。そして、これからの方針も、様々に考えられる。簡単に傷ついたり落胆したりしないで、人生エクササイズを楽しめばいい。100 年未満で片付くのは確かだ。



6/11

好奇心で生活をややこしくしているだけかもしれない。でも、ちょっと面白いと思うと手を出す。でも購入して置き場所を取るのは本だけで良い。

そんな中、リース業の女性の TV 番組を見た。早速、以前から興味のあった i robot を申し込んでみた。一週間 2000 円で届いた。さて働いてもらおう。



6/11

上原隆の本は、昔から目につくと読む。すぐ読めてしまうが、中に一つ二つ、必ず心のどこかに留まる話がある。

聞き書きスタイルで、誰かの人生を書く。私のことを書いてくださいと連絡があって会う人もいるみたいだ。いろんな人生があるとしか言いようもないが、みんな頑張ってるんだなぁ。



6/11 心当たりのない郵便小包が届く。開けてみるとこれが出てきた。あぁ。数週間前まで、初めてヒゲを伸ばしてみて、ちょっと面白かった。手入れって考えたこともないので、ネットでこれをポチ。

でも床屋に行った時、ためらいなく剃ってもらった。もう飽きたのだ。またいつか伸ばすことはあるのか。



6/12

明日日曜の弘前 zoom 版 WS を仕事場で実施のために、夕暮れになってから自宅を出発。途中で食事をしてから到着。

こちらにしか置いていないものもあって、気分転換方々、来週の仕事の準備をする。

先週の不調が回復して、七時間の一気睡眠が戻ってきた。トイレで目覚めたりしないのがいい。

6/13

13.30～16.30 まで。WS と言ってはいるが、三時間、ほぼ話す。話したいと思っていた事が話せてよかった。

その間に、滅多にない電話がかかってきた。壊れた USB のデータレスキュー業者からだった。修復可能だという。高くつくがやってもらうことに。何事も経験だと思おう。



6/14

zoom 会議が午前、午後と二件、私はぼんやり傍観的出席。そう役割はないからね。その間に、秋からの仕事のスケジュール調整と来談の約束。一週間よく働いてくれたルンバ返却の荷造り。



明後日水曜のトークライブ、演目二つのパワポ完成。あれこれ悩んだから、楽しんでもらいたい気持ち MAX だな。

$拡散お願い€

対人援助学マガジン 45 号が先ほどアップされました。連載執筆者六十人、総ページ 628 頁の大部です。読み切るのは困難かと思いますが、これほど様々な対人援助シーンを集めた物も稀だと思います。関心ある全ての方に、無償提供するのも支援だと考えます。

6/17

今夜の zoom で、怒涛の 10 日間が一区切りする。いい歳をして、こんなに仕事を受けるんじゃない！と自分にツッコミながら過ごした。そんな時に限って起きたトラブル、壊れた USB データの回収、復旧もなんとか山を越した。今後は amazon drive を使うことに。分かっているような、いないような



。

6/17

昨夜のトークライブ第四回目。仕事場のいつもとは違う場所から。ここが私が日常的にデスクワークをしているところ。お届けした映像と、舞台裏です。プログラムのおさまりも良く、聞いてくださる方々も全国各地からで、zoomの利点が生かされている。次はいつになるかな？



このでっかいステープラでガッチャンして、製本テープで仕上げた。428ページは印刷、製本の限界だ。バブル期のファッション雑誌ほど重い。プリンターは途中で一度ダウンした。個人ユーザーが一度に印刷する枚数を超えているようだ。プリンターは中古の新品だけど。



6/18

昨日のかじけん zoom 隣の事情は、毒舌満開だったなぁ。気心の知れた人たちとの放談会では、ついつい用心深さがおろそかになる。まぁ、いいのだけれど。

21時過ぎに終わってから夕飯を食べた。その後、洗濯物を干して、チキンカレーを作って

例のこれに。さてシアタールームで録画の何を観るかな。

6/19

ヨーロッパの鉄道好きなもので、ゆっくりした午後、8年くらい前の本を再読。そしてユーロスターに乗る機会がなかったなぁと。ドーヴァー海峡をフェリーで往復したことはあったけど。セントパンクラス駅のラウンジ止まりだな。いつか乗りに行けるかな



。

6/21

6～7年も継続的に依頼されている作画のプランを新京極のドトールで。文具店で見つけた clear crayon なるもので試す。いろんな仕事を頼まれて、楽しんでいるとあっという間に時間がたつ。昨日は家族面接を観に KISWEC に行った。何か出来ることがありそうな興味深い家族だった

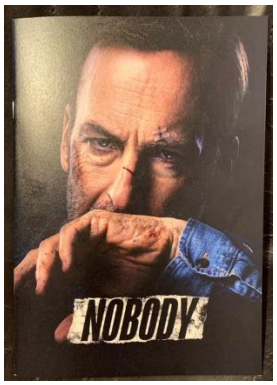


。

6/22

国民健康保険の一括払込に銀行へ。少しずつ安くなってきてはいるが、結構高い。それだけではつまらないので、近くのシネコンで上映時間の合うのを見繕ってこれ「M r.ノーバディ」。聞いたこともない映画だったが、めっちゃ

面白い。こういう類の映画、多いけど、こんな時代だから楽しんだ。



家族心理学年報 39 の表紙画を完成して出版社に送信。本になるのはまだ先のことだが、なかなか数量の出る本ではないので先行 PR。



書店でこのシリーズ表紙のものを見たらぜひ手に取っていただきたい。これまでのはこんな風です。

6/24

朝は相談室で家族面接の初回。午後は週末の浜松 WS のプログラム準備の木曜日。昨晩観たリュック　ベッソンの ANNA がとても面白かった。この監督は同じような映画を何度も作るなぁと思うが、私も観てるからわかることだ。そうか、観るから作るのか。でも、カッコいい女主人公。



6/25

なぜだか分からないが、連載開始の 50 年前から、ずっと読んでいる。量が多すぎて、読んだものと、未読のものの区別もつかない。そうするうち、老化で読んだことも朧げになる歳を迎えた。もう、ダラダラ読み続けるしかないな。ダラダ 13 だな。



6/25

相変わらず新幹線がすいている。ならばと、超久しぶりに自由席を選んだ。以前、仕事終わりに飛び乗った列車に空席がなく、一時間半立った経験以来、絶対に指定席だった。自由席なんて何が自由なもんかと思っていた。早めに駅に着いたので、一本前の列車に乗る。座席はこの有様。自由だ。



6/26

浜松駅前の谷島屋書店は、以前、「国語教師」なる面白い翻訳物を全く知らずに手にしたところ。そんな連想で、今回もチラッと書名に記憶のあった翻訳物を購入。こういうジンクス

を身近に作る遊び。ドクトルジバゴの原稿の話？

大好きな D.リーン監督作ではないか。旅先で読み始めた。



6/26

浜松市 WS 実施中。久しぶりの対面実習。zoom 講座も届くものは多いが、受け手の息遣いや、ちょっとしたリアクションが届いてこない。

中身はそんなに変わらないから、発信者の高まり具合に違いが現れるのかなと思う。

私の場合、一人でも結構盛り上がってしまうと言われるとそうだけど。



6/27

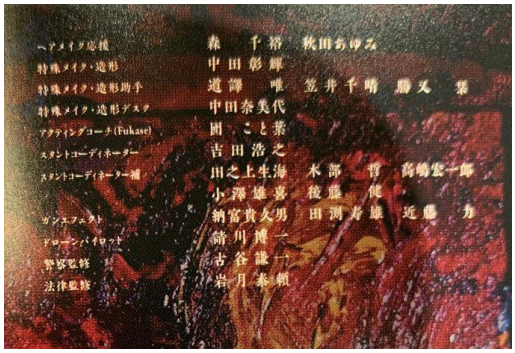
ワクチン接種会場には見えない気がするけど、大津プリンスホテル。ただいま第一回目終了で、十五分の待機中。大勢のスタッフの丁寧過ぎるほどの案内。日曜日に高齢者のために動員されているみなさんに感謝である。いろんな工夫がしてあって、戸惑わないようにしてある。



6/27 これは公開中の映画「キャラクター」のパンフレット。タイトルロールに SEKAI NO OWARI の Fukase のアクティングコーチとして、団こと葉がクレジットされている。

こういう仕事を目指してキャリアを重ねてきて、それが報われた到達点だ。じっくり取り組めるものに出会えて幸運だ。





6/28

インターフォンが見えなくなるほど 6 月の草木は元気に伸びる。仕方なくそこだけ第二回目の刈り込み。

年に一度、職人さんに来てもらって全体を散髪してもらうのだが、日程が 7 月半ばになるらしい。待てないところが出てきたのでにわか植木屋。やったことないって。水分補給で汗だく休憩中。



6/30

街に出て、ドトールで新作の下書き。髪を切って貰いに出てきたが、予約は二時間ほど後になると聞いて、それまで仕事。

書店で見かけた新刊のこれ。「ぼくはイエローで…」の続巻、楽しみだ。でも先ずは読了してしまいたい数冊が走っているので、しばし置くことになるな。



6/30

頼まれていた本文各扉イラスト 25 枚を、3 月初めに仕上げて送った。それをアレンジした表紙も綺麗な本が間もなく発売される。

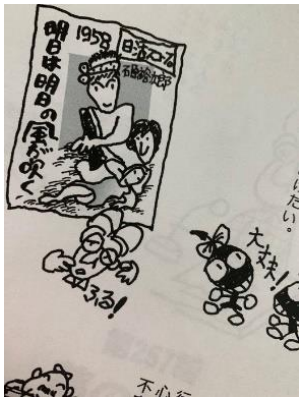
私は製作時に全て読んだが読みやすく、わかりやすく、学ぶところも多い。売れ行きに関心の薄い著者だが、私は是非ともとお勧めしたい。



7/1

朝は相談室勤務で来談二件。元気に行動をチェンジさせた青年の報告は話していて嬉しかった。午後、木陰の物語新作 257 話を完

成。その一コマにネット検索した 1958 年の日活映画ポスターを真似て描く。この後、自治会ニュースの 7 月号を作る予定。



7/2

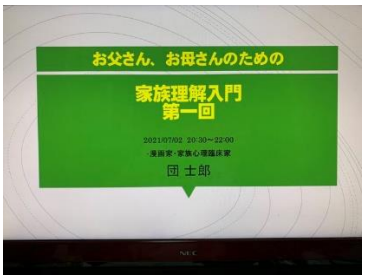
仕事場で目覚めた途端、夕陽のガンマン！が浮かんだ。意味がわからない。そんな夢でもなかったのに。

枕元のスマホで検索してテーマ曲を久しぶりに聴いた。しかし、朝の気分ピッタリでも、何か懐かしいわけでもなかった。なんだこりゃいったい！が正直な気持ちだ。



7/2

さぁ、一回目のシリーズが好評だったので、zoom 講座は同じことを再び。とはいえ、全く同じことは話せない人間なので、自在に飛ぶだろうが、初めて聞いてくださる方も多いので、その辺の塩梅に工夫がいる。



7/5

雨がダラダラ降る。熱海では大変な土石流災害。ワクチン不足で一時停止とか。でも何があってもオリンピックはやる気だな。

外出せず週末の FL C 講演の資料作りと、連続ズーム講座、二回目と三回目の準備。

合間に、以前見た新海アニメ「秒速 5 センチメートル」を再見。気持ちが洗われる

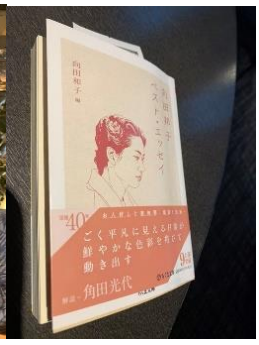


7/6

大阪梅田の TSUTAYA 書店にこんな有料サロンがあるのを初めて知った。

向田本を買ったらレジで割引券を渡されたので利用してみた。セルフのフリードリンク制。一時間ほどでコラム二つが書けた。





7/7

久しぶりにドクターストレッチに出かけた。肩や腰が固まっている感じはしていたが、思った以上に硬い。関節も体も、可動域を確保しておかないと、すぐ怪我をするぞと自分で思う。

痛めてから騒ぐのではなく、そうならないように準備だ。



7/8

朝は相談室勤務。若い来談者が増えている感じあり。

昨晩から仕事場泊で十六時間ほども絶食だったので、小雨の中、三条小橋のここにたっぷりランチに。ピッツァに始まって、お肉、野菜、デザートにこんなものまで。

その間に家族心理学会年報の表紙案の最終打診メールが届く。





7/8

仕事場のすぐ近所でやっているので、出品もしてないのに昨日に続いて訪問。

久々に「環境、廃棄物」漫画をずっと描いている高月ヒロシさんと会う。漫画に何ができるか、漫画家に何ができるか、の話を鍵にあれこれ話す。細く長い付き合いが 50 年にもなろうかという方である。



7/9

最近見た映画三本。Amazon prime や Netflix のラインナップは充実している。

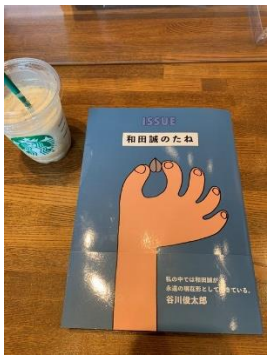
それにしても映画って大雑把に括れば、何かと闘うものが大方だ。残りは色恋沙汰？この三本も弾圧や不当、悪に向かって命懸けだ。一方、今の時代を考えてみると大抵の争いは損得だ。平和な時代の闘いは難しい。





7/9

和田誠氏の新しい本が目に入った。そうだ、どこかで広告をチラッと見た記憶がある。即、買いだ。それを三日ぶりに帰宅する大津駅前のスタバで読む。この店、只今満席でございますなんて言ってる。アクリル板越しの満席テーブルで、しばし楽しむ。

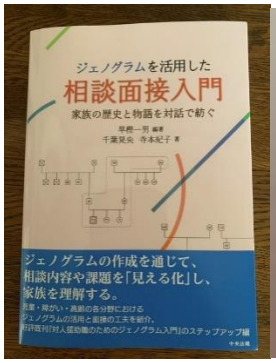


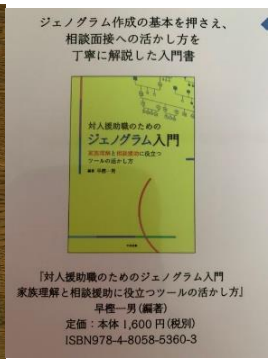
7/9

新しい本が出版社から届く。著者早樫、千葉、寺本は、皆、長い付き合いの人達だ。

家族理解、支援臨床の世界で、実用的なものを作ることが、彼らや私のスタンスだから、本が多くの人に届いて活用されるのが願いだ。

私も家族の構造理論の二冊目を出せる工夫をしなくちゃなぁ。



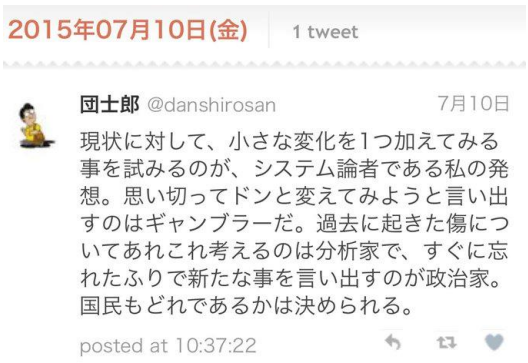


7/10

今日は zoom ではなく live のこれ。大阪松屋町の会場に出向く。その前にランチは東京のマルビル店で以前よく食べていたスープストックで。

スマホを見てたら 2015 年にこんなことを書いている。世の中は当然のように相変わらずだ。それを望んでいる人が少なくないことの現れか？





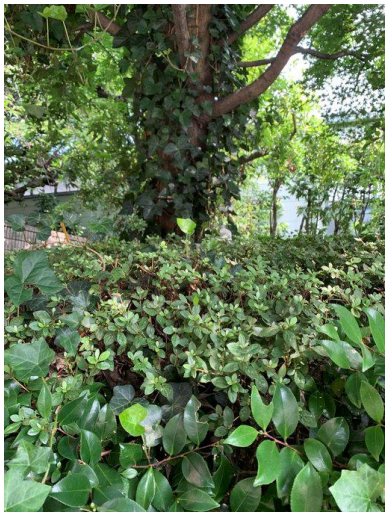
7/12

昨日は継続的に見ている家族面接に出かけた。手法として、バックスタッフが多人数、興味深い参加の仕方をした。

その後、日曜だが仕事場にきて、来週からの立て込んだ企画の準備を一つずつこなす。

捗るものから片付けて、残ったものはしばし

思案。実施、締切はまだ先だから慌てることはない。



7/13

午後から二人の来客。よもやま話をあれこれ。夜は漫画グループぼむの定例 zoom 会談。何度繰り返しても操作に慣れない人がいて、始まりにゴタゴタするのは恒例行事。

ゆっくり読んでいたこの本がいよいよ大詰め。D.リーン監督の映画ドクトルジバゴを昨日の夜から少しずつ、久々に見始めている。



7/14

先週再開したストレッチに今週も。相変わらず痛いところも残っているが、全体には柔軟になってきている。

創作活動に向かう時、身体不調は強敵だ。集中できないし意欲が削がれる。身体は私の環境だと思っているので、出来るだけ不調は避ける。仕事場への帰路、ここで海老天づくしのランチ。



7/16

昨夜は、長く続けてきた家族事例検討会ができなくなって始めた代替有志 zoom ミーティングが 12 回目。

今夜は同じく zoom だが、こちらはコロナ禍を受けて新規スタートさせたもの。好評でシリーズ 2 開講中。シリーズ3も 2022.1 から予定されている。他に学校関係者向けのシリーズも計画中だ。



4/17

明日の能美市での講演のためサンダーバード車中。たまにしか手にしない文藝春秋の特集二つが目についだので購入。

対人援助学マガジンを発行するようになっ

て、全部読んでる人はない厚さの文藝春秋！とよく揶揄していた。その雑誌が今号 444 頁。我がマガジンの最新号は 428 頁。近づいている。



7/18

石川県能美市で二週間の漫画展と講演。防災センターの 5 階。パネルと掛軸がゆったりと見られる空間。コロナの時期、広いスペースに密を避けた椅子を配したところで五十人弱の聴衆に、企画者に寄せた中身で話す。担当者の前後の接遇にも感心しながら二日間を過ごし、満足の帰路に。



7/20

今朝は人間ドック。今年から近くの大津日赤に変えた。一年前、妻の入院や点滴付き添いで通った場所。馴染みがあって懐かしく落ち着く。

30 年あまり京都第一日赤にドックで通ったが、この感覚はなかった。どこでもいっしょだから、これはいい。病院は好きになれないけど。



7/20

夕刻からは茨木の立命館で東日本家族応援プロジェクトのミーティング第一回目。久々の対面開催。むつ市にはまだコロナで行けないので、今年も zoom 開催になる。終了後、今後の打ち合わせ。



これをさっと読みながら、思ったこと。昔は「ずる賢い」って、批判があったけど。今じゃ、ずる賢くさえない。ズル馬鹿とズル呆けじゃん。いい加減にしろよ、歳とってボケたのなら引退でいいだろう。



7/21

2 度目のワクチン接種日。副反応を考えて、今日、明日、明後日はゆるいスケジュールにしてある。そこで Netflix で何か面白そうなものをと検索していてこれを選ぶ。「ザ・ストレンジャー」。面白かった。ミニシリーズ 8 回を一挙に観てしまった。満足。



7/22

次男がわが家に車で向かって、35 キロの渋滞だと知らせてきた。コロナ禍で五輪なんて混乱とリンクする、この時期の世間の行動だ。SA は大混雑だろう。

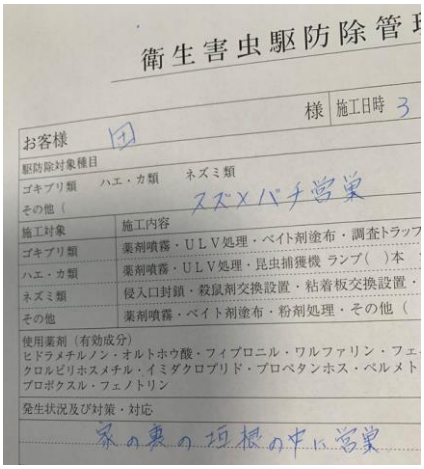
最近ショックだったのは、金沢のこの展覧会。私には全く心動くところがなく、多くの若者カップル観覧者があるのを見て、疎外感。歳とったのだ。

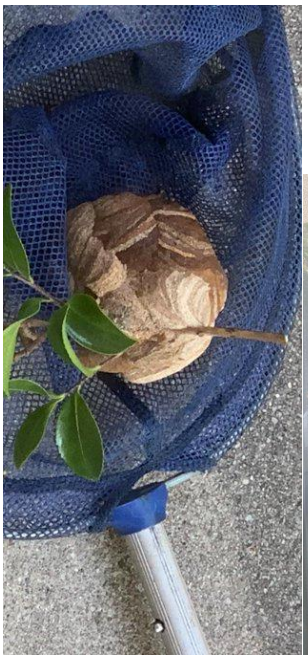
昨年、同じ時期に対応しなければならなかった事案が今年も発生。今回は 1 階の生垣の中、植木屋の剪定作業中に巣を発見。別の業者に来てもらって駆除してもらう。昨年は私が刺されてから業者にお願いをした事実があり、昨日のワクチン接種に続いて、今日蜂に刺されたりしたら大変。で無事終了。

7/23

昨日一日では済んでいなかったスズメバチの巣の処置。あちこち動いてもらって無事、完了。昨年に続いて、なかなかのフォルム。

もう、蜂に刺されるのはごめんだから、すまないが対応も連日次男の世話になる。業者さんは汗だくで作業。ありがとうございます。







7/23

五輪関連は無視で、18 時から zoom 打ち合わせ。進行中の連続 zoom 講座を、別枠でも開催トライしてみようという話。届くといいなと思っている人達に、受け取りやすい形で。それが出来ればきっと大きな一歩になる。

週末は二つの zoom 講座、来週は立命館大

学二日間の WS、KISWEC 三日間 WS。大忙し。



7/25

昨日の zoom 講座のテーマは、「最適解を欲しがりすぎると、人は弱くなってしまうのではないか」。どこらあたりで決断できるかが、それぞれの人に問われる事態は頻繁にある。

今日の zoom 講座はグラフィックメディスン&グラフィックファミリーセラピー？というお題。さて、どれくらい伝わるだろうか？

7/25

グラフィック・ノベル作品は目につくと読む。結構量も読んだと思う。そして、こういう作品に触れると、自分の年齢を強く感じてしまう。登場する思春期が、そもそも違ってしまっている気がするのだ。女の子だからかなぁ。私も昔は若かったのだが、こんなではなかった。なんかモヤッとしている。



7/30

午後から三日間、KISWEC の家族療法 WS step2。こんな時期だから開講可能かどうか懸念はあったが、やや少人数ながらも実施決定とのこと。世間は緊急事態宣言拡大とオリンピック開催の二股。

我がプログラムは五輪カテゴリーか飲食業カテゴリーか？参加申込の皆さんは予定通りかな？



さて、始まりました。参加 13 人だから、いつもの半分以下。こじんまり実習再開。相変わらず話し出すと止まらないし、調子に乗ると、口が悪くなる。誰かを責めているのではなく、私たちが作った時代を嘆き、出来ることを模索している。



7/31

WS 二日目の中身を一部変更。社会の良くも悪くもの変化を受けて、そこに対応できる家族支援のスタンスはどうあるべきかを、実習的プログラムとして練る。

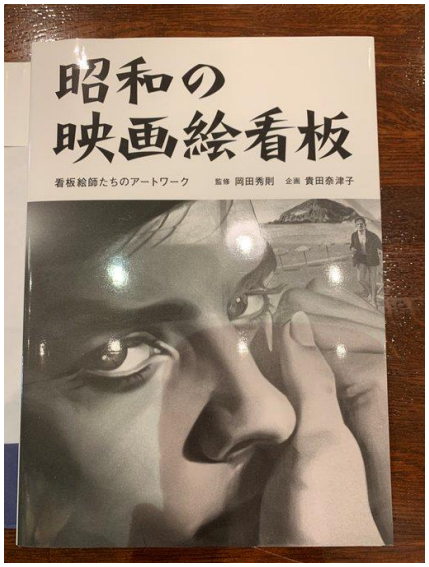
当然、人として普遍的なものはある。だが変

わらずあり続けるものと、変化に呼応してゆく家族的なもの。両方への準備が必須だ。



8/1

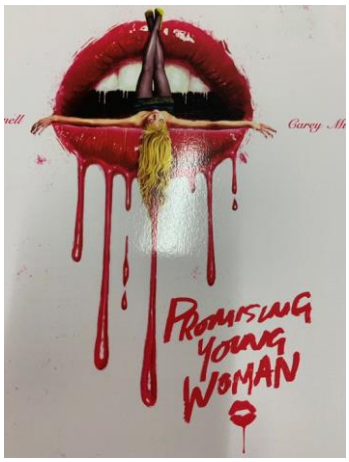
こんな本に手が伸びた。知らない本だ。この看板は二つとも1959年、私が小学校 6 年生の時。女猫は滋賀会館に親父に連れられて観に行った。さっぱりわからなかった。「め」、という読み方が印象的だった。「日本誕生」は大々的宣伝をしていて、看板も凄かった。ポスターより看板が主流の時代だった。





8/1

WS 三日連投が一区切りしたので、ご褒美にずっと気になっていた映画「プロミシング　ヤング　ウーマン」を観る。不思議な映画だし、予定されない感想があれこれ浮かんで消える。



8/1

中国語版「木陰の物語」の表紙のカバーがメールで届く。ほぉー、漢字いっぱいだなぁ。なのに読めない。分かるところもあるような…お国柄だね。一冊 39 元。四冊同時発売だ。



_8/3

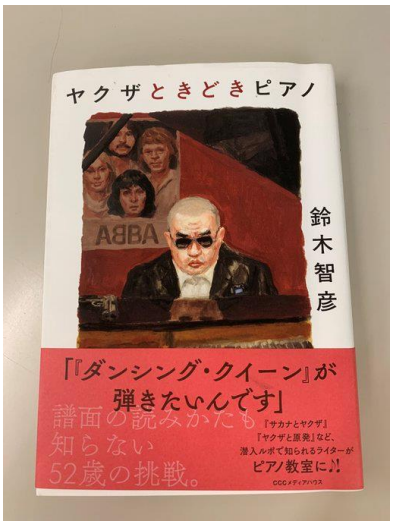
自宅で一日中、木陰の物語の新作制作。最近、なかなかフィニッシュに至らない。今回も。やっと決断できた。
夜は zoom で、NPO しが生活者支援者ネットの依頼で一時間ほど話す。
その後、風呂に入って九時半過ぎから調理開始。ただ今、ナスと豚肉のコックリ煮を仕上げているところ。



8/4
ストレッチで身体伸ばしてもらって、仕事場に。今日は一日、木陰の物語新作のペン入れ、完成まで。昨日の zoom 講演で、そもそも木陰の物語のタイトルは？と質問され、連載第一回目のことや、それが 20 年以上続くことになった経過などを話した。振り返ると沢山の幸運との巡り合いがあった。



8/5
「サカナとヤクザ」の著者が 52 歳からピアノのレッスンに。よくある話だと思ったが、スイスイ読みながら、自分もやってみようかな、なんてちょっと思った。
YouTube でせっせと見ているのは、この外国人の音楽解説。面白いし上手い。そうだ、山田五郎の「オトナの教養講座」もよく見る。西洋美術解説がメチャ面白い。







【アングル】うわっ…私の背中長過ぎ…？【グランド・…
山田五郎 オトナの教養講座 · 29万 回視聴 · 1 か月前

8/5
妻の初盆までに用意しておきたいものがあったので、時間の取れた今日の午後、日傘をさして夷川通へ。
歩き始めて気付いたが、こんな傘では役に

立たない。日陰ならいいが、日向を歩くと傘の中なのにカーッとしている。とんでもない陽射しだ。



8/6

帰宅して日の変わった夜中、少しだけ不安もだきながら届いていた封筒開封。先日の人間ドックの結果である。基本的に A、そしていくつか C が。D はない。従来通り、「要経過観察」。また来年見せにおいでと言われていると理解。サァ、頑張ろう。食べ過ぎは控えよう。



8/8

今から広島に。延期を重ねてきてた WS、しびれを切らした主催者からやろうということに。少人数で対策をして開催。

新幹線は思ったより人が乗っている。私は列車に乗っているのが好きだから、楽しい。京都駅ならこれという駅弁を食す。12 時 23 分までの旅。



8/8

広島からの帰路はこの読書。列車で列車でだ。この本は蔵前仁一さんが Facebook であげていたのを見てポチリ。同世代の好きなこと言いの爺さんが、痛快に毒づきながら旅をしている。(今のところだけど)。膝を打つこと多く、楽しんでいる。私もうるさい年寄りだ。



8/9

出かけなければならないノルマがない月曜日。風の音にどんな様子かなと表に出てみたらこれだ。皆さんのところはいかがですか。

スケジュールの嵐も昨日乗り切ったところなので、静かな一周忌の準備をします。



8/10

去年の今日のツイートを見て驚いている。当然だが、この二日後に妻が亡くなるなんて思わずに書いている。

あの日から一年、昔のことはたくさん思い出すことがあった。でも、この日の病院のことは抜けていた。11 日も 12 日も、いろいろ記憶にあるのに。そうか、もう眠ってしまっていたのか。



8/11

婦人公論 8/24 号のこの記事を読みながら、オリンピックとコロナ禍の中の今の政治を思う。しばしば人が「何も変わらない」と嘆くのは、人類や組織が変わると期待しているからだろう。大きなものは変わらない。変えられるのは自分に属する所だ。それだって自らの意思で変えなければなかなかだ。



直後に「満鮮に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす」つまり、許可すると書いた告知文がありました。支障ないと言いながら要は帰ってくるな、と。つまり、「おまえたちを捨てる」という宣言でしょう。驚愕しました。

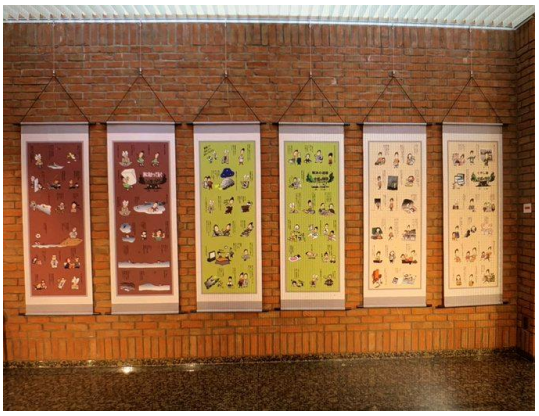
澤地　私も、物書きになってから、これは「棄民」だったとはっきり認識しました。

上野　満州に送り出す時も、いわば棄民だったわけでしょう。

澤地　ですから、日本という国を考える時、いよいよ政治が困ったら、平気で民を捨てる国だと私は

現在、青森県むつ市図書館開催中の木陰の物語漫画展の展示写真を貰った。綺麗に並んでいる。10 年にわたって配布し続けてきた文庫冊子も、こんな風に並べてくれている。





8/12

一年前の今日、23 時 38 分、妻が亡くなった。

社会的養護の新展開 18

―親と離れて暮らす子どもたちの養育とその後６―

浦田 雅夫
京都女子大学

昨年、第 38 回ユーキャン新語・流行語大賞において「ヤングケアラー」がノミネートされている。同様に、昨年あたりから「子どもアドボカシー」というワードも頻出している。朝日新聞では小中学生用の「時事ドリル」として、「子どもアドボカシー」を取り上げ、その解説で「子どもアドボカシーとは、子どもに権利があることを伝えた上で、その声に耳を傾け、自分の意見を周囲に伝えたいと思う場合、どうすればいいかを一緒に考え、子どもが選択できるように情報を提供し、行動を支援する活動」と紹介している。

2019 年、国連子どもの権利委員会は、日本政府に対して緊急に措置をとられなければならないこととのひとつとして、「子どもの意見の尊重」をあげている。

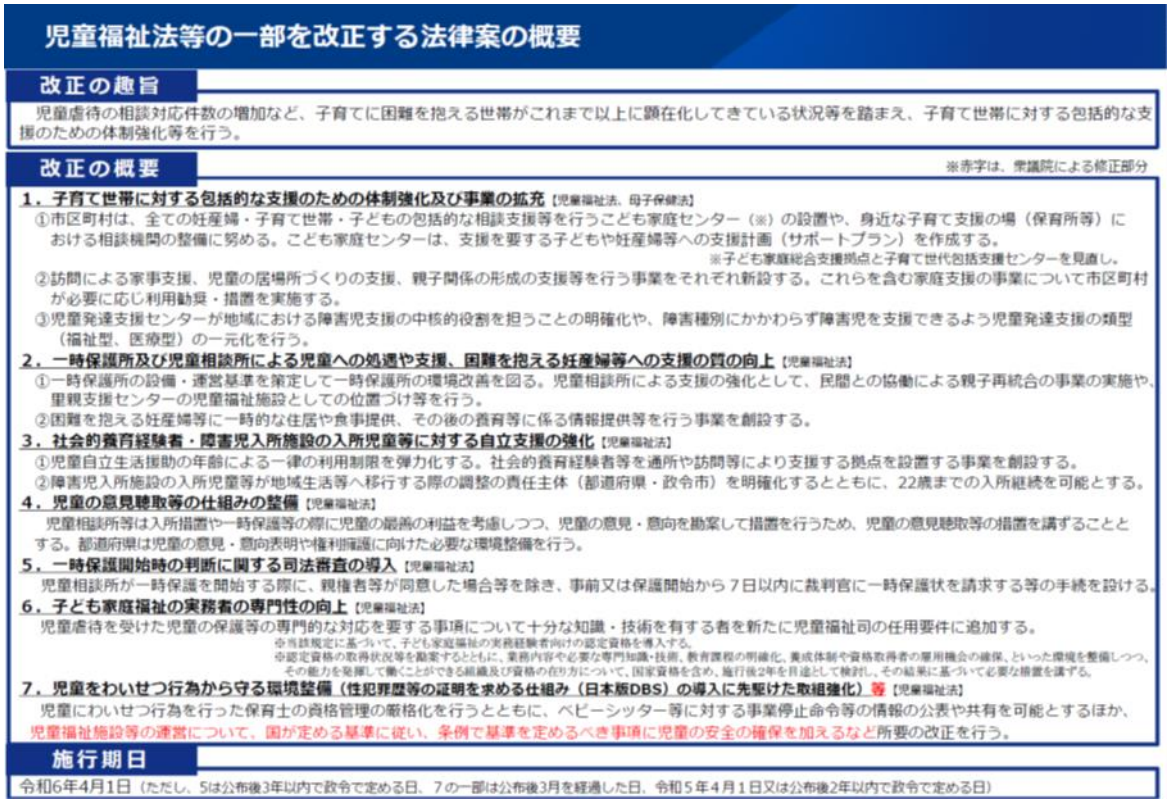
Respect for the views of the child
21. While noting that the 2016 amendments to the Child Welfare Act refer to the respect for the views of the child, and that the Domestic Relations Case Procedure Act consolidates the provisions concerning the child's participation in the proceedings, the Committee remains seriously concerned that the child's right to express his or her views freely in all matters affecting them is not respected.

22. With reference to its general comment No. 12 (2009) on the right of the child to be heard, the Committee urges the State party to assure to any child who is able to form views the right to freely express those views, without age limitations, in all matters affecting the child, and that due weight be given to the child's views, while providing safeguards against intimidations and punishment of a child. It further recommends that the State party provide an environment that enables the child to exercise her or his right to be heard and actively promote meaningful and empowered participation of all children in the family, at schools, in alternative care and health and medical settings, in judicial and administrative proceedings concerning them, in the local community, and in all relevant issues, including environmental matters.

https://tbinternet.ohchr.org/Treaties/CRC/Shared%20Documents/JPN/CRC_C_JPN_CO_4-5_33812_E.pdf

日本では、同 2019 年、「児童虐待防止対策の強化を図るための児童福祉法等の一部を改正する法律（令和元年法律第 46 号）附則」第７条４において、「政府は、この法律の施行後二年を目途として、児童の保護及び支援に当たって、児童の意見を聴く機会及び児童が自ら意見を述べることができる機会の確保、当該機会における児童を支援する仕組みの構築、児童の権利を擁護する仕組みの構築その他の児童の意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されるための措置の在り方について検討を加え、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする」と規定された。

2022 年５月 17 日現在、衆議院で可決された児童福祉法等の一部を改正する修正法案の概要は以下のとおりである。



児童福祉法等の一部を改正する法律案の概要

改正の趣旨

児童虐待の相談対応件数の増加など、子育てに困難を抱える世帯がこれまで以上に顕在化してきている状況等を踏まえ、子育て世帯に対する包括的な支援のための体制強化等を行う。

改正の概要

※赤字は、衆議院による修正部分

1．子育て世帯に対する包括的な支援のための体制強化及び事業の拡充【児童福祉法、母子保健法】

①市区町村は、全ての妊産婦・子育て世帯・子どもの包括的な相談支援等を行うこども家庭センター（※）の設置や、身近な子育て支援の場（保育所等）における相談機関の整備に努める。こども家庭センターは、支援を要する子どもや妊産婦等への支援計画（サポートプラン）を作成する。

※子ども家庭総合支援拠点と子育て世代包括支援センターを見直し。

②訪問による家事支援、児童の居場所づくりの支援、親子関係の形成の支援等を行う事業をそれぞれ新設する。これらを含む家庭支援の事業について市区町村が必要に応じ利用勧奨・措置を実施する。

③児童発達支援センターが地域における障害児支援の中核的役割を担うことの明確化や、障害種別にかかわらず障害児を支援できるよう児童発達支援の類型（福祉型、医療型）の一元化を行う。

2．一時保護所及び児童相談所による児童への処遇や支援、困難を抱える妊産婦等への支援の質の向上【児童福祉法】

①一時保護所の設備・運営基準を策定して一時保護所の環境改善を図る。児童相談所による支援の強化として、民間との協働による親子再統合の事業の実施や、里親支援センターの児童福祉施設としての位置づけ等を行う。

②困難を抱える妊産婦等に一時的な住居や食事提供、その後の養育等に係る情報提供等を行う事業を創設する。

3．社会的養育経験者・障害児入所施設の入所児童等に対する自立支援の強化【児童福祉法】

①児童自立生活援助の年齢による一律の利用制限を弾力化する。社会的養育経験者等を通所や訪問等により支援する拠点を設置する事業を創設する。

②障害児入所施設の入所児童等が地域生活等へ移行する際の調整の責任主体（都道府県・政令市）を明確化するとともに、22歳までの入所継続を可能とする。

4．児童の意見聴取等の仕組みの整備【児童福祉法】

児童相談所等は入所措置や一時保護等の際に児童の最善の利益を考慮しつつ、児童の意見・意向を勘案して措置を行うため、児童の意見聴取等の措置を講ずることとする。都道府県は児童の意見・意向表明や権利擁護に向けた必要な環境整備を行う。

5．一時保護開始時の判断に関する司法審査の導入【児童福祉法】

児童相談所が一時保護を開始する際に、親権者等が同意した場合等を除き、事前又は保護開始から７日以内に裁判官に一時保護状を請求する等の手続を設ける。

6．子ども家庭福祉の実務者の専門性の向上【児童福祉法】

児童虐待を受けた児童の保護等の専門的な対応を要する事項について十分な知識・技術を有する者を新たに児童福祉司の任用要件に追加する。

- 当該規定に基づいて、子ども家庭福祉の実務経験者向けの認定資格を導入する。
- 認定資格の取得状況等を勘案するとともに、業務内容や必要な専門知識・技術、教育課程の明確化、養成体制や資格取得者の雇用機会の確保、といった環境を整備しつつ、その能力を発揮して働くことができる組織及び資格の在り方について、国家資格を含め、施行後2年を目途として検討し、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

7．児童をわいせつ行為から守る環境整備（性犯罪歴等の証明を求める仕組み（日本版DBS）の導入に先駆けた取組強化）等【児童福祉法】

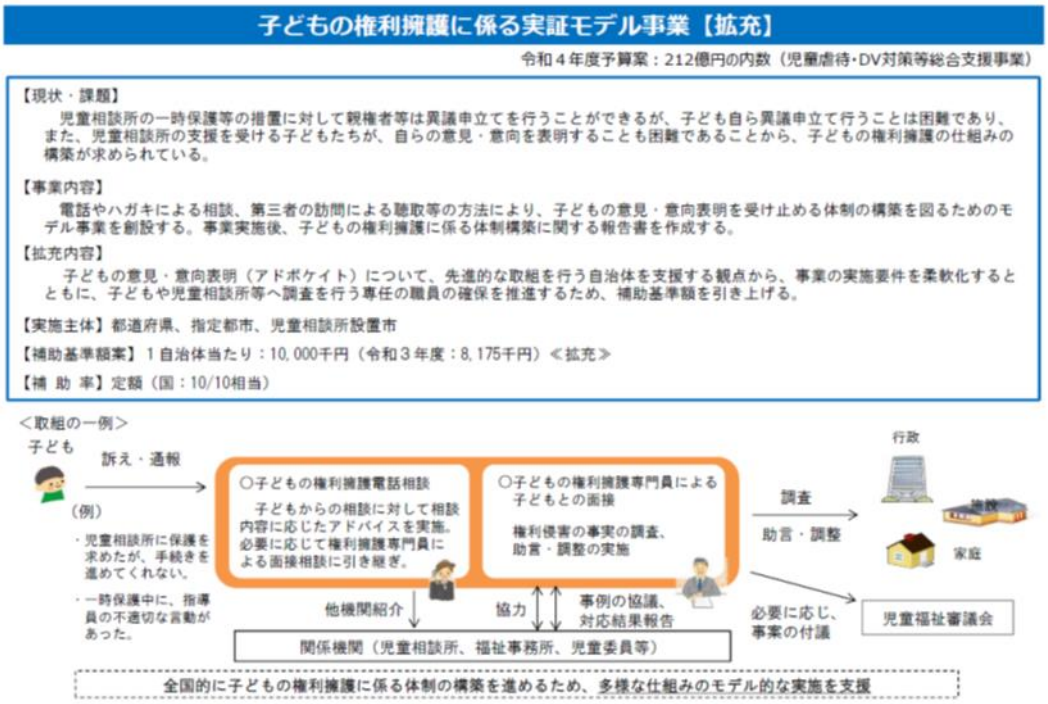
児童にわいせつ行為を行った保育士の資格管理の厳格化を行うとともに、ベビーシッター等に対する事業停止命令等の情報の公表や共有を可能とするほか、児童福祉施設等の運営について、国が定める基準に従い、条例で基準を定めるべき事項に児童の安全の確保を加えるなど所要の改正を行う。

施行期日

令和6年4月1日（ただし、5は公布後3年以内で政令で定める日、7の一部は公布後3月を経過した日、令和５年４月１日又は公布後2年以内で政令で定める日）

https://www.mhlw.go.jp/content/000939772.pdf

2022 年春、国の実証モデル地として先行推進していた大分の相澤仁氏を中心に、全国子どもアドボカシー協議会が結成された。
https://www.child-advocacy.org/



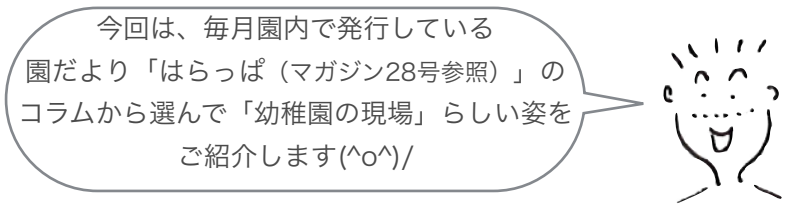
全国児童福祉主管課長会議｜厚生労働省（mhlw.go.jp）

今後、各団体、各自治体で、アドボケイト活動を担う支援者養成が行われていくものと思われる。行政処分である一時保護、措置、措置変更、措置解除等では、これまで子どもの思いが十分に聴かれてこなかったためこのような仕組みを作っていくことは大切である。

一方、市町村の相談員、児童相談所の児童福祉司、児童心理司はこれまで子どもとのラポール形成がどうであったのか、あらためて見直す必要があるのではないだろうか。入所措置後は、施設や里親にお任せで、児童への面接は年に１回、あるいは一度もない。そしてまた人事交代。僕の担当は何代目の福祉司？というケースもある。そのような苦情も含めたアドボケイトではあるだろうが、子どもの思いや意見は外部にお任せではなく、市町村や児童相談所は措置されている子どもとのラポール形成をしっかりと行えるような体制や技術が求められる。

49・うんちでたー！

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）



昼食後、デスクに向かって「あ～眠いなあ」と思いつつ仕事をしていると、廊下から
「Nちゃんうんちでましたー！」と歓声が聞こえてきた。

Nちゃんが幼稚園のトイレで初めてウンチに成功した！
という意味ですが、本人に喜びを伝えるだけでなく、周りにいるみんなにもウンチが出たことをスピーカーのようにアナウンスする。
さながら飲み屋で「ボトルご注文いただきましたー！」「イエーイ！ありがとうございまッス!!!」のノリで
「ウンチ成功しましたー！」
「イエーイ！おめでとうございまーッス!!!」って感じ
(゜_゜)



こんな声が高らかに飛び交うのも保育現場だけでしょうねえ～･･･(ˆ ˆ;)ｳﾁﾀﾞｹ？
もちろん、先ほどのアナウンスを聞きつけた保育者は**「よかったね！」**を言うために、仕事の手を止めてわざわざお部屋に出向いたりする。

子どもといえば、成功したことが嬉しくて、
毎回全員の先生に**「うんちでたヨ！」**と報告して回って、
もれなく**「よかったねー！」「すごいね！」**と賞賛の言葉をもらって悦に入っていた。この行為は半月ぐらい続いたネ(ˆｏˆ)



満３歳クラスや年少クラスで園生活を始めた子どもたちにとって、園でウンチを成功させたという出来事は、親や保育者にとっても嬉しいことだけど、本人も一人前になったような気になる、とても嬉しいことなのだ。

ウンチにしろオシッコにしろ、園に来て何の苦も無くスムーズにできる子もいれば、なかなかできずに苦しむ子どもがいる。
この違いはなんなのか？
何か原因があるのかもはっきりしないが以前よりオムツを外す年齢が上がり、トイレトレーニングに苦労する子どもが多くなってきたのは実感している。(*1)

隣の保育園では２～３才のクラスでオシメを外せることを目安にしている。幼稚園では３歳で入園するので、イヤイヤ期と重なって抵抗感を感じるのか、または紙おむつの性能が良くなってきたこともひとつの原因かと思う。本来お漏らしした下着を着けていたら「不快」に感じて、そ

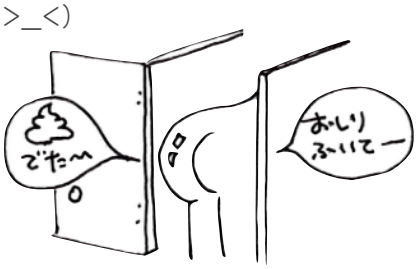
うならない行動（トイレで排泄する）を取らねばならないのだけど「快適すぎる」ためにその必要性に迫られていないのだとしたらお尻サラサラも良し悪しだねって思う。



ウンチやオシッコが自分でできるということは当たり前に出来て当然、と思うかもしれないけど食事や衣服の着脱とともに**『基本的生活習慣の自立！』**という人間生活のキホンのキホンとなるところだからおろそかにはできないのです。

だから園では大げさに見えるほど大騒ぎしてみんなで喜ぶ。友だちができたのに釣られて次に続く人を促す、という作戦もあるので、**呼び水ならぬ呼びウンチ**のようなニュアンスもあるのですがね。(>_<)

ちなみに、子どもがトイレから**「うんちでたー!!!」**と叫ぶのは、お尻拭いてー！という意味だし、
失敗しちゃった時も同じ**「うんちでた～！」**だね。



（*1）ネットで検索したいくつかの論文からわかったこと。
◇排泄の自立が遅くなってきているのは事実で、オムツ外しというより外れるのを待つ風潮、親の生活の変化（共働きなどで忙しい）紙おむつの普及などが原因と考えられること。◇ある論文では排泄の自立は年少児で幼稚園は保育園より２ヶ月遅れていることが調査からわかったそうです。◇紙おむつが排泄の自立に影響を与えているという研究は見つかりませんでした。紙おむつの使用感に関する内容や環境問題（ゴミ・プラスチック）についての論文等はあったのですが･･･。




原町幼稚園　園長　鶴谷主一（61歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

＊－＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）
第49号　うんちでたー！（2022.06）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

福祉系対人援助職養成の現場から㊾

西川　友理

子どもが夢中になったもの

Twitter を何気なく見ていた時に、「年パス買った水族館で 1 歳の息子が夢中になったものは　エスカレーター、エレベータ、階段」という書き込みを見つけました。

わかる！わかりすぎる！あったあった、そういうこと！と思い出しました。

児童養護施設の職員で幼児を担当していた頃、施設の行事で遠足の企画を担当したことがありました。少し遠くの山までハイキングです。施設は大都市の中にありましたので、普段めったに触れない自然あふれる所にいく、となると、アレも見せてあげたい、コレも見せてあげたい、と色々考えてしまいます。

幼児の足でも何とか登れる距離で、見晴らしも良いところで、途中には小さな公園で休憩をして、ここに何分位滞在して‥‥と、様々に考え、準備をして、下見もして、思いや願いをぎゅうぎゅうに詰め込んだ企

画でした。

いざ当日、いささかトラブルはありつつも、皆で楽しく過ごすことが出来ました。ちょっと大変な山道もみんなで頑張って上ることが出来ました。見晴らしがいいところでお弁当を食べることが出来ました。公園でも思いっきり遊べました。帰りの電車ではみんなへとへとに疲れて、充実した一日を過ごすことが出来ました。

翌日、遠足どうやった？と子どもたちに聞いたところ、４歳のＮ君は目を輝かせて

「蜘蛛がすごかった！」

と言いました。

「く、蜘蛛？！」

「うん、蜘蛛！めっちゃでっかかった、めっちゃかっこよかった。」

そういえば登山口の側溝に、ジョロウグモがいたっけ…あれか…

「蜘蛛か、そ、そうか、うん、そうやな、うん、ジョロウグモ、でっかかったな！」

「ジョロウグモ！ジョロウグモっていうんか、あれ？！」

そしてＮ君は本棚に走り、図鑑でジョロウグモを探して、見つけて

「おおー！こんなんやった、こんなんやった！」

と喜んでいます。

確かに、普段の都会の生活の中では、ジョロウグモに出会うことはめったにありません。

しかしあんなに色々考えて企画してこちらが意図したトピックへの反応はあまり見られず、うーん、蜘蛛に全部持っていかれたか、まあ、いいかぁ、山に行かないと見られないものだしねぇ…と思わず苦笑いしたのでした。

学生が夢中になったもの

ところで、養成校でもこれと似たようなことが時々あります。

実習指導の授業の冒頭で、１ 人の学生から

「児童養護施設の実習、私の一言で、子ども達を傷つけないだろうか、何かとんでもないこと言っちゃわないだろうか、不安なんです。」

という意見が出ました。ああ、そうだよねぇと思いながら、

「意図的に傷つけようとは思ってないんだから、大丈夫。それに、生きていたら、人同士って傷つけてしまったり傷を受けたりすることがあるもんですよ。『社会は健全に傷つけあう仕組み』という言葉もあるくらいだよ。奥田知志さんという方がおっしゃってるんだけどね。」

と、授業がはじまってすぐ、５ 分ほどのところで、ほろっと言って、授業に入っていきました。

約１時間強ののち、授業が終わり、私が教室を出ようとすると、学生に呼び止められました。

「ちょ、先生、さっきの言葉、社会って傷つく仕組み、みたいな言葉、あれ、誰の言葉でしたっけ？」

「？　なんでしたっけ？？」

授業のメインの内容とは関係のない話だったので、一瞬何の話をされているのかも気づけませんでした。たまたまそのあと急ぎの作業があった私は、慌てて

「あ、わかった！あのね、おくだともしさん、って人ですよ！」

とだけ言って走り去りました。部屋に帰り、

少し作業して、また廊下に戻ると、そこに一人の学生がひとりでスマホをいじっている状況に出くわしました。さっきの学生です。そういや急いでいたとは言え、乱雑な対応をしてしまったな、と思った私はその学生に近づき、話しかけました。

「あのね、あのさっき言った人の名前の漢字はね…。」

「もう調べました。今、読んでます。」

「あっ…　そ、そっか、それは失礼しました。」

スマホの画面は、奥田知志さんのインタビュー記事です。

「面白いですね、このひと。」

と言って、じっと読んでいる学生です。

私も奥田さんのお話は好きなので、ぽろっと出た言葉にここまで食いついてきてくれるなんて、と嬉しく感じました。

学生が自ら調べたこと

今から 10 年程前、少人数のゼミのようなクラスで教えていた時のことです。当時、「障害者」という表記について、国の障がい者制度改革推進会議で話し合いがもたれたことがありました。「障がい者」「障害者」「障碍者」「チャレンジド」等、当時の国ではどのような表記が適切でないと言われているのか、ふさわしいと議論されているのか、授業の中で紹介しました。

2 週間ほど後の授業、私も含めたクラスのみんなの前でＳ君が「な、聞いて聞いて」と皆に話しかけました。

S 君は障害者支援施設でのアルバイトをしています。

「そのアルバイト先でね、利用者さんと職員さんの皆に聞いてみたんですよ、『障害者』と『障がい者』と『障碍者』と『チャレンジド』、どの表記がいいか、って。」

「ほうほう！」

「そしたら、1 人は『やっぱり“害”っちゅう漢字は嫌やな』って言ってたんです。」

「ははぁ、やっぱそうか…。」

「だけど、それ以外の人は全員『本気で、どれでもええわ！』って。『ていうか、どうでもええわ！好きにせえ！！』って言ってた！」

「へー！」

「そんな呼び方より、大事なもんあるやろ！って言ってたんですよねぇ。」

「なるほどなあ…それで、それ以外の人って何人くらい？」

「んー、ざっと 100 人くらい？かなぁ。利用者さんの友達とかも含めて、いろんな人に聞きました。」

「100 人？！2 週間で？！」

確かにきちんとした研究や調査ではないですし、話を聴いた対象も、こんなことを気軽にできるタイプのＳ君の周囲にいる人達に聞いただけですから、偏りは激しいものです。

しかし、少なくともＳ君のコミュニティにおける傾向や、S 君が関わる利用者や支援者の考えが言語化されたことで、Ｓ君のコミュニティの文化が強化されたり変化したりといった行動ではあったと思います。

なにより、2 週間で身の回りの人に話を聴き、自分の手触りのあるリアリティでもって、状況を把握しようとした、その行動力が完全にこちらの想定外でした。私も楽しくこの話に参加させてもらい、考えを深めました。

学生のやりたいこと

ある時、卒業年度の学生たちに、キャリアについて話をしました。将来について考える事、自己分析の大切さなど、色々と話をした後に、こう〆ました。

「何の仕事につくのかっていうのは手段であって、目的じゃないんですよ。保育者になったら、夢がかなう？保育者になるってのは目的ではなくて、あなたが達成したい目的のための手段なんだと思います。あなたの目標、やりたいことは何なのか、考えてみましょう」

…という話をした翌日のことです。一人の学生が訪ねてきました。

「先生、昨日の将来の話を聴いて思ったんですけど‥‥。」

「はい。どうされました。」

「私、校則を変えたいんです」

「は、え？‥‥と、いうと、ええと、今の、この、ここの学校の校則？」

「いや、全国の、いろんな校則を。中学とか高校の、理不尽な校則を。」

「へぇ！うん、そうですか、なるほど、そうなんですねー。」

「で。どうしたらいいでしょうかねぇ。」

「お、おぅ、そうですね。ちょっと待って、一緒に考えましょうか、ええとね…唐突で頭が追い付かない‥‥笑」

私は全国にいるそういった活動をしている人を何人か紹介しました。

「いつも Facebook で活動を発表されているんだけどね、ああ、アカウント持っていないんだね、だったらアクセスするためにこれこれこういう手段があるか‥‥。」

そうか、そういや若い人は Facebook を使うのに抵抗があるらしいしな、と思い至り、

「また何か面白そうなイベントや勉強会があったら情報提供しますね。」

という話をした次の休み時間、その学生が言うには

「Facebook のアカウント作りました」

「え！ほんまに？！今？」

「はい　で、紹介していただいた人に友達申請しました」

「いやいやいや待って待って早すぎやろ！」

というわけでどんどん好きな方向に走っていく学生に驚きつつも面白くわくわくしてしまいました。学生はどんどん自分の地図を広げていきます。

国家資格ということ

私は社会人になった年から、「福祉系対人援助職」の養成、つまり保育士、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等、国家資格と呼ばれる資格を持つ人たちを養成する仕事に、何かしら携わらせていただいています。現場職員をしていた時にも、社会人大学院生をしていた時にも、受験対策講座や養成講座の講師などをしてきました。

「国家」資格の養成ですから、教えるべき科目も、その科目の中のカリキュラムもしっかり決まっています。私たち養成校教員のやるべきことは、国の指定された科目を、指定されたように教えること。学生も「やらねばならぬ指定された学び」をこなすこと。それが養成校にとって基本になる

ことです。

ですから、それぞれの資格の養成カリキュラムが改訂される時には、毎回ちょっとした騒ぎになります。

実はここ５年程の間に、社会福祉士や精神保健福祉士、保育士などのカリキュラムが相次いで改訂されました。科目名が変わったり、実習時間が変わったり、科目内容が変わったりと大きく変化がありました。

養成校教員は国の動向を見ながら、次の養成のあり方を考えます。

「こんな内容も入れることになるんですね」

「〇〇についてはどう教えることになるでしょうか」

「■■の科目が増えたのはいいことですね。△△の科目の後に設定するといいかなぁ」

「厚生労働省は☆☆についてはどう教えろという考えなんでしょう」

時には国から提示されたカリキュラムに疑問を抱き、まれに危機感を抱くこともあり、パブリックコメント募集期間に意見を挙げることもあります。

それほどまでに、カリキュラムは大切だと考えています。

シラバスをつくるということ

さて、上記のように国から提示されたカリキュラムの規定から外れないように配慮して、各養成校教員は自分の担当科目のシラバスをつくります。

国から規定された内容から外れないように、さらにはそれをどうすれば学生が消化できるような形に出来るかを考えて、授業計画を立てます。授業内容と授業方法を考えて記入するだけではなく、最近はひとつひとつの授業の予習の方法を入れこんだり、ディプロマポリシー（各学校の学位授与の条件）との関連性を明記することなどが求められています。養成校によっては、いわゆるアクティブラーニングの方法を考えて、その内容もシラバスに盛り込むようにと指示されることもあります。

そして、シラバスに沿って授業を実施…するはずなのですが。

実際は、授業内容がすべてこちらの想定したシラバス通りの内容になるかというと、そんなことはほとんどありません。考えてみればそれは当たり前の事で、学生一人一人の興味関心も、その時々の背景となる社会状況も違う中で、その年度のはじまる前に考えた内容からは、授業内容はどうしてもズレていってしまいます。それでも「国家資格」を付与する以上、最低限教えないといけないことは教えないと、というところは必死になって教えますが…。

さらには先述したように、学生はこちらの想定を軽く超えて、どんどん学びを自分で見つけていくことがあります。そのような姿を見ると、やれカリキュラムではどう書かれているとか、この改正ではここが足りないだとか、そんなことをわぁわぁと騒いでいる教員側が、なんだかとてもちっぽけに思えてきます。

カリキュラムやシラバスよりも、学生の声や考え、各々の人生から生まれてくる言葉の方が、ずっと豊かで、手触りがあり、

面白く、重要なものが多いと感じるのです。

学生はシラバスよりも奇なり

…とでもいえるほど、学生は新しい知を自分で見つけていこうとする場面に出くわすことがよくあります。

人の学ぶ力はそんなカリキュラムの中に閉じ込められるものでも、科目担当教員が想定している授業シラバスの中に納まるものでもない、そんなヤワなもんじゃないんだよ、ということを、先に挙げた学生たちは教えてくれます。

知りたいという気持ち、面白いという気持ちは、どんどんとその学生の世界を広げていきます。そして、授業というものは教員と学生の相互行為ですから、その影響を受ける私と言う教員も、また新たな世界に目を開かされていきます。

国家資格の勉強の内容は決まっています。カリキュラムの中身、教えるべき内容。それらをおろそかにしていいと考えているわけではありません。それはやはり骨組みになる部分なので、とても大切だと考えます。まずはそれらがないとはじまりません。

しかし学生それぞれの学びは、そのカリキュラムからは想定できないほどに広がっていきます。

それを間近で見せていただくことが出来る養成校教員というのは、やはりとても楽しい仕事だなあと思うのです。

今日も学生が教えてくれる知の広がりを楽しみに、授業に向かうのです。

ああ、相談業務

～悠斗（はると）くんの話～

9

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

家庭児童相談員として、発達の相談も受けていたが、５年ほど経ったところで、発達相談室を作ることになり、筆者は家庭児童相談室から発達相談室の方に移動することとなった。今回のケースは発達相談室で受けたケースである。

悠斗くん（仮名）家族

悠斗君は、土木技師の父親、専業主婦の母親と弟の四人家族。新興住宅街に一軒家を建てて住んでいる。もともと北海道の人ではなく、北海道の人が言う「内地」つまり、本州からの転入者である。父親の転職に伴って移住を決めたそうだ。その時まだ悠斗君は生まれて間もない赤ちゃんだった。北海道に知人もいない中、子育てを一生懸命頑張っていた母親と、新しい職場に慣れるのに大変な中、母親へのサポートも頑張っている父親という家族であった。

相談の始まり

１歳半児健診が悠斗君（以下本児）との出会いであった。１歳半の健診は１歳半を１か月余り過ぎてから行われるのが普通である。従って、筆者が出会ったときは、１歳８か月になる所だった。

この健診ではほぼ３語程度の発語の有無、指差しや言葉での指示の通り具合、人との関係性などを見ながら発達の確認をしている。発達に遅れが感じられても、経過を見ていくだけでよさそうな場合は、２歳時点での電話確認となることが多い。発達が遅れていると思われる場合は、健診の場の隣の一部屋での発達相談に繋ぐ。発達相談に繋がった子の確認をするのが筆者たちの仕事である。出産時からの保護者の話も聞きながら、発達の様子を更に細かく確認する。発達検査として

は主に K 式発達検査を使う。そこでかなり遅れがみられると、定期的な発達相談や当時母子通園と呼ばれる今の発達支援センターにつなげる。発達障害の子どもの早期発見、早期療育をめざしたシステムである。

その健診時に、発達相談に繋がってきたのが本児であった。言葉が少ない、視線が合いづらいなどが、健診場面で保健師が感じたことだった。また、母親の様子も気になるとのことで、相談となった。

相談室は、和室で、そこに長座卓を置いて、母親との面談や、検査などを行うようにしている。子ども担当と母親担当で分担し、筆者は母親担当として話を聴いた。

この母親について、保健師がどこに引っかかったのかは、すぐわかった。母親自身に落ち着きがないし、子どもは一人で遊び、母親は関わろうとしなかった。

母親にその点を確認すると、「姑が、子どもが一人遊びをしているときは声をかけてはいけないと教えられた。初めての子育てで、何もわからないので、そういうものなのだと思っていた。違ったのか？」と泣き出した。

子育てについて、知識がない母親というだけなのか、それとも別の何かがあるのか、ここからこのケースとの長い長〜いお付き合いが始まった。

相談経過

本児の発達支援ということで、母子通園に繋ぐことになったが、通園がいっぱいだったため、遅れは大きくないが、関わりで変わりそうな子を集めたグループを作ることになり、そこに本児も入ることになった。グループは、筆者と指導員 2 名の 3 名で開催し、筆者は母親のグループを担当、指導員が子どもたちと色々な遊びをしていくというものである。子どもたちは経験不足もあるため、芝生の上ではだしになったり、泥んこ遊びや砂場遊びを経験したり、様々な経験をグループで積む中で変化していった。

本児も、最初は人への関心が弱く、一人で遊ぼうとしたり、芝生をはだしで歩くことに抵抗したりしたが、徐々に慣れ、友達と一緒に遊べるようになっていった。

当時はグループが初めての試みであり、スタート時は子ども 3 人、母親 3 人の小さなものだったが徐々に増え、最終的には 6 人の子どもたちと 6 人の母親たちとなった。

母親たちの話は、子育ての事だけではなく、舅姑の話、夫への不満、実家への不満等多岐にわたり、ストレスを吐き出すとしての役割も大きかった。他の母親たちの話を聴く中で、子どもたちにより良いかかわりができるようになっていった。母親同士のつながりもでき、支え合える関係が築けるようになった。MCG（注１）のようなものである。

こうした母親たちのグループの中でも、本児の母親は、少し目立っていた。凄く若いわけではないが、物を知らないし、ついつい余計なことまで言ってしまったり、マイペースに話してしまったりと、周りの人との調整が当初難しかった。どの母親も何かしら話したい様子を見せていたので、一人がずっと話しているのはご法度である。上手く止めながら、みんながそれぞれ同程度に話せるように調整するのだが、本児の母親の晩になると、長くなりがちだった。

この母親は、とても素直なところもあり、教えたり指導したりすると、必ずその通りにやる所があった。指導員から子どもの様子を伝えて、こんな遊びをしてみようと言うと、しっかり次回まで試してくるので、本児も変化していったのだと思う。子どもの変化を一緒に喜び、母親を褒めて、自ら本児に上手に関われるように母親を育てていくのも我々の仕事である。

子どもにとって何といっても一番関わりの多い人は母親である。あるいは母親に代わる保護者である。その保護者との関係性が上手く育たなければ、子ども自身の情緒面の発達に歪みが生まれ

ることも多い。従って、我々支援者は常に、子どもと保護者との関係を確認し、齟齬があれば修正を試み、子どもと保護者の関係がスムースに、心地の良いものになるように気を付けていた。

本児は、グループの効果もあって、母子通園に通うこともなく、幼稚園に入園した。幼稚園では特に問題行動等はなかった。本児は飛行機が大好きで、空港に遊びに行っては飛行機を見て喜んでいた。そんな子だから、飛行機にはとても詳しく、これは何という飛行機だとか、どこの航空会社だとか、すぐに覚えて教えてくれた。そして将来はパイロットになりたいと言っていた。幼稚園に入ったことで、グループは終了となり、母親とは時々様子を確認するための面談を持つ程度で数年が過ぎた。

本児も小学校に上がって、勉強も友人関係も特に問題ないと聞いていた。ところが中学年になったある日、母親から相談があった。「学校の先生から、本児がクレヨンや絵の具の色をあまり使わない。特に赤を使わないと言われた。もしかしたら色盲とか色弱とかないだろうか」というのである。聞けば、母親自身の家系に色弱があって、母親の弟が色弱だという。

色弱遺伝子は X 染色体が運ぶため、母親が保因者である場合、男子が生まれると 50%の確率で、色弱になる。女子の場合は、父親、母親双方の X 染色体に色弱遺伝子がある場合にのみ色弱となるが、片方だけの場合は保因者にはなるがほとんどの場合色弱にはならない。

つまりこの母親自身に色覚異常はないが、本児には異常が出たのではないかということである。

最近は学校で色覚検査をしないためわからないまま過ごしている子は多いかもしれない。

母親が心配ならばということで、病院に行って調べてもらったところ、赤緑色弱、すなわち赤と緑の区別が余りつかず、同じように見えてしまうのである。その段階で、母親も父親もがっかりしたのは言うまでもない。本児はパイロットを目指して頑張りたいと言っていた子である。パイロットは操縦席から見える飛行機の緑と赤のランプでその飛行機がどっち向きに飛んでいるかを見分ける。すべての飛行機には左翼には赤ランプ、右翼には緑ランプがついている。操縦席から見て、右に赤ランプが見えたらこちらに向かってきているし、緑ランプが見えたら同じ方向に進んでいる。その見極めができなければ、時速数百キロで飛んでいる飛行機がぶつかることにもなりかねない。その他にも様々な機械の操縦盤にも、赤と緑のランプが多い。赤緑色弱があると、パイロットにはなれない。今は、矯正眼鏡なるものがあるが、パイロットになるには、矯正眼鏡は認められないのである。

本児にとって大きな挫折であった。打ちひしがれた本児と話す中で、「確かにパイロットにはなれないけど、飛行機がそんなに好きなら、航空会社で働くのはどうかな、考えてみては？」と伝えたところ、本児は気持ちを切り替えることができたようだった。

小学校を特に問題なく卒業し、中学、高校と順調に進んだ彼が、その後の進路に選んだのは、航空専門学校であった。やはり、飛行機のそばで働きたいという思いが強かったのだ。

色弱はあっても、地上職であれば会社によっては就職可能である。本児は、無事グラウンドハンドリング職員として就職できた。

こうして本児との面談は、2 歳前から 20 歳に至るまで続き、終了した。本児については、順調に進んでいったが、この家庭では、途中で別の問題も浮上した。

一つは父親の失職である。本児が小学校 6 年になったころ、父親の勤めていた会社が倒産したのである。母親はずっと専業主婦で働いたことがなかった。父親はまずは飲食店に就職した。しかし元々が技師である。対人面がそんなに得意なわけではないし、口も達者な方ではなかった。飲食店の仕事は上手く行かず、すぐに辞めることになる。父親の相談に乗りながら、もっと父親の性格に合った仕事を探すよう助言していた。しばらく貯金を崩すような日々が続き、母親も初めてスーパーのレジのパートに入った。母親はどちらかと

いうとADHDが感じられるような、落ち着きのない方である。ただ、人当たりは悪くなかった。失敗は多いかもしれないが、まあ何とかなるかなと思いながら、見守っていた。案の定、時々ミスがあって落ち込むこともあったが、慣れれば大丈夫だからと支え、何とかレジのパートを続けることができた。母親のわずかな収入だけでやっていけるわけもなく、父親は就職活動を続け、漸く見つけたのが、技師としての能力を発揮できる仕事であった。これでこの件は一件落着であった。

もう一つは、弟の問題である。本児が幼稚園の年中になるころ弟が生まれた。最初は順調だったが、1歳半頃から弟の落ち着きのなさが目立ち、結局3歳から母子通園で療育を受けることになった。ADHDの診断を受け、母親は弟の通園に付き添っていた。療育を受けながら、幼稚園、小学校と進んでいくが、どこでも、トラブルメーカーとされ、そのたびに母親と弟の言い合いが始まり、二人の関係が悪化した。特に中学の頃は問題行動は激しくなり、家出を繰り返したり、自殺企図があるなど大変であった。母親の相談に乗りながら、弟へのかかわり方などを一緒に考えて行った。しかし、母親自身もADHDの傾向を持つため、どうしても中々上手く行かず、母子の関係性の悪化が、父母の関係にもひびを入れ始めていた。父親は無口だが穏やかな人で、父親が弟にとって唯一の理解者となっていく。何度となく父母面接を繰り返し、二人の関係を調整しつつ、問題行動の多い弟の対処に医療機関との連携も含め、三人で頭を悩ませながら月日が進んでいく。そして本児も弟の問題で相談に来たりしながら、弟が高校入学まで相談は続いたのであった。弟は無事高校に入学し、アルバイトをしながら、自分の特性と向き合いはじめ、薬の力も借りながら、落ち着いていった。

まとめ

筆者は悠斗君一家と家庭児童相談員として関りはじめ、その後、市役所を退職し、カウンセリングルームを立ち上げ、臨床心理士としてスクールカウンセリングも含め様々な活動をするようになっていった中で、継続的に関わることができた多くのケースの中の一つである。地域に根差した活動というのは、こういうものだという例ではないかと思う。市役所を退職後も、市の関係の仕事をしていたため、市内の子どもたちの相談は無料で受けていた。

幼児期から、あるいは場合によっては乳児期から関わり、大人になるまで何かあるたびに相談に乗る。筆者にとって、そういう形が一番望ましいと思っている。そして最終的に自分自身で自信をもって、問題解決をしながら、生きていけるようになれば良い。

悠斗君一家は、悠斗君との関り、母親との関り、弟の問題行動、夫婦の問題と、目まぐるしくその主訴は変わっていったが、家族はみんなつながっている。一人に何かあれば、その影響を他の成員も受ける。我々支援者は、誰か一人だけの問題として関わるのではなく、家族全体に様々なことが起こる中で、家族全体を支えていくことの重要性を感じたケースであった。

注1）MCG（Mother and Child Group）話したいことをなんでも話してよい環境の中で、自分の子育てや子どもとの関係、あるいは自分自身の育ちなどを語り、他の参加者の話を聴く中で、子育てに関する不安や、自信喪失を防ぎ、虐待を予防していくプログラム。

対人援助学マガジン第 49 号

生殖医療と家族援助

～不妊治療が保険適用になっても～

荒木晃子

不妊治療の保険適用スタート

2022 年 4 月、不妊治療（人工授精・体外受精・顕微授精）の保険適用が始まった（不妊治療の保険適用　(mhlw.go.jp)）。厚生労働省のリーフレットには、①体外受精などの基本治療は全て保険適用されます、②年齢・回数の要件（体外受精）は助成金と同じです、③窓口での負担額が治療費の 3 割となります、と大きく 3 つのポイントの記載がある（③の治療費とは保険診療の治療費）。保険適用開始から 2 か月ほど経過した今、国内の生殖医療現場では、医師をはじめ看護師、受付スタッフが患者への説明と対応、レセプトや事務処理等に追われる日々が続いている。

不妊当事者にとって、これまで不妊治療の高額な医療費の大半が自費診療（自己負担）であったことからすると、基本 3 割を自己負担とする保険診療が始まったことは朗報と捉えられる。不妊に悩む当事者からは、保険適用を喜ぶ声を耳にする機会が増えた。一方、保険適用に際しては、年齢（治療開始時において女性の年齢が 43 歳未満であること）、体外受精・顕微授精の回数（40 歳未満：1 子ごとに胚移植 6 回まで、40 歳以上 43 歳未満：1 子ごとに胚移植 3 回まで）制限が設けられているため、条件を満たさない、保険適用外の施術や服薬・投薬が必要、保険の対象とならない個別の病態や症状の対応などには、患者、医療者の双方に、以前にもまして混乱をもたらす事態が生じている現実があることも否定できない。保険適用の範囲で治療を進めるには、「保険適用と組み合わせて使える先進医療に限り、保険適用が認められる」というのがその理由である。不妊治療に関する「先進医療」は随時追加されることもあるため、詳細は受診する医療機関に確認しなければならないという。

妊娠を目指す女性の体の状態に合わせて進む不妊治療には、個別診断によるオーダーメイドの治療計画、投薬、施術が必要なケースも稀ではない。これまで自由診療で成果を積み上げてきた生殖医療の専門分野では、施設ごとに独自の技術や治療手法を使い、薬剤やサプリメントを研究、導入し、成果を上げていた施設も少なくない。高額な自由診療ゆえに、オーダーメイドで個別の治療計画に沿って成しえた業績も多くあると聞く。その内容は明らかではないが、なかには、この 4 月に始まった保険診療の適用対象外のものもあるだろう。長年にわたり、妊娠を望む女性、一人ひとりの生理周期に合わせ、カップルの諸事情に配慮した丁寧かつ柔軟な治療計画を進めてきた生殖医療施設のなかには、これまでの治療方針の変更を余儀なくされる内容もあると推察できる。反面、例え保険が適用されても、医療者は不妊治療で妊

娠・出産することを確約できない状態で生殖医療を提供することに変わりはない。加えて、今後は、選択した治療が保険適用の条件に当てはまるか否か、保険適用に該当する治療の範囲で妊娠出産が叶うか否か、の判断を事前に患者から求められることも想定される。医師をはじめとする医療スタッフは、妊娠を目指す診断や治療以外に、保険適用の条件に該当するか否かの検証と治療計画の説明を患者に提供する必要性が生じることも考えられる。たとえ、生殖医療が国民健康保険の対象となっても、他科とは異なる治療特性（挙児希望が前提、治療はカップル単位、不妊原因が特定できない等）は変わらない。そのことを、医療者だけでなく、患者・当事者とその家族、さらには行政、福祉、教育、研究に携わる人々、また雇用する企業や事業者への周知がなければ、不妊当事者への理解は進むことはない。「不妊は病気だから治療する」という認識は、生殖医療現場で保険適用の際に必要なものであり、不妊当事者、子どもがいない単身者・カップルなど、必ずしもすべての当事者が自覚している訳ではないことをここに付記したい。

保険適用のメリット＆デメリット

医療者にとって、また不妊に悩む当事者にとって、不妊治療に保険が適用されることのメリットは多い。より早期に、かつ容易に、安価な治療費で不妊を治療する条件が整ったと捉えることもできる。ただし、社会が不妊を治療すべき病態と捉えることが、当事者にとってのメリットとなるのか、保険適用の全てが不妊患者・当事者、医療者にとってのメリットとなっているかについては、改めて十分な検証が必要と考える。保険適用の制定にかかわる専門家のなかには、不妊治療に保険が適用されることで不妊当事者へ（社会の）理解が進む、周りに隠さずに通院できるようになると考える声もある。果たして、保険が適用されることにより、それらの期待はかなうのだろうか。これまでは、子を望みながら〝妊娠しない/できないこと〟を病態と捉え、通院する不妊当事者を〝患者〟と呼称するのは生殖医療機関に従事する医療者だけであった。不妊治療の保険適用が始まり、今後は、勤務先の企業、雇用主、（地方）行政等、保険診療請求を扱う様々な部署や業種の担当者が、誰がどのような不妊治療をしているかの情報を知ることが予想できる。実際にカウンセラーとしての筆者の経験でも、高額な不妊治療に関する「不妊治療の助成金請求」の提出をためらう相談事例を複数経験している。地域により偏りはあると想定できるが、少なくとも地方で暮らす人間関係は密着型で、既存の血縁による家族意識が強く、かつ不妊治療への理解が低い傾向にある。一例をあげると、教育現場や公務員として働く当事者のなかには、〝ことあるごとに子を産むことを求める〟親せきや知り合いが行政職員、また勤務先職員のため、不妊であることを知られたくないとの理由で、「不妊治療の助成金の請求」さえも提出を躊躇した当事者の存在を複数確認している。この経験から言えることは、不妊を治療すべき病態と捉えることで不妊治療する患者にとって経済的メリットは大きい。しかし、治療を選択しない不妊当事者に対して、「保険が使えるのになぜ治療しないの？」、「不妊は病気だから治療すれば治る（子どもができる）」、「孫（後継者）がいないのは〇〇が不妊治療を嫌がったからだ」などと、年代にかかわらず持論を展開

する人たちがいることは確かである。このような当事者の家族や周囲からの軋轢は、医療現場に届かない。今一度、誰にどのようなメリット、デメリットがあるのかの検証が必要である。

不妊は病ではない。

筆者はこれまで、「不妊は病ではない」との前提で不妊当事者の家族形成を論じてきた経緯がある。病ではないので自費診療はやむをえないと考え、高額な生殖医療の治療費を捉えていた。確かに、この度の不妊治療の保険適用により、治療する患者の経済的負担は大幅に軽減される。医療施設ごとに違いはあるが、体外受精の平均費用は38 万円、顕微授精は 43 万円（平成 30 年度厚生労働科学研究『「不妊に悩む方への特定治療支援事業」のあり方に関する医療政策的研究』）を、体外受精 12 万円以内、顕微授精 13 万円以内に抑えることができる。しかし、その代償（表現がふさわしいかは別として）として、「不妊は治療すべき疾病」と社会に周知されることは、当事者にとってのメリットといえるのだろうか。不妊治療で誕生した子どもは、病を治療した結果生まれた子どもなのだろうか。不妊治療は妊娠を確約できない医療である。生殖医療技術の進化に伴い妊娠率、出生率も年々向上している。しかしながら、不妊治療する患者の何割かは、間違いなく妊娠出産に至らない現実があることも忘れてはならない。つまり、不妊治療しても妊娠出産に至らなかった当事者は、「不妊という病」を抱えた体でその後の人生を生きていくことになりはしないか。不妊治療が既往歴として残る、持病を記入する必要がある場合に「不妊症」と記述しなければ詐称と判断されるのか、など過去に不妊治療で願いをかなえられなかった当事者の想いを想像するだけで胸が痛む。保険適用は、果たして不妊に悩む当事者にとって朗報と言い切れるのか否かは、今後、当事者目線で検証したい。

不妊患者はカップル単位

今回の保険適用に向けて厚労省が発行したリーフレットの事項に、「受診に際し、できるだけ本人とパートナーの二人で受診すること」、「治療に際しカップルの同意があること」を推奨し、「事実婚カップルの受療を禁止しない」ことを明記したことを、筆者は改善点と受け止めてはいるが、それはあくまでも推奨するにとどまり、保険適用の前提条件となっているわけではない。場合によっては、「事実婚（＝法律婚ではない）女性でもパートナー（＝男性）の同意（書）さえあれば、実際にその存在を確認しなくても（男性が医療現場に足を運ばなくても）、精子さえあれば体外受精などの不妊治療は可能だ」という解釈もできる。

筆者の勤務するクリニックでは、以前から医師の方針と患者サポートの視点で、「不妊治療はカップルで」をスローガンに、医療者と患者の共通認識としていたため、初診時からカップルでの受診を必須としており、保険適用後もこの点に関して現場に混乱は生じなかった。しかし、国内の多くの生殖医療施設では、「妊娠するのは女性だから」との理由で、子宮を持つ女性であれば、パートナーの存在を確認しなくても高度生殖補助医療（体外受精等の ART）を自己負担で実施していた医療機関は多く、今回不妊治療の保険適用により、パートナーの同席と同意、つま

り、医療者は女性患者だけでなく、男性パートナーの意思の確認を求められる（推奨）により、男性パートナーやカップル関係への対応が求められることが容易に推察できる。不妊治療の現場の看護師の大半は女性スタッフで、なかには「医師も看護師も女性スタッフのみ。安心してお越しください」と HP にあげている医療機関もある。これまで男性不妊の研究・治療が進まなかったことも一因であろうが、多くの生殖医療施設では男性患者への対応、カップルへの医療スタッフの対応は、新たな課題となっていることが容易に想像できる。カップルのいずれに不妊原因があるのか、そのことを相方はどう思っているのか、治療に向けたカップルの意思の疎通ははかられているか、治療説明の理解は共有できているかーそれらは、時間の経過、治療段階の変化と共に、カップルの共通認識となっているかなど、もしかすると〝不妊症ではない〟一方のパートナーとのカップル対応には、相当の熟練と技量が必要となるかもしれない。その認識を、医師、心理士を含め医療スタッフが持つことが重要である。

不妊患者の多様性

今号の冒頭にあげた厚生労働省のリーフレットの性別には、女性の年齢制限が記載されているが、〝パートナーは男性〟との記載がない。パートナーは男性でなくても、パートナーと認められる可能性があるのだろうか。また、法律婚でない事実婚カップルも、保険適用の対象となっている。事実婚をどう解釈するかによっては、一方が妊娠出産が可能な女性カップルであっても、事実婚とみなされるのであろうか。リーフレットには、LGBTQ 当事者を除外する記述がない。女性であることの条件は、生まれたときに決められた性別が男性であっても、本来の性＝女性である mtF トランスジェンダー女性を、女性として保険適用の対象と考え得るのだろうか、疑問は尽きない。さらに、子宮はあるが卵子がない/少ないターナー症候群の女性、卵子はあるが子宮がない/子宮が未発達のロキタンスキー症候群女性にも、保険を適用した何らかの治療が適用されるのであろうか。ここにあげた女性たちは、これまで子どもを望んでも、不妊治療の自由診療の対象にさえなることが難しかった方々である。不妊治療の女性の定義の詳細も検証したいと考えている。

ここ数年、LGBTQ の家族形成の法制化と支援の構築を研鑽するなか、この春、不妊治療の保険適用が始まった。このタイミングで始まった保険適用の概要から、以前から筆者にあった「不妊当事者と LGBTQ 当事者に共通の課題」が改めて浮上したと感じている。生殖の問題、当事者性の医療化、家族形成のマイノリティの課題は、似ていて非なる、不妊と LGBTQ の当事者性に共通するキーワードとなった。

前号の振り返りを振り返る

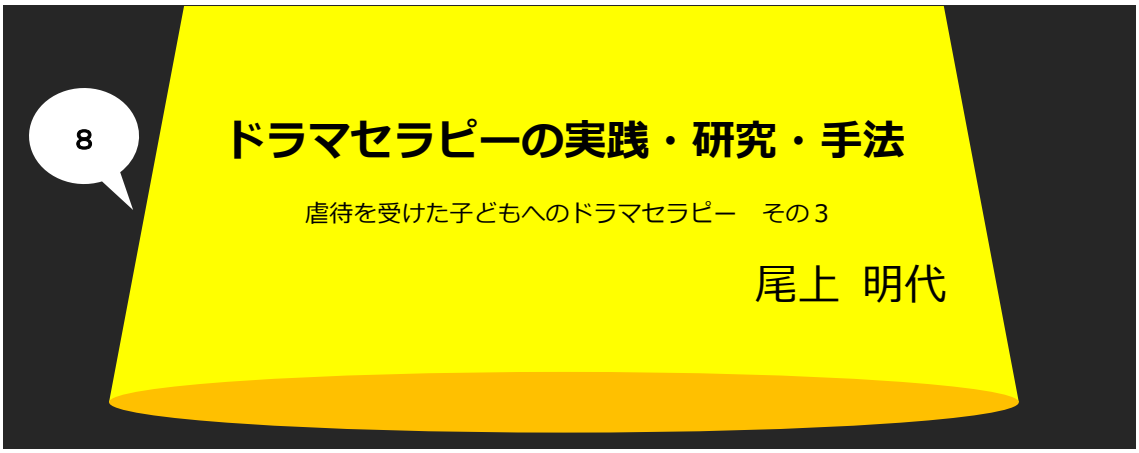
前号の振り返りを、改めて振り返ってみた。問題意識の検証に必要として提示した 7 点は、筆者の思考の足跡をたどり言語化した、自身のライフストーリーの分岐点でもあった。

本稿のテーマ「生殖医療と家族援助」の主要なテーマ「生殖医療・家族援助・不妊」に加え、「生殖マイノリティ・LGBTQ の家族形成」を対象に問題意識が拡張し、現在は「不妊当事者+LGBTQ 当事者の家族形成」が援助の対象となっている。不妊と LGBTQ、双方の当事者支援を前提に、その

思考、問題意識の関連性、共通点を探す、もしくは、何をもって、何を根拠に新たな援助対象を拡大し、その支援に思いを馳せるのか、何故新たなテーマ・新領域に入ろうとするのかを明らかにしたい。二つの当事者性にある領域の接点・関連性が明確になれば、不妊と LGBTQ に共通する家族援助の課題や問題が明らかになるのではないか。生殖マイノリティと家族形成を定点に、双方の当事者の家族形成の援助体系が連動すると考えられるのではないか。そう仮定したうえで、生殖医療と里親・養子縁組で子どもを迎えることに共通の課題とその解決手段が浮上することに期待したい。

妊娠・出産に必要な体の構造と生殖機能は、すでに医学的な解明がなされており、望んでも子どもを迎えることができない苦悩は、たとえいかなる要因があっても共通の不妊心理と考えている。本来、性別違和や性自認、性的指向や表現する性といった LGBTQ 当事者の特性は、こと生殖に限定すれば、体の構造に問題はあれど、それ以外の問題はないはずである。妊娠・出産の医学的条件に、LGBTQ 当事者であることの特性は含まれていない。もし含まれているとすれば、そのことを問題にすべきかもしれない。生殖に、子宮・卵子・精子の 3 つの条件が揃い、妊娠出産を経て誕生した子の幸福は、養育者に生殖マイノリティの当事者性のあるなしでは測れない。たとえ、シングルであっても、いかなるセクシュアリティにおける特性があっても、その子の幸せを願い十分な愛情と養育環境を与えることができれば、子どもを育てる親になることは可能ではないだろうか。

次々に浮かぶ疑問や課題を、次号以降に言語化するつもりである。



前号に続き、「発展的変容(Developmental Transformations)」という手法を用いて実施された、性虐待を受けた子どもとの長期セッションについて、米国のドラマセラピスト・James、Forrester、Kim の３人の研究論文（2005）から紹介する。

「加害者を殺したい」

２，３ヶ月間続けた「目隠しゲーム」を突然辞めたジャマーは、あるときセラピールームの壁をじっと見つめ、「あのドアの向こうの家にいる叔父さんや両親を殺したい」と言い出した。彼の想像の中では、そこに自分がもと住んでいた家があったのだ。拳を握りしめて怒りに震えているジャマーを見たセラピストは、彼が明らかに（「発展的変容」でいう）playspace（=遊びの空間）にいないことがわかった。Johnson(2009)は、「遊びの途中で感情が激しくなりすぎたら、急速に遊びの性格が失なわれる。そしてもしも実際に危害や苦痛が発生すれば、それは全く遊びではなってしまう」という。これまでも説明してきたように、遊べないもの（トラウマなど）を「遊び」に変えて実施することが、この手法の特長だ。遊べないものを遊びに、とは・・言うは易く行うは難しであるが、これこそ私自身もそれを具現化するべく心血を注いでいることである。

ジャマーの様子を察知したセラピストは、彼に「君は、まだ叔父さんや両親に立ち向かう準備はできてないと思うよ」と伝えた。ジャマーが、壁の向こうを「加害者たちの家」だと言い出したことは、ジャマーの創造性が発揮され、プロセスとしても機が熟して来たことは間違いない。長いプロセスを歩んできて、とうとう加害者と直面するセラピーの核心場面が訪れようとしている。しかしセラピストは慎重である。そしてまたもやクリエイティブな仕掛けとして想像上の「鍵」を生み出した。そしてそれを手に高くもち、「心の準備ができるまで、家のドアを開ける鍵を、君が届かないようにここに持っているね」と言

ったのだ。まさにセラピーの成否を決める「鍵」だったと思う。ジャマーは笑い初め「準備できてるよ！」と言いながら、その鍵をとろうと手を延ばした。セラピストはジャマーが届かないようにプレイフルに鍵を動かす。その鍵の取りっこ遊びに１セッションを費やした。ジャマーはそれが楽しくなりセッションの終わりには、彼の心身は元の playspace に戻っていたと言う。

弱い自分を認めて癒される

次のセッションでは、セラピストが「君がもしあのドアを開けたら悲しくて泣いてしまうことになるかもしれないよ」と警告したが、ジャマーは構わないよ、と懸命に鍵を取ろうとし、セラピストはとうとう開けることに同意した。2人は力を合わせて、やっとの思いでドアを開ける。すると、そこにはものすごい風が吹いていて、セラピストがドアの向こうに吸い込まれて行きそうになった。ジャマーはセラピストを掴み、セラピストを取られまいと一生懸命引っ張った。ジャマーとセラピストは何度もその大風と戦った。すると爆発が起こり、彼の叔父と両親が家の中から出てきてジャマーとセラピストに攻撃をし始めた。2 人は勇敢に加害者たちと戦った結果、今回はジャマーが負傷してしまった。矢が飛んできて「僕のハート」を突き刺したというのだ。セラピー開始当初からジャマーは、加害者と同一化し常に強いキャラクターを演じ続けていた。その後、負傷したセラピストをケアするプロセスを経た今、初めて自身が傷つく役を演じることができるようになった瞬間だった。弱い自分にアクセスし、さらには魔法使いになったセラピストが傷の手当てをすることを、初めて許したのである。セラピーが終盤に近付いていることが感じられる。その魔法使いは安全な洞穴に住んでおり、とてもパワフルな魔法を使うことができた。魔法使いはジャマーの傷に包帯を巻き、ジャマー自身の力が出てくる「栄養」を与えた。ドラマの筋としては身体的な傷であり、セラピストも物理的アクションによって手当てをしたわけだが、本人も「僕のハート」と言っている通り、当然ながら彼の心の傷を癒しているのだ。それを非常に象徴的な現実的な行為を通してやっているので、セラピストのケアは可視化され、子どもはそれを文字通り身体一杯、心一杯に受け取ったであろうことがよくわかる。私自身も、子どもとのセラピーでは、よくこのようなことをしていた。例えば、身体が痛いと言う子どもにマッサージをする。しかしその時、実際の身体の痛みはないのであるが、私のマッサージによりケアは可視化され、身体性を伴う現実のものと感じられ、子どもは非常に満足するのだ。

この戦いのセッションで、あるときジャマーがセラピストの膝によじ登ってきた。セラピストが Warrior song（戦士の歌）を歌うとジャマーは静かに泣き

始めたそうだ。この光景を想像してみると、あたかも母親に愛と慰めを求めている子どものように感じられる。子守歌が似合うような場面を想像する。しかしセラピストが歌ったのは、戦士の歌であった。(この歌は士気を高めるためのアメリカ版軍歌であり、戦争を肯定しているこのような歌を子どもに歌うことに私は異を唱えたい。この歌は、戦争で殺す側の論理だ。また男性の暴力の被害者であるジャマーに、それを肯定する歌を歌ったことになる。しかしこのセラピストは、ジャマーが虐待、その後の苦しい状況やトラウマと「戦って」きたことを称えたいがために、この歌を選んだのだろう。そして歌の途中から歌詞を替え歌にして、実際のジャマーの人生を歌った。この転換によって、歌はジャマー自身の歌になった。) ジャマーが泣き始めた理由は、「僕、よく頑張ったよね」という自分自身への共感から万感が胸に迫ってきたからではないだろうか。そして替え歌を聞いたジャマーは大泣きしたそうだ。失われた子ども時代への涙だ。泣きながら、彼は自分のライフストーリーをしっかりと聴いた。そしてその泣き方はゆっくりと静かになり、息遣いも穏やかに規則正しくなっていったという。そこで「魔法使い」はジャマーに３つの「想像上の贈り物」をあげた。「性虐待を癒す飲み薬」、「彼の人生の物語が書かれた本」、そして「彼の未来を守る刀」。もちろんジャマーは喜んで受け取った。

結局、この戦いのセッションは、ジャマーが「怪物たち」に勝ったと思えるまで、２、３ヶ月続けられた。設定は架空のドラマ、場所はセラピールームであるにもかかわらず、ジャマーがセラピストと同盟を組み、加害者と戦ってやっつけたことはまぎれもない事実（＝体験）である。ジャマーが「戦って勝利する」ことが「現実に」できたのは、このセラピーが身体性を伴うドラマを使っているゆえである。

ほどなくしてジャマーは、里親・シャーリーの申し出を受け、正式な養子になることに同意した。彼は新しい苗字を使うことを自分で選択した。シャーリーは、引っ越しも決めた。

家族になる儀式

ジャマーとセラピストはさよならを言う準備を始めた。そこで、セラピーの終結のプロセスとして儀式を行うことにした。結婚式やお葬式など、人生における重要な節目に大きな役を果たす儀式は、実はドラマセラピーの最終段階に組み込まれているものであるが、本当に参列者を招いて本当の儀式を実施するというこのアイディアは素晴らしい。

セラピストは、ジャマーのこれまでの人生のストーリーを招待された親しい

観客たちに語った。彼らが見守る中、シャーリーとジャマーは、「あなたを私の息子とします」「あなたを私の母とします」という誓いのことばを交わし、正式に親子になった。立会人たちは「私たちはあなたの物語を聞きました。あなたはよくやりましたね。私たちは、この新しい家族の門出にあたり、証人となります」と唱和した。多くの涙が流され、そしてケーキがふるまわれたという。何と素敵なセレモニーだろうか。ジャマーの心に一生の思い出として残ったことだろう。

セレモニーの 2 ヶ月後、ジャマーとセラピストは、これまで使ってきた想像上のおもちゃや思い出が詰まった「マジックボックス」を開けて最後のセッションをした。そして 20 年後はどんな風になっているかを想像した。セラピストは杖をついて歩いており、ジャマーは自分の子どもたちを連れて彼を訪れていた。2 人は 2 年間のセッション中に出てきたキャラクターや、ゲーム、戦い全てを復習した。最後にもう一度ということで、例の目隠しゲームもやった。そしてお互いに想像上の贈り物として、刀、トロフィー、メダル、物語の本などを交換した。ジャマーは一つだけ、本物のパペットをもらった。悪夢にうなされていた初期のころ、大丈夫だよと自分に語りかける練習に使ったパペットに違いない。今後の人生で、ジャマーの支えの一つとなるであろう具体的な思い出の品として、これをプレゼントするという判断も適切だと思う。セッションの最後に 2 人はハグをしてさよならを言った。セラピストは自分の心の中には永遠にジャマーがいることを知っていた。そしてジャマーの心の中にも自分がいてくれればと願った。セラピストはジャマーが成長してもずっと心の中に、自分自身を助ける人や怪物たちがいる playspace を持ち続けてくれればと願った。

この事例は何度読んでも感動する。人生の初めに起きたあまりにも辛いできごとを乗り越える子どもの可能性と力、このドラマセラピストの創造的で辛抱強い仕事、この手法の大きな威力、そして自分自身のケースで出会った子どもたちへ同時に思いを馳せるからだと思う。

（終わり）

文献：

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第46話

水野　スウ

昨夏から今年の春にかけて、わたしたち家族に起きたできごと。いろいろありました、と言って済ませるにはもったいないくらいのギフトを受けとった／受けとっている、と思うので、まずは私の記録のためにこの間（かん）の家族の物語をここに記しておこう、と思います。

娘が倒れた

10年ほど前から、娘は東京で夫婦二人暮らしをしています。去年8月日曜の夕方、娘のパートナーから電話がありました。「まいがくも膜下出血になりました」。その前の日の夕方、娘の頭が突然ものすっごく痛くなって、すぐ救急車で運ばれたものの、行った先の病院では原因がわからずそのまま帰されてしまったこと、彼から聞いていました。だけどその後、娘はついさっきのことも忘れてどんどん話がかみ合わなくなっていったそうです。その様子に、やっぱりおかしい、と思った彼が、休日でも診てくれる小さな脳専門のクリニックを必死に見つけて彼女を連れていき、そこで撮ってもらったCTでようやく、娘がくも膜下出血をおこしていたことがわかったのです。

その小さなクリニックには入院設備がないので別の病院を探すけれど、その頃の東京はコロナの緊急事態宣言下、なかなか受け入れ先が決まりません。やっとのことで受け入れてくれる大学病院が見つかり、そこに救急車で運ばれたのが発症からすでに24時間後のこと。今にして思えば、その時の娘は相当に深刻で危険な状態でした。造影剤を入れてカテーテル検査をし、出血している場所を特定したら、そのまますぐ手術にとりかかることになりました。

けれども夜遅くになって彼から連絡があり、「今まで詳しく脳の中を調べたけれど、どこから出血しているかが特定できないので、今夜、手術はできないそうです」。「できない……。でも、脳からは出血してるのよね」「はい、まだ続いていて髄液は真っ赤です」「だけど手術は、できないのね……」「はい、できません」。その時のまっくらで絶望的なきもち、もう言葉にもなにもならなかったです。

それでもその後、やがて髄液が透明になり、娘の意識ももどり、ICUで慎重に経過観察を続ける中で、

娘は手術することなしにいのちを無事につないで、奇跡的に後遺症もなくこちらの世界に還ってくることができました。本当によくぞ戻ってきてくれた！という気持ちでいっぱいの日々でした。

扉をひらく

3週間入院して家に戻ってきてからの娘は、徐々にからだは元気になっていったけど、心がずっと不安なままでした。食べたいものがわからなくて、食材や献立を選ぼうと思っても、何を選んだらいいかわからない、食べてもおいしいと思えない——。「もし許されるならなんにもしたくない。ずっとこのままだったらどうしよう」と電話口で泣く娘に、「不安なときはクッキングハウスの松浦さんに話を聴いてもらうこともできるんだよ」と言ったことを覚えています。私の電話からほどなく、彼女は自分で電話をかけて面談の予約をとり、調布のクッキングハウスを一人で訪ねました。

クッキングハウスは、心の病気をした人たちの居場所であり、働く場所でもあるレストラン。代表をしている松浦幸子さんから出前のご注文を受けて、私は2004年からずっと年に一度、おはなし会にでかけています。そこに娘は毎回参加し、時には彼女がみなの前で話す場面もあったので、クッキングハウスはもうおなじみの場所だったはずだけど、誰のためでもなく自分のために必要だ、という想いであらためてそこへ行く、というのははじめてのこと。それって、私を通して知っていたつもりのクッキングハウスの、これまでとはまったく違うドアを彼女が自分で押して入っていった、ということだったのだろうと思います。

そんな彼女のことを松浦さんは、よくきたね、と迎え入れ、「まいさん、3ヶ月は充電期間だと思って過ごしてくださいね」と話してくれたそうです。

倒れる前の娘は、それはひどい生活をしていました。15年ほど独学で、ゆっくりと産地直送の本づくりをしてきた娘だったけど、そのときは生まれてはじめて、自分以外の編集者さん、デザイナーさんと一緒に、出版社から出す本づくりに取り組んでいた真っ最中。普段の自分とは違うペースで本づくりが進んでいくなか、自分にできるだろうかという不安と、足手まといになっちゃいけないという重圧がごちゃ混ぜになって、寝ることも食べることも何ヶ月も満足にできていなかったのです。

そんな彼女の生活を知った松浦さんは、「まずは生活の基本を整えましょう」と言って、野菜たっぷりの食事を摂ること、夜しっかりと寝て朝になったら起きること、日光の出ているときに運動して、子どもの頃から好きだったことをすること……と目の前でサラサラと書いてくれました。

ただでさえ頭が四角く、ましてや不安がいっぱいでまだ頭がてんぱっていたその頃の娘にとっては、そのどれもがハードル高く思えて、アドバイスをもらったものの、内心とても困ってしまったそうです。（さらに「充電期間の3ヶ月っていつから数え始めるんですか？退院してからですか？　今日からですか？」と松浦さんに訊ねたと聞いたときは、我が娘ながらなんと頭の四角いことだろう！と）

「この先もう本をつくりたくなくなってしまったらどうしよう」という娘に、松浦さんは「別に本をつくらなくたっていいのよ。そのうちまた別の新しい何かがしたくなるんだから、そのときはそれをしたらいいのよ」とカラッとした笑顔で答えてくれ、その言葉に娘はホッとした、と。

そして、「まいさんが小さい頃から好きなことはなんですか？」と問いかけられてすぐ、「歌うことです」と答えた娘に、「ちょうどこのあと歌の会があるから、よかったら参加しませんか」と誘ってくれた松浦さん。

歌の会というのは、伴奏なしのアカペラで、メンバーさんが歌いたい歌を思い思いに歌う小一時間ほどの会。慣れていない娘は、はじめドギマギしていたけど、「まいさんもどうぞ」と順番がまわってきて思い切って歌ってみたら、なんだかとてもきもちがよくて、この会にはまた出たいな、と思えたそうです。

そんな風にクッキングハウスとの出会い直しをしながら少しずつ心の緊張がほどけてきた頃、彼女は松浦さんが言ってくれた「充電期間」というのを、

何かをしなきゃいけない期間、ではなくて、心とからだの声を聴きながら生きるための練習期間、と自分なりに再定義したこと、電話で報告してくれました。

リカバリーの途上で

クッキングハウスでは、おいしいランチを食べられることはもちろん、いくつもの文化学習プログラムも開かれています。その中の一つ、「メンタルヘルス市民講座」というのは心の病気について理解を深める連続講座。松浦さんの解説だけでなく、メンバーさんが講師になって自身の体験を語ってくれる時間や、受講生みんなが参加するワークショップ、最後には、この場で感じたことを一人ひとりが言葉にし、皆でそれを共有する時間もある、双方向の学びの時間です。

あるときのテーマが「リカバリー」だと知った娘は、まだまだ人に会うのは怖かったから直前まで迷ったけど、これは今の自分に関係あるテーマな気がする、しかもちょうど歌の会もある日だから歌える！と、この日だけのつもりで、えいやっと参加してみることに。やっぱりはじめはドキドキしたけど、そのドキドキを観察していくと、どうやら不思議なことに、メンバーさんやスタッフさんのそばにいるときはあまり緊張してないみたい、と気づいたのだとか。なんだかこの場所にいると心地いいな、この講座はなんとなく自分に必要な気がする、また参加できそうなときは来てみようって思えたんだ、と、娘は電話口でちょっと嬉しそうに話してくれました。

結局その後、彼女はそのシーズンのメンタルヘルス講座に全回出席して、さらに、コミュニケーションを練習するSST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング／日常の中で困っていることを課題として持ち寄って、どうしたらいいかを皆で考え、練習してみる会）にも参加するようになり、新しい発見があるたび電話をかけてきては、私にそれを伝えてくれるようになりました。どうやら娘にとっては、一回一回の講座が学びであると同時に、セラピーでもあると感じているみたい。実際、クッキングハウスに通い始めたときには、食べたいものがわからない、おいしいと思えない、献立も食材も選べない、と言っていた彼女が、次第に献立を決められるようになったり、これを食べたい、これをつくろう、これがおいしい、と感じられるように、少しずつ変わっていったのでした。

娘に起きた革命

娘が生協に入ったことも、生活が変わる一つのきっかけになったかもしれません。松浦さんから「野菜をたくさん摂りましょう」とアドバイスをもらってはじめは困ってしまい、野菜が家までやってきてくれたらさすがに食べられるのではないか、と考えたよう。それでも入りたての頃はカタログから選んで注文するのも難しく、もしかしたらすぐにやめるかもしれないけどそれでもいいよね、と思いながら見守っていました。

はじめのうちこそ、野菜食べなきゃ、料理しなきゃ、でもむずかしい……と困っていた娘でしたが、そのうち「しなきゃ」は大変だから「したい」を大切にしよう、と軌道修正したらしく。少しずつ生協とも付き合い方のコツを見つけ、次第に食生活にリズムが生まれ、どうやったら季節の野菜をおいしくたくさん簡単に（簡単に！なところがミソ）とれるだろうかと、娘は楽しみながら工夫するようになっていきました。これまで自分のからだをさんざん粗末にしてきた、以前の彼女の生活ぶりからすると、これはもう革命！っていえるほどの大きな変化です。

はじめて彼女が出た講座で、松浦さんはこんなふうに話してくれたそうです。「リカバリーは元の位置、元の自分に戻ることじゃありませんよ。病気になった自分を認めながら、普通に生活し、自分の夢や希望を叶えていくプロセスそのものがリカバリーなのです」

あぁ、本当にそうだなぁ。倒れる前の彼女に戻ったのでなく、もっと楽に、自由に、のびのびとした彼女になっていくのを、私自身が感じていました。これまで相手にいつも気を遣い、期待に答えようとし、自分のきもちを後まわしにするようなところが多々あった娘だけれど、最近は少しずつそれを軌道

修正して、自分のことを大事にできるようになってきているとも感じます。

突然倒れた夏のあの日から時間が経ち、娘は何度も当時のことを振り返っては言葉にしています。「どんだけからだが注意信号だしても私が無視し続けてたから、やむなくからだが急ブレーキ踏んで、それで倒れちゃったんだよね、同じとこに戻ったら危ないね」

本当にその通り。もとの同じところに戻っちゃ危険、そのことを自覚している娘に私も少しほっとしました。

クッキングハウスと出会い直し、心から安心できる自分の居場所になったことで、松浦さんはもちろん、メンバーさんやスタッフさんたちにもおおいに助けられながら、娘は彼女なりのリカバリーの道を、ゆっくりゆっくりと歩いている途上です。

「風を待って」

退院してから4ヶ月弱、クリスマスの翌日、娘からこんな電話がかかってきました。

「昨日の真夜中、たまたまテレビつけたら、2年ぶりに小田和正さんの歌番組『クリスマスの約束』がはじまって、1曲目の「風を待って」を聞いてたら、なんか知らないうちに涙が出てきた。こんなフレーズが何度も出てくる歌なんだよ」と、電話越しに口ずさむ娘。

♪ずっと待っていた　風がいま吹いた
　まるでやさしい声で　話しかけるように吹いた
　It's going to be all right きっと大丈夫

娘ははじめ何気なく聴いていたのだけど、途中からなぜか涙がじんわりにじみだして、次のこの歌詞を聞いたとたん、涙がポロポロあふれ出したのだとか。

♪今はもどらないから大切　なんじゃなくて
　今を重ねて明日へ　つながって行くから

そんなにも大泣きした訳を、娘はこう話してくれました。

――ああ、自分がICUで目を覚ました時、退院した時、もう大丈夫って思えた時って、彼やパパやママは、この歌みたいに感じたのかな。ずっと待っていた風がやっと吹いて、やさしい声で、もう大丈夫だよ、って言ってもらったみたいに、きもちがふわっとゆるむような感じしたのかな、って想像したんだよね。

そう思った瞬間、じゃあ、まだ大丈夫って思えてない時、まだ私がどうなるかわからなかった時って、どれだけぴーんと張りつめた不安なきもちでその時間をずっと過ごしてたんだろう！ってことに、改めて思い至った。だってあの時、“今”がとぎれて、もう明日につながっていかない可能性だって、十分にあったんだものね。この歌を聞いてたら、ようやく、今更だけどリアルにそう感じられて、それでぼろぼろ涙がこぼれてきたんだよ。

ああ、確かにそうでした。パートナーの彼は、娘がただ目覚めた、というだけではまだまだ全然、安心することなどできなかったのです。ドクターは、良い見立ても、そうでない見立ても、起こりうる最悪の可能性も、あわせて家族に伝えるもの。特に娘の場合は、発症から病名がわかるまでにまる一日経ってしまい、水頭症までおこしていたから（話がかみあわなくなっていたのは、その症状）、いのちがあっても何らかの後遺症が残ることは覚悟してほしい、と彼はドクターから暗に伝えられていたのでした。

無事に目が覚めたとしても、その後に再出血したり後遺症が出たり、血管が細くなって脳梗塞の起こる可能性があるから、入院してからの2週間は本当に細心の注意をはらってICUでずっと見ていないといけなかったのです。

思い返すと、娘が大学病院に運び込まれたその夜、娘のパートナーが私たちに伝えたのは、ドクターから聞いた話の、本当に必要最小限のことだけでした。残り、つまり最悪の予想やその手前の予想の具体的なことは、娘が無事に退院してくるまで、自分一人の胸におさめたままだったのです。そうやって私たち両親の不安がそれ以上、無限にふくらんでいかないよう、彼は私たちを守ってもくれていたこと、私

たちは娘が退院した後になって知りました（知った時、もうもう言葉にできないくらい彼に感謝して、胸が詰まっていっぱいになった。たった一人でその不安を抱えていたって、その恐怖はいったいどれほどだったろう、と）。

だからなおさら、これでもう大丈夫、って安心できるまで、彼は私たち以上の長い長い時をずーっと一人で待っていたんだ、と私も娘の話を聴きながら思いました、そして、ようやっと、風が吹いた。やさしい声で、きっと大丈夫、と話しかけるように吹いた。そうか、娘はこの歌詞をそのように聴いて、それでそんなにもいっぱい涙したんだな、とやっとわかりました。

夫の食が細くなって

その翌月、私の誕生日に、娘から「クリスマスの約束」のDVDが届いて、はじめて私たちも「風を待って」の歌を聞くことができました。そして、あぁもう大丈夫、と思ったときのきもちを思い返していました。でもその一方、私の心には密かに引っかかっていることがあったのです。

夫の食が急に細くなったのは、12月に入ってからのこと。毎食おいしく食べれることはいつも通りなのだけど、その量が、低燃費で知られる私（少食の割によく動く）よりもまだ少ない。あれ、どうしたん？　と聞いても、う〜ん、なんかこれ以上食べられないんだよな、というだけ。そのほかの変化は特にありません。

夫にはもとから慢性心不全の持病がありました。これまで何度、専門のお医者さんに診てもらおうと言っても腰をあげなかった彼だけど、娘が夏に大病したことでやっとその気になって、去年の秋から心臓専門医のクリニックに定期的に行って診てもらうようになりました。

1月、毎月通う心臓専門のホームドクターに彼の食事量の変化を伝えると、彼の体重減少を見た先生はすぐに「うーん、あやしい、がんかもしれない。胃カメラ、すぐのみにいってもらえますか」。そう言うなり、その場で医療センターに予約をいれ、紹介状を書いてくれました。翌々日、センターにいってカメラをのんで検査した結果、夫の食道にがんが見つかったのです（心臓のクリニックの先生は進行性胃がんを疑っていたことを後で知る）

医療センターの初診の日、夫の腎臓の数値が異常に低いこともわかりました。この日が初対面の、消化器内科の若い主治医さんは夫の飲んでいる降圧剤の副作用を疑って、とりあえずその服用をやめることになりました。

それから手術までひと月半の間に5回検査。胃カメラ、CT、超音波内視鏡、ペット検査、造影剤をいれてのCT検査などなど。はじめはその回数の多さに驚いたけど、これも後になってわけがわかりました。夫の食道がんはごく初期のもので、そんな早くに見つかることはとても稀なので、医療センターの主治医さんは、大きな手術をせずに内視鏡だけで患部をはたしてとりきれるかどうか、そう判断できるまで慎重に慎重を期して検査してくれていたのでした。

腎機能の低下は、ドクターの見立てがあたっていたようで、薬をやめてから確実に数値があがり、それに伴って食欲も出てきて、目に見えて夫の食事量がふえてきたのは本当にうれしいことでした。

アゴの骨が折れちゃった

1月に夫の病気を知ってすぐ、一番簡単なケータイを買ってきました。これまで彼はケータイを持たず、持つ気もないと知っていたけど、今どきの入院はほぼ、家族とも会えない。彼との連絡方法が院内公衆電話からだけ、というのはあまりに私が心もとなく、彼のためというより、私のために買ったようなケータイでした。

彼にミニ特訓をして、電話をかける／受けるはすぐできるようになり――と思っていたら、彼の入院まで2週間あまり、というタイミングの2月初め、私がケガをして、なんと彼より先に私が入院することに！　買ったばかりのケータイがこの時、おおいに役立ってくれました。

そのケガというのはーーいつも行く銭湯の湯船か

ら何気にガバッと立って出たところで、突然ふわぁ〜となり、気づいた時は、裸の私がタオルと毛布にくるまれて、救急隊員さんに担架で運ばれるところでした。救急車に載せられる時、一緒に銭湯に行っていた夫の不安げな顔が一瞬、視界に入り、彼には聞こえない声で、ごめんね、ごめんね、心配かけてごめんね、と担架の上で何度もつぶやきました。

緊急搬送された病院で調べた結果、私の脳にも心臓にも異常はなく、気を失ったのは急に血圧が低下したことによるただの湯あたりとわかって、まずは、ほっとする。けれど倒れたはずみで顔を激しく打ったらしく、目の下のほっぺとアゴの蝶番（ちょうつがい）を骨折していたため、その日は家には帰れず、そのまま入院することになってしまいました。

幸い骨はずれていないので、手術はしなくてすみそう、後は日にち薬で骨が自然にくっつくのを待つだけ、とドクター。だけど私は焦りました、夫の手術までに一日でも早く家に帰って、からだを治して、彼のよろこぶごはんをつくりたい。

私がそう思ったのには、特別な理由がありました。暮れから夫の食が急に細くなったことではじめて、食は、大切な人への、いのちへの、ラブレターだったんだ、という実に根本的な当たり前のことにやっと気づいたのです。いのちがよろこぶごはんを毎食つくりたい、本気でそう思うようになった。娘が大きな病気をしてはじめて食の大事さに気づいたように、私もまた時間差で、食べるは、生きるだ！とガツンと気づいたのです。

ふり返ればこれまで夫婦とも大病の経験がなく、食に関してそんなに真剣に考えたことはなかったように思います。それに、生まれも育ちも金沢の夫の大好物が、地物の新鮮な海の幸だったこと、頭では知っていたのに、なんとなくお魚料理はめんどくさい気がしてちょっと遠ざけてた私だったんです。

二人で小さな食卓を囲んで、能登の朝どれイワシやアジやカワハギ、地物の旬の野菜などなど、何気ないその日その日のごはんを、おいしいねえ、うまい！最高！といいあう時間が極上のたからものだと知ったのは、遅ればせながらほんとにこの冬からだった気がしています。

そんなわけで、1日でも早くケガを治して、いのちが喜ぶごはんをつくりたい。ただその一心で、ガンガン痛む頭を抱えながら、病院のベッドの上の私は、3つの養生プランをたてました。

その3つとは——養生プランその①「食べる時はおちょぼ口、話す時はもごもごぼそぼそっと宣言」。その②「ちから強い味方チームに頼るぞ宣言」。その③「『紅茶の時間』お休みします宣言」です。

私の養生プラン

その①「食べる時はおちょぼ口、話す時はもごもごぼそぼそっと宣言」。

形成外科のドクターからは、当分の間、大きな口を開けたり、大声で歌ったり、硬いもの噛んだりしないようにとのお達し。しばらくはおかゆと刻み野菜のみの食事。口を開けると痛いし、噛むのはもっと痛いしで、おちょぼ口になるしかありません。口をあけずに話すと、もごもごボソボソ、まるで腹話術みたいなくぐもった声だけど、これもまたいたしかたない。きもちよくて大好きな大あくびも、毎回グッとこらえてかみ殺すことに。

養生プランその②「ちから強い味方チームに頼るぞ宣言」。

ここ数年、親しい友人で、すばらしい鍼灸の技を持つお二人に、定期的にわたしのからだを診てもらっています。全身の不調、腰痛や肩こり、歯肉炎細菌感染によるほっぺの腫れ、足の甲のねんざ、出血性膀胱炎に至るまで、これまで何度ピンチのたびに助けてもらってきたかしれません。二人の施術を信頼してるので、しろうと考えながら今回のケガにもいいのでは、と即、連絡すると、骨折後の鍼灸で骨癒合（こつゆごう）（って言葉、初耳でした）も促進されるし、まわりの細胞の活性化にも効果あるよ、とのこと。ああ、なんてありがたい。彼女たちに前から出逢えていたことに本当に感謝しました。

骨折してからのひと月間、あまり日をおかずに私は二つの鍼灸院にかわりばんこに通いました。私の全身を注意深く診ながら、ほっぺやアゴの骨の折れ

たあたりを細い細い鍼で浅く刺す散鍼（さんしん）、打たない鍼で皮膚の上をこする銀の棒の鍉鍼（ていしん）、太い葉巻みたいにもぐさを固めて棒状にしたものに火をつけて、それを患部近くにかざしてぼわ〜んと温める棒灸、それに加えていつもの鍼灸、と骨がくっつくのを促す施術あの手この手。

古色蒼然とカッパ色に腫れた顔のひどいあざも、太ももの内出血も、それを一ヶ所にとどめないで早く散らす効果が鍼にはあるらしく、からだのあちこち、内出血の場所が転々と移動していく様は、からだの不思議そのものを見る思いがしました。

結果的に、ケガしてからひと月あまりの間に、二人の友達鍼灸師さんに2回ずつ、計4回施術してもらいました。これをもって今回の骨折に関しての緊急鍼灸はひとまず卒業。おかげで形成外科のドクターが驚くほどの回復ぶりで、おかゆを早々に卒業してご飯を食べられるようになり、口もだいぶ開くようになりました。

二人の鍼灸師さんが誠実に施術をしてくれて、それに私のからだがとてもよく反応することを、二人とも毎回とてもよろこびます。彼女たちは常々、鍼灸が治すんじゃなくて、患者さんの治ろうとする力をうまく引き出すお手伝いを鍼灸でしてるんだよ、というけど、まさにそのことを実感しました。このひと月あまり、鍼灸の刺激によって私のからだのなかで起きている／いたであろう不思議なドラマや、折れた骨のまわりで、それを治そうとする細胞たちが集まってきて懸命に仕事をしている図を想像するたび、とても感動して毎回、敬虔なきもちになったものです。

そして、これってコール＆リスポンスだ、とも気づきました。鍼灸でからだに働きかけて、それにからだが応えていく。養生プランその②として「力強い味方チームに頼るぞ宣言」と書いたけど、まさしく患者である私も含めての3人が一つのチームとなって、からだを治していったんだ。思いのほか回復が早かったのはそのおかげ。入院していた病院の形成外科ドクターの、めざましい回復ぶりですね！という口調からもそれを感じました。

からだに直接触れる治療だけに、施術する人、される人の間の信頼がこの治療には欠かせない要素だとも感じました。まだまだ、鍼ってこわそうって思う人多いかもしれないけれど、私にとっては、からだのツボや血流のことよーく知ってる鍼灸師さんって私の身体の伴走者みたいだなって日頃から感じてた。この安心と信頼があったからこそ、骨折後1週間で鍼してもらおう、とピン！と閃くことができたんだろうなと思います。

紅茶のロングバケーション

最後の養生プランその③は、「『紅茶の時間』お休みします宣言」。

毎週の紅茶は、もう、とうにはやってない場で、コロナ下の2年間はさらにそうで。それでも誰かしらぽつぽつとやってくる場であり続けてきました。紅茶で、誰かのしんどい胸のうちを聴く時の私はとても寡黙だけど、大好きな仲間たちと語りあう時は、大声あげてよく笑う、よくしゃべる。でも、もしそれで骨がずれたら大変だし、そもそもからだ中痛くて当分は人と会うのも無理。紅茶39年目ではじめてのことだけど思い切って紅茶を休もう、と思った時、ロングバケーションという単語が降ってきました。そうだよ、私のケガという理由があるんだから、堂々と、夫が養生する分まで紅茶を長休みしよう。これがほんとのケガの功妙！

39年前に紅茶をはじめたのは私、でも夫が会社をやめてからの20年、紅茶は二人で開けてきたようなものだと感じています。紅茶の時間中、彼がみんなの語りあいに入ってくることはまずないけれど、同じ空間に空気のように居てくれることがもう紅茶の当たり前で、それが私の大きな安心でした。たぶん、紅茶に来る人たちにとっても。

そうやっていっぱい助けられてきたのだから、せめて彼が病気になったこんな時は、できるだけ静かな環境をつくって彼を守りたいと思った、それが紅茶ではじめてのロングバケーションをとったもう一つの理由だったのでした。

ウォークマンから「風を待って」

3つの養生プランのおかげで、私のからだは順調に良くなり、夫の入院の日までに、彼の喜ぶ料理を毎日つくることができました。その間に彼の病気のくわしい検査が行われ、がんがごく初期のものでおおがかりな手術をせずに、内視鏡でとれるものだということも少しずつわかってきました。

今の日本では二人に一人ががんになるのだそうですね、誰がいつなってもおかしくない、それほど当たり前の病気であっても、いざ、がんです、といわれた時は、母をがんで早くに亡くしている私にとってやはりショックで、不安で、こわかった。けれども、ドクターの念には念を入れた検査や診察のおかげもあって、私も彼も、はじめの頃のドキドキは薄まり、自分でも意外なほど安心して、彼の手術の日を迎えることができました。

夫の手術の日（奇しくもウクライナにロシア軍が侵攻を始めた日）、主治医のドクターが内視鏡で見ながら患部を切り取ってくれて、手術は無事に終了。ただし、一つが予想していたより大きかったため、がんでない部分もふくめて粘膜下層近くのぎりぎりまで取り除いたとのこと。そのために食道までの壁が薄くなって絶食期間が増えて、はじめ一週間の予定だった退院の日が延びることになってしまいました。安心しきっていただけに、正直私も少しショック。

それを知った娘が「もしかしてパパ、とても落ち込んでるかもしれない。それにテレビをつけたらウクライナのことしか放送してないから、ますます気持ちが沈んじゃうかも。何かちょっとでもおだやかなきもちになれること、離れているけど家族とつながっている、って感じられるようなこと、自分にできないかな」と言って、こんな提案をしてくれました。「ウォークマンがあれば病院でも音楽聴けるよね。私がセレクトした曲をCDに入れて送るから、その両方を病院に届けてもらえる？」

その翌日、娘の注文したウォークマンと、娘がセレクトした家族の思い出の歌入りCDが、同時にわが家につきました。包みをほどいて、電池いれて、CDいれて、スイッチいれて。あれ？なにも聞こえてこないよ。どきどき。3秒くらい考えてから気づいた、ひょっとするとウォークマンってイヤホン使わないと聞こえないものなのかな？————あ、聞こえた聞こえた、1曲目は予想した通り、小田さんの「風を待って」でした。今の私たち家族にとってのテーマソング。イントロ聞いただけで涙が出ました。

夫の手術の日の同じ時間、私は石川で、娘は東京で、この歌を聞いていたのです。離れていても、一つの歌を共有することで一人じゃないようなきもちになれました。今、退院が延びて不安になっているかもしれない父親に、この歌を届けたい、って娘は考えたんですね。

早速、病院に持って行きました。私と同じく、ウォークマンっていうものを初めて見る夫。じかには会えないので、病院の駐車場からケータイで使い方を説明して、彼の耳にやっと音が聞こえてきた。ベッドの上でイヤホンして、ウォークマンから流れてきた「風を待って」を聴いた夫、その晩に「やけにしみて、泣けちゃったよ」とケータイから電話してきました。

ロンバケ明けの紅茶で

その後の検査で夫の予後は良好なことがわかり、一度延期された入院期間も再び延びることはなく、無事に夫が家に帰ってくることができました。紅茶のロングバケーションのおかげで、彼は家でゆっくり養生しながら過ごし、私も大口開けて食べ、笑えるようになり。

そうして2ヶ月ぶり、ロングバケーションあけの紅茶の時間には、懐かしい顔が入れ替わり立ち替わりやってきました。私たち夫婦の元気な顔をじかに確認して、みなやっと安心してうれしそう。もちろん私も。よかった〜、会いたかった〜、うれしい！の言葉と笑顔が、その日の紅茶内で何度もやまびこしていました。

仲間たちから矢つぎ早にあれこれ聞かれて彼の病気や私のケガの話をすると、実はうちも、私も、と自分や家族の病気やケガのこと、これまであまり言ってこなかったような話が次々、飛び出しました。

そう、誰にでも、どの家庭にも、それぞれ何かしらあって、抱えていて、でもそれを超えて、くぐり抜けて、痛みや悩みや不安となんとか折り合いつけながら生きてきているんだよね、そう互いに実感しあえた、それは豊かな紅茶再開の時間だったのでした。

ふくさよさよのさいわい?

夫が退院して2週間後の診察の時、医療センターの主治医さんが、「血管にがん細胞が絡んでいないという検査結果が出ました、よかったですね。治療はこれで終わりですよ」と。手術の日に自身の手で内視鏡を使って患部をとりのぞけたこと、その判断で間違ってなかったことが、この若いドクターにとってもほんとにうれしい出来事だったのが、その表情から伝わってきました。

実はこのドクターも、初診で胃カメラの結果を見るまでは、夫の急な体重減少から進行性がんを疑っていたそうです。体重の減った理由が降圧剤による副作用だとも言い切れないので、結局、食欲不振になった原因はいまだはっきりわかりません。ドクターはそう言って一瞬の間を置いてから、私たち夫婦の方を向いて、「医者がこんなこというのはおかしいかもしれませんが、強いていうなら、(急激にやせたのは)神様のお告げ、としか言いようがないです」と。それを聞いてなんだか胸がいっぱいになりました。この先生の誠実さと謙虚さに。

私はというと――降圧剤で食欲不振になったんだとしたら、それって「ふくさよさよのさいわい」(薬の副作用が作用したことによる幸い)だ、って思ってたんです。その証拠はどこにもないけど、夫が急にやせたことでがんがごく初期に見つかったのは確かなこと。だからやっぱりそこは何かおおいなるちからがはたらいて彼を守ってくださったのだと、この一連のできごとに心から感謝しました。

チームで治す

毎回、診察時に感じてたことだけど、医療センターのこの主治医さんがいつも、医学のしろうとの私たち夫婦を治療チームの一員とみなして接してくれていたこと、ほんとにありがたかったです。私のごく初歩的な質問にも、いつも真摯にていねいに、たいらに、答えてくれていました。

さっき、私の骨折のリカバリーをおおいに手助けしてくれた友人鍼灸師さんたちと私はチームだと書いたけど、今回のことでも、医の者と患う者とは、本来、チームを組んで、信頼関係をつくって、その病とむきあう、つきあうというのがすごく大事なこと、とつくづく思いました。当人にしかわからない痛みや不調、わずかな変化、そういうからだの声を聴いて、それを専門家に伝えること。それは患うものの受け持つ仕事かもしれないのだなあ、と。

そしてまた、家族もチームだと思ったのです。娘は「私が無茶な働き方してた時にパパとママのことが起こらなくてよかった。その時だったら、私のきもちが不安でいっぱいになりすぎて、耐えられなかったと思う。倒れたおかげで、もう一度自分のペースで生き直そうと思えて、ちょっとずつリカバリーしてきもちが落ち着いたタイミングで、ママが入院、その次がパパで。この順序でほんとによかった!」と何度も何度も言いました。

大病してみないとわからなかったことがたくさんあって、そんな娘の気づきや発見から私たち両親が教えられることもまたいっぱいあって。そのおかげで今年にはいってからの夫婦の日々は、これまでよりもずっとずっといとおしい。

娘の異変に気づいてくれたパートナー(彼にはありがとうがいくつあっても足りない!)含め、離れて暮らしていてもチームとなって、ともに家族におきた出来事に向き合えたこと、そのことに心から深く感謝しています。

そもそも、夫のホームドクターを、町の内科のお医者さんから金沢の心臓専門クリニックにかえたことも、娘の病気がきっかけでした。前々から、専門医に診てもらおうよと何度いっても腰をあげなかった夫が、娘が倒れた翌月から今のクリニックに行くようになってくれたのです。そうでなければ今だにがんは見つけてもらえなかったに違いありません。

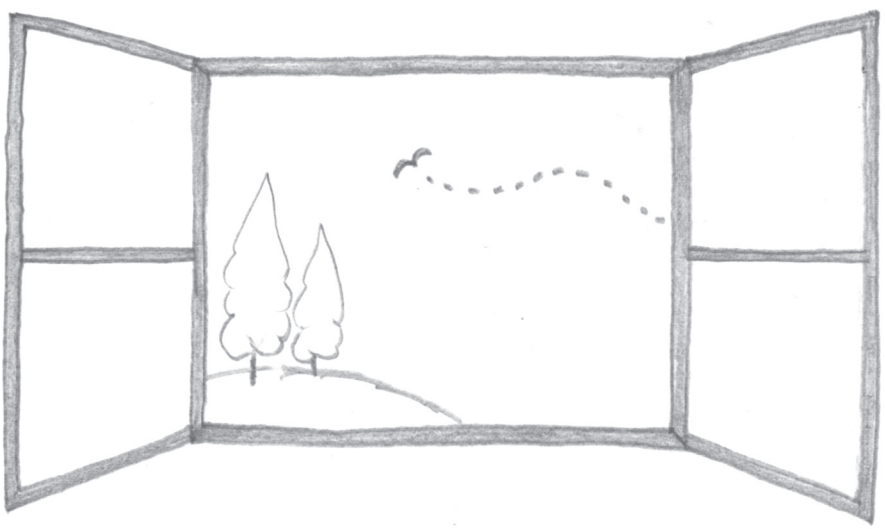
物語からのギフト

娘の入院からはじまった長い長い家族の物語、前からも漠然とは思っていたけど、書いてみてあらためて気がつきました。ぜーんぶが見事につながっていた、ということに。娘が病気になったこと、夫の食が細くなってがんが見つかったこと。私がケガしたこと、夫の入院。食がいのちをつなげるってこと。家族をつなぐ歌があったこと。紅茶の時間のロングバケーション。一つひとつ必然があって、意味があって。

何気ない今、誰かと一緒に笑うこと、涙すること、ごはんを一食一食おいしく食べること、話すこと、見つめること、歌うこと、ちゃんと眠ること、自分のきもちを大事にすること。そんな一瞬一瞬を、あの夏の日以来、娘は自分のからだとこころの声に耳を澄ましながら、夫婦二人の生活をていねいに重ねて、いのちを明日につなげていってるんだなあ。去年からの娘を見ていてそう実感していたけど、それと同じことが私たち夫婦の間にも起きていたんですよね。

この物語の最初に「いろいろありました、で済ませるにはもったいないくらいのギフトをうけとった」と書いたけど、そのギフトというのがこの物語に記したことだったのでした。今しっかりそのことを胸に刻みます。ひとは忘れっぽい生きものだから、忘れそうになった時、私はきっとこのギフトを読み返すことでしょう。そう、何度でも何度でも。

2022/5/26



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（３７）

中村周平

「自分にまだできることはある」

それを実現するために必要であったことは、立ち上げる組織を事故当事者のみならず、スポーツ事故に関心を持つ多くの方にとって参加しやすい『場』として位置づけることだと私は感じました。

「私が自分以外の事故被災者や家族の声を聴きたいと思ったように、弁護士や大学研究者といったスポーツ事故に関心を持つ方、自分と同じように事故に遭い同じ境遇の方との出会いや助言を求めている方、少ないかもしれないけど指導者の中にもそういった方がいるのでは」

また、そう感じた背景には、これまで触れてきた２つの団体の取り組みにも参考にできるものがたくさんあったからです。

「全国学校事故・事件を語る会」の大集会には、事故当事者のみならず大学研究者や、現役の教員、スクールソーシャルワーカーといった方々が学校事故の現状を学ぼうと、高い意識をもって参加されていました。

「全国柔道事故被害者の会」のシンポジウムでは、医師や大学研究者といった方々が、それぞれの専門分野から柔道事故を捉

え、事故を未然に防ぐためには、どのような取り組みが必要か、が報告されていました。もともとは、事故当事者同士をつなぐネットワーク構築を目的としていた団体がそういったかたちで様々な分野の方々と連携し、次のステップにつなげていく様子に大きな感銘を受けただけでなく、その先の可能性に計り知れないものを感じていたのです。

2015 年 12 月に発起人である弁護士の先生、お世話になっていた同志社の指導教員の先生、中村の 3 人を中心に準備会を立ち上げ、そこにスポーツ事故に関心をもつ弁護士の先生や柔道事故をはじめ、スポーツ事故予防を研究されている大学研究者の方に参加していただきました。怪我のリスクが高く、重篤な事故も発生しているラグビーと柔道の安全対策や事故対応における現状と課題を共有し合いました。

その中で感じたことは、事故が起きたスポーツの種別や年月日、事故被災者の年代によって事故の状況や、相手方の対応、現行で取り組まれている安全対策に明らかな違いがあったことでした。そして、最も不足していたのは、やはり、スポーツ事故被災者本人や家族の「生の声」だったと思います。

「ラグビーに限らず、様々なスポーツで怪我をされた方やその家族にご自身の事故について話してもらい、それを参加者を交えて議論できる集まり。それぞれの立場からの意見や考えを出し合うことで、各々が学び合える『場＝勉強会』というかたちで立ち上げてみてはどうか」

2 度の準備会を踏まえ、第 1 回開催に向けて走り出しました。

宗教と人間

竹中尚文

1. 社会の中の宗教

「無宗教だという連中は人間じゃない」というのは、1980 年代にソ連軍と戦うアフガニスタン人から聞いた言葉である。宗教を否定するソ連軍は人間ではなく、イスラム教を信じる自分たちが人間であるという。宗教が自分たちを人間としての証であるという。当時、戦争を取材するジャーナリストたちもこの言葉を聞いた。そして、戦場に同行するジャーナリストは「あなたの信じる宗教は？」と尋ねられた。日本人のジャーナリストはとりあえず仏教だと答えたそうだ。

日本人で「自分は無宗教者」といっている人が多いようにみえる。そうはいいながらも、お盆やお彼岸にお墓参りに行ったり、秋祭りに出かけたり、クリスマスやバレンタインデーだといったりしている。また、身近な人の死に際してお骨を拾うこともする。不要な物だからと火葬場で廃棄を望む人は多くない。

このような行動に私は違和感をもたない。我々の日本社会での行動には、色濃くあるいは薄く宗教的要素が含まれているように思う。宗教的意識の強い人はその行動に反映されるのは当然のことであり、宗教的意識の薄い人はそれなりの行動になる。日本の社会は、特定の宗教を支持してその宗教文化が社会の背景となることはないが、宗教に肯定的であるように思う。それをあえて「私は無宗教だから…」と言わされているところに若干の危惧を感じる。

私はかつてチャプレン(chaplain)の養成に少しだけ関わったことがある。チャプレンとは病院や軍隊などの組織の一員としての宗教者である。多くの宗教者がその教団や宗教組織の一員であるが、チャプレンはそうではない。日本では、チャプレンそのものが珍しいが病院で働く医療チ

ャプレンや宗教系の学校で働く教育チャプレンがいる。私が関わったのは、アメリカ軍の従軍僧の養成である。彼女はアメリカ軍で初めての仏教僧であった。アメリカ軍ではキリスト教の神父や牧師が多いが、いろんな宗教の兵士がいるので仏教僧も必要とされていた。

私が属する浄土真宗では、従軍僧養成に関して「かつての世界大戦で戦争協力をした反省から、そのような従軍僧を養成するのはどうか」という声があがったと聞く。世界大戦の時、戦争反対の声を上げる僧侶を擁護できず戦争協力の立場をとった教団としての反省は当然である。しかし、従軍僧は直接的に戦争協力のための存在ではない。従軍僧は、兵士のための存在である。兵士というのは自分の命の危険や他者の命の危機にさらされる。その時に「命とは、死とは」という問いに共に向き合うのが従軍宗教者の働きである。

私が子どもの頃、父親が一度だけ話したことがあった。父親が特攻隊に選ばれて滑走路で襲撃命令を待ったまま夜が明けた日のこと。友人が特攻隊として死んだ時のこと。再度語ることはなかった。また、子どもの私は父親に「戦争で人を殺したの？」とダイレクトに尋ねたことがあった。父親は答えなかった。

兵士が戦場で直面する体験は命の意味を問うものである。それを不問にしてしまうと言うのは、兵士の人間性を不問にするものである。そういう意味では、宗教を否定する社会の軍隊は恐ろしい。アフガン人がいう「あいつらは人間じゃない」という言葉、そうした恐ろしさを表している。

2. 人として生きる

私が僧侶になったのは、もう 40 数年前のことである。その時には、いろんなことを習ったのだが、一人の講師から「僧侶に成ったらいろんなブレーンを持ちなさい」と教わった。お寺にはいろんな相談にやって来る。話を聞いているだけでいい場合もあるし、僧侶には答えられないこともある。専門外だといって帰ってもらうのではなく、知り合いにその分野に明るい人がいるからその人に相談してみようと応対すべきだという。

せっかくお寺を訪ねてくれたのだから、相談をできる専門の人をできるだけ多く作りなさい、と教わった。

困ったときにお寺を訪ねる、そんな時代が過ぎ去ったのかも知れない。困ったことの有無に関わらず、人がお寺を訪れなくなった。その一因は、お寺の門を閉ざすようになったことだろう。物理的に門を閉ざしているのである。閉ざす理由に、治安の問題もある。門を開いて、玄関も無施錠で、怖い思いをしたお寺の話をよく聞いた。また、お寺がほとんど不在である場合も多い。特に最近のお寺は経済的に苦しい。生活のために勤めに出る僧侶や寺族も多い。夜にならないと誰も帰ってこないお寺も多い。

いろんな問題はあるが、人々の悩みに応えたいと思っている僧侶は多い。私の知る僧侶の多くが人の悩みに応えたいと思っている。特に宗教家として尋ねられた時には、しっかりと応えたいと思っている。

かつて息子さんを亡くされた父親が訪ねてこられた。息子さんは自死であったという。その父親は、私共の寺から数キロメートル先のお寺を訪ねられたそうだ。そこで、「あなたの息子さんは、あなたがしっかり先祖供養をしてこなかったから亡くなったのだ。そして、今、息子さんは迷っておられるから、自分が回向(えこう)して供養(くよう)してあげよう」といわれたそうだ。耳を疑うような話だった。私はそのお寺に電話をして、そのようなことをおっしゃいましたかと尋ねた。その僧侶と思わしき方は、「自分はそのようなに言わなかったが、〇〇さんがそのように受け取られたのだ」と答えた。

私はとんでもない話だし、とんでもないお寺だと思うが、近所の人にいわせるとちょっと違うそうだ。私どものお寺と違ってそのお寺はとても人気があるそうだ。あの坊さんは「よく見てくれる」というのである。何を見てくれるのかと尋ねると、占いが当たるような話だ。それは仏教の僧侶のすることではない。

私は仏教の僧侶の仕事は、まず話を聞くことだと思っている。そして、僧侶が語ることは経典に基づかねばならない。仏教には「経(きょう)」があって、それを註釈する「論(ろん)、疏(しょ)」がある。そうした「論」や「疏または義疏(ぎしょ)」を説明する書物も存在する。仏教の僧侶はこうしたものに基づいて話すべきであるのは、法律家が法に書かれていることに基づいて話すのと同じである。

ところが実際は、思いつきで話を

している僧侶がいるようだ。思いつきで話すのは仏教の僧侶の言葉ではない。そうした偽りの言葉に引き寄せられる人たちもいる。また、偽りの言葉によって仏教のすべてを否定してしまう人たちもいる。どちらも仏教の未来には同じ結果をもたらすだろう。

同じ結果とは、無宗教である。無宗教という考えが戦後の民主化の中で出てきたと考える人がいるかもしれないが、そうではない。おそらく江戸時代中期からだと思う。日本では鎌倉時代に一般の人々に受け入れられる教義をもった仏教理解が出てくる。室町時代には庶民が経済力をつけてくると共に庶民に仏教が拡がり始める。戦国時代を経て、江戸時代には戦いに勝ち残った者が権力を集中させていく。権力者にとって政治権力と精神的な権威とが別に存在するのは都合が悪い。特に仏教やキリスト教は地域を越えて普遍的な権威を持つので、権力者には都合が悪いものである。江戸時代になって、国学の発生とともに宗教を否定する考え方が出てくる。同時に民俗宗教が台頭してくる。それまで、自由な気風の中でエネルギッシュだった仏教は急速に力を失っていく。力を失うとセクト主義に陥って、小さくまとまって自己防衛をし始める。明治維新で仏教は一時的に息を吹き返したかのように活動的になるが、集権的な国家建設の中で力を失っていく。同様の動きは第 2 次世界大戦直後にもおこるが、しだいに力を失っていく。

民俗宗教は権力を集中的に握る者に都合がいい。自分の権力域の外と精神的につながる恐れがないから、自国を支配しやすい。例えば、プーチンにとってロシア正教会という民俗宗教は都合のいい宗教である。またアメリカのプロテスタントの一部は、やはり民俗宗教といってもいいだろう。民族を越えて価値観を共有したりしない。狭量な考えを述べて人々を分断していく。それは独裁的に権力を握ろうとする者に都合のいい考えである。

こうした中で、私は聖徳太子の宗教観は注目に値すると思う。当時の日本社会は、国家宗教として仏教を取り入れた。その時代の中で、聖徳太子は仏教を個人の宗教と捉えたようである。一人の人間として、心の救いを仏教に求めた。そこで個人として出会った精神的救済は普遍的な真理であった。聖徳太子は仏教によって民族や地域をはるかに超越した世界に出会っていた。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第43回

『死刑にいたる病』

1．58歳になって思うこと

誕生日が来て58歳になった。

いよいよ人生の先が見えてきた。普通の会社員だったら60が定年というところが多い。その後再雇用で65くらいまで伸ばす人は多いだろうが、もう引退間近の年齢である。俺は大学で働いているので定年は普通の仕事よりも遅いが、刻々と、少しずつ肩の荷が降りてきた。

この連載を始めて、早くも10年ぐらいが過ぎている。本当のことを言えば、もっとここに綴りたい生々しい出来事はたくさんあるのだ。しかし、それを書いてしまうと流石に知り合いの人に知られた時が怖い（笑）。そろそろ、連載の体裁を変えようかとも思うのだが、忙しいので、なかなかその踏ん切りもつかない。

「男は痛い！」というタイトルはそろそろ返上しなくてはならないかと思っている。今の世の中は男と女を分ける時代じゃない。この頃は大学の名簿でも男女を区別する表記はしなくなってしまっている。ここ数年、急速にLGBTの人権や多様性を求める政策があちこちで見られるようになって、ベルリン映画祭も男優賞と女優賞の区別を廃止した。

「男は痛い！」ではなく、「俺は痛い！」というタイトルにしなければ社会の流れに呼応できないと感じるようになった。事実、今の俺は別に男だから痛いというわけではないからだ。むしろ、俺はノンバイナリーなんじゃないかなあとこの頃思っている。俺は別に体を女に変えたい、女装をしたいという願望はない。むしろ、男っぽくない人生を歩んできたので、見た目くらいは男っぽくなりたいという願望がある。しかし、それでは男っぽいジェンダーの男なのかというと決してそうではないのだ。俺は長年にわたってジェンダーに囚われ、自分の男性性の部分で気に食わないところは全て削ぎ落としてきている。男女どちらにも属さないジェンダーなのだ。

そもそも、最近は男・女という言い方すら気恥

ずかしい時代になってしまった。多様性の概念が広がってきたため、男でも女でも色々な人がいるという部分の方が大きくなっているように思える。この頃は、性別の欄も、「男・女・その他」と書かれているところが増えている。もはや、「男は・・・」「女は・・・」という言い方は過去の遺物なのだ。

閑話休題。

58 歳になって、急に歳をとったような気持ちだ。やはりもう人生を逆算して考える歳になってしまったのだ。

最近になって、俺の身辺は変わっただろうか？

先日、母に久しぶりに電話。俺が Facebook に「GW、誰か遊びに来てください！」と書いてしまったため「あんたあんなこと書くと変なおじさんと思われるよ」と母の声。母は
84 歳だ。70 代くらいまでは忙しかったのが、最近になってすっかり隠居生活。50 年乗った車も廃車し、まったくのお婆さん生活である。それで暇になったせいか、最近本当に口喧しくなった。

いつまで元気でいてくれるのか。電話の声は極めて元気だが、いつ何があってもおかしくない歳だ。あれこれ心配にもなるのだった。俺もおじいさんだしなあ。

俺がこのところ我ながら成長したと思うのは、ご飯を綺麗に食べるようになったことだ。俺の周りは体育系の人が多いので、一緒に食事をすると食べ方が綺麗なことに感嘆させられる。体育系のクラブだと合宿でそういう教育をされるらしい。俺は教え子の体育系の男の子と食事をすることが多いので、彼らにあやかろうと思うようになって、ご飯は一粒も残さない、お汁は最後まで吸う、という習慣がついてきた。これはいい傾向なのだろう。

それにしても、こういう些細なことしか起きないのだ。大事件が起きて今の生活が崩れるのは、それはそれで困るのだけど・・・。この頃、ちょっと車が横から走ってくると、「俺の人生これで終わりになるのか」という思いが頭をよぎる。学生と話をすると 60 まで生きることができればいいという。彼らからしてみれば、60 なんてまだ先の先の先。どういう自分になっているかなんて想像したこともないのだろう。意外に若いものなのに。

非常勤の身でありながら、どうにか 58 歳まで辿り着けた。40 代くらいまではまだ先が長いので、いつまで非常勤でやっていけるのかという不安があったのだが、いまはそれも超越してしまった。俺が教えている大学の中で、一番定年が遅いところが 73 歳なので、長くても 15 年がんばれば全て終わる。15 年なんてあっという間に過ぎる。もう人生を生きたという思いもあるし、諦念の思いもある。後悔はないけど、なんとなく虚しい。そういう気持ちでいるのだった。もう大きな事件も起きないだろう。あるとしたら病気？　それはないことを祈りたいのだが。

前回の連載で、男性は、覇権的男性、共犯的男性、従属的男性、周縁的男性に分けられるという説を紹介したが、俺は結局周縁的男性のままで一生を終えていくのだ。それはそれで仕方がない。しかし、もしできたら、周縁ではない男性になってみたかったとも思うのだった。

２．俺の人生カレンダー

『一度しかない人生をどう生きるかがわかる 100 年カレンダー』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）という本を発見した。この本によれば、男の健康寿命は 72・14 歳なのだそうだ。平均寿命は 80 歳を超えているが、健康でいれるのはあと 14 年と考えたほうがいいのだろう。

この本に従って、俺のこれまでの人生の大きなイベントを考えてみる。まず、俺の人生の歴史を辿ってみよう。

1964 年 2 月 27 日。九州に生まれる。

1973 年。小学校 4 年生になるときに組み替えがあり、超男根主義的な女性の先生が担任になる。その後 3 年間、この先生の支配下に置かれる。この女の先生との出会いは俺にとっては最大の不幸

だった。

1978 年。14 歳。中学入学後、女子から「気持ち悪い」と言われ続け、しだいに学校嫌いになっていっていたが、ここで決定的な不幸な出会いが起きた。超男根主義的体育教師との出会いである。夏のプールの時間は男子全員髪を切るように強制し、その後、秋からは男子全員を上半身裸で授業を受けさせられる。冬になっても裸教育は終わらない。俺の心は壊れていった。

1979 年。4 月、不登校になった。

1980 年。高校をやめて、通信制の高校に移った。

1983 年。R 大学に入学し、京都に移住。この頃、気持ちは前向きだったが、女子学生からの白眼視と悪口に悩まされる学生生活だった。

1985 年。スポーツ音痴を解消するためプールに通い始める。

1987 年。大学卒業間際に、ゼミの先生から（今で言えば）アカハラを受けて、R 大学と決別。K 大学の院に行くことになる。

1988 年 9 月。K 大学の留学制度で奨学金を得て、アメリカ、ワシントン州の大学に留学。

1989 年。帰国

1990 年。当時、K 大学には博士課程がなかったため、兵庫の大学の博士課程に入学。京都から 3 年間兵庫まで通った。3 年間はプールと図書館のみで、ほとんど引きこもりだった。

1993 年。K 大学で非常勤のコマが見つかって、仕事を始めた。それまでほとんどバイトの経験すらなかった。

1994 年。非常勤の仕事が増えて、K 大学に加えて、大阪の大学 2 校でも仕事するようになる。どうにか収入は増えるが、まだ親がかりだった。

1998 年。34 歳の誕生日の前日、父が亡くなる。秋、伊藤公雄さんと初めて会い、ドーンフェスティバルで中村正さんがコーディネートする非暴力プロジェクトに参加。

1999 年。35 歳。伊藤さんや正さんも関わっていらした男性グループでメディアのプロジェクトに参加。1 年間べったり通い詰める。10 月、上の弟が死去。俺の人生最大の悲劇である。この後、徐々に男性グループの人たちとの関係が悪化。

2000 年。36 歳。無事、プロジェクトの報告書が出る。しかし、その秋、そのグループのリーダーと大喧嘩。憎しみが残るような別れとなった。当時確執を起こした人とはまだ今でも修復できていない。仕事は 4 大学（京都 3 大学、大阪 1 大学）で教えていた。

2002 年。38 歳。このまま非常勤を続けても先が見えないと思い、翻訳家の道を探そうと大阪の大学の非常勤をやめ、京都の大学のみとなったため収入が激減。何も払えない極貧生活が続く。その後 2 年くらいは苦しかった。

2004 年。40 歳。大学に加えて外国語専門学校で教えることになり、教えるコマが増えたせいで、生活にはゆとりがでる。

2005 年。41 歳。映画研究では有名な加藤幹郎先生と知り合い、映画の学会に参加するようになる。

2007 年（？）。定かではないのだが 43 歳ごろ、この当時から先の男性グループで一緒だった男性が行っている山科のグループに通うようになる。ミニコミの作成などに関わる。

2011 年。47 歳。ここで山科のグループのリーダーの人と上手くいかなくなり、決別。7 月、最初の単著『マッチョになりたい！？　世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』（彩流社）を上梓。

2014 年。50 歳。新書『BL 時代の男子学』（近代映画社）を上梓。

2017 年。53 歳。キリスト教の勉強を始める。

2019 年。55 歳。キリスト教の勉強で知り合った牧師先生のツアーで、夏休みにアメリカ、ナッシュビルへと旅をする。楽しかった。

2020 年。56 歳。コロナで大パニック。秋から教え子の家族が経営するボクシングジムに通い始める。

2021 年。57 歳。3 月『マスキュリニティで読む 21 世紀アメリカ映画』（英宝社）を上梓。2022 年。58 歳。3 月末で、それまで 29 年間お世話

になったK大学（学生の頃から合わせるともっと長く）を退職。
現在は京都の５つの大学で非常勤（嘱託）講師を務める。

３．俺の生活の割合

『一度しかない人生をどう生きるかがわかる100 年カレンダー』では、さらに次の６つの指標を基に自分の生活の割合を考え直すことが書かれている。

1. Output （仕事）
2. Mother Earth （家族・人間関係）
3. Belonging (金・物)
4. Tool (健康)
5. Input （学び・勉強・資格）
6. New World （趣味）

Output にはボランティアなども含まれているとのことで、そうすると男性運動もこれに含まれるのだろう。俺は仕事は講師、翻訳、文筆、ジェンダーなどの運動である。映画と英語が専門なので、それを社会にアウトプットしてきている。わずかだけども笑。

Mother Earth に関しては、30 代くらいまではほとんど友達もいなかったのが 40 代になってからどっと増えた。当時関わっていた山科のグループでご一緒の男性からも、「國友さん、交際範囲広くていいですよねー」と言われたものだった。アラ還になった今は、誰かにかまってもらいたいという思いがある一方で、人間関係が広すぎると体力がもたないと思うようになった。

Belonging に関しては、20 代はほとんど親と奨学金だった。30 代くらいまでは、親に無心したり、借金したりでほとんど蓄えがなかったのが、40 代になってから余裕が出てきて、わずかながら貯金もできるようになった。大学院の頃にもらっていた奨学金の返還も完済した。いつの間にか非常勤でも生活には困らなくなった。

Tool に関しては、正常眼圧緑内障が俺の持病だ。それと不眠なので睡眠導入剤はいまでも飲んでいる。他はトイレが近くなったこと、49 歳のときに怪我をして初めて全身麻酔の手術をして、その後も左腕にわずかに傷みが残っていることだろうか。

Input は、水泳は 21 の時から長くやってきたが、ここしばらくは泳いでいない。泳ぎは一旦覚えれば忘れることはないだろうし、今は休憩時間だ。その代わり、今はボクシングに通っているが、月２、3 回のペースなので、もっと増やさなくては！資格は 23 歳のときに英語検定一級をとった。勉強は仕事柄たくさんしてきた。

New World は、水泳やボクシング以外では、映画や読書だがこれも仕事の一環である。趣味と実益を兼ねているのでその意味では幸せだ。1 年前から教会に通うようになり、最近、聖歌隊に参加するようになって、歌も練習するようになった。今の New World はこの聖歌隊だろう。

この本では、さらに６つの項目を何%の割合でやっているかを分析することが指示されている。俺はというと、仕事、趣味、学びがほとんど重なっている。この３つすべてを合わせて、生活全体の 90%を占めている。

４．俺の過去・現在・未来

その他、さらにこの本に書かれていることにしたがって、俺の人生を分析してみる。

①手に入れた物・手に入れられなかった物

手に入れたものは具体的には著書である。俺は 3 冊単著を出した。その他共著やテキストも合わせれば、もっとたくさん本をだしている。もちろん、ベストセラーになるような本ではない、印税もほとんど入っていないが、自分のしたことが形になることで自己満足は満たされる。

俺はこだわりが強いので、どうしても自分と合わないところで暮らしたくないため、ほとんど就

活もしていない。結果として、大学の専任職は得られなかったが、京都での生活が手に入った。今は5大学で教えていて、これから定年まで続けられれば、御の字である。

一方、俺がこれまで全く無縁だったのは、何よりも覇権男性の地位である。共犯的男性であってもかまわない。少なくとも男としての規範から外れていない地位につくことはついぞなかったのだ。もちろん、権力や家族は俺にとってはそれほど重要なことではない。子供の頃からそれが欲しかったわけではない。むしろ、そういう社会通念に反発していた。ただ、そういう世間一般で幸せの指標とされるようなものを持っている人は、ある面楽だろうなあと思っていた。俺は自分のこだわりをまっとうしてきたが、そのせいで、世間一般の幸せの基準からははずれた生き方をしてしまっている。

もちろん、この頃は世間の価値観も多様化しているので、それはそれでいいだろう。人生は何もかも手に入るということはない。俺は男性運動に関わってきたし、キリスト教にも関わっている。権力なんて握ってしまったら、男性運動の趣旨ともキリスト教的な生き方からも外れてしまう。

かつては、結婚して、家庭を持って、社会的地位も得るのが男の幸せという社会通念は大きかった。

今から10年以上も前のことだ。俺はその当時ブログをやっていて、そこに俺のブログのファンになってくれた女の人がコメントしてくれていた。彼女は、年はおそらく俺より10くらい上。彼女はとても真面目な人で、正しさを求める人。世の中の人に偏見をもってはならないのだという考え方だった。俺が偏ったことを書くと、「そんな考えだと大事なものを見失いますよ」とコメントが来たりもしたものだった。

ところが、その彼女でも結婚問題となるともろ偏見が出るのだ。「あなたが悩むのは女性がいないせいだと思います」「ソクラテスの悪妻という言葉もある通りで、結婚したら、成長は間違いありません」「あなたに必要なものは向かい合ってくれる人だと思います」と俺をどうにか結婚させたいと思っているという雰囲気だった。

10年以上前なので、まだカップル幻想を抱く女性が多かったのだろうが、それにしても普段は真面目で、偏見や差別を許さない人が、結婚にだけはもろ偏見をもっているというのは不思議だった。

しかし、この10年間で世の中も大きく変わった。もはや若い女の子でも結婚したくないと言っている人が多い時代だ。もはや結婚や社会的成功が幸せの指標ではないのだ。

これから残された人生どう生きるのか。

俺は、これまで勉強してきた証として、どこかの大学で博士号が欲しい。しかし、仕事をしている間は忙しくて無理である。だから、70くらいになって、仕事が暇になったら、どこかでとろうかと思っている。

次に欲しいものは、自分の居場所だ。俺はこれから一生京都で暮らしても構わないのだが、老後は東京で暮らしてみたいという思いもある。元々は東京志向だったのだ。70過ぎになって、老人ホームに入ることになったら思い切って東京というのもありだろう。おそらく70くらいになるとすることがなくなる、東京に行けば、したいことがたくさんできそうな気もする。年寄りだからこそ、大都会で刺激に満ちた生活をするのも悪くないだろう。

②これから会える人・会いたい人

しばらく会っていない人で会いたい人となれば、鍼灸師の先生だ。10年ほど前その先生は東京にさっていかれた。しばらくは東京に会いに行ったりもしていたのだが、しばらく経って、連絡がつかなくなった。電話番号も変わってしまっているし、メールアドレスも変わっている。京都の実家はすぐ近所で、お母さんはまだそこに住んでいるので、強引に会うことは可能だろうが、もう会いたくないという意思表示なのだろうか。

とてもいい人だった。娘のことを考えて、自己

犠牲的に生きられているのだろう。あの先生が幸せでいてくれることを願うのみである。

③何に歓びたいか？

喜びを感じるのは、かつての教え子の男の子たちと会うときだ。ボクシングジムで体を動かしている時もしんどいけれど幸せを感じる。

嫌いな時間は、記憶に悩まされる時間だ。この本では、「嫌いな時間は無駄な時間」と書かれている。嫌いな記憶を思い出すのは、まったく無駄なわけだからそういう習慣を断捨離したいとは思っているが、これがなかなか難しい。

④時間をかけてきたこと・お金をかけてきたこと

映画とジェンダーである。

⑤許せないことは、何だろうか

許せない人はこの連載に幾度も書いてきた通り何人もいる。俺に対して悪意的な人だけではなく、好意的だった人でも許せない人はいる。

この本ではいつまでに忘れるという日時をセッティングすることが指示されている。60 に設定したいと思う。還暦までにはどうにか忘れなくては！

⑥後悔していることは何だろうか

後悔というわけでもないが、社会運動に参加したことは俺にとっては因果なできごとだった。

結局、俺は、社会運動は向いていない。そのことを切に感じる。R 大学も俺たちの頃は学生運動のイメージが強く、俺はそれに対する反発が強かった。しかし、あの頃は学生大会にも 1 回も参加せず、ただ傍観していただけのことだった。

30 代になって、実際に社会運動に参加してみて、2 度にわたる確執。俺はつくづく、社会運動とは相性が悪いらしい。いろいろな勉強にはなったから、そのことに感謝もしているが、俺のアイデンティティではなかったのだった。

幸い、俺は専門が映画とジェンダー。映画が間に入るため、伊藤さんや正さんほど反発されるということはない。

⑦自分は誰として生きるのか？

これからは誰を恨むでもなく、誰かと競争するでもなく、日々をひたすら生きていきたい。幸い、今は支えになってくれる友人もいる。

６．『死刑にいたる病』（白石和彌監督・2022）

阿部サダヲがシリアルキラーの役を演じている。彼の存在感が強いので、彼が主役なのかと思っていたら、むしろ主役は岡田健史。

彼が死刑が確定しているシリアルキラーとやり取りしていくなかで、自分の生育歴のことも辿っていく話である。話があまりにも暗すぎて、重すぎて、ここまで酷い話にすることはなかったようにも思うのだが、あれこれ現代的な問題は網羅されている。虐待を受けてきた人間にしかわからない苦しみの話だ。俺だって、多数の女性たちと数人の男性から迫害を受けてきているので、その気持ちはすごく共感できる。

前半は世の中にはこういうどうしようもないトラウマや被害者意識を抱えて生きている人もいるのだということをわかってもらうにはいいようにも思ったのだが、だとしたら、後半の展開に問題がありである。あれだと、逆にトラウマ的な人に対する偏見をもたらすのでは？？？これ以上書くとネタバレになるので、あとは映画館で確認してもらいたい。

ただ、見る価値がない映画ではない。何よりも興味深いのは、阿部サダヲ演じるシリアルキラーが、高校生ぐらいの制服姿の子だけをターゲットにしていたという部分だ。男とか女は関係なくそういう子だけを生贄にするその部分は面白いと思った。面白いと言っては不謹慎だけど。

刑務所での、岡田健史とのやり取りの場面で、お互いの指がふれあって、ひょっとして同性愛なのかと思うのだが、そうでもない。そのどっちつ

かずのところがいい。

　これからはセクシュアリティやジェンダーは二の次。この殺人鬼は性別よりも年齢や制服で相手を選んでいるのだ。高校生フェチ、制服フェチともいうべきか。それが好ましいかどうかは別として、とりあえず、人間の性は多様。

　そういう認識を世間の人がもつようになったのだとしたら、進化である。

役場の対人援助論

（４１）

岡崎　正明

（広島市）

つながる、つなげる

趣味は研修コーディネート？

以前短信でも書いたが、自分がイイと思ったものをやたらと勧めるクセがある。
自分が得た感動を、誰かに教えたい、共有したい、という欲求が強い。「いいねぇこれ」「でしょでしょ！」というくだりが、好きで好きでたまらないらしい。そのくせ、逆に他人からあまり熱をもって勧められると、その温度差にちょっと引いてしまう。だったら自分のゴリ押し問題にも気づけそうなものだが、つい嬉しくなってやめられない。我ながらはた迷惑なヤツだと思う。

また、思えば子どもの頃から友人の中で新たな遊びを提案したり、どちらかというと集団を仕切る、いわゆる「黙っておけないタイプ」であった。それもあってか学生時代は、サークルだのイベントなどの幹事や調整役をすることが多かった。
そういう体質が合わさって、かれこれ１５年近く地元で続く勉強会のお世話役だったり、西日本豪雨災害の時には、わが子を使って地元でチャリティの「こども落語会」を主催したり、勝手に知人の男女を紹介してくっつけようとしたり・・・といったことにつながっているのだと思う。

仕事でもそんな調子で、自分のメイン業務じゃなくても意見を求められればアレコレ持論を述べたり、求められなくても（？）良いと思うことはジャンジャン伝えたりしてしまう。
そのせいか、最近いろんな人から
「研修したいんだけどどうしたらいい？」
「講師を呼びたいんだけど、知ってる人いません？」
的な相談を受けることが増えてきた。

昨年度はそんな話から２件の研修会が開催されるに至った。新年度も、すでに１件進行中のも

のがある。いずれも私は主催者でも事務局ですらなく、企画段階でアイデアを出したり、講師とのつなぎをつけたりしただけの、完全黒子役。
そのほかにも自分が事務局をしたり、講師をさせてもらった研修も 10 数件あったので、それらもすべてふくめると年間で 20 件程度の研修に関わり、形にしていることになる。ここまでくると趣味といってもいいレベルかもしれない。

特に黒子役をした2件は、今までしたことがないパターンで、大変興味深い経験になった。
1つは過去に仕事でつながりをもらった「こどもぴあ（精神疾患の親をもつこどもの会）」の方々を、児童相談所の若手中心の研修に紹介できたもの。自分の作ったつながりが、周囲の若い人につながっていくというのは、この業界で年を重ねてきたからこそ担える役回りのように思えて嬉しかった。
もう1つは世界ゆるスポーツ協会の澤田智洋さんを、地元の障害者関係の研修に呼ぶことができたもの。以前澤田さんの著作を読んで「この人面白い！ぜひ話を聴きたい！」と思っていたところ、本当に偶然のきっかけから澤田さんの知り合いの方とつながる機会を得て。ダメ元で企画を伝えたところ、快く澤田さんが受けてくださった奇跡的な出来事だった。
主催者の熱意とそれを伝える力はもちろん、私のあつかましさや運など、様々な要素が揃ったからこそ実現し、50 名近い参加者に澤田さんの話を聴いてもらえたことは、個人的にここ数年の中でも会心の思い出となった。

主催者の思いを汲み取り、それに最適な企画を考える。講師と主催者をつなげる。
1＋1 が 2 ではなく、3 や 4 やそれ以上になる可能性を感じさせる。研修コーディネーター？イベントプロモーター？あやしい響き満載だが、そんな形で関わることに、何ともいえない快感を覚えている。
それは私 1 人では決してなしえないことであり、しかし私 1 人が欠けたら絶対この形にはなっていなかったこと。そんな感覚が、なんだか無性に面白い。

つなぎ方アレコレ

「誰かと誰か」「誰かと何か」をつなぐ。根っからそういうことが好きなのだな～とボンヤリ考えていたら、ふと「それってソーシャルワークでも同じじゃね？」と気づいた。

ソーシャルワーカー（以下、SW）は様々なクライアントの相談に乗る仕事である。その中で「こんな制度が使えますよ」「こんな機関に行くといいですよ」と紹介しつなげていくというのは、頻繁にある作業だ。私が「つなぐ」ということに興味があったり、親和性が高いのも、元々のおせっかい体質のみならず、自治体 SW として 20 年働いてきた経験からきているのかもしれない。

ひとくちにつなぐと言っても、ただ単純に「あちらにどうぞ～」とすればいいものではない。クライアントのニーズを見極め、いかに確実に、効果的に「つなげる」か。それにより、解決や変化をどうもたらすのか。そこには様々な理論やスキルがあり、その善し悪しが SW の専門性を作っていくことになる。

つなぎ方のスキルとして最もシンプルなのは、困り事に対して解決策を即返す形だろう。ショッピングモールの総合案内所のように、

「靴を買いたいんですけど」と聞かれれば、
「それなら 2 階の東棟に靴売場がありますよ」と答える、至極当然のスタイル。
質問に対して即答ですぐ打ち返す様子は、スポーツで言うならテニス方式だ。話が早くて具体的なのが強みだが、これで上手くいくのはクライアントが明確に今、何に困っているかを理解し、それを言葉できちんと説明でき、言葉の説明を受け入れる素地が相手にあるときだけ。そもそも靴が欲しいのか、服がいるのだったか、傘が欲しいのかが、混乱したりブレていると、どこを案内して良いか分からない。実はそんなお客さんが結構いたりするのがソーシャルワークの世界なのだ。

そんな時にはキャッチボール方式の対応が望ましい。いきなり相手の言葉を打ち返すように即答するのではなく、まずは話をしっかり受け止めキャッチすることから始める。
「何を買うか迷ってて…」
「そうなんですね」
「服も欲しいけど、足のマメが出来やすくて…」
「なるほど。足の痛みにお困りなんですね？」
と、一緒に考えをまとめていく。
その上で「では靴を買うのが優先順位として一番高そうですね。でしたら売場は 2 階の東棟ですよ」と、相手が受け止めやすいように投げ返す。相手のニーズを明確にし、それに適した答えを一緒に考えていくスタイルだ。考えが整理された上でつなげるため、目的の売場へいく確率は、格段に上がる、というわけだ。

もうひとつ押さえておきたいのが駅伝・リレー方式。より確実に次につなぎたいときの手法である。
それは、
「靴売場は 2 階の東棟ですのでご案内しましょう。どうぞこちらです」
「こちらから『今から行かれます』と、売場に連絡を入れておきますね」
と直接的に次の担い手にバトンを渡すことで、クライアントを支援の環から漏らさないようにする工夫。相手のニーズは低いけど、社会的に変化の必要性が高い場合には、特にこの手法は欠かせない。

つなぐ＜つながる

つなぎ方ひとつにもいろいろあり、いまだに試行錯誤の日々である。まだまだ修行が必要で、奥深い世界だな～と感じているが、しかしそれ以上に大事なことがあると思っている。
それは「つながること」である。
相手がクライアントであれ、同僚であれ、家族であれ。まずは自分がその対象とどう「つながる」か。それがコミュニケーションの基本だろう。そこなくして次につなげることなどありえない。

対人援助の世界でときどき一生懸命に取り組んでいるけど、上手くいかずストレスを溜めている人をみることがある。クライアントが次につながらない！ドロップアウトしてしまう！同じことの繰り返しだ！と、ついクライアントのせいにしてしまう。そんな心性が働くのも分からないでもない。
だがそんな状況のときはまず、自分がクライアントとしっかりつながれているのか？つながる前に、どこかにつなごうとしてしまっていないかを振り返ってみたほうがいい。
自らがつながることをおろそかにして誰かにつなげようとする行為は、悪気がなくても相手からするとたらい回しに見えてしまう。横パスばかりするサッカーでは点は取れないのと同じで、まずはボ

ール（クライアント）を受けた者（今の支援者）が主体的にゴールに向かう（変化を目指す）。そうでなければ勝利（解決）が得られるはずもない。

今この瞬間に向き合っている自分が、クライアントといかにつながれるか。大昔から、支援の基本が「ジョイニング」や「ラポール形成」だと言われ続け、今も変わらないのは、おそらくそういうことだろう。この「つながる」ということも、相当に奥が深く、対人援助職にとって大きなテーマだ（永遠のテーマといっていいかもしれない）。

導入の雑談や相談を受ける環境の工夫、見た目やノンバーバルのスキル、質問法やバックチャネリング。広く言えばアセスメントや検査、分析すらも、相手をよりよく理解することでつながるための手法と言えるかもしれない。

ちなみにいえば十数年前、生まれてくる我が子に**「介」**の字（仲介、媒介など、何かと何かをつなぐという意味がある）を入れたのは、尊敬する人の一字であることに加え、私の「つながる」ことへのそんな想いの表れだったのだと、今さらながら思う。

臨床のきれはし

Sheet 17

浅田 英輔

Objectivity

○客観性のこと

臨床事例や日々の仕事を通して、客観性ってとても大事だよなと思うことが多い。

相談に来るケースにしろ、仕事の人間関係がうまくいかない人にしろ、みんな視野が狭くなっている。「～でなければならない、絶対に」みたいなことにとらわれるパターンにはまっている。そこにいいタイミング、言い方、雰囲気で「こっちの道とかあっちの道もあるかもしれないね？」とツッコミを入れることも心理屋さんの役割だと思っている。

では改めて、客観性とはなんだろうと考えてみる。客観を考えるには、まずは主観からかな。

○主観とは

主観というものは、誰でも持っているものだ。人はみな、分け隔てなく全員が「主観的に」物事を考え、とらえており、そこから離れることはたぶん無理だ。何に対してでも「自分はこう考える」「こう感じる」というのが主観である。それはなにも否定されることではないし、なにものからも自由である。

また、主観的な物事のとらえ方というのは必ずしも一定ではない。「焼きそばが大好き」という主観と「今日は焼きそば食べたくない」という主観は当然、両立する。また「最近あんまり好きじゃなくなった」ということもある。人の感情や考えは、変わるものだし、むしろ変わることが当たり前なのである。ともすると「一貫性を欠いた人物」などと評されることもあるかもしれないが、「そうはいっても、今の私は焼きそばが嫌いになったのだ」ということになるだろう。

当たり前だと思うかもしれないが、これが公的な場では「前と言ってることが違うだめなやつ」と評価されてしまうこともある。もちろん、朝令暮改というのは悪い意味で使われることが多いし、組織のトップの方針をころころ変えられるのは困る。しかし、「現在の方針は間違っていたようだ。来期からは違う方針でいく」というのはむしろ英断となるのではないだろうか。

話が大きくなったが、言いたいことは「みな主観的な考えを持っているし、変わらないこともあるし、変わることもある」ということである。

○主観、客観の定義的な考え

そもそも、主観、客観とはどういうものか。これは哲学などの問題になるのだが、かなり大雑把に表現をすると

主観　＝　自分が感じる、とらえるもの
客観　＝　誰でもとらえられるもの
といえるだろう。
主観　＝　数えられない
客観　＝　数えられる
ともいえるかもしれない。感情と行動の分け方に似ているところがある。心理学はずっとこの問題に取り組んでいる。数えられるものに注目したものが、行動学系統の考え方になるといえる。「感情なんていう科学的でないものは心理学で扱うべきでない」という考え方もある。

では、客観的というものはなんであろうか。これも正確な定義は難しいが、端的にいうと「誰がみても（大体）同じにみえるもの、こと」といえる。カップ焼きそばは、誰がみてもカップ焼きそばである。バゴーンはバゴーンだし、バゴーンのことを「緑のきつねだ」という人は（たぶん）いない。「このカップ焼きそばは、客観的にバゴーンであるといえる」ということだ。ここでこんがらがるのだが、「このカップ焼きそばが客観的にバゴーンである」といことは「かなり多くの人が、このカップ焼きそばについて、主観的にバゴーンであるととらえている」ことが前提になる。つまり、主観的なとらえ方の総体が客観的なとらえ方と考えることができる。もっというと、主観がなければ客観もないといえるのだ。

○形のないものの客観性

バゴーンなどの「もの」であればわかりやすいのだが、「性格」や「感情」「自分の行動」となると、なかなか難しい。

「客観的に自分の行動を振り返る」とはどういうことだろうか。

①行動を同定する

まず必要なことは、「どう思ったか」ではなく「実際に何をしたか」である。感情ではなく、行動を捉える。

例えば、「仕事の後輩に、あなた、ミスが多いねと言った」とする。これが行動となる。「私は、昨日、後輩に対して、ミスが多いねと言った」と言葉にできることが行動を客観的に表現したこととなる。この時点で「そんなこと言ってない」という人もいるだろう。単に記憶から抜け落ちていることもあるが、「人とは、忘れることもある」ことを理解していない人も意外といる。言ってしまったことを隠しているわけではなく、「そんなことは絶対に言っていない」と言い張ってしまう。また、「後輩に注意をした」と表現する人もいるだろう。行動を表現するとは、正確にしなければならない。「注意した」と「ミスが多いねと言った」は違うものである。単純に行動を振り返るということにも客観性は必要になるのだ。

②その行動を評価する

次に「この行動は適切だったか」を評価することになる。

- 実際にミスは多いんだから言ったことは間違っていない
- 間違ってないけど、別の言い方がよかったかも
- 一回いったくらいで変わらない
- 書類にメモつけたほうがよかったかも
- ミスの減らし方も加えたほうが優しかったのかな
- 自分が前に上司に言われたのはいやだったんだよな

などなど、いろいろ思うことがあるだろう。自分が指摘したことで後輩のミスが減るとよいのだが、実際はそんな簡単にミスは減らないし、減ったとしても、その言葉のおかげだとは限らない。なので、この場合に大事

なことは、「客観的に先輩として適切な対応ができたかどうか」ということになる。

○客観性？？

ここに、大きな矛盾がでてくる。「主観は自分の考え」「客観は誰がみても同じもの」のはずであるのに、今の結論は「客観とは自分がどう思ったか」となっている。

ここが客観性の難しいところかなと思う。突き詰めていくと、「人が完全なる客観的な視点を持つこと」は無理なのである。どこまでいっても主観からは逃れられない。「人がみたらどう思うか」「ほかの人の立場になって考える」という言葉はあるが、そんなの本当は無理なのである。だって、ほかの人の視点でみることはできないんだもん。

そう考えると、客観的に自分を見るというのは「人からみた自分」ではない。「自分からみてどうみえるか」といえるのだ。「メタ視点」という言葉があるが、一歩引いた視点で「自分のとった行動は、自分はどう思えるか」と考えることがとても大事になる。

もちろん、ここでは自分の考え「だけ」ではよくなくて、ほかの人の意見も取り込んでいくことも必要である。「あのときこういったけど、どう思った？」とか、「あなたああ言ったけど、あんまりいい感じしなかったよ」などの意見を取り入れつつ自分の考えを洗練していくことは、とても大事である。人の意見を取り入れるのも「いわれてみればそうだな」と思えることもあるだろうし、「そういわれてもしっくりこない」こともあるだろう。また「あの時はいやだったけど、今思うと正しい意見だったな」と思うこともあるだろう。人の意見を取り入れつつ、失敗したりして、だんだんと「自分の意見」「自分の考え」を作っていくのだと思う。そして自分の行動を振り返り「あの行動はＯＫだな」「ああいったのはちょっとよくなかったな」と考えることが「客観性」となるのではないだろうか。

どの段階においても、「一歩引いた視点で自分を見てみる」ということがとても重要になる。ときには見たくないこともある。失敗したことを振り返るのはいい気分にはならない。落ち込むことだってある。でも、ちょっとずつちょっとずつ自分の言動を変えていったほうが（ときには変えずにいたほうが）、「好きな自分」でいられる時間は増えるのではないだろうか。

○くせを振り返る

誰しも「よく使うフレーズ」があると思う。よく使うのは、使っていてこれまでうまくいったからだと思う。ただ、人は年をとる。学生のときにうまくいっていたやり方がそのまま使えないこともあるし、いつまでも若手でいられるものでもない。後輩や部下ができることもあるだろうし、家庭と職場では少し違う言葉を使う必要もあるだろう。「この場面でこの言葉、この行動を使うことは自分にとってOKだろうか」ということは、何度も見返さなければならない。

「でも」とすぐに言っていないだろうか。「わかります」と短絡的に使っていないだろうか。主語を大きくしていないだろうか。自分が言った言葉は差別的ではないだろうか。よかれと思ってとった行動が、結果として相手のためになっていないのではないだろうか。その行動は本当に相手のためを思ってしたのだろうか。

価値観をアップデートしていくのは大変な作業だし、さぼったりすることもたくさんあるのだが、「客観的であること」は、完成形はないのだろう。

発達検査と対人援助学

⑧ 見立て

大谷多加志

前回「フィードバック」について書いたのですが、後から読み返すと何だか誤字も多く、慌てて仕上げるものじゃないなぁと、今さらながら反省しています。と言っていたのに、今回も結局締め切りギリギリで、追い詰められないとエンジンがかからない習性は、そうそう簡単には直らないみたいです。

さて、今回は「見立て」について久しぶりに考えてみようと思います。これまでにも様々な形で取り上げてきたテーマなのですが、なんとなく今考えていることを改めてまとめてみようと思って取り上げてみました。

発達検査の見立てとは？

発達検査からの見立ては、狭義には発達年齢や発達指数などの数値的な結果や、それに基づく発達評価（発達に遅れが見られるか）を指すことになります。しかし、実際には数値的な結果が子どもの支援に役立つ場面はとても限られますし、子どもの理解につながるのはそれ以外のインフォーマルな情報の方が多いように思います。そして、その見立てとは、検査項目の通過・不通過を判断する時や、数値的な結果を算出する時にだけ行われるのではなく、検査のあらゆるプロセスの中で継続的になされていると考えています。

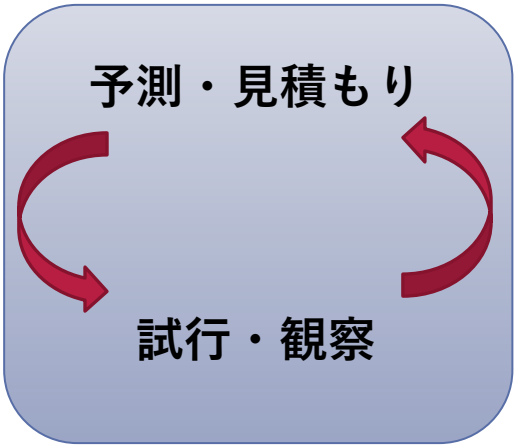
検査の実施に含まれる“見立て”のプロセス

例えば、検査実施の入口である、検査への導入について考えてみましょう。検査者と出会った時、子どもはどのような反応をするでしょうか。検査者との関係性（会ったことがあるか）ももちろん関係しますが、初対面でも全然気にせず関わってくる子もいますし、目が合った瞬間に泣き出してしまうという場合もあります。

この時の反応も、もちろん子どもの見立てのひとつの要素です。子どもの年齢や検査の状況によってはいきなり泣き出すことも全く不自然ではありませんが、年齢などによっては不相応な反応に思える場合もあります。その場合は、不安が高いという特徴があると仮定するかもしれませんし、場合によっては保護者の緊張も高く、それが子どもにも伝わっているケースもあるかもしれません。このような仮の見立てに沿って、それでは子どもの不安を和らげるためにはどのように関わるかを考えていくことになります。「あっちの部屋で、積木とかで遊ぶんだ」と今から何をするかを子どもにわかりやすく伝えることが有効かもしれませんし、まずは保護者に話しかけ、保護者の緊張が緩和されるように働きかけていくことが

結果的に近道かもしれません。

このような「観察」⇒「(仮の) 見立て」⇒「見立てに基づく関わり」を繰り返すことが検査の実施プロセスに含まれているわけです（図１）。



図Ⅰ　検査実施のプロセス

さまざまな見立ての側面

考えてみれば、ある検査項目を実施した後「じゃあ次はこの課題を実施しよう」と検査者が判断する時には、①ある検査項目への反応を観察・評価し、②じゃあ、この課題はできるかも？という予測・見積もりを持ち、③次の検査項目を実施し、その反応を観察する、という見立てのプロセスを常に繰り返していることになります。

また、先述した導入場面の例にもある通り、検査者が見立てているのは子どもの「発達」だけではありません。少なくとも「発達面」、「行動面」、「対人面」の３つくらいの側面からは、子どもの行動について観察・評価しているように思います（図２）。

例えば、ある検査課題を提示した時に子どもが教示した通りに検査用具を扱ってくれなかったとします。この時に仮説として「①指示が理解できなかった？」、「②指示は理解できたけど、実現できそうにないので自分なりの方法で反応した？」、「③指示に応じるより自分の興味や関心が勝った？」、「④そもそも指示を聞いていなかった（聞く気がなかった）？」など複数の可能性が浮かび上がると思います。

この時「①指示が理解できなかった」と考えたとすれば、子どもの行動の背景について発達面から見立てを行ったことになります。この後、例示を行ってみたり、難易度の低い課題を実施した時にどのような反応をするかを観察することによって、この見立ての妥当性が検証されることになります。

また、「②指示は理解できたけど、実現できそうになかったから」と考えたとすれば、子どもの行動の背景について発達面＋行動面で見立てを行ったと言えるかもしれません。指示が分からなかった時の子どもの反応として、「わからない」と表明する、「教えて」と尋ねる、固まる、拒否する、などさまざまなパターンがありますが、自分なりの方法で反応する子どもの場合、その背景に“あまり検査者の期待に頓着しない”という傾向がある場合もありますし、“失敗を感じたくない”という行動面の特徴がみられる場合もあります。

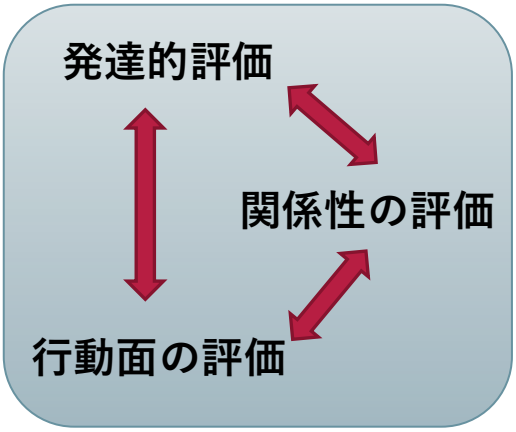


図２　見立てにおける３つの視点

この検査項目への反応だけで断定的な判断はできませんが、“こうかもしれない”という仮説にはつながりますし、保育園や家庭などの生活場面でも似たようなことが起こっていないかな？と想像を膨らませておくと、後の助言で役立つこともあるかもしれません。

「③指示に応じるより自分の興味や関心が勝った」と見立てた場合は、対人面（対人意識の薄さ）や行動面（マイペース・興味の偏り）で見立てたと言えそうです。これも、似たようなことが保育などの場面でも起こっていそうです。検査場面で“どのように働きかけるとこちらの指示や教示に意識を向けてもらえるか”、“どんな内容に特に関心を持つのか”というポイントを探っておくと、のちの助言にも活用できそうです。

「④そもそも聞いていない」場合には、注意の問題（行動面）や、対人意識の薄さ（対人面）が背景にあるという見立てになりそうです。不注意は検査時間が長引くと目立ってくる場合もありますし、その日のコンディションや検査者との関係性にも左右されます。「指示を聞いていない＝不注意」と直線的に考えるのではなく、検査の他の場面ではどうだったか、検査場面以外ではどうなのか、など様々な情報を収集して考えることが必要と言えるでしょう。

このように子どもの反応は複合的な要因の結果として産出されている場合も少なくありません（指示がわからない時に行動面の特徴が顕著に出る、など）。

助言の際の留意点

ここまで見立てについて書いてきたので、最後に少しだけ助言の留意点を述べておこうと思います。

検査者自身が検査を通してその子どもの発達状態や行動の特徴をよく理解できたと思った時、つい、それを“余すところなく伝えたい！”という思いに駆られてしまったりします。もちろん、伝えられるのであれば伝えてもらえばよいのですが、相手がどのような予備知識を持っているかによって、伝えられる内容や量は異なります。相談内容や生活状況を踏まえて、まず何を優先して伝えないといけないか、助言内容の優先順位や伝える順序、タイミングなども考える必要があるでしょう。

発達相談に限らず、援助職が良かれと思って行った助言が、「正しいけれど役には立たない」、「もっともだけれど、相手には届かない」ということも珍しくはありません。相手に届いてこそ、役に立ってこその助言・支援であると考えれば、見立てや助言の「正しさ」を追求しすぎることは時に“言うべきことは言った”という自己弁護につながる恐れがあることも、自戒しておきたいと思っています。

講演会＆ライブな日々㉛

古川　秀明

『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』

第五話・実践経過Ⅱ（2月の続き）

【チーム学校によるオープンダイアローグの導入】

- 一向に酒をやめる気配のない父親、このままではどんな不幸な結果になるか分からないし、あきこの状態も悪く、虐待通告をしないといけない状況。
- カウンセラーの面接だけでは難しいので、チーム学校としてこの家族を支えたいと両親に提案したところ、両親とも是非そうして欲しいと承諾を得た。
- 関係者会議の開催と守秘義務の解除、SC と SSW によるオープンダイアローグを提案すると、それも承諾してもらえた。

【学校の方向性】

- 両親の承諾を得て、チーム学校での関係者会議を定期的に開催。
- 主なメンバーは校長、あきこの担任、養護教諭、SC、SSW。
- 今後の面接は SC と SSW が責任者となりチームを組み、家族療法（オープンダイアローグの技法を使う）にて対応。
- 各関係機関との連携は SSW が担う。
- 面接の中で緊急事態等が発覚した場合は、直ちに校長に報告し、その判断に従う。

【SC、SSW と全家族面接の経過】

- 果てしない夫婦の水掛け論に、子ども達はうんざり。

- 子ども達は別居か離婚を強く要望したが、父親は家族がバラバラになることに、母親は経済的な理由から聞き入れない。
- 何度も根気よく対話を続ける（不確実性への忍耐）
- かなり過酷な面接だった。（怒鳴る妻、かわす夫）

【父親は酒をやめることに強く抵抗】
→ここはSC、SSW共に深く父に共感し、父親に深く同情した。
→もしお酒に強い拒否反応を持つ援助者であれば、倫理、道徳観を父親に押し付け、失敗していたかもしれない。
ＳＳＷは父親に、ＳＣは母親に寄り添う。

- 子ども達は日々の辛さを切々と語り、面接を重ねる間に妻のうつの症状が悪化。

→SCとSSWの励ましもあり、ある日、ついに父親が酒をやめることを決断。

SSWの動き①〔外部連携〕

- K市家庭支援センター(U児童相談所内に併設)のK相談 員（虐待対応、DV対応）と面談。
- 本事例は、父のアルコール依存に伴う大声や暴言により家族が疲弊している
  ことから、児童への心理的虐待とDVの両面の対策が必要となる。
- DVに関しては、母親が身の危険や限界を感じた時の、緊急連絡先の電話番号と所在地を母親に知らせておく。
- 緊急の時は、母親の実家（隣町）に逃げるか、K市家庭支援総合センターまたは地域の民間シェルターを利用するようアドバイスする。
- 本事例に関して、弁護士や警察との連携も視野に入れ、家庭支援センターも協力する。
- 万が一母親が実家に逃げた場合は、校区外でもあるので妹の校区外通学も視野にいれ、教育委員会と連携する。

SSWの動き②〔父親支援〕

- 父親を責めるばかりではなく、支援することも実施。
- SC の面接は予約が詰まっており、オープンダイアローグの流れで、SSW による父親支援開始。
- SSWは父親の父親と年齢が同じで、ちょうど父と息子くらいの関係となり、孤立していた父親のよき相談者となる。
- 医療機関や児童相談所、保健所との連携は全てSSWが引き受け、その度に父親に丁寧に説明し、そのおかげで父親も抵抗なく外部援助を受け入れた。

- アルコールに関しては、WHO のアルコール依存症スクリーニングを活用し、依存症の度合いを調べる。
- その結果、***父親よりも SSW のほうが、飲酒量が多いことが判明！！！！！***

- ちなみに SC も SSW と飲酒量が変わらなかったので、酒の量と依存症の相関関係について、父親、SSW、SC で爆笑、激論のオープンダイアローグとなる。
  →3 人とも、もしここが居酒屋だったらどんなに楽しいだろうと思った。
- 年齢的には、SSW が父親の父親、SC が父親の兄といった感じになった。
- ＳＳWが NPO 法人 ASK の HP から「多岐にわたるアルコール関連問題」をダウンロードし、資料にある１０項目の解説の中からひとつを選び、その感想・意見を書いてくるという「宿題」を父親に提示。
- 翌週、その宿題を読みながら、父親と SSW で話し合った。

その結果、父親が以下のことに合意した。
① 子ども達が成長し、例えば結婚式で楽しく「祝い酒」を飲むことを目標に、それまでは「禁酒」すること。
② そのために、アルコール依存症を治療する。
③ 治療のために、専門医の診察を受ける。

医療機関との連携

- SSW が H 医院の PSW と連携。
- その結果、SSW の仲介により、ＰＳＷとＳＣも連携できた。
- PSW「来院時にしっかりと本人（父親）に動機づけができていました。アルコール依存症の人が、自らの意思で治療を受けに来ることはまずありません。（ほとんどが家族や親戚に強制的に来させられている）ここまで本人の動機付けが出来ているケースは初めてなので医師も驚いてました。本人によると、学校での SSW やＳＣとの面接が、断酒の決意を固めさせてくれたと語ってました。凄いですね」
  →SC と SSW は心の中でガッツポーズ！
- 参考までにどんな技法を使ったのかを聞かれたので、オープンダイアローグを説明。
- ＰＳＷもその存在を知っており、今後も連携することを約束。

治療の経過

- 父親は毎回必ず、休まず治療を受け、投薬も続けた。
- その結果、断酒が成功。

- 断酒の効果はすぐに表れ、父親の暴言や物を壊したりする行動がなくなった。
- 断酒後も父親と SSW の面接は続行（SCが入れる時はSCも入る）
- その度に SSW と SC で父親の断酒続行を心の底から褒めて認めて尊敬した。
- なぜなら、SSW も SC も断酒できないから(笑)
- 断酒後３か月で父親が血液検査の結果を持ってくる。
- 見事にアルコール反応が消えていた。

家族の動き

- 父親の断酒とともに、まさしの不登校は改善。ほぼ毎日通学し、体重も元に戻りつつある。
- あきこの妄想、幻聴が消える。
- あきこは父親にうまく甘えられるようになり、前から欲しかったスマホを買ってもらい、上機嫌。
- それに伴い、保健室への来室がゼロになる。
- まさしは甘え下手なので、父親はまさしにもゲーム機を買ってやった。
- 母親に関しては、断酒により酒代がかなり浮き、大いに家計が助かると喜んでいたが、夫に関する不信感はぬぐえず、過去の夫の暴言などのフラッシュバックが、断酒後さらに強く出るようになった。
- 母親の主治医とも連携をしつつ、母親のカウンセリングは SC が続行。
- 妻の自分に対する不信感に関して、夫が強い不満を表す。
- せっかく酒をやめたのに、妻の態度が変わらない。
- こんなことならやめるんじゃなかった・・・。
- そこで再び SSW と SC が父親支援に回る。
- 酒をやめることがいかに辛いことかを世界で一番共感できる SSW と SC なので、なんとか支えられた。

「その後の経過」

- 翌年、あきこが中学に入学したため、S 小学校での面接は終了。
- あきこのフォローは中学の SC と連携。現在も幻聴や妄想なし。
- 両親とまさしのカウンセリングは高校で SC が継続。
- 父親は一切酒を飲んでいない（母親とまさしも証言してくれている。飲んだら態度やにおいですぐに分かるらしい）。
- 母親の夫に対する PTSD はなかなか改善せず、夫婦仲も元に戻るということはないが、以前よりは平和な暮らしができている。

- まさしは高校で E スポーツクラブに入り、国体に出場 し、団体で２位になり新聞にも掲載された。
- 現在、アルコール依存症やゲーム依存症に興味を持ち、心理学部のある大学を目指して勉強している。
- 成績は良いので、いくつかの指定校推薦は確実に受けることができるらしい。
- ジャニーズに関しては、やはり無理とのこと。

【考察】

SC から

- 心理の視点だけでは、とても対応できなかったケースと言える。
- 特に、他機関との連携や、校内におけるチームワークは SSW の力無くしては無理だった。
- また、父親に寄りそう丁寧な SSW のケアも効果的だった。
- 父親が断酒を決意するまで、とても緊張感のある長い家族面接だったが、その長く苦しい時間こそ、オープンダイアローグの「不確実さへの忍耐」であり、父親自身も、あの時の面接が自分の断酒の考えを固めたと言っている。
- 父親が面接の有効性を認めてくれたのは、SC,SSW の「胸を打つ瞬間」となった。
- 母親の怒鳴り声、父親の丁寧だけれど頑なで冷たい態度、子ども達の絶望した顔・・・
- あのいや～な時間を耐えられたのは、SSW とチームを組んでいたからだと思う。
- どうやってもうまくいかない難しい面接の時ほど、この「チームで対応」するオープンダイアローグは有効に働く。
- すぐに解決しなくても、わけが分からなくても、持ちこたえられる力は問題解決の大きなパワーになる。
- このお父さんのお酒のように、どうにも解決できない問題を、宙ぶらりんのままなんとか耐え続けていく力が、オープンダイアローグのチームメンバーの中に芽生える。
- インスタントに早く解決したケースはリバウンドも早い。
- このお父さんが、「あの時の辛い面接があったから決断できた」と言っているように、根を張る時間が必要。
- 相談者が根を張っている時間の面接は、たいてい、いや～な空気が漂っていて、援助者はそれをケースの行き詰まりと思って落ち込んだりするが、オープンダイアローグではチームで動くので、その耐性があります。
- また、迅速な支援も、SSW がいることで父親面接や他機関との連携が取れ、養護教諭や担任などの校内委員会での報告も、SC がいなくても実現できています

今回のケースにおける、オープンダイアローグの７つの基本ルールについて

１．immediate help　迅速な支援

- SC、SSW、養護教諭、担任などのチームの誰かが迅速に対応できた。

２．social network perspective　社会的ネットワーク

- SSW が保健所、児童相談所、医療機関などとつないだ。

３．flexibility and mobility　柔軟性と機動力

- SSW が多職種連携の糸を素早くつないでいった。SSW が　児童相談所出身というのも大きい。

４．responsibility　責任制

- 学校内のチームの誰かが常にこのケースを毎日見守っていた。
- それはコンサルテーションや校内委員会での情報共有がなされていたから。
- またチームで面接するので、閉鎖性がない。

５．psychological continuity　ケアの継続性

- あきこが卒業してからも、まさしの高校でフォローアップできている。

６．tolerance of uncertainty　不確実さへの忍耐

- 過酷な面接に耐えきった成果があった。

７．dialogism　対話主義

- 常に家族やチームメンバーと対話してきた。

「最後に」

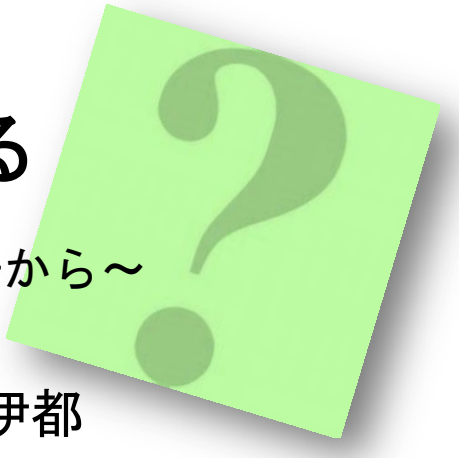
- このように、医療現場では不可能な、迅速な支援、社会的ネットワーク、柔軟性と機動力、責任制、ケアの継続性、不確実性への忍耐、対話主義この全てが、学校内オープンダイアローグでは可能だった。
- オープンダイアローグは、新しいスクールカウンセリングの技法として有効であり、チーム学校という考え方の切り札になり得ると思う。
- 最後までお読みくださりありがとうございました。

ふるかわひであき

立場が変わると何が見える



～その１　養育者と子どもの立場から～



坂口　伊都

はじめに

戦争のニュースが日々取り上げられ、戦争の悲惨さ、止まらなさを思い知れと言われているようで、己の無力さを痛感させられます。コロナ感染の方も終わりが見えず、明るい話題に出会えない日々が続き、息苦しさを感じます。そして私事ですが、この 4 月から施設職員となりました。50 歳を超え、宿直業務をやっていける体力があるかの自信もなく、不安だらけでしたが、チャレンジすることにしました。残念なことに体力不足は、日々痛感することになっています。周りの職員の方々に脱帽です。全く違う景色が４月から広がり、自分が何と無謀なチャレンジをしてしまったのかと実感しているところですが、体力が続くまで、頑張ります。そして、マガジンの連載も新たなものにしたくなりました。私は、これまでいろいろな体験をすることで知ることが多くありました。そこで、「立場が変わると何が見える？」と題して、実際の立場になって見えたことを書いていきたいと思います。

実際に経験してみて、想像と全く違うと知ったのは養育里親の時でした。養育里親をするまでにだいぶ悩みましたが、実際にしてみて初めてその大きさに気づかされました。想像では、家族の中に温かく里子を迎え入れる感覚なのかと思っていましたが、里子が入ることで今まで気づいてきた家族のバランスが崩壊しました。崩壊して更地になり、そこから里子を含めた家族バランスを再構築していくことになりました。子ども一人の生活を支えることは、簡単ではないと思い知らされました。

里子の行動化が激しくなり、その対応を背負うことが増えた時、動悸等の身体症状が私の中に起こりました。家族、同僚、児童相談所のワーカーと状況を共有しましたが、私の気持ちが癒えません。知ってもらっても手立てがなければ、何も変わらないという思いになり、落ち込みが回復することはありませんでした。里子と何とか関係を修復したいと願っていましたが、自分一人でどうにかできるとは思えず、八方塞がりでした。里子だけでなく、実子との間でも関係が綻びることがあります。その子どもが、自分の気持ちを話せればいいですが、なかなか言葉にできない子もいます。腹を割って、話し合いができれば、先を見通すことができますが、話し合いが成立しないと困ります。私以外の誰かが話して

くれるのではないかと期待しながら、自分が無能に感じ傷つきます。自分の傷つきを話そうとしない子どもと向き合うことは、非常に辛いことです。どこで歯車がずれてしまったのだろうと後悔して、次は自分から子どもへ話しかけることに恐怖し、悪循環にどんどんはまっていきました。

人は、仕事や家族の中で様々な立場に立たされます。例えば、職場で、上司のやり方を批判していた人が、その上司の立場になると批判していたことをその人も同じようにしていることも多く見かけます。近所の遊園地に行ったことを子どもの時は、ものすごく遠出をしていたのだと思っていたけど、こんな近所だったのだと大人になってから知るということもあります。同じ自分でも、年齢を重ねたり、立場が変わることで感じ方が変化したり、価値観が入れ替わるということも起きます。人は行動を選択しますが、その時に自分の身体を通して何らかの感情も出てきます。その時に湧き上がる怒り等の感情に支配されると、上手くコミュニケーションが取れなくなることがあります。自身の立場が報われないと、相手に対して何故してくれないのかと、相手を非難することで精一杯になります。本当は、お互いに分かち合う力があるにも関わらず、衝突が続きます。そこで、立場が変わると何が見え、何が見えなくなるものがあるようです。その辺りに焦点をあててみたいと思います。どうぞ、最後までおつきあいください。

親の心子知らず

まず、衝突が起きやすい関係は子どもと大人の間が思い浮かびます。親（養育者）と子、教師と生徒というところでしょうか。大人にも、子ども時代がありました。子どもの頃、親に注意されて「今やろうと思っていたのにやる気なくした」と思うことがよくありませんでしたか。大人は子どものことを何もわからない、わかってくれないと不満でした。その経験から、親になってすぐ子どもに注意するのではなく、子どもの様子を伺いながら、待つだけ待ってから〇〇しないの？と気を遣って声かけをしましたが、子どもから「今やろうと思っていたのにやる気なくした」と言われてしまいました。親の私は、愕然としました。これだけ気を遣ったのに、結局こうなるのだったら、気を遣うだけ無駄というものです。

私は、自分の親とは違う行動をとったつもりでしたが、もしかしたら私の親もすぐに注意していたのではないのかも知れません。子どもから見たら、親が自分の様子を見守っているということに気づかないだろうし、子どもの立場では、親が自分の状況を何も見ずに言っていると思うのでしょう。

親が子どものことをいろいろと思い悩み、少しでも子どものためになるように試行錯誤を日々重ねていますが、その気苦労ほど、子どもに伝わりにくいものはないのでしょう。私自身も親に「あんたにもいつか私の気持ちがわかる時がくる」とよく言われていました。そんな話をする親の印象は、親は自分の思いばかりを優先させて押し付けてきて、子どもの気持ちを全くわかろうとしないくせにでした。親になって、自分よりも子どものことを

優先してやってきたつもりで、子どもを叱っている時間よりも子どもを想う時間の方がずっと長い感覚でいますが、子どもの印象に残るのは、叱られた時で、それも親が怒り過ぎたかなと後悔するような場面だとわかります。親としては、不条理だと叫びたくなります。

家庭でも児童養護施設等でも、子どもの生活をケアする日々を送ります。食事、掃除、洗濯と家事をこなしながら、子どもの様子を見守っています。ハンバーグを作って、美味しいと言われれば嬉しくなって、また作ろうと思い、日々の労力が報われた気分になります。逆に食事を用意しても食べなかったり、文句を言われたら、もう二度と作るもんかと怒りながら、気落ちもします。日々の生活の小さな一場面ですが、子どもの何気ない言葉や態度の影響は大きいと感じます。主婦の家事労働対価はいくらになるかという指標が出されたりしますが、金銭の支払いというよりも、家族のためにしていることを理解して欲しいという思いが先に立つのではないでしょうか。実際は、理解する前に私がどれだけやっているか気づいてもらいたい。

例えば、洗濯を私がするのが当たり前になって、他の家族がそれをやろうとも思わなくなって、それならしないでおこうと思っても、洗濯物が溜まることに気づくのは私だけ。他の者は、それすらなかなか気づかず、そのまま放置されていきます。洗濯物が溜まるストレスにさらされるなら、誰にも期待せずにしてしまうと同じことが繰り返されます。家事をする者損です。家事を楽しめれば、損をしたという気分にならずに済みますが、家事の内容は多岐に渡っていて、好きなものも嫌いなものもありますし、できれば他の人がしてくれたら楽なのも事実です。生きている限り、終わりがないものです。何もしていないのにお腹が減ることを恨めしく思ったり、自分がお腹が減っていなくても家族はお腹が減っているから献立を考えないとならないと思うと面倒くさくなります。家族に自分で何とかしてと投げかけることもできますが、何となく気が引けるのは、何なのでしょう。自身でも、家事の役割を引き受けてしまっていて、家族の中の役割を担っていると思っているのでしょうか。何とも言えず、貧乏性になっているようです。児童養護施設で働いてからは、お昼から夜にかけての勤務が多いので、その時は晩御飯を作れないからと伝えています。宿直明けの時は、作る体力がないから弁当を買っています。晩御飯を作れるのに作らないのは引け目を感じますが、作れるような状態でなければ自分で何とかしてと言えます。自分の気持ちの持ちようで変わりますが、大きな変化が生活の中に起きないとそれも難しいようです。



毎日の生活は、流れるように過ぎていきます。その中で生活を支えていることに振り向いてもらえませんが、それをし続けることに大きな意味があると知ることが大切なのではないかと感じ始めています。子どもの生活を支えるということは、養育里親の時にも感じましたが、公私

の感覚を区別することに難しさがありました。里親の時は、自分達の生活の中に里子と過ごすことで、里子と向き合うために家モードでいるか、仕事モードでいるべきか悩み、里子と落ちついて向き合うためには、家で過ごす時も仕事モードでいる方が上手く回ると判断しました。しかし、娘からはいつものママではないと嫌がられました。娘からしたら、いつもの母と違って見えることは、無条件に母が自分の横にいるパーマネンシーを脅かされる感覚を抱いたのではないでしょうか。逆に里子の方は、いつも同じようにいる存在に居心地の悪さがあったのかも知れないと思います。

里子に一緒に暮らす家族として受け入れてもらえない感覚がありました。その時は、なかなか信用されないなと悲しくなりましたが、施設職員や児相職員、学校の関係者等、子どもの生活の中で自分の担当が変わっていきます。いろいろな大人が自分が関わろうとしてくれても、別れの経験を重ね続けたら、大人に気を許すことを止めることも頷けることです。

表面に出ない部分

里親になって、里子は予想の斜め上をいく行動をすることによく驚いていました。先程まで、落ち着いて一緒に過ごすことができたとホッとしていたと思った矢先に何らかのトラブルを起こすという感じでした。息子も頭が痛くなるような行動をいろいろとしていましたが、調子のいい時、悪い時の察しがつきました。今は大丈夫だろうという予想がつき、それがある程度続くので、調子がいい時、悪い時期という感覚がありました。里子の場合は、調子の良し悪しの時期が一瞬にして入れ替わる感じで、少しの何らかの刺激で、あっという間にトラブルになる感じで、何が起きているのか見当がつきません。

息子も里子に向かって、「いろいろと気に入らないこともあるだろうけど、どうしようもなく子どもは親の保護がないと生きられないんや」と語っていました。神妙な顔で里子も聞いていましたが、息子の真意を理解することは難しかっただろうと思います。息子の行動に手を焼いていましたが、息子の中に一線があり、それを超えてはならないことを無意識的にわかっていました。成人を迎えた今でも、何かあれば親に訴えてきます。子どもにとって、親は最後の砦だと思えることの意味は大きのだと感じます。里子の行動に振り回される感じは、こういうところから出てきているのではないかと改めて思います。

親なんて、子どものために苦労しているのに気づいてももらえず、していることが当たり前と捉えられ、何か損ばかりしている立ち位置だと感じます。子どもには、無条件に隣にいて、自分を護り続ける存在が必要不可欠で、それは生活の中で見えにくいもので、意識されにくい部分なのだと思います。子どもは、できる限り生まれた家庭で育ち、それが難しいようなら養子縁組、養育里親、施設と「新しい社会的養育ビジョン」で優先順位が示されています。この意識されにくい部分に焦点を当てると、この順位になる理由がよくわかります。

現実は、そう簡単に割り振れるものではありません。特別養子縁組の話が進んでいても

直前で子どもを手放せなくなり、中断されることもあります。実親が子どもと分離する際、里親家庭を拒否し、施設なら了承するという話もよく耳にします。何らかの理由で、家庭で育つことができない子どもの居場所が必要となることは変わりません。

では、子どもが家庭で育てば、子どもが大人を信頼できるようになるかといえば、一概には言えません。大人は、子どもの行動を問題だと感じ抑制しようとすると、子どもの話を聞くよりも先に否定、禁止、言っていることを信じられないということをしてしまいます。それが継続されると、子どもはどうせ信じてもらえないと説明することを諦め、激しく責められたり、叱られたりすることで深く傷つき、トラウマになることもあり、他者や自分自身を信用できなくなります。実際に、何でそんなことをしたの？と聞いても、上手く説明できずに話さなくなりました。息子も里子も、上手く話せないところはよく似ていました。娘は、よく話す方だったので、学校で何があったかや自分の気持ちをよく話していました。話ができる子は、言葉でのコミュニケーションができ、一緒に問題が起きても考えるということができました。

息子や里子は、話さないというより話せないので、この子の中で何が起きているか一生懸命考えました。息子は、私が予想した考えを聞かせると反応し、時には泣き出すこともあるので、そこが辛いのだねとわかることがありました。里子は、こういう気持ちではない？と聞かせると、目を白黒させていました。経験したことないことを言われ、何を言われているのかわからないという反応に見えました。それよりも、里母である私があなたとどうしたいと思っているか、例えば「ずっと一緒にここで暮らしていきたいと思っているんだよ」と言葉にする方が、わかりやすそうでした。でも、その話をした後でも、止めようねと約束したことを繰り返してしまうということが起こりました。わざとしているのではなく、本人にも止められないのだろうと感じました。止められないのは、複数の要因があるのだろうと思いますが、自分の中の整理をどうすればいいのかわからないのではないかと感じています。

息子の子育ては、何もかも初めてで、手探りでやってきました。なかなか寝てくれない、やっっと寝たと思ったら些細な物音で起きてしまったと神経質になった頃もありましたが、言葉を話せない赤ん坊相手にお腹すいたね？げっぷ出て気持ちいいねぇ、アリさんがいっぱいいて面白いねぇ等、語りかけていました。娘の時は、余裕もできて少々泣かれても、かわいい泣き声ね、もう少し泣いててね、お兄ちゃんに取られて嫌やったね、かわいいね、いい子ねとたくさんの言葉をかけてきました。言葉を少し話せるようになってからは、モノを投げたり、他の人を叩いたりしたら、あなたは叩かれてもいいの？叩かれたら痛いよね、嫌よね、〇ちゃんも痛いから泣いているよ、□□されて嫌だったのはわかるよ、でも叩くのはダメねと話しま



す。子どもが小さいと諭すように離せますが、子どもの年齢が上がるにつれ、
大人の言い方もきつくなってしまいます。この諭すように言われることは、子ども自身も考えていく準備になります。言葉がわかるようになってからこそ、子どもの気持ちの代弁を子どもが聞くことで、自分の中でどのような感情が起きているのか、それをどう扱っていけばいいのかを考えていく経験の積み重ねがコミュニケーションスキルに繋がることのように感じます。

周辺からの記憶 35

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in むつ

村本邦子（立命館大学）

2022 年度を迎え、コロナ禍は収まる様子もないが、大学も基本的に対面授業と決まり、少し日常が戻りつつあるように感じられる。何はともあれ、忙しさが戻ってきた。相変わらずマスクははずせず、コンパも合宿もできないが、それでも学生たちは（教員たちも）嬉しそうだ。やはり、直接、場に身を置いて顔を合わせ、空気を共有するということが必要なのだろう。

11 年続けてきたプロジェクトを終え、12 年目になる今年は新たなスタートを切る。これまでは年 4 回、東北 4 県を訪れてプロジェクトを実施してきたが、今年度からは福島を中心に、9 月に一度だけ現地を訪れるプロジェクトとなる。「院生たちはどのくらい参加してくれるだろうか」と思っていたが、5 名の予定のところを 19 名の参加希望となった。そんなにたくさん一度に引率できるのだろうかと不安もないわけではないが、みんな大人だし、いろいろと工夫して、自分たちの責任で動いてもらえるようチャレンジしてみることにした（研究科からは、来年から人数制限するようにと言われたが）。

昨年参加した M2 院生数人が、現地プロジェクトには参加できないが、自分たちが受け継いできたものを後輩に受け渡すと言って、研究会にボランティア参加してくれてもいる。今年のプロジェクトがどんなふうに発展的にやれるのか、とても楽しみだ。





2020 年リモートでのプロジェクト

プロジェクトを ZOOM 開催することに

しばらく状況を見ていたが、コロナ禍は収まる様子もなく、オンラインの授業にも慣れてきたので、2020 年度はすべて ZOOM でプロジェクトを開催し、最終年度を 2021 年に持ち越すことに決めた。まだ ZOOM に慣れていない人たちばかりなので、希望者とはまず練習をすることから始めた。

院生たちは今年も 19 人がメンバーとして登録してくれたので、オンラインで行うプロジェクトの参加方法を工夫してみた。例年通り、各地の担当者を決めるが、このメンバーは各地のプログラムの企画担当者となり、2~3 回の企画会議を行い、当日は運営にも関わってもらう。他のメンバーは、オンラインであることから、自分の担当地以外のプロジェクトにもすべて参加する。オンラインだと録画視聴ができるため、時間空間の制限を越えて、すべての地のプロジェクトに参加できることになる。

むつ企画会議

7 月 10 日、第 1 回目の研究会を開催、夜は ZOOM の練習がてら、ずっとむつの中心を担ってくれている杉浦さんとつないで相談した。むつでは庁舎以外は wifi がつながっておらず、ZOOM 未経験者ばかりだそうで、ハードルは高そうだ。私は司法臨床の集中講義でロールプレイも ZOOM で経験し、思ったよりはるかに手ごたえがあったので、支援者支援セミナーも ZOOM を使ってできるのではないかと考えていたが、現地の事情としては無理ということだった。残念だが仕方ない。支援者支援セミナー10 年の振り返りをすることにして、過去の参加メンバーにも声をかけ、これまで扱ってきた事例の振り返りとその後のこと、十年の取り組みで何か変化があったかどうかなど成果の共有や課題の洗い出しをすることを考えた。危機に強い私である。こんな時には、次から次へと創造力が働く。

むつプロジェクトには 3 人の院生が参加してくれ、第 1 回企画会議を 7 月 19 日に開催した。これまで、プロジェクト終了後、院生たちが企画段階から関わりたかったという声があがっていたが、実際にはその時々の現地の状況に合わせて調整するため、なかなか難しく、実現できないままだった。今回は、こちらが主導でやることになるので、自由度が高く、院生たちのアイディアを反映しやすい。

みなで相談した結果、担当院生たちには、下北とむつの経過と現状を調べてまとめてもらい、それに修了生や教員が補足的に説明するということにした。8 月 4 日には第 2 回企画会議を開催、発表の担当やスケジュールなどを決めた。

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in むつ@リモート

2020 年 8 月 28 日(金)午前「むつ・下北・青森の概要とプロジェクトの 9 年」

プロジェクト初日午前は、通常の事前学習とフィールドワークを合わせたような感じで、むつ・下北・青森について調べたこと、

過去の参加者による HP を参照してプロジェクトの９年をまとめ、むつ担当者３名に報告してもらった。

まずは院生たちが作成した資料を紹介する。

東日本家族応援プロジェクト

下北・むつについて

むつ市





写真：ぐるりんしもきたHP

特産品
イカ、海峡サーモン、帆立、昆布などの海産物
青森ヒバ、べこもち、乳製品　など

観光名所
恐山、尻屋崎、薬研温泉、釜伏山展望台
むつ科学技術館　など

お祭り
海峡サーモン祭り、恐山大祭、大湊ネプタ
田名部祭り　など

恐山



比叡山・高野山と共に三大霊山として数えられ、恐山菩提寺がある。
古くから湯治場、山岳信仰の場所として地元に知られていた。

862年 滋覚大師・円仁(天台宗)によって開祖。
15世紀に地元の争いに巻き込まれ、寺は破却。
その後100年近く荒廃していた。
1522年 曹洞宗の僧侶が恐山の麓の田名部(現・むつ市)に円通寺を開き、1530年恐山を再興し菩提寺を建立した。



青森県むつ市



地理
本州最北端の市
日本で初めての平仮名の市

気候（2018年）
平均気温：10.2℃
雪の日：131日/年

人口（2020年8月１日）
56051人
世帯数：28796世帯
平均年齢：49.8歳



恐山ー死者に会える場所ー

- 恐山は死者に出会える場所として昔から有名であった。
- 恐山という場所に来ることにより、死者との対話が叶うと信じられていた。方法は死者の名前を呼ぶなど様々な方法があったようである。また、「大祭の日に地蔵を祈れば、亡くなった人の苦難を救う」とされていた。
- イタコマチと言われるイタコが集まって口寄せすることは、大正末期から昭和にかけて広がった。
- 死者を憑依させるというような霊媒は全国各地で様々な名称で存在していた。現在でも残っているのは東北と沖縄。





むつ市の歴史

藩政時代には代官所が置かれ、北前船などの海運港路が集まる地として栄えた。
1870(明治3)年 戊辰戦争で賊軍とされた会津藩の一部の旧藩士と家族が、明治政府により斗南藩に移封された。
しかし、寒冷地の過酷な自然条件、火山灰台地の荒れた土地で開墾は進まず、疫病と飢餓により多くの死者を出した。

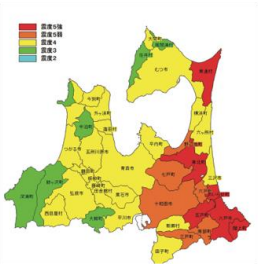


三戸町ホームページ

東日本大震災

3月11日
三陸沖でM9.0
むつ市は震度４
市内全域が停電

青森県内の避難者：最大24,132人
むつ市：1896人



むつ市の歴史

1959(昭和34)年、下北の政治・経済・交通の中心として成長してきた田名部市と、海軍から自衛隊の基地として発展を遂げた大湊町が合併して大湊田辺市となり、1960(昭和35)年にむつ市となった。

2005(平成17)年3月14日には、ホタテ養殖等の漁業を中心としたまちづくりを進めてきた川内町、室町時代から続いているヒバ材搬出等の林業及びイカを中心とした漁業等によりまちづくりを進めてきた大畑町、鱈をはじめとした漁業と北限のニホンザルや風光明媚な自然を活かした観光によりまちづくりを進めてきた脇野沢村が合併し、新「むつ市」としてスタートを切った。

1968(昭和43)年 下北半島国定公園に指定され、2016(平成28)年には下北ジオパークにも認定される。
観光地として期待をかけ自然満喫や農林水産物のブランド化に力を入れている。



東日本大震災

津波被害
15時21分に八戸で引きの第一波0.7mを観測
16時57分に 4.2m(観測できた最大の津波の高さ)を観測
※後日、気象庁が津波の痕跡の位置をもとに推定を行った結果、八戸で6.2mの津波の痕跡が確認された。

人的被害
青森県内での死者の数は八戸市で1名、三沢市で2名の計3名
行方不明者は八戸市の1名
いずれも地震に伴い発生した津波によるものである。

東日本大震災

広域避難

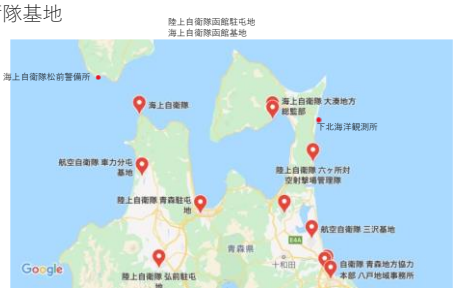
地震や大津波による被害とともに、福島第一原発 からの放射性物質の放出・拡散による複合災害

⇨都道府県を越え青森県内に広域避難する 人が最大1209人

農林水産物・観光業への被害

福島第一原子力発電所事故 による放射性物質 の放出・拡散による懸念から、国内外から、宿泊のキャンセルや、農林水産物等の取引停止など、大きなダ メージを受けた 。

自衛隊基地



軍事施設



アメリカ軍三沢基地

Xバンドレーダー

国内にはつがる市と京丹後市のみに設置されている。弾道ミサイルの発射を察知してイージス艦や迎撃ミサイル部隊にデータを送る。（米軍施設）

ガメラレーダー

防空用の固定式警戒管制レーダー

弾道ミサイルの探知

（防衛省/ 航空自衛隊）

基地・軍事施設と生活

米軍基地、自衛隊基地があることにより、周辺雇用の促進や人口（自衛隊員や米軍人だけでなく、その家族も基地周辺に居住する事になる）の維持、消費の増加による経済活動の活性化につながっている。

アメリカンデーなど米軍基地と地域住民との交流なども行われており、国際交流の場にもなっている。

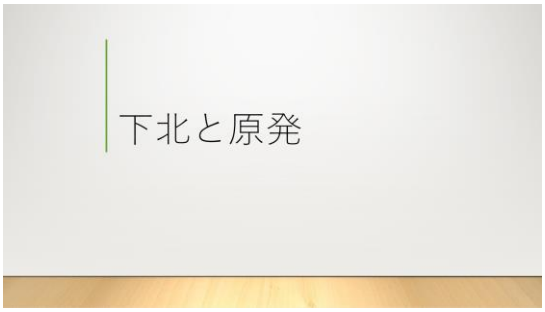
交付金

米軍基地や自衛隊基地の所在する市町村に毎年、国から交付金が支払われる。

Xバンドレーダーに関しても、交付金がつがる市に支給されたが、 2016年に10年間の期限付き交付が終了している。

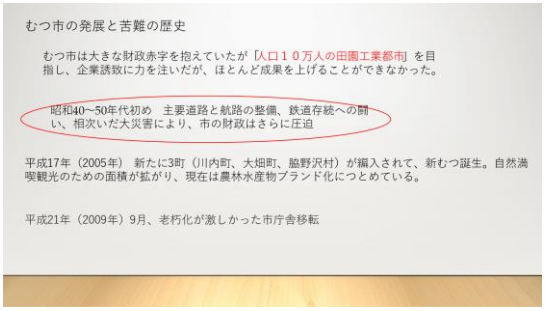
安全性

軍事訓練、レーダーの体への影響、騒音問題、米軍関係者による犯罪、訓練に伴う操業規制など











むつ市と原発の歴史②

原子力船むつ：政府が日本最初の原子力予算を成立させていた矢先、むつ市長の「むつ製鉄」の誘致が頓挫し、代わりにこの原子力船の建造が決定

原子力船むつの建造　73億円
むつ市関根浜港の築港　340億
そのほか附帯施設260億
＝総額1500億円の空費

中間貯蔵施設を受け入れたら・・・
誘致による交付金で赤字解消+累積赤字の脱却が見えてくる

受け入れを決める

その後の経緯はこちら→http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/15,1309,30,226,html

原発産業に頼ってしまう理由

原発関連施設立地条件

☆広い敷地を確保できること

☆海岸または大規模河川沿いに位置することにより大量の冷却水を確保できること



都会から離れた地域で第一次産業中心。自然に左右される。

自治体の収入安定のために、第２次産業誘致などで雇用創出する。

財政逼迫の時期に国からの誘致がある場合、第一次産業の懸念もしつつ、財政立て直しのために電源三法交付金を使う

中間貯蔵施設とは（むつ市HPから抜粋）

・使用済燃料を再処理工場で再処理するまでの間、一時的に貯蔵・管理する鉄筋コンクリートでつくられた頑丈な倉庫のような施設

・運ばれてきた使用済み燃料は、自然に取り込まれた冷気で冷やされながら、施設内で安全に貯蔵・管理される。

→大量の使用済み核燃料は50年間保存されるが、原発が稼働し続ける限り永遠に増え続ける。保存は地中ではなく、地上の平屋建て倉庫に縦に並べられるだけ。



中間貯蔵施設イメージ図（リサイクル燃料貯蔵株式会社提供）

http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/15,1312,31,224,html

六カ所村と原発の歴史

1969年　「新全国総合開発計画」が閣議決定され、「むつ小川原開発」が含まれていた。
（３万ヘクタールの用地買収、1万５千人の立ち退きという巨大開発計画）

1970年　県内外不動産業者による土地買い占めが続き、その規模が260人から870ヘクタールに及ぶ。

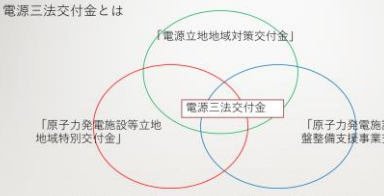
1971年　土地買収会社「むつ小川原開発株式会社」創立。土地ブームが続き、村内民有地の13%にあたる178ヘクタールが売られた。

1973年　地価が3年前の200倍になる。開発地域内から他市町村へ移転する人が出始める。また、オイルショックにより、土地ブームは終了。

結果として、巨大開発の縮小により、土地賠償などで膨大な借金を抱えてしまう・・・

売却できなかった土地に核燃料サイクル施設を建てる案が浮上する
→受け入れを決意

電源三法交付金とは



1974年に制定され、立地地域に発電所の利益が十分還元されるようにする制度。原子力発電所のできる地元の人たちにとって他の工場立地と比べると地元に対する雇用効果が少ないとう余りメリットを直接的にもたらすものではないため、補償措置として交付した。

六カ所村にある原発施設

日本で唯一の核燃料サイクル施設

・原子力発電所で1度使い終わった使用済み燃料の中にある、再燃料として使用できるウランやプルトニウムを回収してリサイクルする。

・エネルギー資源の長期的な確保が可能になるとされている



核燃料サイクル施設の詳細↓
https://www.jnfl.co.jp/ja/company/facility/

電源三法交付金の額（2020年度）

詳細な金額はこちら
→https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/energy/g-richi/files/R1_dengensanpou_jisseki.pdf

むつ市（人口約5万6000人）　24億2千万円
六カ所村（人口1万人）　22億3千万円
東通村（人口約6000人）　16億8千万円
大間町（人口約5000人）　2億6千万円

１施設あたり60億円を限度とした地域振興計画の交付金（核燃料サイクル交付金）も含まれる

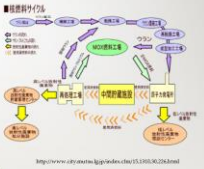
他の地域（水力発電）
青森市（人口約27万人）約１千万円
鰺ヶ沢町（人口約１万人）約１千万円

核燃料サイクル施設の現状（事故や放射能漏れ問題など）

・ガラス固体化をつくる、ガラス融解炉のある小部屋で3回にもわたって高レベル廃液が漏れるなどの事故があり、**長らく試運転が中止となっていた。**（現在は技術的な改善により再開）

・最も危険な放射能物質をあつかう化学工場（日本原燃株式会社）が、**分析、点検をサボっている現状**がある。
→スケジュール優先という実情

・再処理工場の煙突から出る煙には放射線物質が含まれており、**風下の地域**に降り注ぐ。



再処理工場建設に最後まで反対していた菊川さんの田畑があたる（菊川さんについては後に詳しく説明します）。

2020年7月29日、福島第1原発事故後の適正審査に合格したというニュースが
→https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200729/k10012538381000.html

市庁舎の建て替え

そもそもの経緯

前市庁舎が老朽化が激しかく、早急に工事が必要。しかし、財政難であり改修工事、建て替えの予算がない状態。

東京電力と日本原燃株式会社からの寄付金5億円が入る

市庁舎の建て替えに充てることができた



むつ市に限った話ではないが、原発関連の交付金にはリミットがある（7年）。つまり、その期間を終えると交付金が切れてしまう。

東通村の原発施設

・1971年　原発用地の八割強を総額20億円で買収したが、8名が拒否したため、**土地の完全引き渡しに20年かかっている。**

特に漁師の方が最後まで反対運動をしていた。

・1988年 電源三法による交付金が入り始める

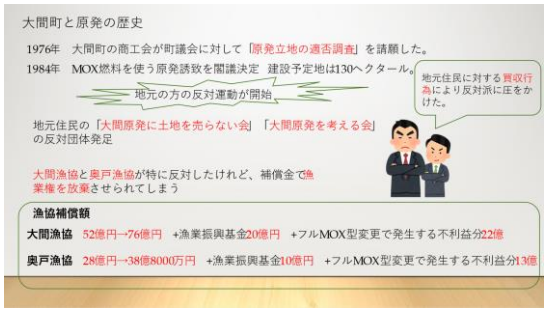
・2005年　東北電力第１号が稼働



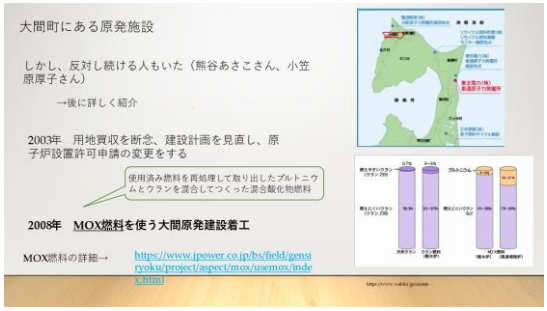
現在
実際は2号炉までしか計画されておらず、震災で1号機は停止/定期点検中、2号機は稼働が未定。

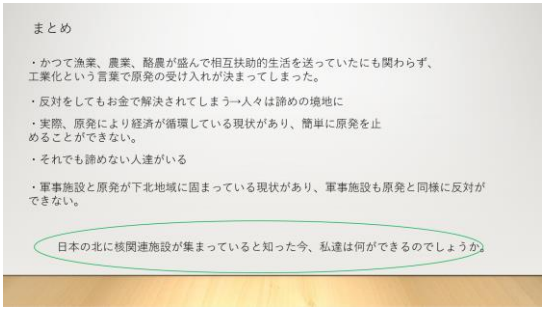
→今後どう使われるのか、最終処分場となるのか、土地の使い道は未定のまま

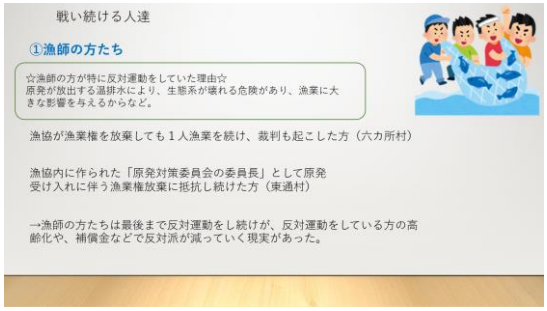
東通原子力発電所の詳細→ https://www.tohoku-epco.co.jp/electr/genshi/safety/higashi/introduction.html

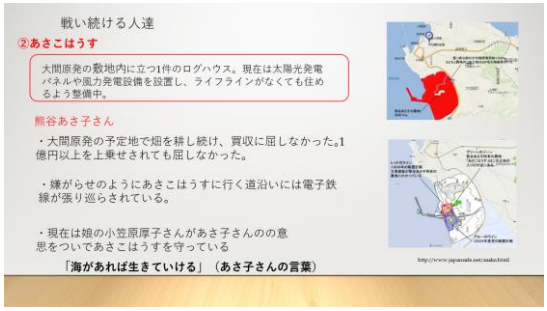


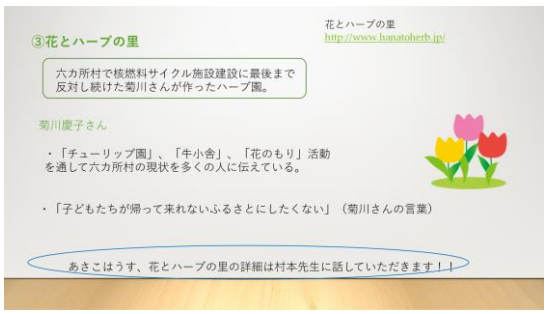












東日本家族応援プロジェクト in むつ
～本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を～

９年間のまとめ

むつプロジェクトについて

・毎年むつからこのプロジェクトがスタートする
・児童相談所職員や市役所職員など行政が中心

◆漫画展＆漫画トーク
◆お父さん応援セミナー
◆支援者支援セミナー
を毎年開催



漫画展＆漫画トーク～むつ市立図書館～

漫画展
「木陰の物語」
児童相談所に長く勤め、様々な家族問題を解決に導いてきた団先生が
実際に扱ったケースをもとに創作された漫画エッセー
パネル展では大きく拡大し、絵巻物の屏風のようにカラー化した作品を展示

漫画トーク
物語の描ききれなかったものや
あえて描かなかったものを
スライドショー マンガに併せてトーク



団先生：多くの人に見てもらうことが成功ではない
届いてほしい人に届くべき。少数でも構わない

来場者のアンケート
「漫画展示パネルはいろいろな自分の奥にしまってあった想いがインスパイアされるものでした」
「なんとなく見たのですが、引き込まれました。家族漫画ということで、昔風の道徳っぽい
ステレオタイプの内容かと思いきや、考えさせられる素敵なものが多く、おもしろかったです」
「先生の漫画を見るたびに温かく、せつなく、懐かしい思いになります。
このプロジェクトの精神が、見た者たちと、それを聞き伝えられた人に
永遠に活かされることを心から願っています」

**初めて来た方にも、リピーターの方にも
届いていると実感**


漫画展会場のむつ市立図書館

セミナーの三つの目的

①支援するー支援されるの関係を再考すること
②多職種連携の場とすること
③官民の連携を地域で可能にすること

対象： 児童相談所職員・保育士・看護師・教師
民生児童委員・子育てNPOスタッフ・福祉施設職員等

セミナーの内容

・ワークショップ形式で事例検討（地元むつの家族支援に関する事例）
→ほどよい家族支援とは何かを考える
・所属をバラバラにした小グループで検討
→多様な背景をもつ支援者同士で、知恵を出し合いながら
家族の力を引き出す支援のコツを学ぶ
・専門家に頼るだけでなく地域の力を活かす支援を考え る
→地域の人々が力を合わせて困難を抱える家族を支えるための
視点を共有してもらう

お父さん応援セミナー

子育て中のお父さんが元気になるお話しが満載
・日頃思っていること
・どこかにぶつけたいこと
・妻にも言えないこと
などなど、お父さんたちで語る企画

対象：子育て中のお父さん
イクメン予備軍
男性に限る



2019年チラシ

プロジェクト開始当初
参加型のセミナーに戸惑いを見せる参加者も多かった

現在
継続参加者も増え、議論の時間が足りなくなるほど意欲的な参加者も多い

**むつの家族や地域の強みが
少しずつ具体的に見えるようになった**

2012年 むつスタッフより
「このようなイベントを教育委員会、児童相談所、公民館、
図書館が一緒に　なってやるのは初めてだったが、むつの支援者たちが、
このようにネットワークし、むつの家族のために力を合わせることができれば、
10年後にはむつの家族が幸せになっているのではないか」

楽しい子育てをする小さなアイディアを伝えたい
（お父さんのコミュニケーション教育）

**お父さんたちはよく頑張っている！
あと一息変われば社会は良くなる！
男たちが変われば社会が変わる！！**


毎年参加してくれる常連さん
家族でのコミュニケーションを改善したくて来た人
何をするのかと困惑気味に参加した人など
多様な層が地域から毎回30人くらい参加


帰るときにはみんな笑顔

まとめ

◆むつの行政職員が中心のプロジェクト
普段の多忙な業務や人事異動もある中、毎年滞りなく実施されている

◆このプロジェクトで毎年顔を合わせて参加者が仲良くなり
むつの支援者同士をプロジェクトが繋いでいる（多職種連携）

◆むつ市と立命館大学の協働によって続けられてきたプロジェクト
外部と連携することで生まれる新しい視点・発想

◆立命館大学にとっても大きな意味がある

支援者支援セミナー

1年目のセミナーで
むつの支援者の課題をあげてもらった
↓
多職種連携が不十分との声
地域の多職種で一緒になって事例を検討する
ワークショップをしてはと示唆したところ
2年目からさっそくその形式を取り入れてくれた

その柔軟な対応力がむつの力


昨年のセミナーの様子

いつものフィールドワーク代わりに、過去のフィールドワークから私が下北のことを、博士後期課程の河野暁子さんが恐山のことを紹介した。

下北半島フィールドワークから

村本　邦子

◦大間原発のフェンスが続き、入口は非常にわかりにくく、入り口付近には、守衛と監視カメラがあって圧迫感あり。有刺鉄線に囲まれた細い草道を通ってたどり着く。

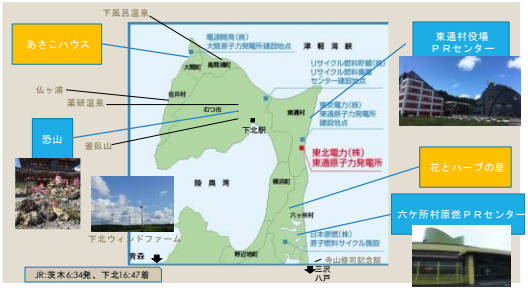
◦あさこハウスは、季節の花が咲き乱れ、山羊や犬がいて、メルヘンチックな雰囲気である。気持ち良い気候、庭でコーヒーを頂きながら話を聴く。

◦大間の街中に母の実家があって、ここと半々行き来して暮らしている。ふだんは草むしりしたり動物たちの世話をしたりと、自然を大切に生活することがテーマ。運動の部分は少しで、訪ねてくる人もそう多くはない。

◦自分は15歳で大間を出たので、母がやってきたことについてまったく知らなかった。狂言強盗事件があって、刑事事件として大々的に報じられ、初めて知った。157名の地権者がいたが、「そんな変なものを海に流してはいかん、豊かな大間を守らなければいけない」と母だけが売らなかった。外からも内からも四方から圧力あったが、「どれだけこの海と自然が大事か。いつかわかるべ」と言っていた。





◦そこから亡くなるまでの4年、母を助けるようになった。68歳だった。本人はまだまだ生きるつもりで、何も聞いていなかった。「母ならどうしたかな」と考えながらやっている。母はなんでも自分でする人で、この家も自分で作った。

◦娘と決めて、町長選にも出た。反対している人もいるという意思表示をしたかった。葉書を送ろうという方法を考えたのも娘。今、29歳で、今は自分のことをしたいと、東京でフリーターをやっている。

◦明るくパワフルで自然体の厚子さんに、どこからそんな力が沸いてくるのか尋ねると、「守りたいものがある。大間の自然、大事な人。その気持ちが人よりちょっと強いのかもしれない」という答えが返ってきた。

◦原発の作業員が一日何度か巡回に来る。車でやってきては、何か測定している様子（そぶり）だった。原発の建屋はすぐそこにあり、作業員はいても、原発工事はストップしたままだ。










花とハーブの里
菊川慶子さん

鎌仲ひとみ監督　2006）

「六ケ所村ラプソディー」

2004年、六ケ所村に、原発で使った燃料からプルトニウムを取り出す再処理工場ができた。この工場の風下には農業地帯が広がっていた。賛成・反対・中立の立場の人々を取材。イギリスのセラフィールド再処理工場で、日常的に放出される放射性物質の影響についても取材。

菊川恵子さんは、毎年、チューリップ祭りを開催し、隣接の農家たちと一緒に、再処理計画への反対運動を続けていた



◦2018年8月、菊川さんを訪ね、宿泊した。薪ストーブの火を入れ、土地のものを頂きながら、お話を聞いた。

◦両親はサハリンからの引揚者 子どもの頃 このあたりは原野で 開拓して畑にしてきた 集団就職でいったん県外に出たが 核燃のことがあって帰ってきた 最初は周囲から変なことしているという眼で見られていたが チューリップ祭りを始めてから受け入れてもらえるようになった2011年が最後になった

◦1998年、2014年村長選、2015年村議選（無党派）にも出た。可能性はいくらでもある土地なのに選挙のたびに多額の裏金が動く日本だけが世界に逆行して どう見ても長くは続かない

◦https://iwj.co.jp/wj/open/archives/336179（IWJ取材）

◦現在は、WWOOF（World-Wide Opportunities on Organic Farm）有機農法の農業体験ボランティアの受け入れをしているもともと、自分で食べるものは自分で作りたいと畑を借りて、子どもたちと無農薬でやっていた世界中からWWOOFERがやってきて長期滞在をするおもしろい出会いもたくさんある ここにきて初めて六ケ所のことを知る若者も多い

◦「六ケ所村ラプソディー」の後、震災の後、お客があまりに増え、疲れ果てもともと市民活動などしようと思ったこともなかった。ふつうに自分の暮らしをしたいと思っているだけなのに、こんなことになってしまった。本当は一人の時間が好きなのに、忙しくてなかなか一人になれない。もっと優雅に自分の時間を生きたかった」と静かにため息。



原発は日本全国にあり、下北や福島だけの話ではない。

高橋（2012）『犠牲のシステム　福島・沖縄』集英社新書

犠牲のシステム

一人ひとりが考えるべき責任

2020年8月26日現在4基（九州電力玄海3・4号機、関西電力大飯4号機と高浜原発3・4号機）が稼働。（大飯3号機、四国電力伊方3号機は定期検査で停止中。高浜3号機と川内1・2号機は、テロ対策で原発に審査付けられた特定重大事故等対処施設の建設遅れで停止）

原発は大量の冷却水が必要で、海岸沿いに建てられている。北海道3基、東北14基、関東甲信越8基、東海5基、北陸15基、中国2、四国3、九州6、計57基。

子どもたちの未来へ<311被災者支援と国際協力>　2020.8.2朝日
https://digital.asahi.com/articles/ASN8264JSN82UTIL02M.html?rm=772

あさこハウス
小笠原厚子さん

熊谷あさこさんは、大間原発の用地買収を担み、たった一人で闘い続けた、ログハウスを建てたところで、2006年急死。現在は、娘の小笠原厚子さんが、意思を引き継ぎ、あさこハウスを守っている。厚子さん自身も、2017年、不慮の事故で大怪我をしている。



おわりに

■暮らしのなかに思想があり、その延長線上にごく自然な行動がある。

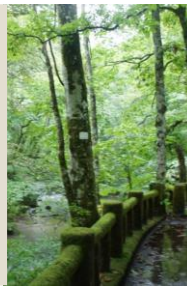
メアリー・スタモス（スリーマイル・アイランド・アラート）

普通の母親や父親が原子力に関する専門家になる必要はない。本当に必要なのは「人間として持たなければならない当たり前の常識」だけである。まさしくそれは原子力を厳進としている人々に欠けていることです。

■藍原（2020）「グローバルとパクシャとフクシマをつなぐ」後藤編著『21世紀の新しい社会運動とアクシオ 八明社

311後、福島では住民の多様なコモンズ（共有地）が次々に奪われた。地域の言論空間は「風評被害」で台頭するヘイトと委縮と疲弊がある。これは、「放射能による<公共圏>の収奪」である。フランス、マーシャル、ウェールズ、ベトナム、スリーマイルで抵抗を続けている人々とグローバルネットワークは、「連帯の公共圏」を広げる営み。

ご清聴ありがとうございました



東日本・家族応援プロジェクト in むつ2020
2020年8月28日

恐山と口寄せ文化

立命館大学大学院人間科学研究科
博士課程後期課程
河野暁子



三陸と恐山

■亡くなった家族が夢の中で
「これからは恐山にいるね」

■大漁祈願
春になると漁師たちが

■先祖供養
農作業の終わった 6月頃から
家族や団体で続々と

南直哉(2012)「恐山　死者のいる場所」新潮新書



恐山

■およそ1200年前、慈覚大師円仁によって開かれた霊場
■宇曽利湖を中心に八峰（釜伏山、大尽山 …）：八葉の蓮華
■火山ガスの噴出する岩肌：地獄
■湖をとりまく白浜：極楽
■信仰と祈りの場
■「死ねばお山に行く」

肉親の菩提を弔い、故人の面影を偲ぶ多くの人が、今もお山をめざします。そんな思いを柔らかく受け止められるよう、　恐山は今後も在り続けるのです。

霊場恐山パンフレット

東日本大震災と恐山

■ 恐山は直接の被害を受けたわけではないが 、ある意味当事者だった。恐山の最も熱心な信者が住む地域が 、被災地域全域だった。
■ 震災直後から、開山（5月1日）と同時に犠牲者の位牌を設置できるよう準備を始めた 。被災地からの参拝は無理だろうが 、全国からの参拝者に掌を合わせてもらえるよう 、大型の卒塔婆を建立することにした。
■ 開山初日から被災者は来た 。6月の団体バスはほとんど仮設住宅に住む人だった。

南直哉(2012)「恐山　死者のいる場所」新潮新書

「山と死者」の関係

■個々の死者のために墓を建てるようになったのは、日清戦争(1894~1895年)以降で、それ以前は、亡骸は山へ還された
■盆に山から祖霊を迎える風習が多く残っている
■山の火祭り、盆の草刈り、盆路作り

柳田國男(1949)「魂の行くえ」

■日本人の死後の観念：
霊は永久にこの国土に留まって、そう遠方へは行かない

柳田國男(1946)「先祖の話」

恐山（2019年夏）

40代~70代くらいの男女数名で供養塔にお供えをし、「〇〇ちゃんは高3だね」「△△は小4か」と話す。
供養塔の裏に回り、供えられている風車と石を眺め、「男の子と女の子だ」「うちと一緒だ」「おらいぇの分もやってくれてるな」とほほ笑み、飴玉を供えていく。



恐山



東日本大震災以降の恐山



東日本大震災供養塔
（2012年建立）



恐山



恐山（2019年夏）

70代くらいの女性 4人。供養塔の裏にある手形に手を当てて 「お父さん、ようやく来たよ」「がんばってるからね 」と泣きながら声をかける。宇曽利湖に向かって 「お父さーん」と魂呼びをする 。終えると 、「名前呼んだ ？」「名前で呼んだことないから 、呼ばねぇ」「心の中で呼んだ」と、くすくす笑いながら去る 。





イタコの口寄せ

- 死者の霊をおろす
- 年2回
（夏の恐山大祭と秋詣り）
- テント小屋が２～３個
- 小屋の奥にイタコ
- 希望者がずらりと並ぶ
- 他の人の口寄せを周りも聞いている



恐山のイタコ



むつ来さまい館展示より

口寄せ

■東北には、イタコ・ゴミソ・カミサン等々と呼ばれるシャーマン的職能者がかつて多く存在し、病気や生業の相談、死者の霊を呼び寄せる口寄せが行われてきていた。

佐々木宏幹(1984)「シャーマニズムの人類学」弘文堂

■宮城県においては、葬式の後、遺族の女性たちを中心に、かつてはオカミサンと呼ばれる巫女を家に呼び、「口寄せ」という、死者が巫女に憑いて遺族に語る儀礼を行なっていた。

川島秀一(2018)「災害死者の供養と伝承」　高倉浩樹・山口睦編『震災後の地域文化と被災者の民族誌　フィールド災害人文学の構築』新泉社

口寄せの流れ

口寄せの流れ

・故人の確認
・念仏など
・死者の語り
・念仏など
・死者が帰る

「呼んでくれてありがとう」
「会いたいと思ってくれた気持ちがうれしい」
「自分でもまさかこんなあっけないと思わなかった」
「おかげさまで、今は元気な頃の身体に戻っているよ」
「見守っているからね」
「何か聞きたいことある？」

口寄せ研究

■柳田國男(1913)「巫女考」
①神社に属する者　②神や死者の言葉を仲介する者
■「オシラサマ信仰」→大正～昭和期に研究が盛んに
巫女がオシラサマを奉祀　「オシラアソバセ」
■シャーマニズム研究として（佐々木宏幹 …）
■社会的存在としての巫女：「民間の知」（川村邦光 …）
■精神医学的視点（藤井博英…）
■恐山のイタコ→メディアの影響（1960年代～）

大道晴香(2017)「「イタコ」の誕生　マスメディアと宗教文化」弘文堂

東日本大震災と口寄せ

■ 夫を亡くした女性

最初にオガミサマを訪ねた時、「男の人も一緒に入ってきたよ。心配でしょうがないって」と言われ、夫だと思った。

■ 娘が行方不明の女性

何人もの遺族と同時に会うオガミサマ。女性がなぜ娘が出てこないのか尋ねると、「顔に傷がついているから見せられないけど、いつもそばで見ている」とオガミサマが言う。「いつも隣にいるんだったら、父ちゃんとさっぱりいいことできねぇちゃろか」と言って、みんなで泣き笑いする。

奥野修司(2017)「魂でもいいから、そばにいて　3・11後の霊体験を聞く」新潮社

東日本大震災と口寄せ

■ 妻が行方不明の男性

恐山のイタコに「何かに挟まれて身動きできない。探さなくてもいい」と言われたが、諦めきれずに捜索を続け、震災から7年9ヵ月経って妻の遺骨が見つかった。

（朝日新聞, 2019.3.12）

■ 夫が亡くなった女性

震災以降、年に一回弘前市のイタコを訪ね、夫と話すのを楽しみにしている。一昨年の口寄せで夫が自分の名前を呼び間違えたので、自分を忘れてしまったのかと思い、去年は口寄せを頼まなかった。今年の口寄せで夫が名前を呼び「なんぼ仏になっても、お前を忘れることない」と言った。夫の気持ちを確かめられた。

（NHK仙台, 2019.2.23）

死者論

■私たちは、ときに触れ得るかと思うほど、死者が近くにいるのを感じることがある
■死者からの呼びかけを「聞く」こともある
■五感に訴えるものに世界を限定した科学が支配する現代においては、死者の実在を信じることは難しい
■一方で、五感を超える何かがあることを、強く感じている
■私たちが死者との関係を否定しなければならない理由はどこにもない

若松英輔(2012)「魂にふれる　大震災と、生きている死者」トランスビュー

三陸の死生観

■明治29年(1896年)、昭和8年(1933年)の大津波
→わずかな生存者だけで、村のほとんどの人が亡くなる

■「板子一枚下は地獄」→船乗りの危険

■海辺の村々　→家族を海で亡くしている人多い

海で生きる⇒死というものが近い

鷲田清一・赤坂憲雄（2012）「東北の震災と想像力－　われわれは何を負わされたのか」講談社

まとめ

■「災害→心のケア、グリーフケア」と支援者はケアしたがる
⇒その土地の悼み方、弔い方、作法があるはず

■共時的な死者と生者
実存する死者との紡ぎなおし ⇒西洋との違い

■災害をくり返し経験してきた地域 ⇒困難を乗り越える土着の知



2020 年 8 月 28 日(金)午後「支援者支援セミナーを振り返る」

午後は中村さんがファシリテーターとなり、これまでの支援者支援セミナーを振り返り、今後を見据えて、これまでの成果や課題を確認するセッションとした。現地からは、むつ市児童相談所の杉浦さんと高木さん、むつ市子育て支援課の半澤さんと藤田さんが、立命館からは、中村、村本の他、修了生の真鍋さん、神山さん、野池さんが登壇する形を取り、プロジェクトメンバーが参加した。

初めに中村さんがセミナーを振り返り、ポイントを確認した。

「公的な仕事を持った人、保健師さん、学校、幼稚園、保育園の先生、就労支援に関わる人、弁護士など、子育て支援や家族支援に関わるのある人たちなど、多様な職種が集まってグループディスカッションをしてきた。公的機関は虐待として捕捉してくる可能性が高いが、実際には子育て支援として、民生委員や保護司や裁判員など市民参加があらゆるヒューマンサービスにつきまとう。プラスもあればマイナスもあるが、地域に行けば行くほど、こういう人たちの力量アップが必要になってくる。援助援助していない日常的に関われる人たちを重視する。

このセミナーの特徴は、事例検討としてやっていること。通常の事例検討はおもしろくない。発表する人が緊張して、いろいろ言われて神経をすり減らすものだが、楽しい事例検討会を工夫している。いろんなことが話し合われることが重要。

毎年、ひとつかふたつ事例を出してもらい、ジェノグラムを書きながら、時間経過に伴う家族の動態がわかるようにする。地域でやっているのでエコマップも重視する。そこには支援者も当事者として登場する。公的機関は、ある種の権力を持って入ってくる。家族システム論に支えられながら、やや構造化して捉えることになっている。さらにジェンダーの話も出てくる。概念の紹介もする。目指すべきは地域の力、場の力、多職種連携。役に立つというより、やってよかった事例検討会。

どんな事例を出すかを地元で練ってもらい、杉浦さんが調整してくれ、事例提供者と対話しながら、ディスカッションをしてもらう流れ。グループワークが重要で、一方的に話をしない、評価しない、傾聴するなど、対話しながら協働する。主役はむつの家族。そこでは院生も重要な役割を果たしている。グループに入り、若い院生は息子や娘のポジションになり、社会人は他職種の視点を持ち込んで貢献してもらった。」



次に、杉浦さんが、現地から見たセミナーの意味を話してくれた。

「このセミナーは復興支援を目的とした立命館の取り組みの一環として始まった。2011 年、団先生に、『こんな時だからこそ漫画展やりませんか』と個人的なメールをしたことをきっかけに、村本先生から『せっかくだから漫画展プラスα、いろいろやろうよ。何して欲しい？』と思いがけない話を頂き、その勢いに圧倒されて、それならば、児童相談所職員という立場としての私を含めた子育て支援、家族支援に関わる人たちを元気にするセミナーをとオーダーした。10 年やるよという言葉にのせられて、続けてこれただけでも感無量。

むつは被災地ではなく、関係者たちに、『どうしてむつなの？』と聞かれ、毎回説明するのも面倒になってきた。むつの開催趣旨として、『災害に限らず誰にでも起こりうる家族の災難を乗り越える地域の家族力の向上』というところに視点を置き、毎年人事異動で人が変わるたびに、上司や関係機関に説明してきた歴史がある。

効果を問われてもなかなか回答は難しいものだったが、プロジェクト全体に言えることとして、毎年最初の開催地として開幕のテープを切ることで、その後に続く被災各県で開催することを牽引する役割を担ってきたのかなと感じている。サブタイトルにつけた『本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を』もそういう意味。

あらためて現地から見たセミナーの意味を考えてみると、地域で暮らす家族に寄り添う支援者が連携するネットワークを育むこと。単発の研修で終わるのでなく、長期にわたって継続してきたからこそ言えることである。連携というキーワードはよく出てくるが、個人情報の保護などと言って、連携が図りにくい時代になってきている。面倒なことに関わりたくないという時代で、関係機関も隣は何をする人ぞという状況。

児童虐待等の事件が起きるたびに、関わった支援機関や担当者が批判にさらされる。後になってから、そう言えばあの時という情報が報道される。一生懸命な支援者ほどショックは致命的。セミナーでこの地域の実際の事例を取り上げることで、地域の問題に気づいてもらい、もし自分が関わっていたら、地域でどう関われるのか、私たちの地域にどんな社会資源があるだろうかなど考えてもらう機会になったと思う。

グループワークをすることで、当事者感覚で考える機会が得られ、自然と顔の見えるネットワークができるということも期待できた。地域の社会資源をいかすには、地域で関わっている関係機関を知らなければならない。最初の頃は、民生委員、保健師、教師、保育士といった子育てに関わる支援者が集まっていたが、子どもの問題を取り扱う家族のなかに障害者やメンタルな問題が出てくると、さらに多職種の連携が必要となり、おのずと関係職種が拡がっていった。

2015 年には、障がい者生活就労支援センターから事例が出た。この時一番喜んだの

は事例提供者の職員で、以来、この事業所からは毎年数名の職員がセミナーに派遣されてくる。セミナーで本当の地域支援ネットワークを体験したと言う。障がい者の支援ネットワークが拡がらない根底には地域の障がい者への理解が乏しいためだと嘆いていた。地域の支援者たちがそれぞれの立場で隣人を理解して寄り添う。そんな地域になったらいいなと。そんなことが見えてきた矢先にコロナで足踏みすることになったのは残念。

育むという意味で、終わらせてはいけないと思う。事例のほとんどが、むつ市の要保護児童対策地域協議会で取り扱ってきた事例なので、事例提供してきた方々からも話してもらう。最善と考えることをやってきたが、セミナーで検討すると、また新しい視点がある。苦しさも再現されるが、セミナーで『よくやっている』と評価してもらうことで救われることもある。やって当たり前、評価されることのない仕事なので、励みとなった。」

次に子育て支援課の藤田さんから。

「提供してきた事例は、参加者が身近なものと感じられるよう、地域の支援機関が関わった事例を意識してきた。取り上げてきた事例は、ひとり親家庭、親が精神疾患、知的障害、経済的困難、支援者がないなど、課題が複合するなかで子育てしている家庭をとりあげてきたことに気づく。ふだん関わるのはこのような事例がほとんどである。だからこそ、地域との支援機関との関わりが欠かせない。それぞれの知恵を出しながら考えていく。回を重ねていくことで、地域にはいろいろな支援機関があること、地域力が向上していることを感じる。」

それから、子育て支援課の半澤さん。

「3 年前にこちらに来て、子育て支援が何かもよくわからないままで、当日まで参加するつもりはなかったが、事例担当者ということでひっぱりだされてマイクを持たされた。いろんな事例検討会に参加はしていたが、自分でマイクを持つことはなかったので、いつもと違った。事例で説明したことから、みなさんがグループで話し合うのを見るなかで、他の人の意見を通して自分のことにも気づく。

ニュースに出てくるのは遠い話だと思うかもしれないが、むつ市の事例を取り上げることで真剣に考えてもらえる。こんな濃いケースが田舎のむつ市にあるんだと知ってもらうことも、こういう機会でなければなかったし、むつ市独自の目線で、独自な支援が見えたと思う。事例を出すのは大変だが、得られるものも大きかったと思っている。

実際に関わっているケースでは、各機関の思いがぶつかるので、怒りがぶつけられることもあるが、事例検討として客観的に見てもらえると、『大変だったね』とねぎらってもらったり、『むつの力すごいね』と言ってもらって、そんなこと思ったこともなかったので驚いた。

1 年目、会場に支援者がびっしりいるのを見て、むつにはこんなに支援者がいるんだと思えたことも大きかった。直接的支援者だけでなく、母にメンタルな問題があるとなると、さらに関係者が拡がっていく。いろんなケースでこんな参加者がいる、こんな支援者もいるんだよと知る良い機会だっ

たと思う。」

続いて、立命館の修了生たちが話した。一番バッターは真鍋さん。

「2014~2016 年にむつのプロジェクトに参加し、現在は、きょうと NPO センターで市民活動の間接支援をしている。NPO の基盤強化とともに、行政や企業と対等なパートナーシップを築くための環境整備。京都市の市民活動総合センターで、市民活動をしている人々への相談機能やコンサルティング、サポーターの派遣などもしている。

振り返りながら、今やっている仕事とのつながりを考えてみた。むつのなかで活動している多職種の支援者が一同に会してディスカッションすることに、当時は難しさを感じていた。それぞれ視点が違い、どうまとめたらいいのか。今の仕事でも、どこでもそれは見られて、だからこそ違う視点をどう総合していけるのか、地域の力、場の力をどう引き出していけるのかが問われる。『NPO は借り物競争だ』と言われるが、どこに地域資源があるのか、うまく借りていくことが重要。地域の資源をエコマップにして、地域の力をうまく結集させてよりよい結果を出す。

院生としてホワイトボードでビジュアル化したり、グループワークに入ってファシリテートするのだが、M1 で知識もスキルもないなかで不安に感じながら参加していたが、何も知らない青臭いやつが入ることが大事だったと思う。支援に従事している人だけだと、前提が思い込みでずれていく。中村先生から『息子として入る』とあったが、地域の支援者たちが、息子に教えるように言葉が柔らかくなったり、丁寧に説明してくれる。そんな役割を演じることも、実際の現場で経験できてよかったし、今につながっていると思う。」

次に昨年参加した神山さん。

「神経内科、脳外科で看護師を経験して、大学院に入る 1 年前から精神科病院で働き出した。現在、精神科デイケアにも行き、リワークなどにも関わっている。ボランティアや災害支援の経験はなく、仕事としてただただやってきた。多職種連携ということに興味を持って、むつのプロジェクトに参加した。

セミナーでは、グループに分かれて多職種で話したが、その立場だからこそ見えてくることがあり、勉強になった。セミナーのやり方がリスクアプローチでなく、良い部分を引き出していこうとなっていたことが今の仕事にも参考になる。リスクだけに眼がいきがちだが、そこで学んだことである。

セミナーが終わってドライブした時に、関係者と話していて、支援していた方の玄関に雪が積もって入れなかった話を聞き、支援するにも土地ならではの特徴ややり方があり、土地を知ること大事なのだと思った。何も知らない自分たち院生で大丈夫かという不安はあったが、その土地の者ではない私たちが入ることで、そこで当たり前のことが新鮮だったりするので、いいのではないかと思った。

職場では、多職種連携を言っても、実際には縦割りで、眼に見える形で連携が想像できないことが多いが、実際には見えないところでもつながっていることもあり、そういうことが想像できるようになるといい。見える範囲だけでなく、支援者がいること

を想像しながら関わることも大事だと思った。」

最後に、一期生の野池さん。

「京都で町づくりに関わり、後方支援の仕事をしている。震災当時はきょうと NPO センターで働いており、阪神大震災を経験した後に NPO 支援センターを作っていたので、2011 年の時には、そういう経験をいかせたらと、現地にボランティアを京都から派遣する災害ボランティアセンターをやった。公的にはできない支援、たとえば、アレルギーやペットなどの問題も各 NPO と連携し、京都に避難してきた人々の受け入れや支援の仕事もした。離れているからできることをと、このプロジェクトの話を聞き、当時は資金的な支援をしてた。京都や関西で今を伝える意味で漫画展もやった。

当時は人を送っていたが、間接的、後方的支援に関わるなかで、もっとお金の支援ができるのではないか、お金も大切なことだと気づき、今は、クラウドファンディングを使った経営を支える資金調達をしている。震災を経て、思いを持った人たちがたくさんいることがわかり、一人ひとりが少しでもお金を束ねて資金として提供する事業である。宮城県でコミュニティ財団法人の設立の支援をし、795 のプロジェクトで 16 億円を寄付する寄付型投資を行った。地域のなかで支えあうお金を出すことも大事ではないかと思う。

応用人間科学研究科の一期生なので、当時は卒後十年目、十周年記念で校友会役員として応援したが、現在、学校法人立命館の RIMIX にも関わっている。立命館が東日本やコロナで学んだことを社会に活かすプラットフォームにも関わっている。」



下北でも子育て支援は続き、立命館でも支援者支援は続く。私たちは危機とともに生きていくしかない。院生たちもむつの取り組みから学んだことを、それぞれの人生に活かしている。ひととおり発言したところで、中村さんが、「十年間取り組み、経験の言語化を行った。来年度以降どうするのか？」と問いかけた。

今年度初めてのむつ市児童相談所の高木さんは、「昨年まで中核市として人口の多い八戸児童相談所にいた。むつは、支援できる場所や機関がどうしても少ないので、地域の力をいかさなければ大変だと感じていたところだった。こういう形で顔を合わせることで、ここにこの人がいると共有できる場だったのだろうなと想像する。今後も続けていけたらと思うし、この取り組みを他の児童相談所にも共有できたらいいのかな」と言った。

杉浦さんは、「今年で退くことになっているので、来年以降が気がかり。今日の話を聞いて、あらためて地域で続けていく価値が

すごくあると確認し、ここで終わりにしたくない。形を変えてでも、育む活動は続けていけるはず。コロナで来年できるという確証はなく、むつのリモート環境が整っていくとできるのか、どういう形でなら続けていけるのか見えないところもあるが、とにかく続けたい。」とのこと。

藤田さんも半澤さんも、院生たちの話をあらためて聞いて、新鮮だったという。民生委員のおせっかいな言葉を院生たちが受け留めていることに感動したし、大学で学んだことを社会に出ても続けていることに感心し、これからも頑張って欲しいと励ましがあった。

団さんからは、このセミナーと自分自身がずっとやってきた家族理解ワークショップが相似形であることを前提に、「人も状況も変わっていくが、大事なことは持続させることである。それには、継続のための意志が必要。そこには予算も含まれる。弘前では参加者負担で 20 年やってきたが、退職したからと言って参加できなくなるわけではない。自分が地域住民としてどこに使命を感じるかはその人に属する。支援者支援というのは、必要な時に誰かに助けてもらえるということ。大きな予算を組まないとできないことはなしにして。むつで十年続いた。すでにある。一から立ち上げるより、ずっとやりやすい。意志があれば続けられる」とエールが送られた。

あらためてこのセミナーの意味を確認し、是非継続して欲しいと思う。

2020 年 8 月 28 日(金)午後「次年度プロジェクト企画委員会」

続いて、むつ市児童相談所の眞手さんを司会に、次年度プロジェクト企画委員会ということで、話し合いの場を持った。現地からは、むつ市児童相談所から眞手さん、杉浦さんを含む 3 名、むつ市子育て支援課から 2 名、むつ市 PTA 連合会長会長、むつ市立図書館から 1 名の計 7 名が、立命館からは教職員 4 名と、院生、修了生 9 名が参加した。

支援者支援セミナーについては、現地では、最終年もこれまでどおりにと話しているとのこと。関わってきた人たちから、十年続けてきて、やっただけの成果があったというので、方針として続けようと決めているが、どういう形で続けるのかは要検討。市役所（子育て支援課）からは、児童相談所とも相談しながら、要対協（要保護児童対策地域協議会）の組織を活用して継続できればいいのかなという案が出ている。緊急事例ではなく、一定、時間の経った事例を扱う方がいいと思うが、確認をすると、参加メンバーもこれまでとそれほど変わらないだろうとのこと。ファシリテーターを育てるような企画があれば、地域で継続していけるという声もあがった。

団さんから、「効果を示せと言われれば何とも言えないが、続いているということは意味があると思われているということである。どのような形で続けられるか、うまくいっていないこれまでの委員会の形に重ねるのではなく、この形でやっているものを続けることを考える方がいい。誰かによって行われるものではなく、みんなで続けるも

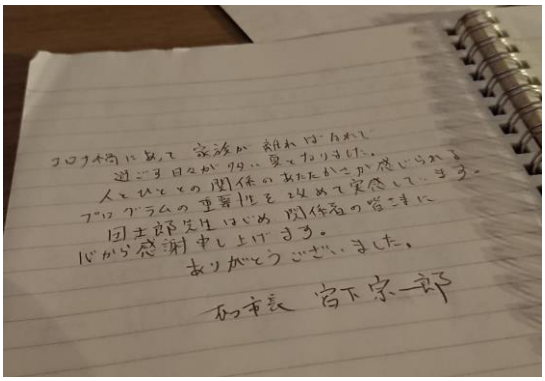
のに頑固にならないと何も生まれない」と助言があった。

お父さん応援セミナーについては、むつ市関係者たちから、「単にお父さん同士で話すより、中村先生の話を聞いて、そこから実際にやってみて体験することから何かが生まれていると思う。最初は、動員されてきた人や立場上やむを得ず参加する人もなかにはいるが、終わった後にはみんな笑顔で帰っていく。家族のことや自分のことを考えるきっかけになっている。会場での熱量もすごい。普段は話さないような見ず知らずの人とも話していると見ている。20 人から 30 人のお父さんでやっているが、今の形がすごくいい形だと思う。ひとつの問題点はどうやって興味を持ってもらって集まってもらうかということだけだと思う」とのことだった。

中村さんからは、「むつの男たちに通用するかなと思いながらやってみたが、結構ノリがいい。どちらかと言えば学校の先生たちは少し硬いかもしれない。気になっている点は、去年の参加者のなかに深刻な夫婦問題を抱えていた人がいた。京都や大阪では男性相談があるので、個別のニーズはそちらへことができるが、むつではそれができないので、男性問題として大きなテーマがあると感じている。来年が最後とすれば、来年は女性も含めてやってもいいのかなと考えている」とのことだった。

私からは、「是非、むつのなかからファシリテーターや男性相談やってみようというような人材が出てきて欲しい。これまで種をまいてきたものが、むつでどう育っていくのか。そのための支援はいくらでもします」と伝えた。

漫画展、漫画トークについては、十年以降も図書館で開催すると言ってもらっている。毎年評判がよく、今年も市長が来て、感謝の言葉とともにアンケートを書いてくれたとの報告。





団さんからは、「パネルはたくさんあるし、すべて見たと言う人は少ない。コンスタントにやってきたのがむつ。プロジェクトのひとつの形としてやれるだけやってもらえたらというのが作者としての希望。トークは ZOOM でもできる。コストかからないし、人を集めなければならないということもない。」

杉浦さんから、「来年のコロナ事情がわか

らないが、5 月の実行委員会の時点ではリモートの可能性など考えもつかなかったが、あらたな可能性も見えた。環境面も含めて検討していきたい」ということだった。

参加院生たちは、かなりのエネルギーを注いで事前学習をし、議論しながら準備していた。ある院生は、「今月はむつにまみれて青森漬け。楽しかった」と言っていた。そうやって調べたことを、直接現地の人々の声を聴くことで、自分の中に落とし込むことができたという。「やって当たり前のことが認められる」「むつにこんな力があったんだ」「十年間続けてこられて感無量」など、むつの声を直接聞き、「9 年の歴史があって今がある。普段の生活では気にしないことが、プロジェクトで地域について学ぶことで、自分の日常を考える。育ってきたセミナーなんだと実感した」という。

また、現役院生にとっては、修了生たちがプロジェクトの経験を現在につなげていることにも感銘を受け、M1 で何ができるのか不安に思っていたが、逆に知らないから活性化されるものがあるという話で自信が持てたようだ。



2020 年 8 月 29 日(土)午前「漫画トーク」

漫画展に関しては、今年も、むつ市立図書館にて、8 月 11 日（火）～8 月 30 日（日）に開催してもらった。





漫画トークは公募もしたので、むつ市と立命館の関係者以外にも 15 名ほどが申し込み、はじめて ZOOM で 31 名で行った。

今回は、来年展示予定の漫画「アースカラーの物語」「ソロ泊」の二点が紹介され、それぞれ感想を述べ合ってから、作者が思うことを述べるという形式をとった。通常は隣同士の 2～3 人でバズセッションをやっているが、ZOOM のブレイクアウトルームの機能を使って 2~3 人で語り合ってもらった。これはとても新鮮だったようである。今回の一般参加者は、これまでの継続参加者や、もともと団さんを知っている青森在住の人が多かったため、院生たちにとっては現地の人たちと直接触れ合う貴重な機会と

なった。

アンケートの感想には、「久々に団先生のお話を聞けて、元気なご様子をみることができて、参加できて良かったです。頭と気持ちが活性化する楽しい時間でした。」(50代、女性、5回以上)。「いつもの漫画トークが自宅に居て受けられる新鮮な感覚を楽しみながら参加できました。ご支援ありがとうございました。また、リモートだから参加できた人もいることから、こんな形も良いなあと思う反面、うちのグループで聞いた話や他のグループから出た話題等、同じ会場であれば、漏れ聞こえたり、共有できたかなあと思いました。参加者全員の顔や反応を間近に感じるには、やっぱりリアルトークだと思いました。」(60歳以上、女性、5回以上)。「回を重ねるごとに『へー、そうなんだぁ』から『うんうん、わかるわかる、そうだよね』になってきました。時代も、人も、そして自分も変わっていっているということを毎年この企画に参加することで実感しています。」(50代、男性、5回以上)。「Webだからこそ参加できました。また機会があれば参加したいです。」(40代、男性、初めて)など評判もよかった。





初めてリモートプロジェクトをやって

今年はコロナ禍により、院生たちを現地に連れていくことができず、現地の方々と一緒に交流することもできず、とても残念だったが、リモートならではの良さも発見することができた。プロジェクトの参加院生たちは、通常一ヶ所の現地に赴き、行ったメンバーの報告を聞いて学ぶという形をとってきたが、今回は、むつのチームメンバー以外の院生たちも参加することができた。ただ報告を聞くより、コミットできる参加となり、学びも深かったように思う。わずかではあったが、むつの方々のお顔とともに声を聴き、ブレイクアウトルームで短時間でも交流し、パソコン越しであっても生きた出会いができた。リモートであったからこそ、過去にプロジェクトに参加してくれた修了生たちも参加しやすく、先輩たちとの交流は院生たちの励みになったようだ。

もちろん、その土地に身を置き、人々と出会い、身体レベルで時空を共有することから得られるものには代え難いものがある。その分、「来年は是非むつに行きたい！」という声があがっている。来年は院生たちとともに訪れることができることを願う。

精神科医の思うこと㉕

女性の医師であること

松村　奈奈子

ちょっと前の話、小学５年生の女の子の診察をする事になって、担当の男性心理士さんがお部屋に連れてきてくれました。女の子は部屋に入るなり「あっ、女の先生でよかったー」と言い、「ん？なんでかな」と思いながら話を聞き始めると「お母さんに新しい恋人ができて、いつも夜になんかいやらしい声きこえんねん」「朝とか二人で裸でいるのん見てしもてん」「こんなん、男の先生には言えんかってん」「あー話してすっきりした」と一気に話します。「やさしい男の先生やけど、言えんかった？」と聞くと「うん、いい先生やけど男の人には言えん」と答えます。時代とともに、男だから女だからと意識する事も少なくなってきている気がしますが、無くなってしまうもんではないんやなぁと思います。

これまでも診察で「私が女性であるから」と意識させられた場面は何回もあります。なんで今回のテーマは「女性の医師であること」

異動で病院をかわるたびに、前の先生の患者さんを引き継ぐのですが、精神科医も男性が多いのでいつも前医は男性医師でした。異動してしばらくすると、精神科の外来担当の看護師さんから毎回、同じ話を聞きます。「前の男の先生の時はミニスカートで来ていたのにジーンズで来るようになった患者さんがいる」「きれいにお化粧してきていた患者さんが、すっぴんで来るようなった」「いやー意識してはったんやね」と看護師さんはみな笑って話します。

なんとなーく気持ちはわかります。異性の担当の先生にはやっぱ気に入ってもらいたいもんです。特に精神科は長くお話をしたり、通院はけっこう長期になったりと、他の科に比べて一緒にいる時間が長く、異性として意識しちゃう気持ちも起きてしまいますよね。

そして診察での変化は外観だけではありません。これまで男性医師には話さなかった家族など男性からの暴力や心理的虐待の話を、女性患者さんが始めるのも、よく体験します。長期の通院で、過去のカルテにはあまり夫への不満は書かれていなかったり、育った家族の事がほとんど語られていなっかったのに、医師交代後しばらくたった頃に「実は夫から殴られることが・・・」「実は自分の父親から昔に身体を触られて・・・」と精神科通院に至った核心の問題が語られ始めることがあります。みな口をそろえて「男の先生には言いにくかったから・・」といいます。女性の医師としてお話を聞けてよかったなぁと思いながらも、性別によって話せない事があるのだと実感します。

逆に、女性だから話しにくい話があるのも意識しています。

うつ病の男性患者さんから「先生は女だからわからないと思いますが、この薬飲んでから勃起してもイカないんですよー、ネットでみたら射精障害の副作用があるってあったんで薬を変えて下さい」なーんてさらっと言われた時は“ちゃんと不満を言ってくれてありがとう”という気持ちになります。もちろん「なるほど了解です。お薬変えてみましょう」と対応します。今までそんな副作用を言ってくれる人がいなかったので、大変勉強になりました。さらっと話す口調が、上手いなぁと思いました。

また、若い男性患者さんが初めての診察から数か月たった頃、ふと「話しておかなければならない話がある」と、中学時代のイジメで、同性の同級生から性的被害にあった事を話し始めました。「話しにくかったよね？話してくれてありがとう」「いや、これは先生には話しておかないといけないと思って」と言われた時も、一緒に治療をしてく思いが伝わって嬉しかったです。

患者さんと医師は「治療」を一緒にしていくパートナーであるので、本来は性別による対応の違いを持たないことが理想ではあります。しかし、現実は、なかなかそうはいかないケースも多いように思います。

もちろん、性被害など、逆に性別による配慮が必要である診察場面もあると思います。

話はちょっとそれますが、男・女による反応の違いの問題、こんな仕事をしてると意識しておかなくてはなーと思う場面があります。

先日、児童相談所で「家庭内暴力のおやじ」のケースを男女２人の担当者と話しているとき、「どんなお父さんですか？」と私がきくと男性スタッフは「僕らには丁寧に対応しはるんですよ」と話します。横にいた女性スタッフが「えっ、丁寧なんですか？」「私にはけっこう横柄な言葉使いなんですけど」と驚きます。それをきいた男性スタッフが「えっ、女性には横柄なんですか？」と驚く事に。いやー、スタッフの性別で対応を変える“おやじ”いますよねー。性別だけでなく年齢や肩書で対応を変えてくるパターンもありますよね。

だから一人で対応すると、人物像を誤って認識してしまう事もあります。

家庭内暴力での離婚で裁判となり、女性が精神科通院中の場合、女性側の弁護士が暴力による精神状態への影響について、経過の確認などに来られる事が時々あります。ある時、高齢の男性弁護士が被害女性の担当となり訪ねてきました。そして「相手の男性に会ったんですが、話も丁寧でそんな暴力をふるう感じはしなかったんですがねー」と笑って話します。“いやいやそんな奴が一番危ない男やん”と思い「女性に暴力的な男性は、性別によって対応が変わることが多い」と説明しましたが、弁護士は腑に落ちない様子でした。その後、女性患者さんもそんな視点の弁護士に腹が立ったようで、私が弁護士の変更を提案する前に、その男性弁護士をクビにして女性弁護士に頼みなおしていました。

性別で態度を変える事があるのは、こういう仕事をしているとちゃんと理解しておかなくてはいけないことだと思います。それは男性も女性も。

私は、できるだけ「女性だから話せないんです」という場面を作りたくないので、診察ではあまりフェミンな立ち振る舞いはしないし、服装もパンツにシャツといつもシンプルな外観にしています。でも、やっぱり患者さんは私を「女性の医師」として認識して話をします。だから、「女性だから話せない事」がある患者さんがいる事を意識しつつ、女性である自分ができる事は何かなぁと思いながら、いつも仕事をしています。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

「貧困時代」

僕が６歳ごろの話、世の中は戦後の貧困時代、日本画家だった父は家族６人が食べていくために、戦後ベビーブーム世代の子ども達が就学時に購入するランドセルをはじめとする学用品で、安価な学用品のカットイラストと言えども、人がコツコツと手で描いていた。

日本画家だった父の技術を見込んで、近所のカバン問屋さんがアルバイト仕事として学用品の絵付け仕事を依頼してくれたようでした。



※父が絵をつけるランドセルが山のように運びこまれていた

長屋の狭い我が家に大量の無地のランドセルやピンクや青いセルロイド製（引火しやすい）の筆箱が山のように積み上げられ、家族はそれら製品の谷間に埋もれるようにして寝起きしました。

父がこうした職人仕事をしている数年のあいだは、とりあえずひもじい思いをした記憶はありません。ですが、しばらくすると父はどうしても日本画を描く戦前の生活に戻りたかったようで、命綱の仕事を減らしたら４人の子どもをちゃんと食べさせられるのか不安になった母にずいぶん反対され、夜中に父の仕事場で物が壊れる音がする夫婦喧嘩もありました。

その時、子どもの僕は、好きな道で自分らしく生きるのって相当むずかしいんだなと大人のような感想を持ったのでした。

にワンポイントのキャラクターイラスト、たとえば男児用なら野球選手、女児用ならバレリーナなどが定番でしたが、これらのシンプルなキャラクター画を肌・コスチューム・髪・バットやシューズなどのパーツに分けて図案化し、ラッカー塗料を絵の具にして、面相筆で絵付けしていった。

まだイラストの印刷シールなど存在しない頃

やぶにらみ日記 （487）

東成区の昭和

（29）写生



やぶにらみ日記 （488）

東成区の昭和

（30）写生



やぶにらみ日記 （489）

東成区の昭和

（31）写生









やぶにらみ日記 （490）

東成区の昭和

（32）写生









やぶにらみ日記 （491）

東成区の昭和

（33）写生









やぶにらみ日記 （492）

東成区の昭和

（34）写生









やぶにらみ日記 （493）

東成区の昭和

（35）写生









やぶにらみ日記 （494）

東成区の昭和

（36）写生





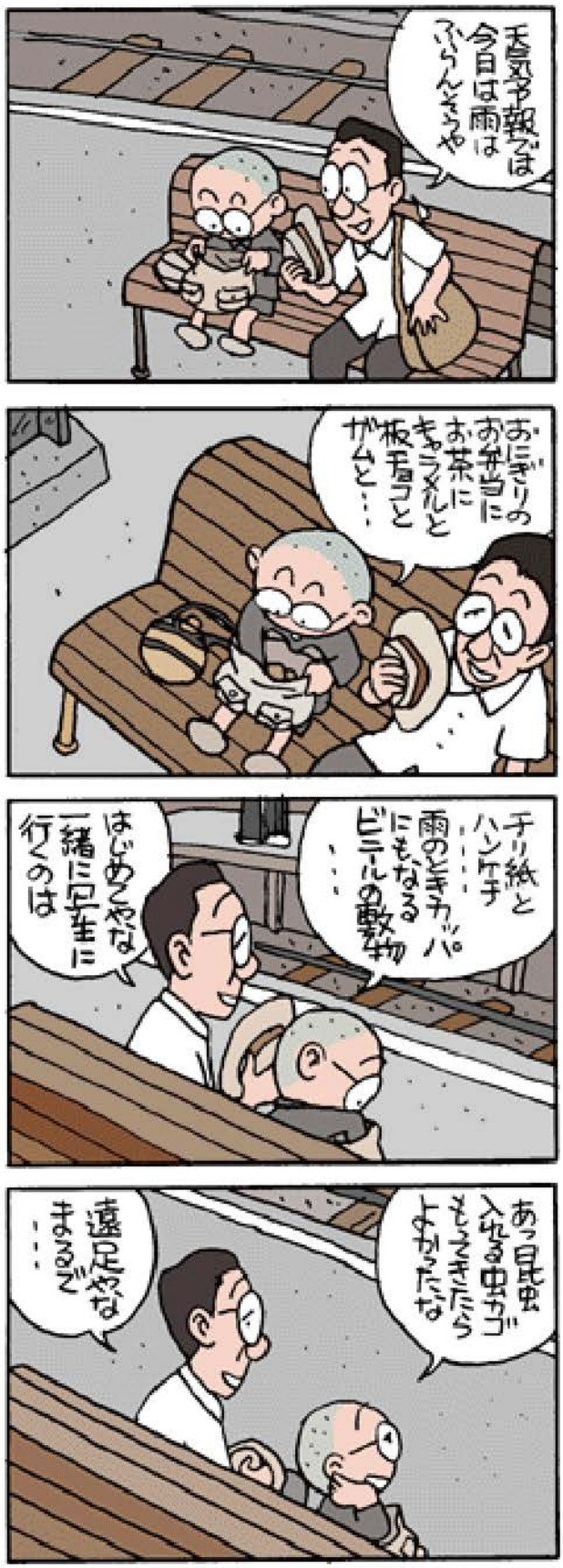




やぶにらみ日記 （495）

東成区の昭和

（37）写生



やぶにらみ日記 （496）

東成区の昭和

（38）写生



東成区の昭和

（ 39 ）写生



東成区の昭和

（ 40 ）写生



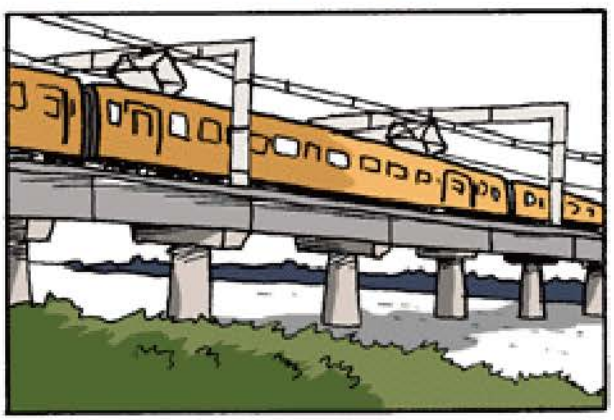
やぶにらみ日記 （499）

東成区の昭和

（41）写生









やぶにらみ日記 （500）

東成区の昭和

（42）写生









心理コーディネーターになるために Vol.7

山下桂永子

☆新年度の悩み



私が教育センターで心理指導員として働くようになって１年後に、教育相談員の予算大幅削減を受けて迎えた 2014 年度 4 月、早くも教育相談はピンチだった。前年度からの継続が決まっていた約 50 ケースを、相談員の枠が半分近くになった状態でどのように対応していくのか、かなり頭を悩ませていた。

教育センターの教育相談はほとんどが母子並行面接で、1 ケースにつき、親担当と子担当が必要になる。それぞれのニーズも、来れる日程も千差万別の 50 ケースに対して、曜日ごとに異なる週 1～2 日勤務の非常勤相談員がパズルのように担当のペアを決め、部屋を確保し、保護者に連絡して曜日と時間帯を決めていくことになる。これまで通りにやろうとすれば、途端に相談員の人数や相談枠が足りなくなる。年間 100 ケース来ることも想定されているのに、継続ケースすら始められない状況であった。

☆教育相談について一から伝える

まずは、このピンチの状況を上司と共有し、相談員たちとも協議する必要があったのだが、昨年度末、散々泣きながら議論した所長は１年で異動になり、教育センターでは、新年度に新所長を迎えていた。

教育委員会では、指導主事と呼ばれる方々が学校現場での教育活動の下支えや行政とのつなぎ役を担っており、私が勤務する市では大抵現場の先生が指導主事になった後に、管理職として現場に戻っていくことが多い。数年ごとに教育相談の管理職が変わり、教育相談について理解をしてもらうころには大抵異動してしまうので、予算を取ってくるどころか、削減の憂き目にあっても、行政に理解してもらう説明すらできない。そして年度末ぎりぎりに突然言い渡される異動に忙殺され、引継ぎも満足になされないことも多いのである。教育相談に関する引継ぎはおそらくこれまでの歴代所長もほぼなかったのかもしれない。



いや、それなりに引継ぎがあったとしても、学校での教育活動とは、動きが全く異なり、やったこともない行政的な仕事や教育相談のことなど、説明を受けても理解が追い付かず、きっと頭に入らないことだろうと思う。

学校現場においても、教育相談やスクールカウンセラーの認知度は、10 年近く前の当時は今より少なかったし、教育センターと連携したり、あるいは教育センターのカウンセラーと話をしたことがあるという先生もかなり少なかった。現場の先生方と教育センターの間で、教育相談やカウンセラーのイメージの共有がほぼできていなかったと言って過言ではない。

そして、それに関して、私含め、相談員たちも慣れきってしまっていた。数年ごとに一から説明するのも面倒で、説明をするのが誰かという相談員の中での立場や役割もはっきりしていない。「教育相談は今まで通り勝手にやってるから、そのうち見てたらわかってもらえるだろう、わからなかったら必要に応じて聞いてくるだろう、管理職は異動で代わっていっても私たちは変わらないのだから」と甘えていたのだと思う。上司とコミュニケーションを取って教育相談について理解してもらうということが、教育相談の存続にとって、そして心理職にとって重要なことだとは思ってもみなかった。

しかし私は昨年度から「心理指導員」という立場である。他の相談員のフォローやまとめ役をするようになり、教育相談についての実質的も運営を担っている。「つまりこれは私がやることなのだ、私が教育相談について伝えないといけないのだ」とここで気づいた。上司や現場とのコミュニケーションを取って教育相談についての理解を促す、そうやって教育相談のシステムを運営、発展させていくことが心理指導員の仕事なのだと思った。

☆新所長とのコミュニケーション

そういうわけで、新しい所長も相談員が削減されて、新年度の教育相談がまともに始められないなど知っているわけがない。昨日まで学校現場にいて、ほんの数日前に今日から所長ですと言われ、丁寧な引継ぎがあるわけでもないのに膨大な仕事を始めなければならないそんな中、4 月 1 日に殺気立った様子で「少しお時間いただけませんか、急ぎの大事なお話があります」と私に言われたわけだから、かなり怖かったと思う（あとで「怖かったよ～」と笑って言っておられた）。

そこで、昨年度までの経緯をできるだけ冷静に伝え、このままでは今年度の教育相談が始められないこと、教育相談についてまめに報告や相談をするので、会議などにも参加して、理解をしようとして頂きたいことなどをお願いした。新所長は戸惑いながらも「わかり



ました。急に何とかできるわけではないけれど、提案してくれたことは検討します」と言ってくださった。

☆関係性の引継ぎは難しい

話は変わるが、教育相談において、保護者の方の相談内容の中に「新年度の配慮をお願いしていたことが引き継がれていないので困っている」というものがある。状況を学校側にも聞いてみると、前担任が言い忘れたとか書かなかったとかそういうことではない（そういうこともないではないが）。新担任が引き継ぎ内容を忘れてしまったとか、たくさんの引継ぎ文書を読んでいないとかそういうことでもない（そういうこともないではないが）。

例え会議での口頭や文面で、子どもへの配慮が引き継がれていても、なにより、その子どもへの理解やそのお願いに至った経緯、保護者の思いが引き継がれていないのだなと感じている。そういったことがないままに、お願いした配慮の方法だけ伝えられて、新しい担任が同じことをしても、子どもとの関係性が昨年の担任とは違うのでうまくいかないことが多い。結果、次の年に「お願いした配慮が引き継がれていないのではないか」という保護者の不安になるのである。こういったこどもと先生、そして保護者と学校のすれ違いは増えてきているように感じる。

☆すれ違いはいつでもどこでも起きる

なぜこういったことが起こり、増えていると感じるのだろう。それは昨今のコロナ禍や貧困、虐待などが問題となっている社会状況において、学校と保護者、担任と子どものコミュニケーションの不足がすれ違いを起こしているのではないか。いや、コロナ禍のせいというよりも、コミュニケーションの不足が引き起こす、関係性の弱さや思いのすれ違いが、目立ってきているというべきか。

今のこどもも親も先生もとにかく忙しい。こどもとコミュニケーションを取っていると言う保護者や先生によくよく話を聴いてみたところ、コミュニケーションを取っているつもりでも、ただの指示や業務連絡になっていたり、予定の確認ややることに追われて、どうでもいい話の中での感情の共有ややりとりができていなかったりする。

同じことが 10 年近く前に、自分の身にも起きていたのかもしれないと思う。上司とコミュニケーションが取れておらず、教育相談について言葉を尽くして伝えて理解を求めるという努力をしてこないままにきた結果、教育相談のシステムや運営が引き継がれなかった。

その反省から、ここ数年は、相談員の方々と日頃から問題意識を共有しておくようにして、そのときそのときのアイディアや今後の方向性をまとめ、面接回数などの数字のデータを添えて文書に残し、上司と話をするときにすぐに渡せるようにしている。そうすることで、上司も教育相談について知りたいことがすぐにわかるようになるし、私も長々と説明する必要がなくなる。結果、その文書が予算の立案に使われることもあるので、上司のその上のお役所に対しても教育相談への理解が促せるようになってきているのではないかと思う。





考え改め、迷子猫に力を注ぐ。

今回のマガジンは、「ねこから目線。」の仕事について書いていきたいと思います。ねこから目線。は、ノラ猫と保護猫専門のお手伝い屋さんです。その為、「旅行に行く間に、自宅の飼い猫のお世話をしてほしい。」という飼い猫のペットシッター業務など既存の業者がいるような依頼は、相当な事情が無い限りお断りしていました。“迷子猫の捜索依頼”もよく入る相談ではあったのですが、同じ理由で積極的には引き受けていませんでした。なぜなら迷子猫は飼い猫さんのことですし、既存の業者さんも居ますし、１日８時間３日間連続といった一般的なサービス内容では、ねこから目線。の人員ではとても対応しきれないと思っていたからです。なにより、需要が多かったとしても、猫の殺処分ゼロを目指すための事業とは関係が薄いのではないか・・・。そう考えていたので、迷子猫の相談には、あくまでサポート程度のお手伝いをする程度で全く積極的ではありませんでした。そんな私ですが、2022 年 1 月より、迷子猫の捜索捕獲に全力を注ぐようになりました。今回のマガジンではなぜ考えがガラッと変わったのか、どんな風にサービス内容を組み立てることで、今のねこから目線。の人員でも対応できるように工夫したのかを書いてみたいと思います！

知って驚愕。迷子猫の件数・・

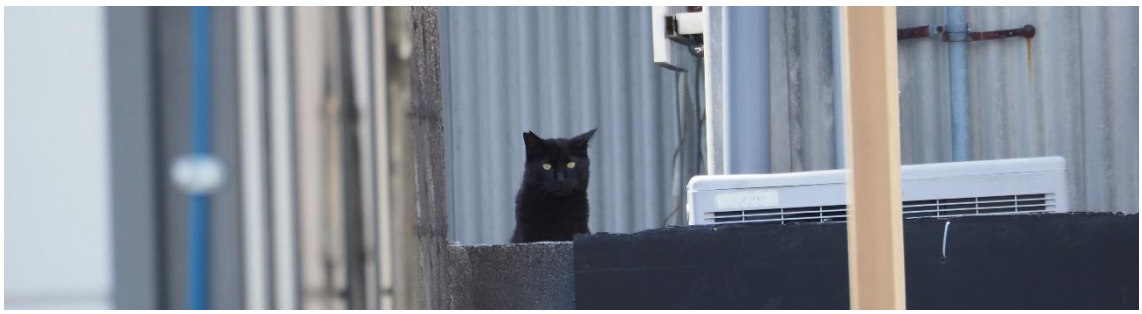
ある日、TNR（ノラ猫を捕獲して不妊手術をしたうえで元の場所に戻すこと）の依頼を受けて現場に行くとターゲットのノラ猫さんは緑色の首輪をしていました。「首輪をしてますけどノラ猫なんですか？」と聞くと「もう半年くらいノラ猫に混じってご飯を食べに通ってきてるのよ。」と依頼主さん。なるほど、半年も毎朝毎晩ご飯を食べに通っているとなると、今現在帰る家がある猫さんではなさそうです。ひとまず捕獲をして、動物病院へ不妊手術の為に搬入します。もしかすると迷子猫さんで今も飼い主さんが探しているか

もしれないので、動物病院にはマイクロチップの確認をお願いし、警察と愛護センターに迷子の遺失物届けが出ていないか電話をして確認しました。
私「迷子猫さんを一時的に保護しているんですが、届け出がないか確認してもらえますか？」
警察の人「はい。迷子の猫ですね。どの辺りにいましたか？」
私「○○市△町です」
警察の人「特徴を教えてください。」
私「未去勢のオス猫で、茶トラ模様に緑色の首輪をしています。尻尾は長いです。」
警察の人「いつ頃保護されましたか？」
私「保護したのは今日なのですが、半年前からノラ猫に混じって餌やりボランティアさんのお家にご飯を食べに来るようになったそうです。」
警察の人「え！半年前？？300 件くらい確認しないといけないよ（すごく嫌そう）。一度電話切らせていただいて、また確認が終わったら連絡しますね。」
とすごく迷惑そうにしながらもきちんと対応してくれました。結果、遺失物届けは出されていませんでした。ネット上の迷子猫の掲示板やＳＮＳも一通り探しましたが、それらしい猫さんを探している人はいませんでした。目の前にいる首輪のついた猫さんの飼い主を見つけてあげることができず、残念で寂しい気持ちでいっぱいでした。首輪猫さんのＴＮＲが終わり、しばらく経つと、じわじわと「え！半年前？？300 件くらい確認しないといけないよ」というあのセリフが何度も何度も頭の中で再生されるようになってきました。え。たった一つの市で警察に遺失物届けを出す案件だけでも半年で 300 匹も飼い猫が迷子になってるの？！

気になりすぎて、警察本部に連絡をしてみました。いったい 1 つの県で年間何匹の遺失物届けが出されているのか。電話で問い合わせをすると「なぜそんな事が知りたいのですか？」とだいぶ怪しまれましたが、「自分は猫の殺処分をゼロにするための事業のみを展開する会社を経営しており、これまで迷子猫はノラ猫問題とはあまり関係が無いと思って対応していませんでした。ですが、ある市の警察の方から半年で 300 匹を超える迷子猫の遺失物届けが出されていると聞きききました。もし、これが事実であるならば、迷子猫はノラ猫の発生源の大きな 1 要因であると考えることができ、弊社で真摯に取り組むべき問題であるといえるからです。そこの部分が、電話口の警察の方がちょっと盛ったのか、私の聞き間違いなのか、はっきりさせたいのです。」と丁寧に説明すると、２人ほど上の人まで確認作業がなられたうえで、「一般に公開している数字ではないので、どこの県から聞いた情報なのかはぼかしてくださいね。」という前置き付きで、「この県内ではおよそ年間 1,000 匹の猫の遺失物届けが出されています。」と教えてくれました。

年間 1,000 匹――。最初の窓口対応をしてくださった市警察の方はちょっと盛っていましたが（あるいは私の聞き間違いか）、それでも年間 1,000 匹の遺失物届けが提出さてる現状には衝撃を受けました。飼い猫が迷子になって、警察に遺失物届けを提出するくらい意

識の高い飼い主さんの飼い猫が年間 1,000 匹というわけですから、意識の低い飼い主さんの迷子猫も合わせたら、たった一つの県で年間 2,000～3,000 匹くらいは飼い猫が迷子になり、ノラ猫化してしまっているのではないでしょうか。その中には今回の首輪の子のように不妊手術がされていない子も沢山いるでしょう。それって、もはやノラ猫の発生源の大きな一つといえるんじゃないでしょうか。だとすれば、「迷子猫のサポートは、猫の殺処分ゼロを目指すための事業とは関係が薄いのではないか・」なんて言っていた自分はなんて浅はかだったんだ・・と頭に衝撃が走りました。



どう迷子猫に対応するか。

いつどこに餌を食べに来るか分かっている TNR の捕獲と違い、迷子猫はどこにいるのか、何時に出てくるのか、そもそもこの地域にまだいるのかさえ分かりません。捕獲の前に【捜索や調査】が必要になってきます。ペット捜索の業者さんの料金プランを見ると、かなり差がありますが、１日５～８時間滞在の捜索で３～６万円の価格だったり、３日間連続の８時間捜索で８～１０万円という形でした。うーん。スタッフを８時間も１つの現場に派遣しようと思うと、予約は１週間は先になってしまいます。それに通常１日２～６現場は捕獲やリターンが入っているので、８時間も１人のスタッフを拘束されてしまうと本来一番力を入れて対応したい TNR が対応しきれなくなってしまいます。実際、これまでも何度も迷子猫対応をしていますが、迷子猫は迷子猫専門の業者さんがいますよ。と伝えても「それでもねこから目線。に対応してほしいです。」と依頼される理由は「評判の良い業者に連絡したら、来れるのは最短で２週間先だと言われた」というケースか、費用的に他の業者さんの価格は出せないというケースでした。

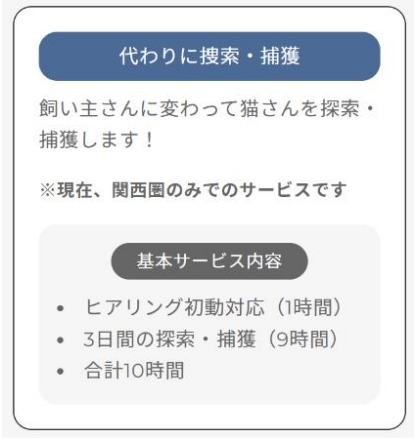
迷子猫の最大課題であり、変えようがない部分は「事前に予約してくれないこと」です。当たり前ですが、迷子は不測の事態による突発的な脱走から起きる事故のようなものなので、「来週の火曜日にうちの飼い猫が迷子になる予定なんですが・・」なんて予約をしてもらうことは不可能です。とはいえ、「今日脱走してしまった」と言っている人に「じゃあ１週間後にお伺いのご予約入れますね」ではあまりにもスピード感が伴いません。なるべく依頼を受けた当日または翌日には現場に行きたいところです。ねこからスタイルの迷子猫サポートプランを考える必要があります。

そこで、これまでに他の業者さんを紹介しても、「できる範囲でいいから対応してほし

い」と言われて、対応してきた迷子猫の事例を遡っていくと、記録がしっかり残っているだけで４９件の成功サポートがありました（消極的な割に以外と件数ありました)。それらの脱走場所や見つかった経緯、捕獲方法、時間の間隔などを検証し、スピード感ある対応ができて、かつ保護までたどり着ける可能性が高いサポートスタイルはどうか・・・・・・・・と考えていきました。

ねこからスタイルの迷子猫サポート

悩みぬいた末に、ねこからスタイルの迷子猫サポートパックが決まりました。関西圏内限定にはなりますが、ヒアリング・初動対応＋飛び３日間の捜索・捕獲で合計１０時間というプランを作りました。これくらいの実働時間になることが分かれば、次は費用設定です。私が一人で感覚で費用を決めると、「赤字ではないけど自転車操業ですね」という所に落とし込んでしまいがちなので、ここでは、新規事業立ち上げのサポートスタッフ浅岡さんとミーティングを繰り返していきます。ノラ猫さんに対するTNR は依頼主さんもボランティアなので、ギリギリの料金設定のまま行きますが、迷子猫は飼い主さんがいて、ちょっと厳しい言い方をすると飼い主さんの不注意によって起きてしまっている事態ですので、収益事業として設定したいと考えました。そして決まった価格は、代わりに捜索・捕獲プラン 50,000 円という、ペット探偵業界では安い～普通くらいの価格ですが、ねこから目線。としてはめちゃくちゃ高額な価格設定となりました。





そして、2022 年 1 月から正式に迷子サポートをリリースしました。ここからは事例を紹介しながら解説していきたいと思います。

お出かけ先で迷子になってしまったリコちゃん

【依頼時の状況】

- 相談日から 4 日前に山の中腹にある大きな公園で何かに驚いた拍子にパニックになり、ハーネスを抜けて山の中に逃げてしまった。
- 逃げてしまった日は何度か目撃することができたが、追いかけるとさらに山の奥へ入っていってしまった。
- 翌日以降も探しに行くが姿は一回も見えない。
- 最後に目撃した場所の近くに餌を毎日置いている。それは食べている形跡があるが、山なので色々な動物が居る。
- 餌を置いている所に捕獲器を一晩中設置したが何も捕まらなかった。

■ヒアリング・初動対応（１時間）＋捜索（１時間）

ねこから目線。の代わりに捜索・捕獲プランのご依頼をいただき現場にお伺いしました。飼い主さんのご自宅で状況や猫さんについて詳しくお伺いした後に、迷子現場に向かいました。まずは、連日飼い主さんが置いている餌をたべているのが誰なのか確認する為に同じ場所に餌とカメラを設置しました。移動している可能性も含めて、周辺調査をしたうえで移動しそうな場所に更に 2 箇所カメラを設置しました。



【解説】

依頼をもらったその日に 3 時間も現場で捜索をする時間を取ることは難しいですが、１～２時間だけなら即日に捻出することができると考えました。それでまずは現場にすぐにお伺いして、ヒアリングと簡単な捜索を行い、ネコ観察カメラを設置します。
これが、**ヒアリング・初動対応（１時間）＋捜索（１時間）**の部分になります。

■捜索２日目（１時間）

翌朝カメラを確認すると、飼い主さんが毎日餌を置いていた場所にリコちゃんが写っていました！18:30 頃と早朝の 4:30、6:35、と暗い時間帯に何度も来ていることが分かりました。他のカメラにはウサギさんやアライグマさんが写っていました。幸いにもリコちゃんがきている場所にはリコちゃん以外の動物が映らなかった為、夕方から張り込み捕獲を実施す

ることにしました。



リコちゃん



ウサギさん



アライグマさん

■捕獲作戦（7時間半）

薄暗くなる 18 時頃から捕獲器を設置し、離れたところに車を停めて見張ります。街灯が無いので真っ暗になる現場・・。でもリコちゃんは白が多めの三毛猫さんなので登場すれば目立つはずです。





ひたすら待つこと 2 時間・・。リコちゃんが登場しました！5m 歩いては立ち止まって左右を確認する警戒っぷり・・。それでも捕獲器の近くへ行きました。捕獲器の入口付近のご飯を少し食べてはキョロキョロ。かなり怖がっている様子です。そして 1/3 ほど食べ進んだ所で何かに驚いて走り去ってしまいました・・。

逃げていった先にはプレハブやコンテナが並んでおり、おそらくその下などに隠れていると思われます。しかし、ここでは見つけることよりも保護することが優先です。隠れているところを暴いてしまうとかえって出て来れなくなってしまったり、さらに遠くへ逃げてしまう可能性があります。コンテナエリアの近くにそっと追加でひとつ捕獲器を設置し、2 台体制でリコちゃんが再び出てきてくれるのを待ちます・・。

ひたすら待ちます・・。街頭すらない極寒の山の中で・・。さらに待つこと 3 時間・・。



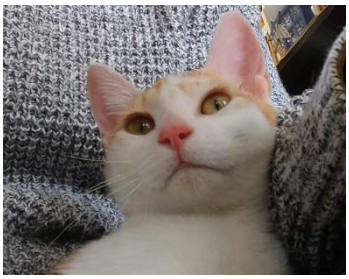
リコちゃん保護完了ですー！！！！

出てきてくれてありがとう！！！！

深夜 1 時。張り込み開始から約 7 時間半経過したところで無事保護することができました。飼い主さんにすぐ報告の LINE をして、ご家族が待つお家にリコちゃんを連れて行きます。車の中では全く鳴かなかったリコちゃんですが、インター

フォンから飼い主さんの声が聞こえてきた瞬間から「ニャー！ニャー！」と鳴き出しました。怖かったね、帰りたかったね。リコちゃん知らない場所で５日間もよく頑張りました。病院に行くためのキャリーに入れ替えてお手伝い完了です。深夜 1 時半にもかかわらず飼い主さんご家族皆さん起きて待っていてくださいました。





後日、すっかり落ち着いてリラックスしているリコちゃんのお写真が届きました(^^)

ねこから目線。の迷子猫代わりに捜索・捕獲プラン３日間、延長無しで終了でした。

１日目	２日目　朝	２日目　夜	３日目　深夜
依頼	捜索	捕獲	保護完了
ヒアリング・周辺捜索 カメラ設置	カメラ確認・捕獲の 段取り決め	張り込み捕獲	飼い主さん宅にお届け
２時間	１時間	６時間	１時間半

１週間縁の下から出れなかったふうちゃん

換気の為に開けていた玄関から、お外に出てしまい迷子になってしまったふうちゃん。

【状況】

- 脱走翌日の早朝に近くで見つけたが、抱っこに失敗して逃げてしまった。
- それ以降全く姿が見えない。鳴き声もない。
- 去勢済みのオス　11 歳。足が少し悪い。迷子から 3 日目にねこから目線。に依頼。



■ヒアリング・初動対応（１時間）

ご依頼をいただいた当日の夜に飼い主さん宅にお伺いさせていただき、状況や猫さんの性格のヒアリングを行いました。その場で迷子のチラシを作成と印刷の注文を行いました。この日は遅い時間だった為、飼い主さん宅の玄関先ガレージにカメラを設置して翌日捜索を行うことにしました。

■捜索１日目（２時間）



翌日カメラを確認すると、３匹のノラ猫さんが入れ替わり立ち替わりにパトロールにきていました。かなりノラ猫さんの多い地域のようです。捜索中も沢山のノラ猫さんに遭遇しました。ただ、幸いなことに遭遇する全てのノラ猫さんがさくら耳になっていました。TNR をしてくれているボランティアさんがいらっしゃる地域のようです。

隠れられる隙間がありそうなお家はインターフォンを押して、入らせてもらいます。怪しい箇所が何箇所か絞れたところで、飼い主さんのお話しを思い出しながら、カメラを設置する場所を考えていきます。



飼い主さんのお家から出てしまい、翌日にふうちゃんが目撃されたのは、お家を出て右に数軒行ったお家のガレージだったそうです。そして、そこで保護に失敗し、さらに家沿い右に逃走。一番初めの角を右に曲がった所で見失ったそうです。壁沿いを右に右に動いていく典型的な怖がりさんのパターン・・。だとすると、右に曲がってから道を真っ直ぐ進んでいったというよりも、右に入れる隙間があったら直ぐに入り込んだ可能性が高そうです。となると、一番初めにふうちゃんが見つけるであろう穴は、この家と家の間を塞いでいる錆びたトタンの扉の下・・・。と、よくよく見ると黒く長い毛が一本引っかかっていました。

これは、ふうちゃんの可能性高そうです・・

家主さんの許可をいただき、大きなお屋敷を見させていただくと、お庭の縁側の下ともう１箇所床下に入れる穴がありました。そこでカメラを２台設置させてもらいました。



そして翌日カメラを確認すると・・

■捜索２日目（４時間）



　ふうちゃんがバッチリ写っていました！
お庭の縁側の下のカメラにも、お屋敷の端っこの穴に置いたカメラにも写っていました。
ふうちゃん以外にも５匹ほどのノラ猫さんが写っていました・・



どうやら、入っていない猫さんが出てくる様子も写っているので縁の下は２箇所の穴と繋がっているようです。
潜伏場所が分かれば、あとは捕獲に移ります。
怖がりなふうちゃんは他のノラ猫さんの気配が無い時にそっと出入口付近に顔を出す程度で、１、２日に１回程しかでてきません・・。捕獲器のご飯を新鮮に保ち続けながら、ふうちゃんが勇気を振り絞って、出てきてくれるタイミングを待つしかありません。

■捜索３日目（３時間）

　家主さん、飼い主さんにもご協力いただき、捕獲器を設置して待ち続けること３日目。依頼をいただいてから５日目。ふうちゃんが捕獲器に入ってくれました！！脱走からは７日目でした。お家に戻り、『お水もたくさん飲み、ご飯もたくさん食べ、気絶したように寝ています！』とお写真をいただきました。



　今回のふうちゃん保護のお手伝いも、代わりに捜索・捕獲プラン、延長無しでした。ん？依頼から捕獲までに５日かかっているのに延長無し？と思うかもしれませんが、そこのからくりはこうです。代わりに捜索・捕獲プランは３日間の捜索と記載していますが、これは直近３日間ではなく、ねこから目線。のスタッフの現場対応日が合計３日間という意味です。
ふうちゃんのケースでいうと↓のスケジュールになりました。

１日	２日	３日	４日	５日	６日	７日
脱走		**依頼**	**捜索１日目**	**捜索２日目**		**捜索３日目**
実施内容		ヒアリング チラシ作成	周辺の捜索 カメラ設置	カメラ確認 捕獲作戦へ移行	捕獲器の観察と餌の入れ替えを飼い主さんで実施	捕獲器増設 捕獲作業 →保護完了
現場滞在時間		**１時間** 訪問回数１	**２時間** 訪問回数１	**４時間** 訪問回数１	**捜索日カウント無し** 訪問回数０	**３時間** 訪問回数２

飼い主さんの協力のおかげでスタッフが現場に行って対応したのは３日間で収まったので、

依頼から５日経っていても延長無しというわけです。

脱走からすでに１ヵ月以上経っているケースや、普段から外中自由に行動している飼い猫さんの場合は、周辺の目視で見回っても見つけられる可能性は低いので、注文したチラシが届いてから捜索開始取るため、下記のようなスケジュールになります。

１月前	１日	２日	３日	４日	５日	６日
脱走	**依頼**		**捜索１日目**		**捜索２日目**	**捜索３日目**
実施内容	ヒアリングチラシ作成 注文・カメラ貸し出し	飼い主さんでカメラ確認	チラシ完成ポスティング・周辺捜索	チラシのリアクション待ち	目撃情報の地点を捜索・カメラ観察	捕獲決行
現場滞在時間	**１時間**	**捜索日カウント無し**	**５時間**	**捜索日カウント無し**	**２時間**	**３時間**

目撃情報が全く寄せられない場合は、チラシ配布の日数を増やしたり、リアクション待ちの日数を増やしたりする場合もあります。捜索のスケジュールに関しては脱走猫さんの性格や周辺環境、脱走からの日数に応じて組んでいくことになります。

まとめ

ねこから目線。の迷子猫サポートがスタートしてはや５ヵ月。迷子サポートを始めました！という広報はしていないものの、ねこから目線。のブログには積極的に載せるようにしたところ、依頼数は右肩上がりになってきました。2022 年の１月～５月半ばの代わりに捜索・捕獲プランの対応件数や成功率を集計してみたところ、対応件数 43 件、捕獲まで至ったケース３６件、成功率 83.72%という結果でした。スタートしたてにしては奮闘していると思いますが、これからも丁寧にケースレポートを積み重ねてもっともっと成功率を高めていきたいと思います！

依頼数	44 件
保護成功件数	36 件
成功率	**83.72%**

2022.1 月～2022 年 5 月末のデータ

おわり



小池英梨子

活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
36

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

気が付けばもう５月という時の流れの速さに呆然とする日々である。よくもまあ飽きもせず続けているなと自分自身に感心しながら、矢張り最後までやり遂げたいと思っている。ようやく「さ行」の終わりに至った。辞書で見ると半分くらいは来ているか。意味が重なる諺も多いことから、今後は進みが早くなるかなと思っている。

今回は「せ」のところから以下の９つ。

- **急(せ)いては事を仕損じる**
- **性に率(したが)う、之を道と謂(い)う**
- **生年(せいねん)百に満たず、常に千歳(せんざい)の憂(うれ)いを懐(いだ)く**
- **生は難く死は易し**
- **性は猶湍水(なおたんすい)のごとし**
- **精を得て麤(そ)を忘る**
- **赤心(せきしん)を推して人の腹中に置く**
- **積善(せきぜん)の家には必ず余慶(よけい)あり**
- **世間は張り物**

＜急いては事を仕損じる＞

物事はあまりあせるとやり方が雑になったり、注意力が散漫になったりして、かえって失敗しやすいということ。気がはやるときほど落ち着いて考えて行動すべきであるという戒め。

この諺は誰もが知っていると思うが、それはきっと昭和生まれの人に限られるのかもしれない。そこで、改めて紹介した。

不登校のお子さんを持つ保護者との面談では、どの保護者も少し休みが続いたところで、「どうしよう、不登校になってしまう」と焦り始める。今は不登校になってもいろいろな手段があるので、焦る必要はないし、焦れば焦るほど子どもの状態は悪化する。子ども本人も焦っているときに、保護者の焦りはそれをさらに焦らすことになるからである。保護者の気持ちを受け止めつつも、

まずは「どんと構えてもらう」ことが不登校では大事だ。不登校になったって人生が終わるわけではない。追い詰めてしまうほうがよほど危ない。「ことを仕損じない」ために、この諺はとても伝わりやすいと思ってたびたび使っている。

仕事が立て込んで慌てていると大抵失敗する。車の運転でも、急いでいるときほど事故を起しやすい。何事も焦らず、落ち着いて行動し、対応していくことで余計な問題を起こさずに済む。自分自身への戒めとしても、この諺は頻繁に使っている。

英語では・・・
Haste makes waste.（性急は無駄を生む）
The more haste the less speed.（急げば急ぐほど上手く行かない。）

＜性に率う、之を道と謂う＞

天から与えられた性質に従って行動することを、道というのだということ。

出典　中庸

自分自身の性質について、しっかり把握できている人はそう多くはないだろう。まして、相談に来る人は、自分を見失っていたり、自分を過大評価あるいは過小評価している人も多い。理想はあっても現実とのギャップは必ずある。そんな人に、この諺を使うことがある。

自分の悪い面ばかりは目立つが良い面に気づいていない時はそこに気づかせ、その良い面をどのように生かすかを検討するほうが、自分の性格を変えたいという目標に向かって進むよりずっと簡単で合理的でもある。

兎角自分自身を過小評価しがちな日本人は、それを「謙遜」として美徳ととらえがちだが、自分の良い面を生かせなければ人生辛く苦しくなるばかりである。自分の人生をどう謳歌するかは、自分の活かし方と関係が深いと思う。

「道」を極めるとはこういうことではないかと思っている。

＜生年百に満たず、
常に千歳の憂いを懐く＞

人間は百歳までも生きられないのに、いつも千年後のことまで心配している。若いこの時は今しかないのに、千年後の余計なことまで心配して過ごすのは愚かであるという意。

出典　文選

人生百年の時代に突入したとは言え、やはり百年生きられる人は少ない。ましてどんなに科学、医学が発達したとしても千年生きるのは SF の世界のような話で、仮死状態で冷凍保存でもしない限り無理だろう。今の時点では無理としか言えない。

しかし、人間というのは不安が強く、先々の心配をすることも多い。確かに地球温暖化や宇宙ゴミなどについては、もっと真剣に考えなければならない問題で、それはここ数十年の話でもある。

先のことを考えないで生きるのもどうかと思うが、これは、「若いうちは、そんな先のことより今を楽しみなさい」という諺である。

若さというのはいつまでも続くものではない。そんなことは誰もがわかっていることだが、相談に来る若者を見ていると、今を楽しんでいない。というか楽しめない。不安が強く、積極性に欠けていたり、元気もなかったり、エネルギーがとにかく低い。２０歳で死ぬとか、１８歳で死ぬとか、そう言っているなら、今を精一杯楽しめばよいのに、毎日を辛い辛いと言いながら過ごしてあと数年で死にたいという。辛いから死にたいと思うのだろうが、どうせ死ぬならもっと楽しんでからにすればよいのにと思う。

物事や人生を楽しめるかどうかは、多くが気持ちの問題である。楽しんでいる人と楽しんでいない人との違いは、どのくらいのことがあれば楽しいと思えるのかということと相関する。

道を歩いていて、かわいい雑草を見かけて、「かわいい」とか「きれい」とか感じられる人は、日々たくさんの楽しみや喜びを見つけられるだろう。空の色も、雲も、日差しも、木々の葉の色や香り、自然の移り変わり、なんでも感じて味わえればずっと楽しく幸せを感じられるだろう。しかし、死にたいとか辛いとか言っている人は、自分と自分を傷つける周囲のことしか見えていない。多くの人が自分を心配したり助けてくれようと思っていたり、優しく見守ってくれていたりするのだが、それに気付かないのである。

若いというだけでも、年取った身から見ればうらやましい限りである。無限の可能性を秘めた「若さ」をもっともっと楽しんでほしいと思うたびに、この諺を伝えている。古くから言われていることは、時にはこういう若者に響くことがあるから。

＜生は難く死は易し＞

苦しさに耐えて生きていくことは難しいことであり、苦しさから逃れるために死を選ぶのは簡単なことであるということ。自分の命を絶つことによって事態の解決をはかろうとする態度を戒め、生命の尊さを教える言葉。

この言葉は、前掲の諺とも関係がある。生きることは苦難もあり、辛いこともたくさんある。しかし辛いことばかりではない。それでも辛さの真っただ中にいる人は、苦しく死にたいと思ってしまう。

コロナ禍のなか、自殺者、特に女性や十代の自殺者が増加した。有名人の自殺の影響もあっただろうが、なんといっても自殺が多い日本である。死んでしまえば楽になれると思うのは、短絡的だが、鬱状態ではある意味「死に取り付かれる」ということもある。鬱の患者さんに「死にたいなんて言うな」といってもそれは追い詰めるだけだろう。

「死」を考えたことが無い人というのも少ないのではと思うくらい、「生」と「死」は背中合わせで、「死の誘惑」というものが時折微笑みかける。特に若い時はこの誘惑にかられることが多いように思う。

この誘惑と闘うには何が必要か？

人との信頼のおける繋がり、自分の存在感、自己肯定感等々いろいろあるだろう。今それがないからと言って、永遠に得られないわけではないが、今見えないから、今

感じられないから「死」なのである。

そんな人に、この「諺」とともに伝えていることがある。今、大地を感じ、自分の呼吸を感じ、心臓の鼓動を感じ、空気を感じ、太陽の暖かさを感じてみようと。面倒くさいことをすべて放って、気持ちの良いことだけを感じてみようと。何かを見つけられたらと思って。

＜性は猶湍水のごとし＞

人の本性は善にも悪にもなりうるということのたとえ。人間の生まれながらの性質は、あたかもぐるぐる渦を巻いて流れる水のようなものであるという意。

出典　　孟子

前掲の諺でも伝えたが、自分の良いところというのを見つけられない人は多い。悪いところと良いところは表裏一体でもある。そして、それが表を見せたり裏を見せたりしている。つまり渦のようにくるくる回っているのである。それを知っていれば、他人の言動についても、くるくる変わることが当たり前であると感じられ、そうした言動に振り回されずに済む。

他人を信じられないという人も多いが、所詮他人に裏切られたり、言動をくるっと替えられて、迷惑をこうむったとしても、自分が他人に迷惑をかけなければよいのではと思って生きていれば、なんてこともない。

＜精を得て麤を忘る＞

物事の真髄をつかんで、本質的なことに関係ないことについては忘れてしまうこと。中身の本質だけをとらえ、外形などにとらわれないことのたとえ。　　出典　　列子

人間の記憶量には限界があるので、大事なことだけ覚えればよいと考えることともいえるが、それより、後半の説明の通り外形などにとらわれないことという意味で使っている。

最近は外見が素敵な人が増えている。スタイルも、顔も、整っている人が増えた分、そうではない人の自己嫌悪感が増している。少しぽっちゃりしているだけで、食事を抜くとか、小学生でも無理なダイエットをするような時代だからこそ、もっと自分の見た目ではなく中身で勝負できるようにしていかねばと思う。そういう意味でこの諺を使っている。難しいので子どもにはわかりづらいが、子どもの見た目を気にする保護者には効果があるように思う。

＜赤心を推して人の腹中に置く＞

真心をもって人に接し、相手を信じて少しも疑わないこと。自分の真心を外に出して相手の腹の中に置く意から。赤心＝真心。誠意。　　出典　　後漢書

人を疑わない、信じることができると、人との関係は良くなる。しかし一回でも人に裏切られると、人を信じることが怖くなり、できなくなる。人を信じられないために、人との関わりが怖くなり、引きこもり

になっている人もいるし、友達を作らず孤立していて実は心が寂しがっているという人もいる。こうした人たちにこの諺を伝え、それで裏切られたら、その人には真心が通じないだけで、あなたのせいではないと伝えている。

昨今、悪い人がいるから、人を信じないようにと家庭でも学校でも子どもたちに伝えているが、もちろん子どもがさらわれたり被害に遭ったりする時代なので、そんな目に遭わないようにすることは大事だが、知らない人は怖いとか、信じるなとか言っていたら、いったいどうやって人間関係を作っていけばよいのか。

人は一人では生きていけない。真心をもって人と接していくことで、相手もその心に呼応してくれる人なら信頼できると思えるだろう。

「自分の真心を人の腹に置く」という表現が筆者としては気に入っている。

＜積善の家には必ず余慶あり＞

善行をたくさん積み重ねて来た者の家には、その報いとして必ず子孫にまで及ぶ幸福があるということ。余慶＝先祖の善行のおかげで子孫が受ける幸福。

出典　　易経

易経には、これと正反対の諺もある。悪行を行っている家では子孫にまでその報いがあるというものである。両方を掲載しようかと思ったが、プラスのものの方が良いかなと思ってこちらを選んだ。

善い行いを続けていればきっと良いことがおこる。そしてそれは子孫にまで及ぶと言われると、だれも悪い気はしないだろう。世の中は必ずしも公平ではないが、自分が正しい行いや、善い行いをしていると、悪い気分にはならないだろう。

その行動の結果がが必ずしも良いものにならなくても、自分なりに満足感はあるものだ。誰かを恨んだり、羨んだり、人の悪いところばかりを見て過ごすよりもずっと心は穏やかできれいでいられるのではないだろうか。

そんな風に子どもたちに伝えている。

＜世間は張り物＞

世間を渡るには、ある程度の見栄を張るのも処世術の一つであるということ。又、人はみな見栄を張って生きているので、外見に騙されてはいけないという戒め。「世は張物」ともいう。張物＝芝居の大道具で、木材を骨にして紙や布などを張ったもの。

見た目については、今は化粧でもかなり化けられるし、美容整形も気軽にするようになった。口の達者な人は、自分を幾重にも大きく見せることもする。そういう人たちに、素直な人は、すぐに騙されてしまう。見た目も、話も、大体半分に受け止めると、まあそれほどの痛手は被らないだろう。特に素直な人がいるので、そういう人には、この諺を伝えている。北海道ではねぶたの様に、張物を作って学校祭を楽しむ高校なども多いので、張物のイメージは伝わりやすいなと感じている。

地で勝負できないというのもなんとも情

けない話ではあるが、少しでもよく見せたいと思う気持ちは理解できる。ただ、あまりに作り過ぎると自分自身とのギャップにかえって苦しくなるのではと思う。作り過ぎている人にもこの諺を伝えることがある。あとで辛くなるくらいなら、今のうちに正直に自分を出そうと。

出典説明

中庸・・一巻

儒教の教典。『論語』『孟子』『大学』とともに四書の一つ。孔子の孫子思の著と伝えられるが、異説も多い。喪とは『礼記』の一編だったが、宋代にそれを一書に独立させた。天と人を結ぶ奥深い原理を説いたものとして、儒学入門の必読書となった。

文選・・・三十巻

中国の詩文集。梁の昭明太子蕭統が編纂。古代の周から南北朝の梁までの約千年間の作家百三十余人による八百首近いすぐれた作品が、文体別・時代順に編集されている。奈良時代に日本に伝来し『白紙文集』とともに、日本の文学に大きな影響を与えた。

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の言行を
門人が編纂したもので、「大学」「中庸」「論語」と共に四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、覇道（武力による政治）を否定して王道（人徳による政治）を提唱している。

後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の「続漢書」からとったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本についての記述がある

列子・・・八巻

中国、戦国時代の思想家。名は禦寇。老子よりあと、荘子より前の時代の道家といわれ、虚の道を得た哲人と伝えられるが不詳。『列子』八巻の著者とされるが異説も多い。

易経・・・十二編

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文との解説書の「十翼」を合わせて十二編より成る。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王、周公、孔子があげられるが確かではない。

うたとかたりの対人援助学

第 22 回「手話民話の語り部・半澤啓子さん」

鵜野　祐介

「ろう文化宣言」そして半澤啓子さんとの出会い

1995 年 3 月、「ろう文化宣言　言語的少数者としてのろう者」という一文が『現代思想』（青土社）に発表された。「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」――この宣言は、「ろう者」＝「耳の聞こえない者」つまり「障がい者」という病理的視点から、「日本手話を日常言語として用いる言語的少数者」という社会的文化的視点への転換を図るものとして、聴者（健聴者）のみならずろう者の間にも大きな反響を呼び、その後 27 年が経った現在も尚、これをめぐって賛否両論が繰り広げられている。

この宣言を、聴者の市田泰弘さんとともに共同で起草（執筆）したろう者の木村晴美さんが、その著『日本手話とろう文化　ろう者はストレンジャー』（生活書院 2007）の中で、「衝撃を受けた」手話通訳者として紹介しているのが半澤啓子さんである。

（1991 年の第 11 回世界ろう者会議で）半澤さんの手話を見たとき、私は衝撃を受けた。いちいち頭の中で日本語に変えなくても、ダイレクトに頭にすんなり入るのだ。それまで私が見てきた手話通訳者は、シムコム（日本語対応手話含む）で、そのままではメッセージが頭に入らないので、頭の中でいったん、日本語の文章に組み立てるという再構築が必要だった。それなのに、半澤さんの通訳だとそういう再構築は不要で、メッセージがそのまま頭に入り、しかも心地よい。疲れない。私は、その分科会に居る間、半澤さんの、…

…よくわかる通訳に目を奪われていた。……現在、半澤さんは、手話民話の語り手としても活躍中である（54－58 頁、下線は鵜野による）。

本連載においてこれまで複数回にわたって紹介してきたように、筆者は 2016 年夏、英国スコットランドで手話民話の語り部の存在を知って以来、日本でもそうした方がいらっしゃるのではないかと取材を重ねてきた。大阪や奈良において手話で絵本の読み語りを行っている方々を知り、交流してきたが、いわゆる「素話（すばなし）」での手話民話の語り部さんにはなかなか出会えなかった。そんな中で、木村さんのこの本を通して半澤さんのことを知ったのである。

そしてこの本に、半澤さんが宮城県仙台市在住と書かれていたため、旧知のみやぎ民話の会会員・加藤恵子さんを通じて、せんだいメディアテークや宮城県聴覚障害者情報センター（みみサポみやぎ）に仲介していただき、今年（2022 年）4月、半澤さんご自身とコンタクトを取ることができた。

ZOOM インタビュー

本来なら仙台まで出向き、直接お目にかかってお話を伺いたいところだったが、コロナ禍ということもあり、オンライン ZOOM でインタビューさせていただくことにした。半澤さんは本連載前号で紹介した「コーダ」（ろうの親のもとで生まれ育った聴者の子ども）であり、音声のみでのインタビューも可能だったが、手話についてのお話を伺う上で、画像付きなのは結果

的にとてもありがたいことだった。

インタビューは5月 20 日午前中、約 1 時間半にわたって行われた。録画した映像を再生して確認し、この日お聞きした内容をまとめて以下に記す。

これまでの活動歴

半澤啓子さんは 1948 年、宮城県大河原町生まれの手話通訳士。1968 年より手話通訳活動をはじめ、宮城県手話通訳主任相談員を経て、1992 年より仙台医療福祉専門学校勤務。同じ年、東京で開催された第1回全国わたぼうし語り部コンクール(障がい者が民話などを語るもの)で通訳を務めた。

その時の録画を見た宮城県の手話通訳関係者の勧めで、1997 年、全国手話通訳問題研究会宮城支部主催の特別手話講座において、民話語り部の穀田千賀子さんとコンビを組み、穀田さんの音声語り、半澤さんの手話語りで、手話民話の語りをしたのが最初だという(以下、半澤さんを一人称〈私〉として記す)。

その後、宮城生協のイベントなど宮城県内を中心に語りの会を不定期に行っていたが、2006 年NHKーEテレ「みんなの手話」で2話の民話(「蛇石(じゃいし)物語」「屁ったれ嫁ゴ」)を語り、また「ろうを生きる、難聴を生きる」でも2話(「山の神さん」「阿子耶松(あこやまつ)」)を語った。さらに 2012 年から 17 年までの6年間、Eテレ「みんなの手話」に毎年1回出演したことで、全国各地から手話語りの依頼や問い合わせが入るようになった。

語りの形式とレパートリー

通常は「コラボレーション」と称して、穀田さんとコンビを組んでいるが、手話講習会や講演の中では一人で行うこともある。一人の時には、話の筋をしっかり憶えておかないといけないので、穀田さんと一緒にする方が安心だが、間(ま)を取るタイミングなどマイペースで進められると感じることもある。

現在のレパートリーは 28 話で、約4分の1が日本の伝承民話、残りは東北の民話を基に穀田さんが再話・再創造した「創作民話」である。

穀田さんが東北の土地言葉で語るということもあり、外国の物語はレパートリーにない。長年にわたってコンビを組んで活動をしていく中で、お互いに語りの腕前が磨かれていったと感じている。

語りの会の概要

規模も主催者も参加者もさまざまだが、印象に残るものをいくつか紹介する。東日本大震災翌日の 2011 年3月 12 日、神戸で行った会(「特定非営利活動法人　神戸ろうあ協会設立 90 周年記念大会兼第 30 回耳の日記念大会　特別企画:日本手話と民話のコラボレーション」、神戸市立垂水勤労市民センター)には数百人が集まった。参加者のうち多くの方が 1995 年の阪神淡路大震災を経験していたこともあってか、会の終了後、前日の震災のことを心配して励ましてくれ、募金活動をして下さったことが忘れられない。

大阪府吹田市では「お笑い手話会」に参加したこともある。手話落語もあるように、しぐさや表情、顔の向きなど、落語と手話には共通点が数多くあることがわかる機会となった。

2000 年代には、毎年6月、仙台で開催されていた「とっておきの音楽祭」に出演していた。これは路上で行うもので、野外の開放感があって楽しかった。この音楽祭はそれ以降も続いており、コロナ禍のため2回中止されていたが、今年は行われるようだ。私自身は出演しないが、ろう者たちが毎回出演している人気のブースもある。

宮城県内の小・中学校や青森県の大学でも、依頼を受けて手話の語りをおこなってきた。また町内会の子ども会で開いた時には 10 名ぐらいのこともあったが、子どもたちやお母さんたちが手話に興味を持って会場に来てくれただけで嬉しかった。

手話語りの特徴

手話の語りならではの表現として、情景を伝えられ

るということがある。私の語りを〈聞いた〉あるろうの方が「すご〜い、情景が浮かぶ」と〈言って〉くれた。小舟で波に揺られている主人公の所に、大蛇になった母親が水の中をやってくる場面が特によかったそうだ。音声では伝わりにくい情景も、手話であれば伝えることができると感じている。

また、登場人物の演じ分けを目線や肩の向きで行う「ロールシフト」と呼ばれる動きによって、誰が誰に言っているのか、音声言語では伝えられないことまで伝えることができる。手話は手指で伝える言葉だと思われがちだが、それだけではない。

特に大事なのは目だと思っている。目の位置、目の向き、そして目を閉じたり開いたりすることで特定の意味を伝える。それから、口の形や肩や顎の位置や角度を変え、それらを網羅することでいろいろな意味を伝えている。これが日本手話の独特な表現であり、手指の動きだけで表現するわけではない。

日本手話と日本語対応手話

一方、日本語対応手話では、聞いた言葉（音声日本語）を翻訳するという発想のため、例えば「とてもおいしい」であれば、「とても」と「おいしい」を、それぞれに対応する手話で表現する。けれども日本手話では、目を閉じてからパッと開きつつ、頬を叩くことで一度に表現する。目と手の動きとうなずきを連動させている。

別の例として、「あなたの名前は何？」がある。日本語対応手話であれば、「あなた」「名前」「何？」をそれぞれ手指の形と動きで示すことで完了するが、日本手話では顎の角度を変えることによって、相手との関係性が変わる表現になる。

つまり、顎を引けば目上の人に対して「あなたのお名前は何ですか？」に、普通の角度だと対等の関係の人に対して「あなたの名前は何？」に、顎を上げるようにすると目下の人に向かって「お前の名前は何だ？」となる。またこの時、目線の角度や口の形も微妙に変わってくる。こうしたことも、日本手話であれば表現できる。

もう一つの例。「（私は）ろうに生まれてよかった」と「ろう（であるあなた）を産んでよかった」も日本語対応手話では手指だけを使うので同じになるが、日本手話では他の部位の動きや向きなど（＊これは「非手指動作［non-manual markers］」と呼ばれる。…筆者注）を総動員して表現するので、違いを正確に伝えることができる。

ろう者の観客と聴者の観客

これまでさまざまな所で手話民話の語りをしてきたが、ろう者の観客がいる場合と、ろう者はおらず手話の講習を受けている聴者だけの場合とでは、語り口が違ってくる気がする。意識的にそうしているわけではないが、音声語り部の「日本語」に釣られて、無意識に日本語対応手話になってしまう。日本手話の分らない聴者だけの舞台ではよく日本語に引きずられることがある。反省している。

これがろう者だったら容赦しない。ある語りの会の後で、10数年ぶりに私の語りを〈聞いた〉というろうの方が感想を述べに来られ、「レベルアップしたね」と〈言われて〉嬉しかった。逆に、「今日のはノッてなかったね」と〈言われた〉こともある。そのくらい手厳しい。ちゃんと見て下さっている。

DVD「手話語り　怪談」のこと

2017年９月、「朗読と手話で語る怪談」が舞台公演され、その時の収録映像が翌2018年４月、DVDとしてデフライフ・ジャパンから販売された。

私は「鍋島猫騒動」を語っている。その他、五十嵐由美子さんが「雪女」、佐藤八寿子さんが「耳なし芳一」、田中清さんが「番長皿屋敷」、菊川れんさんが「牡丹灯籠」を手話で語り、穀田さんが音声の朗読をしている。DVDが送られてきたので観たけれど、私自身の語りは、恥ずかしくて見られなかった。他の方は素晴らしい。これこそ日本手話だ。

手話語りの語り手たちとの交流

この「怪談」公演に一緒に参加した田中さんをはじめ、何人かの手話の語り手とのおつきあいはあるが、イベントなどで依頼された時に会う程度で、団体や組織に所属して一緒に活動しているわけではない。

2000 年代はじめに、数年にわたって「手話語りを楽しむ会」というイベントが D プロの主催により東京で毎年開催され、これを収録した VHS ビデオが数本販売された。この会を通じて、小泉文子、南田政浩、砂田アトム、牧山定義、河合祐子、米内山明宏、森田明、川島清、井崎哲也といった方々と共演した。この会がその後どのようになったのか、交流が途絶えたので詳しいことは分からないが、皆それぞれに手話普及のために社会活動などで活躍しておられる。

手話民話の語り部として伝えたいこと

はじめは、民話のようなものを〈聞いた〉ことのない、耳の聞こえない人たちに、こういうお話があるよ、ということを知ってもらい、楽しんでもらうということがきっかけだったと思う。皆さんに喜んでもらって、嬉しくて全国各地でやっていくうちに、「手話はろう者にとって欠かせない、大事な言語なんだ」ということを痛切に感じるようになった。

私の両親はろう者で、もし生きていれば 100 歳になる。両親から手話を自然に覚えた。そして私の娘にも手話を教えようとしたが、小さい頃は覚えようとしなかった。ところが就職して、私や私の母親（娘にとってのおばあちゃん）と同居することになってから、娘はおばあちゃんと手話で会話しようと努めた。最初は私が通訳をしていたが、やがて少しずつ表情が出てきておばあちゃんにもわかる日本手話が使える様になってきた。手話通訳者にならないかと勧めたところ、「私は通訳者にはならない。ろう者と一緒に活動したい」と言い、それから数年後、結婚相手として家に連れてきたのはろう者だった。

娘には２人の子ども（私にとっての孫）がおり、今８歳の女の子は耳が聞こえるけれど、４歳の男の子は聞こえない。息子の耳が聞こえないことがわかると、娘はより一層手話の勉強をして、手話通訳士の資格も取った。今では子どもたちも含めて家族全員、手話で会話をしている。両親から私へ、私から娘へ、娘から孫へと、４代にわたって 100 年、手話は受け継がれてきたということになる。これを大切にしたい。

・・・・・・・・・

そして、半澤さんは次のように締めくくられた。

手話は語るだけではなくて、想像したり、考えたり、夢があったり、今だったらビデオもあるから記録して残すこともできます。こういう素晴らしい言語を失くさないように、大切にしていきたいのです。手話は素晴らしいんだということを皆に理解してもらえるようにしたい。

今は人工内耳ができるようになって、手話よりも口話の方に力が入っています。でも私は、手話の素晴らしさを、両親から受け継いで一番よく知っています。手話はろう者にとって、ありのままの自分で生きていける、唯一の言語だと思っています。だから、一人でも多くの人に、「ああ、ろう者は素晴らしい言語を持っているんだ」ということを知ってもらいたい。「ああ、障がい者」「かわいそうな人」と見るのではなくて、「一人の、耳は聞こえないかもしれないけれども、違う言語を持っていらっしゃる人格者」「少数言語者」という感覚で見てもらえるように、これからも働きかけていきたいと思っています。

半澤啓子さん、どうもありがとうございました。



あぁ、結婚！

―婚活日記―

第22回

黒田長宏

＜2022年2月2日＞

25日締め切りではあるが、慣例通りに早く48号を提出した。これが私の性格である。なんでも早く終わらせたい。だが、人生は早く終わらせたくない。まだ実子も諦めきれない。そんな54歳。婚活は就学や就職よりも難しいと思う。（これって、前回から一箇所、7を8に変えただけじゃないか！）

＜2月14日＞

非常に珍しい事だが、某マッチングアプリでいいねしてくれた人が現れたが、その人のコメントには、子供が欲しい人は無理だというのもあり、一番影響のない方法は無言でブロックする事だと思っているので、そうした。もったいないことだが、私のほうは何百人いいねしてもマッチングしないのと、たまにマッチングしてからブロックして去っている人がいるが、今回の私と同じような気持ちなのかも知れないと思い、それががっかりくるので、いいねもせず、ブロックした。ここら辺がマッチングの冷たいような仕組みだが、最善がどうかはわからない。だが、自信が与えられる。それならば、
私もいいねしてきてブロックした女性たちに良い気持ちは与えたのかも知れない。

＜2月23日＞

某マッチングアプリで、交際する気がないのでコメント送らないでと来たのでブロックした。マッチングアプリの仕組み自体が結婚しにくい人には難しいので、新たなマッチングアプリの仕組みが開発されれば大金持ちだと思う。だいたい、大金持ちならマッチングアプリをしなくても結婚できるのかも知れない？だが、反応がない人がほとんどの中で、真面目というか、気持ちはある人だったに違いない？

＜3月15日＞

某マッチングアプリで久しぶりにいい

ね！でマッチングした人が来たが、どうなることやら。

＜3月30日＞

　某マッチングアプリで久しぶりにいいね！の人は消えてしまったような記憶があるが、その後アピール出しまくったら2人マッチングしたが、2人ともなぜか送信ブロックになっている。どうせなら全部ブロックしてくれ。ふと思いついて、相手の文章にボケたりツッコむことにした。
いくら応募してもずっと応募してもダメならば、お笑いのセンスを練習しようと思う。ウィル・スミスの
奥様をからかったようなコメディアンにはならないようにしよう。

＜5月8日＞

　来ないなと少し心配になっていたところ、編集長からのお知らせがきた。次の連休の初日に原稿を送らせていただこうかと検討している。
　某マッチングアプリでは、今日一人マッチングしたが、そこからストップしている。以前の別の人は、マッチしてもその後ストップが長引いていて反応もないので、ブロックさせていただした。このように、マッチングアプリなのに、マッチしてくださるだけで、その後の反応が全くないまま、成就しない場合が、私のような高年齢だったり、負けてしまう者にとっては、その永遠のように思える繰り返しである。なんだかとてもつまらない内容が続いているとは思うが、これが現実なのである。面白いのはドラマである。この実態は、ノンフィクションライターが取材してくれたりすると公に出たりするが、まず、なかなか公にはならない事だと思う。だから、
私は多くの認知されるチャンスに立たねばならない。だがそれも疲労する。この雑誌に書かせていただいていることは有難いことで、そしてこの時代、YouTube という切り札が現世界に出現している。
昨日、健康診断の結果で、肺に陰影があるかもしれないから、CT を推奨しますと書かれて、おまけに、以前からの中性脂肪と悪玉コレストロールの高いのに加えて、尿の窒素？も基準値より
高くなってしまった。その場合、赤字として数字が出ている。もっと人生が死と表裏だということを
実感していなければいけないのに。ただ、それに鈍感になっていることが、生きられる仕組みの
ようになっているのかも知れない。それどころではない。生死よりも性志とでもいうべきところを、
生きているうちに叶えたいものだ。あまりに結婚できない人があふれてしまっているらしいのだから。

＜5月12日＞

　今から原稿提出をしようと思う。某マッチングアプリは、相手からラインにしようと言ってきたのに、
　ラインに繋がる数値を教えたらなぜか相手がブロックしたまま、ラインもこない。その後、近場の25歳で、投資で莫大に

稼いでいて企業を始めるという女性のほうからいいね！がきたが、私はそういう実業に関してやる気がないし、年齢に差がありすぎるし、婚活目的なのだし、ブロックさせていただいた。その後、間髪入れずに、年齢的には30代後半だが、企業の社長をしているという人のほうからいいね！がきて、雑談ならいいと返信してみたが、反応がまだない。このようにマッチングアプリだとキツネにつままれたようなこともあったりするが、このところ、多様性とかグローバリズムとか言われてきたが、生活状況が違いすぎてついていけなさそうな、また詐欺ではないかというような、もっとマッチングアプリにせよ、仲人業界にせよ、そうした企業的サービスに婚活というのは、実際にそれでご結婚されて幸福にやっている二人もいるのだとしても、私には複雑化するばかりで、多様な男女がいるほどわけがわからなくなる気がする。昔の交通事情その他が発達していない頃の、同じ地域とか見合いとか、そういう結婚までの方法のほうがやりやすかったのではないか。

その後に、職場結婚が増加したかも知れないが、それだって、多様化によって、得手不得手が出てきてしまったのではないか。そして得意な人間は軽く騙しのような手口で、伴侶も見つかったら、不倫などの悪事も簡単に乗ってしまう女性まで見つけてしまうのではないか。その反面で、結婚したくても『比較』に負けてしまい、婚活だといくら参加しても負けてしまう人が出てしまっているのではないか。婚活は2位は成り立たないのだ。ひねって不倫という悪事のようなものだ。結婚は1位と1位の心底の永続的信頼でしか成り立たないのではないのだろうか。このように、いくら連載を続けさせていただいても、現状変化を起こすことができない。結婚できない。ただ、

YouTube の「婚難救助隊」という私の運営サイトの登録者が98人になり、増加の方向だということである。

〔PBLの風と土　第21回〕

自己と社会の関係性を市民性向上で醸成

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目には米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 有無よりも方針・状態を問う

年間4号刊行されている本誌「対人援助学マガジン」は、季節の変わり目ごとに実践と研究の今を見つめ直すと共に、春には本連載を始める契機となったデンマークでの暮らしを想い起こす契機をもたらしてくれる。コロナ禍など予想もしえなかった2017年、日本と比べたときに「デンマークでは」と言える独特の文化と、「デンマークでも」と場所が異なっても共通する風土などに触れた。特に、1974年の開学当初から全学で（Problem-Based Learningとしての）PBLを展開したオールボー大学に滞在したことで、地域社会における大学の役割に加えて民主主義を実現し国の未来を創造するカリキュラムの意義についても深めることができた。それらの原体験は、それから6年経ってなお、連載を継続させていただく確かな源流となっている。

一方、帰国して5年、日々の業務ではサービス・ラーニングを取り扱っていることもあり、PBLを題名に掲げた連載ながら、サービス・ラーニングに重点を置く回が増えてきた。立命館大学においては産業社会学部が提起してボランティアセンターが2004年に設置され、その後、学部での教学を横断して教育プログラムの企画・開発・展開・評価を行う共通教育推進機構が2008年に設置されたことでサービスラーニングセンターへと発展することになった。阪神・淡路大震災の際に学生主導での立命館大学ボランティア情報交流センターの設置・運営・解散というプロセスに携わった一人として、ボランティアという観点と正課科目との折り合いは必ずしもよくない、という印象をいくつかの場面で向き合ってきたことに加え、2006年から5年はは同志社大学大学院総合政策科学研究科にてソーシャル・イノベーションと掲げたコースで主に社会人の実践的研究の指導を行った身としては、母校での新たな展開にささやかな関心を向けていた。その背景には、1998年4月から京都地域の産官学地域連携組織「大学コンソーシアム京都」が各大学・学部が認めた場合には単位認定の対象となるインターンシップ・プログラムを事業として展開し、しかも筆者は中でもボランティア・NPO分野のコースの運営スタッフとして参画させていただいたことがある。

例えば、前回も紹介した図1を用いて「私」と「社会」との関わり方を問うことで、よりよい未来への想像力を高めていく契機が得られるように、筆者の観点では、PBLもサービス・ラーニングも、高等教育機関の教学の充実のために求められている方法論的特徴には一定の共通点があると

あなたと地域社会との関係について、最も適切な表現に○をつけてください（S=自分、C=地域社会）

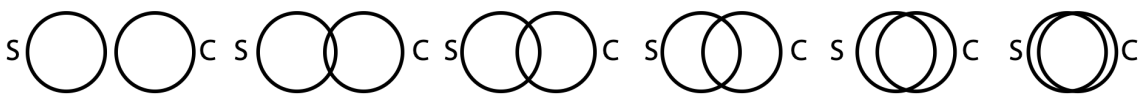


図1：自己内コミュニティ包含尺度（Inclusion of Community in the Self (ICS) scale）（Mashek et al., 2007, p.263、筆者訳）

捉えている。そのため、2021年度の本連載では、プログラムを展開する上で必要となる関係当事者間の関係性の構築という点に焦点を当ててきた。ここで重要となるのは関係の構築ではなく関係性の構築である。関係構築は誰と関係を構築するか、言わば「つくる／つくらない」あるいは「ある／ない」といった方針や状態の対置的な区別であるのに対し、関係性とは自己と他者にまつわる「集団内外の関係の性質」（山口, 2016）であるため「良い／悪い」「変える／変えない」などの価値判断や意思決定が自ずと伴うものである。

関係性の構築を重視するという方法論的な特徴に一定の共通点があるPBLとサービス・ラーニングとを比較した上で、その両者の理念に大きな特徴があるとすれば、PBLは現実の課題を愚直に探究していくのに対し、サービス・ラーニングでは学習者の学びと成長における規範的側面を重視し模範的な市民性の獲得に力点が置かれていることだろう。勘の鋭い読者なら、「だろう」と含み置きした理由は、「ことである」と断定できる確信が得られていないゆえの表現と受け止めてもらえるのではなかろうか。そこで連載6年目は、サービス・ラーニングにまつわる市民性の観点を連続的に掘り下げていく。その際、連載5年目の後半部分で展開した関係性に関する理論的枠組みも絡めることで、実践的な学びにおける質の問題をさらに深掘りしていく。

2. 市民性にまつわる政策動向から

市民性について、本連載では第10回で立命館大学でのアンドリュー・フルコ先生の講演を紹介する中で「市民性教育」の視点から少し触れた部分もあるが、まずは市民性とは何かについて、その定義を確認していくこととしよう[1]。とりわけ日本においては、2022年に高等学校で新たな科目として「公共」が開始となり、市民性にまつわる新たな動きが生まれているところである。この科目は2016年に導入された18歳選挙権の導入も背景として、いわゆる「主権者教育」の具体化として位置づけられているものである。このことは、2014年12月22日の中央教育審議会第96回総会で取りまとめられた「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」で掲げられた改革の「目指す未来の姿」に「国家と社会の形成者として十分な素養と行動規範を持てるようにする」（p.1）とあることからも確認できる。

主権者教育を市民性教育と関連づける上では、2016年5月16日に日本学術会議の心理学・教育学委員会（市民性の涵養という観点から高校の社会科教育の在り方を考える分科会）による「18歳を市民に―市民性の涵養をめざす高等学校公民科の改革―」の提言が参考となろう。ここでは市民性を「シティズンシップ」と併記した上で、「国家、社会を形成する主権者、政治的主体である市民の資質を指す概念であり、民主主義社会の担い手として、自らの専門性や職業以外の分野についてもアマチュアとして判断や意思決定に参加する資質を含む」（p.1）と定義している。そして、2002年から中等教育で市民性教育が必修化された英国でのcitizenship　educationを取り上げた上で、その政策推進の前提とされた「クリック・レポート」が紹介されている[2]。そして「経済産業省の「シティズンシップ教育宣言」（2006年）や総務省の「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書（2011年）など、日本におけるシティズンシップ教育の政策提言に直接的な影響を与えたものとして重要である」（p.4）と、日本にもたらした影響を分析している。

日本学術会議では、この2016年の提言に先立ち、2010年7月22日に「大学教育の分野別質保証の在り方について」と題した文書を発表している。そこでは市民性を「社会の公共的課題に対して立場や背景の異なる他者と連帯しつつ取り組む姿勢と行動」（p.28）と定義し、「各自が自身の専門性を積極的に活かして、他者と連帯しつつ公共性にコミットしていくことも重要であり、また職業人としての振る舞いも、こうした市民性に根差したものであることが望まれる」（p.38）と、市民性教育の意義を説いている。さらに、市民性教育の具体的な展開における参加型学習の必要性が示されており、「具体的には、ゼミ、セミナーなどの形態やPBL（Problem Based Learning）、サービスラーニングなどワークショップ型の多様な教育形態が挙げられる」（p.38）とあることからも、PBLとサービスラーニングが近接する方法論であることも確認できる。そもそも

この文書は文部科学省からの諮問に対する回答であり、この回答をもとに中央教育審議会が2012年8月28日の第82回総会において「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」が取りまとめられたことからも、高等教育の質保証は専門教育の先鋭化でもたらされるのではなく、市民性教育が重要な役割を果たすことが明確にされたものと捉えられる。

さらに遡れば、高等教育おける市民性についての言及は、2005年1月28日の中央教育審議会による「我が国の高等教育の将来像」に見ることができる。これは2001年の省庁再編を踏まえて作成されたもので、今後の社会における高等教育の役割として「21世紀型市民」を多数育成することが挙げられた。この「21世紀型市民」とは、「活力ある社会が持続的に発展していくためには、専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」と説明されている。なお、2018年11月26日の中央教育審議会第119回総会で取りまとめられた「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」でも「21世紀型市民」は改めて言及されており、前掲の説明を再掲しつつ、「文理横断的にこうした知識、スキル、能力を身に付けることこそが、社会における課題の発見とそれを解決するための学問の成果の社会実装を推進する基盤となる」（p.4）とあることから、1998年10月26日に大学審議会が「21世紀の大学像と今後の改革方策について」で示した「課題探求能力」の育成を重視の方針が市民性教育の根底として今もなお根付いていることがわかる。

3. 市民性教育がめざすもの

こうして政策動向を概括してみれば、市民性教育は狭義では主権者教育として展開され、広義では専門性に対する幅広い知識・スキル・態度の習得を通じた模範的な人格形成として整理できる。主権者教育の観点では、2022年度から高校での正規科目「公民」が開始となったものの、例えば前述の総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書（2011年）では、主権者教育を「集団への所属意識、権利の享受や責任・義務の履行、公的な事柄への関心や関与などを開発し、社会参加に必要な知識、技能、価値観を習得」（p.7）という市民性を育成する教育の説明に重ねており、市民性教育と主権者教育の親和性を見てとることができる。ちなみに「常時啓発」とは「臨時啓発」に対置する言葉で、選挙期間中のみならず選挙の浄化・投票参加の促進・政治意識の向上を図るために1954年から「あらゆる機会を通じて選挙人の政治常識の向上に努めること」（p.2）として取り組まれているという。そして前掲の報告書は、東日本大震災も踏まえ「時代に即した新しい『社会に参加し、自ら考え、自ら判断する』主権者の姿を念頭に」（p.1）議論を重ねたものを取りまとめた、とある。

少なくとも前項で述べた2016年5月16日の日本学術会議心理学・教育学委員会の分科会による提言「18歳を市民に」では主権者教育の取組事例として紹介した総務省による報告書は比較的理念が重視されている傾向だが、市民性教育の取組事例として紹介されている経済産業省の報告書では具体的に「社会との関わり合いを通じて、自分たちを守り、豊かな生活を実現し、自己実現し、また、よりよい社会づくりに参加するために必要となる多様な能力」を、意識・知識・スキルに分類して提示している。特にスキルについては「多様な価値観・属性で構成される社会で、自らを活かし、ともに社会に参加するために必要なスキル」として、「自己・他者・社会の状態や関係性を客観的・批判的に認識・理解する」、「情報や知識を効果的に収集し、正しく理解・判断する」、「他者とともに社会の中で、自分の意見を表明し、他人の意見を聞き、意思決定し、実行するためのスキル」の3つを挙げ、意識と知識の項目に比して、さらに詳述されている。その上で、今後の展開の方向性としては学校で展開される既存の教科学習（公的な正規の学校教育、いわゆるフォーマル・エデュケーション）に留めずに学校においても実践・参加を伴う非定性型教育（インフォーマル・エデュケーション）への拡がりをもたらすだけでなく、学校と地域社会との連携に加えて家庭内やNPOなどによる正規の学校以外で行われる教育（ノンフォーマル・エデュケーショ

ン）への拡がりも重要となる、と示されている（経済産業省, 2006, p.37）。

ここで市民性教育は国家的な政策によってのみ推進されるものではない、ということを前提にすべく、米国での高等教育機関における取り組みを紹介しよう。今回取り上げるのは、筆者が2021年度に担当した授業で用いたAAC&U（アメリカ大学・カレッジ協会）によるメタ・ルーブリックの1つ「市民参加」（表1）である。松下（2012）によればメタ・ルーブリックとは、「各大学で開発されてきた既存のさまざまなルーブリックをもとに（中略）専門家チームによって（中略）共同開発され、それが個々の大学・学科・科目の文脈にあわせてローカライズされる」もので「卓越性を競わせる」ものではなく「質の追求を促すもの」と整理している（p.89）。実際、筆者の授業では、「体験学習の循環過程を理解してより深い学びの姿勢を保つようになる」「異なる価値観を重視し対話的なコミュニケーションの環境を創造できるようになる」「社会的な課題の只中にいる当事者の立場を認識し主体的に尊重できるようになる」からなる3つの到達目標に対し、第12回目授業で受講生自身が体験前と体験後の自らの学びと成長を俯瞰的に見つめ直す契機と観点を提示し、自己評価の結果をもとに受講生どうしで体験の言語化を促すこととした。

結果として図2のとおり、「コミュニティと文化の多様性」「知識の分析」「市民的アイデンティティとコミットメント」「市民的コミュニケーション」「市民的行動と省察」「市民的な文脈/組織」の6項目に対して、概ね授業開始前より能力の向上がもたらされたと回答する傾向が見られた。筆者はコロナ禍の中での現場でのボランティア活動を通じて、教室やオンラインでは実感しえない自らの長所や短所を他者との関わりを経て自覚できた結果と受け止めている。無論、そうした濃密な体験で何も成長していないとは思いたくない、という思いから、相対的に知識やスキルや習慣が洗練された、と回答している場合もあろう。ただし、こうした評価軸が提示されることによって、シラバスで示した到達目標に対して自らがどこまで接近できているか、また受講後にもどのような能力維持を確認することができている。

4. 理想状態をめざしつつ日常を過ごす

連載6年目は市民性をテーマとしていくことを冒頭に記したが、今回は前回の結語に記したとおり、筆者が担当しているサービス・ラーニング科目での教育実践を事例も紹介した。そこから、筆者が参加型学習のスキルセットの構築に関心を向けていることについて、読者の理解が進んでいれば存外の喜びである。同時に、今回は既存のルー

表1：AAC&U 市民参加VALUEルーブリック 日本語訳（松下, 2012, p.110）

定義

市民参加とは、「我々のコミュニティの市民生活に変化をもたらすために活動し、その変化をもたらすための知識・スキル・価値観・動機づけを組みあわせながら伸ばしていくこと」である。それは、政治的および非政治的なプロセスを通して、あるコミュニティにおける生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）を改善すること」である（*Civic Responsibility and Higher Education* Thomas Ehrlich ed.,　Oryx Press, 2000,　Preface,　p. vi より抜粋）。加えて、市民参加には、個人的には生活を豊かにし、社会的にはコミュニティにとって役立つという意味において個人的・公的な重要性をもつ活動に参加するという行為も含まれる。

＊ベンチマークレベルのパフォーマンス（1 のセル）を満たさない作品事例にはゼロを割り当てること。

	キャップストーン 4	マイルストーン 3	マイルストーン 2	ベンチマーク 1
コミュニティと文化の多様性	コミュニティや文化の多様性の中で活動し、そこから学ぶことによって、自分の態度や信念を調整しているというエビデンスを示している。他者に多様性への参加を促している。	自分の態度や信念が他の文化やコミュニティの態度や信念とどのような点で異なっているかについて熟考している。コミュニティや文化の多様性から学習できることがらに対して好奇心を示している。	自分の態度や信念は他の文化やコミュニティの態度や信念とは異なっているという自覚をもっている。コミュニティや文化の多様性から学習できることがらに対して好奇心をわずかながら示している。	片寄った観点から個人としての態度や信念を表している。コミュニティや文化の多様性から学習できることがらに対し、無関心であるか抵抗している。
知識の分析	自分自身の学業／フィールド／学問分野から得た知識（事実、理論など）を、市民参加や市民生活・政治・行政機関への参加とつなぎ、さらにその知識を拡張している。	自分自身の学業／フィールド／学問分野から得た知識（事実、理論など）を分析し、市民参加や市民生活・政治・行政機関への参加と知識との間に関連性のあるつながりを作っている。	自分自身の学業／フィールド／学問分野から得た知識（事実、理論など）を、市民参加や市民生活・政治・行政機関への参加と、つなぎ始めている。	自分の学業／フィールド／学問分野から得た知識（事実、理論など）のうち、市民参加や市民生活・政治・行政機関への参加と関連性のあるものを識別し始めている。
市民的アイデンティティとコミットメント	市民参加活動での経験のエビデンスを提示し、市民的アイデンティティについての強く明確な感覚や公的活動への持続的なコミットメントに関して、自分が何を学んだかを述べている。	市民参加活動での経験のエビデンスを提示し、市民的アイデンティティやコミットメントの感覚が高まるにつれて、自分が自分自身について何を学んだかを述べている。	市民参加活動への参与は、市民的アイデンティティの感覚からではなく、期待やコースの要件から生じているということが、エビデンスによって示されている。	市民参加活動における自分の経験のエビデンスをほとんど提示しておらず、経験と市民的アイデンティティを結びつけていない。
市民的コミュニケーション	さらなる市民活動とのつながりを作るために、効果的に表現し、聞き、他者に合わせるためのコミュニケーション方略を作りあげている。	市民的文脈で効果的にコミュニケーションを行い、〈表現する、聞く、他者の見方にもとづいてアイデアやメッセージを作りかえる〉のすべてを行う能力を示している。	市民的文脈でコミュニケーションを行い、〈表現する、聞く、他者の見方にもとづいてアイデアやメッセージを作りかえる〉の一つ以上を行う能力を示している。	市民的文脈でコミュニケーションを行い、〈表現する、聞く、他者の見方にもとづいてアイデアやメッセージを作りかえる〉のうちの一つを行う能力を示している。
市民的行動と省察	複雑な（あるいは多様な）市民参加活動について、自立的な経験や、チームリーダーシップのイニシアチブがあることを示す。その際に、自分の行動の目標や遂行についての省察的な視点や分析を伴っている。	市民的行動の自立的な経験やチームリーダーシップがあることを示す。その際に、自分の行動の目標や遂行についての省察的な視点や分析を伴っている。	市民性に焦点化した行動（civically focused actions）にはっきりとした形で参加したことがある。また、これらの行動が、どのように個人やコミュニティのためになるのかを省察（あるいは論述）し始めている。	いくつかの市民的活動を体験したことはあるが、その目標や影響に関する理解の内面化や将来の活動へのコミットメントが乏しい。
市民的な文脈／組織（structure）	市民的な目標を達成するために、コミュニティの文脈や組織にまたがって（あるいはその内部で）協調的に働く能力やコミットメントがあることを示す。	市民的な目標を達成するために、コミュニティの文脈や組織の内部で積極的に働く能力やコミットメントがあることを示す。	市民的な文脈や組織に参加するための計画的やり方を識別する経験があることを示す。	市民的な文脈や組織で体験を行い、何が適しているのかを試している。

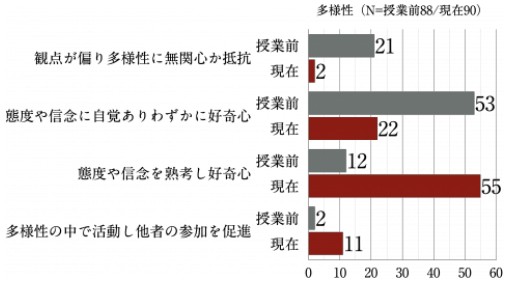
（注）訳出は蒋妍（京都大学大学院教育学研究科博士後期課程２年）による。

1．「現代社会」での「ボランティア」に関わって、あなたの市民参加のレベルは？

(1)コミュニティと文化の多様性

【授業開始前（2021年4月）】
1. 観点が偏っており、多様性に無関心か抵抗していた。…21人
2. 態度や信念に自覚があり、わずかながら好奇心を示していた。…53人
3. 態度や信念を熟考し、好奇心を示していた。…12人
4. 多様性の中で活動し、他者の参加を促していた。…2人

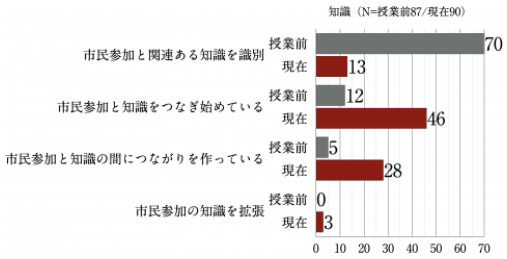
【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 観点が偏っており、多様性に無関心か抵抗している。…2人
2. 態度や信念に自覚があり、わずかながら好奇心を示している。…22人
3. 態度や信念を熟考し、好奇心を示している。…55人
4. 多様性の中で活動し、他者の参加を促している。…11人



(2)知識の分析

【授業開始前（2021年4月）】
1. 得た知識のうち市民参加と関連あるものを識別し始めていた…70人
2. 得た知識を市民参加とつなぎ始めていた…12人
3. 得た知識を分析し市民参加と知識の間につながりを作っていた…5人
4. 得た知識を市民参加とつなぎ、さらに知識を拡張していた。…0

【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 得た知識のうち市民参加と関連あるものを識別し始めている…13人
2. 得た知識を市民参加とつなぎ始めている…46人
3. 得た知識を分析し市民参加と知識の間につながりを作っている…28人
4. 得た知識を市民参加とつなぎ、さらに知識を拡張している。…3人

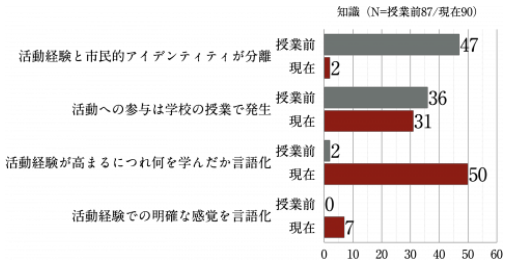


(3)市民的アイデンティティとコミットメント

※市民的アイデンティティとは社会における自分の存在や役割を自覚できていることです

【授業開始前（2021年4月）】
1. 活動経験と市民的アイデンティティを結びつけていなかった…47人
2. 活動への参与はコース（学校の授業）の要件から生じていた…36人
3. 活動経験が高まるにつれて何を学んだかを述べていた…2人
4. 活動経験で市民的アイデンティティの明確な感覚を述べていた…0

【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 活動経験と市民的アイデンティティを結びつけていない…2人
2. 活動への参与はコース（学校の授業）の要件から生じている…31人
3. 活動経験が高まるにつれて何を学んだかを述べている…50人
4. 活動経験で市民的アイデンティティの明確な感覚を述べている…7人

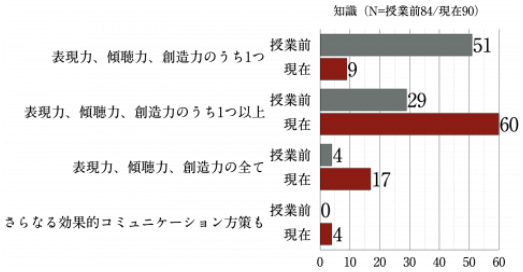


(4)市民的コミュニケーション

※表現力・傾聴力・創造力の3つは「表現する、聞く、他者の見方にもとづいてアイデアやメッセージを作りかえる」という記述でした。

【授業開始前（2021年4月）】
1. 表現力・傾聴力・創造力のうち一つを行う能力があった…51人
2. 表現力・傾聴力・創造力のうち一つ以上を行う能力があった…29人
3. 表現力・傾聴力・創造力の全てを行う能力があった…4人
4. さらなる効果的コミュニケーション方策を作りあげていた…0

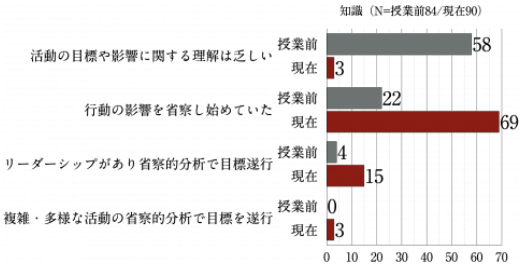
【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 表現力・傾聴力・創造力のうち一つを行う能力がある…9人
2. 表現力・傾聴力・創造力のうち一つ以上を行う能力がある…60人
3. 表現力・傾聴力・創造力の全てを行う能力がある…17人
4. さらなる効果的コミュニケーション方策を作りあげている…4人



(5)市民的行動と省察

【授業開始前（2021年4月）】
1. 活動体験はあったがその目標や影響に関する理解は乏しかった…51人
2. 行動がどう個人やコミュニティのためになるか省察し始めていた…29人
3. リーダーシップがあり省察的な分析で目標を遂行した…4人
4. 複雑・多様な活動でリーダーシップがあり省察的な分析で目標を遂行した…0

【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 活動は体験したがその目標や影響に関する理解は乏しい…9人
2. 行動がどう個人やコミュニティのためになるか省察し始めている…60人
3. リーダーシップがあり省察的な分析で目標を遂行している…17人
4. 複雑・多様な活動でリーダーシップがあり省察的な分析で目標を遂行している…4人



(6)市民的な文脈/組織

【授業開始前（2021年4月）】
1. 活動体験にあたり自分に何が適しているか試していた…59人
2. 活動体験にあたり自分と社会に何が必要か計画的に試していた…15人
3. 活動体験にあたり地域や組織に積極的に貢献していた…6人
4. 活動体験にあたり地域や組織に積極的・協調的に貢献していた…0

【現在（2021年6月29日～7月5日）】
1. 活動体験にあたり自分に何が適しているか試している…18人
2. 活動体験にあたり自分と社会に何が必要か計画的に試している…37人
3. 活動体験にあたり地域や組織に積極的に貢献している…24人
4. 活動体験にあたり地域や組織に積極的・協調的に貢献している…11人

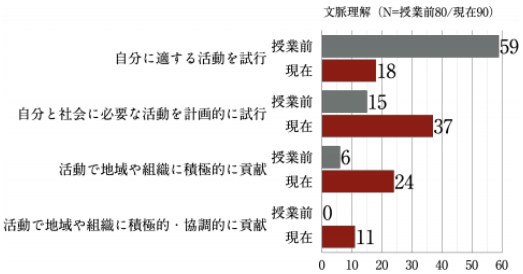


図2：2021年度立命館大学教養C群科目「現代社会とボランティア」GAクラス（衣笠キャンパス、秋学期）でのAA&CUのメタ・ルーブリックのうち「市民参加」を用いた自己評価の実施結果

ブリックをもとにまとめられたメタ・ルーブリックを用いることで、授業担当者としての固有の観点で学びと成長の意義を評価することを避け、地域参加型の授業における市民参加の意義を受講生自らが学びと成長の実感を評価するという実践事例を共有する機会ともなった。逆に言えば、このように専門家が既存のルーブリックをもとに導出したメタ・ルーブリックの存在とその活用は、教育の質が問われる時代に、授業担当者がどこまで評価観点と指標を提示する必要があるのか、という問いも浮上する。

ちなみに表1にあるように、AAC&Uのメタ・ルーブリックにおいて、市民参加とは、「我々のコミュニティの市民生活に変化をもたらすために活動し、その変化をもたらすための知識・スキル・価値観・動機づけを組みあわせながら伸ばしていくこと」と定義されている。教育者が学習者にこのような姿勢で学習と実践に取り組むよう促し続けることが大切であることは論を待たないが、ではそうした教育機会を提供する側にはどのような知識・スキル・態度が求められるのか、個々の点もまた重要な論点である。つまり、メタ・ルーブリックで挙げられた評価観点とその評価基準をスキルセットとして捉えてみたとき、授業を企画・運営する側に求められるスキルセットもまた、何らかの形で整理・確認しておく必要があるのではなかろうか。本連載で繰り返し言及しているサービス・ラーニングのSOFARモデルを引き合いに出すなら、到達・維持すべき能力の水準は学生以外にも、教員・職員・受入団体・地域住民にも提示・共有されていることが、市民生活をよりよいものへと変化をもたらす上では重要となる。

また、今回は筆者の担当している科目の教育実践の共有だけでなく、政策動向を概括するなどにより、PBLとサービス・ラーニングの相違点に着目すべく、市民性教育との関連度合いについても取り上げた。共に参加型学習の教育法であるものの、対置的に整理するなら、サービス・ラーニングが模範的な市民としての知識や能力や態度の習得をめざす市民性教育、PBLは探究心を駆り立てつつ高い水準を目指していく専門教育の具体的な展開方法と捉えられる。想い起こせば、筆者が6年前にデンマークのオールボー大学で触れたPBLは、2013年11月からはUNESCOにより工学教育の分野の取り組みに対して支援がなされている。安易に二極化するのは適切ではないことを承知の上で述べるなら、PBLは問題解決、サービス・ラーニングは問題発見、それぞれを志向する方が関係者の相互協力をより確実なものへと導くのではなかろうか。

そこで次回は改めて参加型学習を通じて関係者らが何を目指すのかついて改めて接近してみたい。連載第19回・第20回では、サービス・ラニングでは交流的（transactional）よりも変容的（transformative）な関係性の創出・維持・発展が重要であることを確認した。ここでの変容とは学習者の学びと成長のみを意味しない。よって、学習者のみに知識・スキル・態度を求めるだけでは、効果的なプログラムの展開は困難、という現実に改めて照射する。

（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

クリック．B. R. 他(著)、長沼豊・大久保正弘(編)、鈴木崇弘・由井一成(訳)．2012. 社会を変える教育 Citizenship Education～英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから～. キーステージ21.

Mashek, D., Cannaday, L. W., & Tangney, J. P. 2007. Inclusion of community in self scale: A single-item pictorial measure of community connectedness. Journal of Community Psychology, 35(2), 257–275.

松下佳代. 2012. パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて. 京都大学高等教育研究, (18), 75-114.

経済産業省. 2006. シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書. 三菱総合研究所.

山口洋典. 2016.「物語」と「関係性」からコミュニティ・デザインを捉える」『「コミュニティ・デザイン論研究」読本』大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所. 82-89.

【注】

[1] 本節および第3節は2022年5月29日に実施のJSPS科研費22H00671の助成を受けた研究プロジェクトにおいて、「市民性教育とは？私たちが目指す市民性教育×日本語教育について考える勉強会」で筆者が話題提供した内容をもとにしている。

[2] 「クリック・レポート」とは英国の政治学者バーナード・クリックにより1998年にまとめられたもので、日本語訳が2012年により刊行（クリックら, 2012）されている。本連載では次回以降に改めて取り上げていく。



（続々）こりの正体

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

きのう来られた患者さんの話です。
たまにマッサージ店で体をほぐしてもらわれます。
すると毎回お店の人に「こってますねえー」と言われるのだそうです。

「マッサージが必要ですよアピールをしてるのでは」と答えると、
「そりゃそうですね。こってないですよと言ったら、お客さん来なくなりますもんね」と笑っていらっしゃいました。

当院では、私のほうから患者さんに「こってますねー」と言うことはありません。

患者さんに心理的な負担を強いる言葉かけをしたくないという気持ちもあります。
また、患者さんは必ずしも、こっていることで困って来院されるわけでもありません。
それに、「こり」とか、「こっている」という言葉がさしているものは、みな同じではありません。

ですから、私から「こってますねー」と言うことはありません。

前回まで、筋肉が縮みすぎたこりと伸びすぎたこりについて説明しました。

筋肉が縮みすぎると、筋肉の中の細い繊維どうしが吸着し、縮みっぱなしになります。
筋肉が伸びすぎると、筋肉の中の細い繊維と太い繊維が離れてしまって収縮できなくなり、伸びっぱなしになります。
どちらも筋肉を包む筋膜がピーンとつっぱった状態になるので、筋肉が固くなります。
この二つがよくあるこりです。

さらに、それら以外のこりもあります。

こりとは何なのか、医学的・科学的な定義はありません。
本人または他の人が「こっている」と言えばそれがこりだと言っても間違いではありません。

筋肉にこり固まった部分ができたり、機能不全や不快を感じたりしたときに、人は「こっている」と言うようです。

ただ、人によってこりのイメージは違います。

中には「自分はこったという経験がないから、こりってなんなのかわからない」という人もいます。

こりを感じたことはないけれど、美容院などで「こってますね」と言われるので、どうやらこっているらしいと話される人もいます。

筋肉が固くなっているのに、こりを感じないという人がいる一方で、筋肉が柔らかいのに、こりを訴える人もいます。

筋肉が柔らかいのに、こりを感じるのは次のような場合です。

血流や神経の伝達が悪くなっていて、痛みやだるさが感じられるようなこり
肉体的または精神的な疲れで力が入らないようなこり
眼の疲れや心理的な緊張からくるこり
虫歯、副鼻腔炎、上気道炎、中耳炎など内科的な問題で生じるこり

縮みすぎや伸びすぎ以外で、筋肉が固くなっていてこりを感じるのは次のような場合です。

冷えて筋肉が固くなっているこり
長い間じっとしていたために筋肉が固くなったこり
筋肉をたくさん使ったあとに筋肉が膨張（筋肥大）し、固くなったこり
熱を持ったり、むくんだり、腫れたりして筋肉が固くなったこり

このように、こりにはさまざまなタイプがあります。

繰り返しますが、私からわざわざ患者さんに対して「こりがある」とか「こっている」とか言うことはありません。

ただ、患者さんが「こっている」とか「こりがある」と訴えていらっしゃるときは、「こっているのはここですか？」とたずねることはあります。

たとえこっているところがわかっても、「ここが固くなっていますよ」と客観的にお伝えするようにしています。

患者さんから「こってますか？」とたずねられたときは、「縮んで固くなっているのがこりだとすれば、たしかにこっていますね」などとお答えしています。

触診などをして体の状態がわかったときは、「ここととここが縮みすぎて固くなっていて、反対にここととこは伸びすぎて固くなっています」というような説明をさせていただいています。

こりの改善には、症状や原因に合わせて対応をしていくことが大事です。

例えば、次のような対応が考えられます。

冷えすぎた人には温める
熱疲労を起こしているような人には冷やす
むくんでいる人にはリンパを流す
腫れている人には圧迫する
血流の悪い人には胸郭出口症候群などに対する施術をする
神経の流れが悪い人には頸椎症などに対する施術をする
マッサージやストレッチ、筋トレをしすぎている人には中断していただく
運動不足な人には軽い体操をしていただく
ブロック注射を繰り返して悪循環に陥っている人にはそれを休めないか考えていただく

こりで多いのは、筋肉が縮みすぎたこりや伸びすぎたこりなのですが、こりにはさまざまなタイプがあり、それぞれ対応も変わるのです。

できるだけ客観的にということも大事ですが、最終的に大事なのは、患者さんの言葉、患者さんの感覚・主観です。

患者さんが「こってるんです」とか、「こりで困っているんです」とかおっしゃっているときは、「施術してみて、筋肉は柔らかくなったようですが、こりのほうはどうですか？」と質問することはあります。

そのとき「こりはなくなりました。もうこっていません」という答えが返ってくれば御の字です。

患者さんと話すときは、次のような点に注意しています。

患者さんの言葉をできるだけ理解し、できるだけそのまま使う（オウム返し）

補足したり整理したりするのは良いこともあるが、勝手な解釈や、価値判断を加えないようにする

専門用語は使わず、できるだけだれにでも伝わりやすい言葉を使う

これらの注意点は、心理面接の仕事をしていたときに学んだものです。

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑳　『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまい社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。つまり、**「地域域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、(望まない)「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で

「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということというタイトルで問題提起をさせていただきました。

今回は、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、第 19 回で**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について述べさせていただきたいと思います。

今回登場する事例は私が経験した事例を組み合わせたものであり、意見にわたる部分は私見であることを申し添えます。

1　対人援助場面でよく耳にする言葉～「だって家族だから当たり前」

対人援助の仕事に従事されている方であれば、「だって家族だから当たり前」という内容の言葉を一度ならず耳にしたことがあるのではないでしょうか。

例えば、こういった場面でこの言葉は使われます。

・金員の要求を行う時

・各種トラブルへの対処を家族に依頼するとき
・施設退所等にあたって引受けを家族に依頼するとき
・日常的なケアを要する状態に到った際、家族がそれを担う事態となったとき

また、この言葉は、家族同士だけではなく、援助職から家族に対して（表現の方法は様々あるにせよ）「依頼」などの形をとって投げかけられることもあります。

・受診の際などに当然のように同伴を要求される（しかも家族が日程を調整するだけの暇（いとま）もないし、そもそも考慮もしてもらえない）。
・時間を問わない様々な依頼ごと。
・本人が疾病ベースで述べる様々な要求事を「頼まれたから電話しています」という形で、ケアチーム内でのアセスメント（これを行うことが当初のルールとされているケース）なしでそのまま家族に伝えること（時間問わず）。

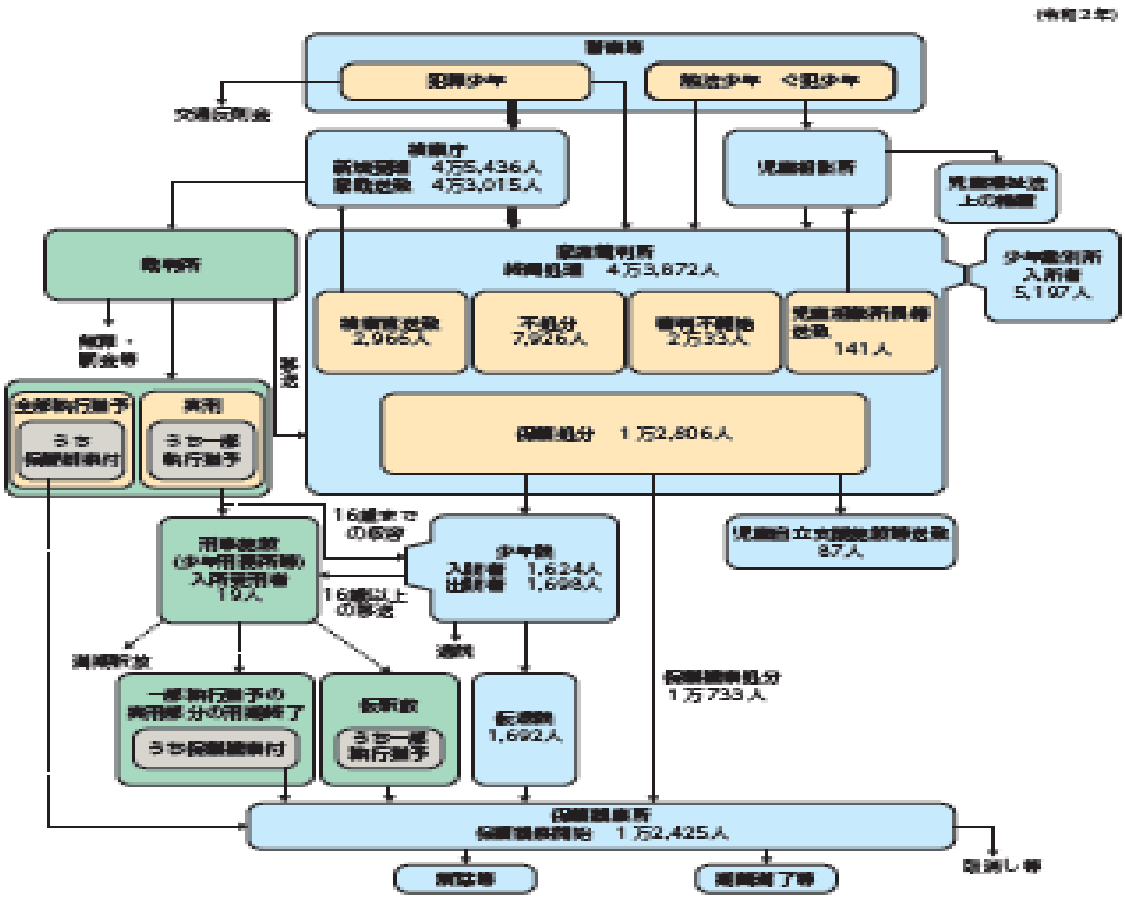
私自身は、家族成員同士で行われる「だって家族だから当たり前」よりも、援助職が家族、特にケアを担っている家族に無自覚にこうした言動を行っていないか、一度自らの援助の在り方を考える必要があると近年強く感じるようになりました。

社会的な問題をテーマに精力的に映画を撮り続けているケン・ローチ監督の映画『家族を想うとき』（原題は『Sorry　We Missed You』、つまり宅配便の方が配達先不在時に置いていかれる「御不在連絡票」のこと）では、家族の幸せ（マイホーム購入）のために宅配便のドライバーとして個人事業主となったものの、こなしきれないノルマ、ぎくしゃくする家庭に心身をすり減らしていく主人公に対し、長男の非行により司法機関から呼出しに応じなければならない場面があります。長男の将来を決める重要な呼出しであり主人公も何とか対応しようとするのですが、「だって授業員だから」休まずノルマをこなすのは当たり前、「だって家族だから」子どものために親として呼出しに応じるのは当たり前、という状況の中で主人公である男性は、職場と家族の間でまさに心身を引き裂かれるような苦しみを味わいます。私はこのシーンを、ある意味自戒を持って反芻することがあります。

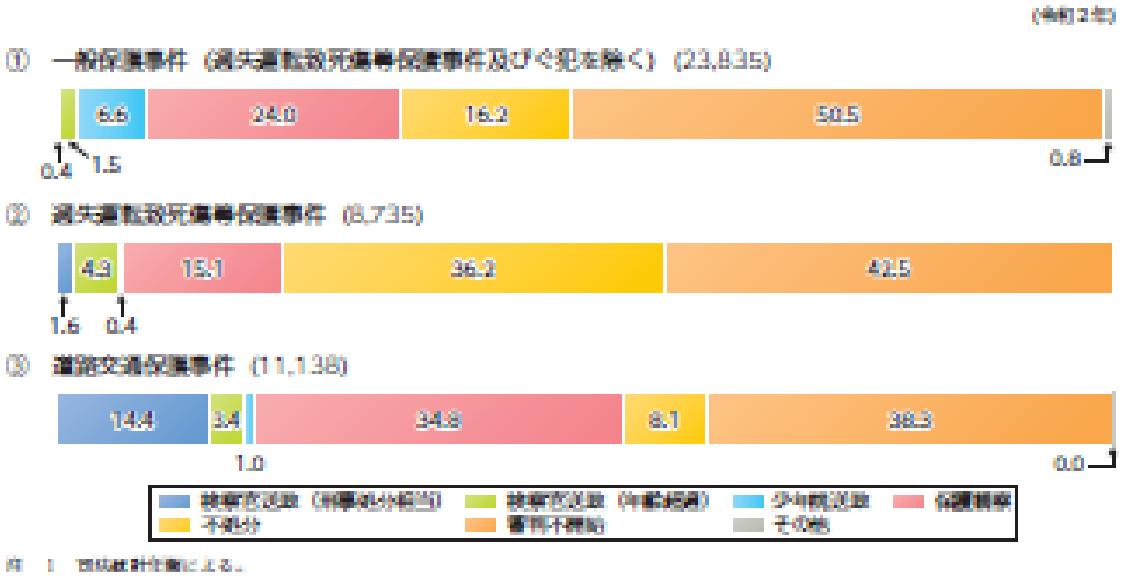
保護観察処遇においては、保護者の仕事・体調等にも配慮しつつ、面接その他の場面に来ていただくこともあります。私自身は「お仕事でお忙しい時に御時間を割いていただき、ありがとうございます。」といった労いの言葉をかけることを忘れるないように心掛けています。それでも、「本人の問題であらゆる機関からこうした呼出しを受けることが重なり、派遣社員としての働く自分は、この月の収入はいつもの半分以下になってしまいました。契約の更新も最早危うい状況です。」「家族だから、親だから子どものために今動かねばどうするという気持ちは無論ありますが、他の子どもたちにまで影響を与えるような生活困窮に陥っている現状で、どんどん余裕がなくなっていきます。」という言葉を聞くこともあり、家族がどのような思いで自分の子どもの立ち直りのためにこうした面談に応じる時間を工面されているのか知ることも少なくありませんでした。

非行に関しては、家庭裁判所の段階で処分が終了するケースが 7～8 割を占め（審判不開始・不処分）、保護処分（少年院送致、保護観察処分、児童自立支援施設等送致）に至る少年は決して全体数の中では多くありません（下図参照）。

非行少年処遇の概要（令和 3 年版犯罪白書 117 頁）



少年保護事件終局処理人員の処理区分別構成比　令和 3 年版犯罪白書 122 頁

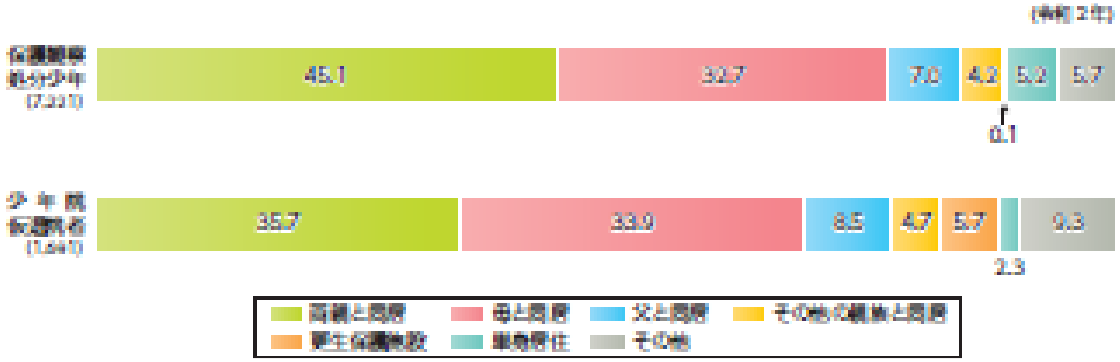


そして、保護者や家族は、我が子の非行そのものや、そこに至るまでの生活態度の悪化とそれに対応することによって生ずる疲弊感や仕事や家庭生活への影響、家庭裁判所の審判に至るまでの諸手続への対応等で、「保護処分の決定」にたどり着くまでの過程において少なからず消耗し

ている場合もあります。

今自分の目の前にいる御家族の「家族歴」とでもいうものを十分にアセスメントし、家族の置かれた状況に思いを致すことが重要ではないでしょうか。親世代や少年のきょうだいに保護処分歴があるなど、ある意味「慣れ」ている保護者もいないわけではありませんが、多くの保護者は我が子が少年保護手続に「乗る」ことにより、「保護者が果たすべき役割」をそれぞれの段階で果たすことを求められます。たとえば、「少年を再び家庭に受け入れることができるか」という家庭裁判所調査官からの問いかけに対して、本当は自信が全くなくても、「ここで『できない』と答えれば、我が子が少年院送致となる可能性もある。」と考えるかもしれません。これは通常であれば家族にとって非常に辛く大きなストレスであることは想像に難くありません。保護観察処分が見込まれる少年で、処分決定時までに自宅以外の受入先を探すことは事実上非常に困難であり、実際に保護観察処分少年の多くが家族・親族のもとに戻っています。少年院送致少年が更生保護施設や福祉施設等に帰る少年が一定数いることと対照的であるといえます。対して、少年院送致となった場合は、在院中に生活環境の調整を行い、家族・親族の引受けが難しい場合は、更生保護施設や福祉施設の帰住の調整を着手するなどして、少年院仮退院後の生活場所の確保に力が入れられています。

少年の保護観察開始人員の居住構成比　令和３年版犯罪白書 144 頁



2　家族の歴史に思いを至すと「家族だからあたり前」と安易に求めることがいかに家族に負荷をかけ、その後の援助を困難にするかわかる

家族の在り方は様々であり、我々援助専門職の前に立ち現れる家族には、それぞれに家族の歴史を背負っています。しかしその歴史に目を向けることなく、「家族に求められる役割」（それも社会的に容認されている標準的なもの）だけを家族に求めることは、家族に対して大きな負荷をかけ、その後の援助を困難にすることがあります。場合によっては、ひとつの家族や家庭を援助職自身が無自覚の上で潰してしまうこともあり得ると考えます。

かつてこの連載で、「だって家族だから当たり前」という持論のもとで、自身の子どもやその配偶者に過大な要求をしてきた親世代は、実は子どもに対する激しい虐待歴がありました。親世代には後に精神疾患があることが判明しましたが、自身の疾病を受け入れる気持はなく、治療反応性は芳しいものではありませんでした。子ども世代は複数いましたが激しい葛藤の後に「絶縁」という形で親世代から断絶したり、何とか踏みとどまった子ども世代にも様々な支障が発生するなどしていました。たった一人踏みとどまった子ども世代である実子（男性）は、愛情よりも倫理観で何とか事態を打開しようとしましたが心労で健康に支障を来し、病院受診やケア会議への

対応は実子の配偶者（女性）が全面的に担っていました。彼女の話を聞く機会がありましたが、精神保健福祉士としてこうした難しいケースに業務上日々対応することで積み上げられたスキル以外に、彼女を支えていたのは、「私自身も嫁いだ後に夫の親世代から暴言や暴力を受けたことは数多くありますが、成育過程でそうした経験に晒されたわけではないわけではないので、実子である配偶者と比較すると、ストレスは少ないはず。」と自身をコントロールして支援場面に臨むことだったそうです。ただ、そうした彼女であっても「だって家族だから当たり前」という援助職の対応については、同じ援助職として疑問を呈さざるを得なかったといいます。勤務中に着信があり、周囲に断って慌てて出てみると、「利用者様が希望されるので、シャインマスカットを至急 3 粒送ってください～。」という援助職からの電話であった時にはさすがに力が抜けるような気持ちがしたといいます。彼女はこれに対し「生ものの差し入れなどは原則禁止と聞いていますので、当方ではそれを遵守したいと考えています。」と伝えた上で、「現在の嚥下の状態でブドウは難しいのではないでしょうか。」「こうした情報を施設内できちんと共有していただきたいです。」と伝えた上で、「『利用者様』と呼び、その要求を安全性等を考慮せずなんでも受け入れることが、パーソンセンタードではないと考えますが」と言い添えて電話を切ったそうです。必要な物品については施設責任者と連絡をとり整えていく一方で、「物を多く持ち込みすぎる」ことで発生しがちなトラブルを避ける方針で動くよう努めていた矢先のことだったといいます。その後施設長を交えて話し合いを再度行われたとのことですが、「だって家族だから当たり前」という考えは、家族自身より、援助職の方の言動にそれが窺われることがもっと消耗するということも実感したといいます。

対人援助に関わる者は、援助対象者本人の生育歴に目をむけることは通常行うと思われますが、家族歴（家族全体の歴史）に目を払うことも留意が必要だと考えます。「跡継ぎとして過剰な期待を受けていた子」「しつけという名のもとに体罰が正当化されていた家」などには特に注意が必要だと私は考えます。

また「よそ様に迷惑をかけない」という考え方が強く、家庭内だけで問題を解決しようとする家族、「私の一生は●●（この子の更生、介護等の言葉がここには入るでしょう）に捧げる」という言葉が発される家族、介護離職を行ってまで老親の介護を敢行しようとする家族については、介護を行う上で発生する様々な課題の抱え込みに留意する必要があります。

下記は、私が過去のこのコーナーでも示した図表ですが、今回のテーマにも関連が使いと思われ、再度データを提示させていただきます。

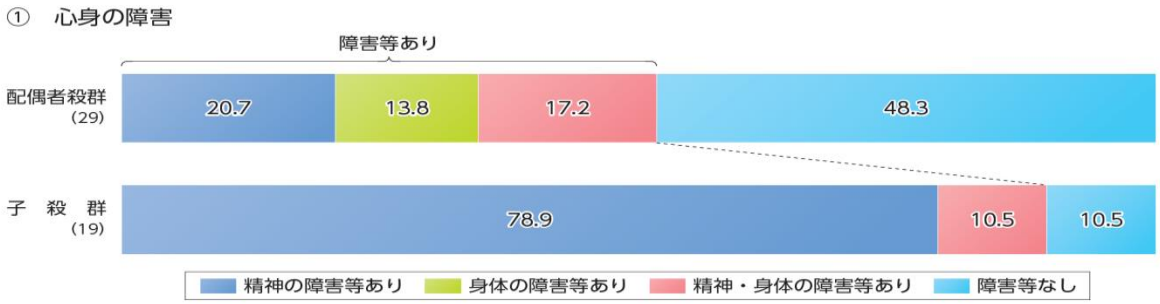
参考：「29 人と 19 人」この数字が示すもの（平成 30 年版犯罪白書より）

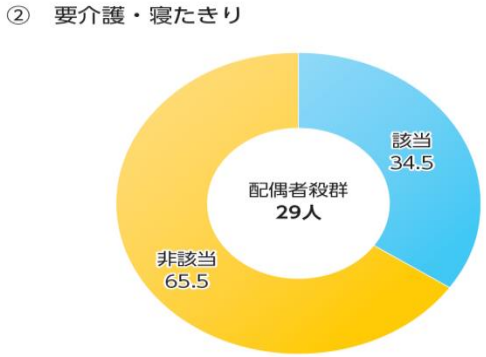
平成 30 年版犯罪白書の特集は「進む高齢化と犯罪」でした。法務総合研究所によって行われた特別調査の結果が特集部分に掲載されていますが、その 1 つに「29 人と 19 人」という数字が出てきます。ここではこの「29 人と 19 人」という数字が示すものについて考えたいと思います。（以下参考及び文献出典　平成 30 年版犯罪白書（法務総合研究所）

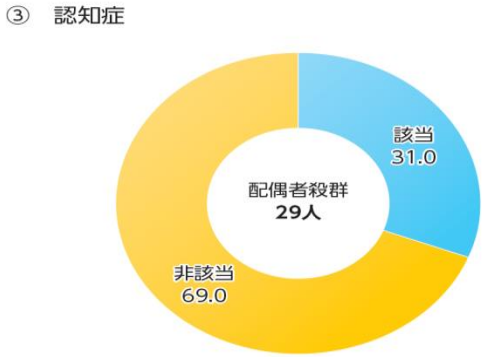
平成 30 年犯罪白書　特集「進む高齢化と犯罪」　特別調査Ⅱ　殺人

調査：殺人事犯者と被害者との関係別構成比を比較したところ、高齢群では、親族殺が約 7 割だった（非高齢群では 4 割）。そして**「29 人と 19 人」とは、上記調査対象となった高齢群（殺人事犯者）のうち「配偶者殺群＝29 人」「子殺し群＝19 人」**

ということを示している。



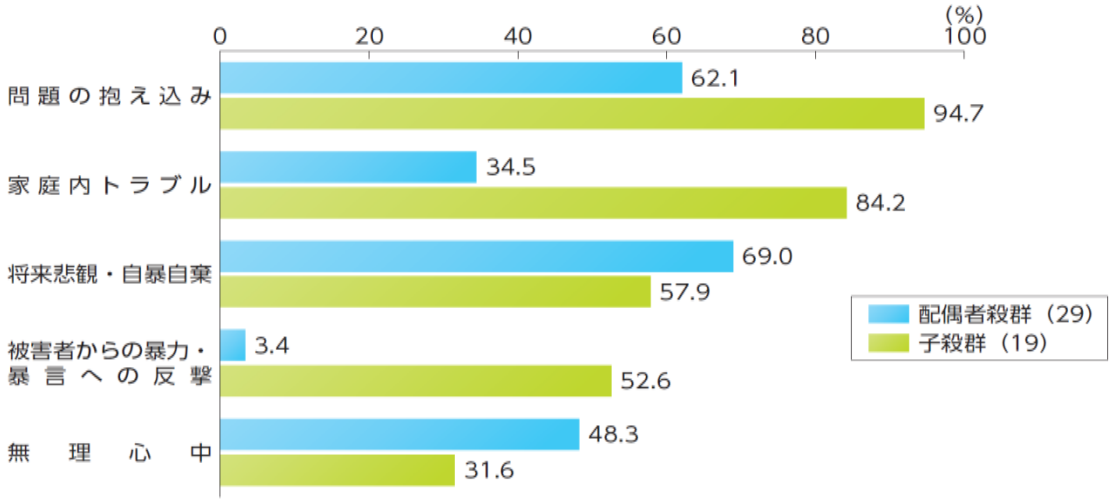




高齢・配偶者殺群の特徴：被害者が精神・身体の障害等を有する割合が約 5 割、要介護・寝たきり／認知症の状態にある割合が約 3 割であった。

高齢・子殺群の特徴：被害者が精神の障害等を有する割合が約 9 割。動機・背景は、約 9 割に問題の抱え込みがあり、過半数に被害者（子）からの暴力・暴言への反撃がある。

高齢殺人事犯者の犯行動機・背景（配偶者殺・子殺別）



課題と対策（平成 30 年版犯罪白書に掲載されたもの）

要介護・寝たきり、認知症を含む精神・身体に障害を有する配偶者に対する殺人の防止⇒実情を共有することなどにより地域の福祉・医療の協力を要請

子に精神の障害があり、問題を抱え込む高齢者に係る高齢者に係る家庭内殺人（子殺し、親殺し）の防止⇒少年鑑別所の地域援助等専門的知見を有する機関の活用

3　援助職自身が自分や自分が生活している地域の価値観や性別役割分業にどのような影響を受けているか振り返る。

私事になって恐縮ですが、私はこのマガジンの編集長である団先生のもとで「原家族を見つめる」というセッションに参加したことがあります。その頃は実母の在宅介護生活もある程度落ち着き、職場では中堅と呼ばれる頃になっていました。

ただ、介護保険導入時に母の在宅介護がスタートしたため、当時の混乱を利用者家族としてそれなりに経験し、援助職としての「家族観」が自身の成育過程の影響を受ける可能性があること、そして、それに対してより自覚的でないと、より良い家族介護も、何よりより良い対人援助業務もできないと感じた所以です。

私の母は昭和一桁生まれの人であり、「家庭をしっかりと切り回し、男性を立てること」が女性に求められる資質であるという考え方があり、私にもそれを望む節がありました。一方で、私は一人っ子でもあるので、将来自分が老いた時の面倒や家や墓守りについて恃みにする言葉も折々に発するのでした。こうした一見矛盾する親世代からの期待は子ども世代を混乱させることもあると往々にしてあると思いますが、私自身は幸い周囲に相談できる方がおられたこともあり、介護と仕事の両立については比較的早い時期に腹をくくっていました。それでも、自分の成育歴などが援助職として働いていく上でどのような影響を与えているのかじっくりと見返す機会が欲しいと感じたのです。

結果的には3日間のセッションに参加したことで、自分のなかでの「育ち」「家族観」などを見つめる機会になりました。何よりもその後各地を異動（転勤）していくなかで、その地域における問題解決システムとしての家族・家庭、期待される性別役割分業をあり方を見極めながら、対人援助業務を進めていくことについて自覚的であろうとするという学びを得たことが最大の収穫だったと思います。

繰り返し申し述べますが、「だって家族だから当たり前」という言葉・態度・考え方について、対人援助職は常に自覚的でなければならないと強く思う昨今です。

参考文献

平成 30 年版犯罪白書

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

迫　共（比治山大学）

⑯ アイ’ム ホーム

石坂啓さんの『アイ’ム ホーム』（上下巻,小学館,1999）は、家族とは何か、高次脳機能障害について、また中途障害者、つまり人生の途中で難病や交通事故などで障害を負った人たちの生き方について考えるきっかけを与えてくれる作品です。1999 年の文化庁メディア芸術祭大賞受賞作で、木村拓哉さん主演のドラマにもなった作品です。

銀行マンの家路久が自宅についたとたん、雨が降りはじめた。「なんでこんなにためてるんだ、洗たくもの。だから毎日やっておけってのに、カオルのやつ」。庭に干してあった洗濯物を、久は急いで取りこみ、湿り具合がちょうどよさそうだとアイロンをかけ始める。そこに中学生の娘、スバルが帰ってきた。濡れた髪と服をタオルで拭くスバルは、久が自分の下着にもアイロンをかけているのを見て大声をあげる。「なんで人んちで、こんなことしてんのよォ!!」

「…人んち？」「オレの家だろ？」と戸惑う久。スバルは「別れた妻と娘の家でしょ」と返す。

混乱する久を見て、スバルはつぶやく。「あの噂ホントーだったんだ…半年前の事故、単身赴任先で七輪でモチ焼いて一酸化炭素中毒。低酸素状態で脳に酸素がいかなくって、目がさめたらヘンになっちゃってたって」。

（上巻「ホーム１　思い出した家」より）

主人公の久は、離婚して家を出たのでした。妻とスバルと三人で過ごした家は「慰謝料がわり」として妻に引き渡したもの。スバルに最後に会ったのは一年前の誕生日でした。

久は事故で記憶が欠落しており、たびたび手帳のメモに頼っています。最寄駅から自宅へ

の帰り方、まわりの人間関係などの他、日々あったことを手帳にメモして見返していますが、別れた家族のことは忘れており、幸せだった日々の記憶だけが残っていたのです。

久は「自分の家」に帰ってきたつもりだったのですが、その家に住む元妻と娘は、久が記憶を失う前に傷つけ、分かれを選んだ相手だったのです。おまけに元妻は再婚して新たな三人暮らしを始めています。そこにいきなり上がり込んでしまったのです。

久はスバルに謝り、現在の家族のもとに帰ることにします。しかし久は、現在の家族を「本当の家族」とは感じられなくなっています。

事故で入院していた久のそばには同居していた妻のヨシコ、息子のヨシオ、義理の両親の四人が付き添っていました。意識を取り戻した久は家族を見て驚きます。四人全員がひきつった笑顔の仮面を被っているように見えたからです。それから半年がたっても仮面を被っているように見えるままで、家族の区別すらつかないのです。

スバルは久を「まだらボケ」と言います。記憶が部分的に欠落しており、過去の記憶が点々と残ってしまい、間を省略して現在につながっているようです。周りの人たちは記憶を失う前の久の言動をもとに久に接するのですが、久にはその脈絡が読めません。

「高次脳機能障害」は、事故などによって脳に損傷が生じることによって起こる障害です。新しいことを覚えることが難しくなったり（記憶障害）、注意力が低下したり（注意障害）、何気ない動作が困難になる（失行症）、よく知っている人の顔を見ても誰だか識別できない（失認症）等の症状が見られます。久のように、性格の変化が起こる場合もあります。

「高次脳機能障害」の当事者の中には、一見、社会生活が問題なくできている人もいます。身体障害のように他人から見て分かりやすい障害ではありません。また本人としても、自分の障害を受け入れにくい場合があります。

久は鍵の束を持っている。これまでに住んだ家、関わってきた人たちの家の鍵だ。かつての親友、山野辺の記憶を辿りながら、彼が一人暮らしをする安アパートを見つけ、あがり込む。

山野辺は学生時代に映画論を戦わせた相手だった。今も映画を撮る夢を追って貧乏暮らしを続けている。

久は山野辺に、事故で記憶をなくしたことを告げる。なぜ離婚したのかも、なぜ再婚したのかも分からなくなったと。「自分がこの五年間、何やってて何考えてたか分からないなんて…まるで他人の人生を抱え込んでるみたいだよ」。

「五年前か…オレが結婚しようかどうしようか、迷ってた頃だな」と山野辺。「どーしたんだ、それで」と久。

「別れた。自信家の有能なサラリーマンに寝取られちまってさ」「彼女、結局そいつと結

婚しちゃったよ」。山野辺は付け加える。「なあ家路…人間、思い出さねー方がいいってこともあるかもよ」。

「終電で帰る」という久に、別れ際、山野辺は言い放つ。「なんかホントに感じが変わったな」「おまえって自信家で有能なサラリーマンだったから…」。

（上巻「ホーム４　友人の家」より）

事故後の久は、過去のことがわからず、自分の状態がつかめず、不安感もあるためか、謙虚で弱気な人物です。周りの人たちの言葉の端々から、どうやら事故前の自分は元妻と娘を捨てたらしいこと、親友の彼女を寝取って再婚したらしいこと、仕事はよくできたらしいことなどが分かってきます。

事故前の久は、とんでもなく嫌な人間だったようです。優秀でやり手だった久は、「俺はできる」という記憶をもとに社会的成功者としてのアイデンティティを生きてきたのでしょう。しかし、過去の記憶を失った事故後の久には、どれもこれも現実感のないお話のように感じられます。

他者から眼差される久のイメージは、その相手が見た「過去の久」の記憶がもとになっています。現在の久と過去の久、他者から眼差される久はすべて違うものですが、社会生活をする以上は、誰しもがそのいずれにも折り合いをつける必要が出てきます。私たちは皆、それぞれに自分のそれぞれの記憶と、他者の眼差しとの間で、バランスを取っています。

人間の自我とは、実際には記憶の束でしかないのかもしれません。その束がほどけてしまうと過去の出来事どうしのつながりが見えなくなり、現在との脈絡が覚束なくなってしまいます。

ある人の記憶が「正しい」と認めてもらえるのは、まわりの人の記憶と比べて、ある程度以上の共通性があると思ってもらえたときです。でもこの共通性というものも、実はあやふやなものです。

「まだらボケ」の久の記憶よりも若くてしっかり者の娘・スバルの記憶の方が、より多くの人の記憶との共通性があるということは言えます。ですが、どちらがより「正しい」と言うことはできないのではないでしょうか。

スバルの記憶の中での久は、「この人はお父さん」「お母さんと離婚した人」「別の女性と再婚した」「今は別の家族と暮らしている」といった一連の連なりになっています。ですが、これであっても彼女の身近にいる人たち全員が、一斉に同意しなくなると、途端に「正しい記憶」ではなくなってしまいます。

少なくとも、元妻とスバルと一緒に住んでいた家に勝手に上がり込んだ久にとって、その時点での現実は「ただいま、帰ったよ」で間違いなかったはずなのです。

過去の自分の言動が分からなくなったとすれば、もし仮に過去のふるまいを責められたとしても、その意味が分かりません。理不尽なことをされたと感じ、怒るかもしれません。でも責める側には責める側の理由があります。両者に共通性がないとすれば、私たちは何をもとに判断すればよいのでしょうか。

久には自分が出て行ったはずの家、元妻と娘と三人で過ごした記憶の場所が、「自分の戻るべき場所」のように思えて仕方がなくなってしまいます。認知症になった人たちも、過去に過ごした「あの人」との「あの場所」にもどることを切望することがあります。

記憶は美化されたり、細部が省略されたりするものですが、本人にとっては強いリアリティがあります。私たちは、記憶の束を手掛かりに、愛着のあるもののもとへたどり着こうとします。愛着が満たされれば安心してしまいます。

周りからすると「現実ではない」「本当ではない」ことだったとしても、科学的には「脳の誤作動」だったとしても、そこに人間の人間らしさがあるのかもしれません。

世の中には社会的成功のルートを最短距離で駆け抜けていく優秀な人がいます。しかしゆっくり走ることで見えてくるものもあります。ときに優秀な人が見落としていたものがあり、ゆっくり走らないと見えないものもあります。

社会的成功や優秀を追い求めることも大事ですが、そこからこぼれ落ちることではじめて見えるものもあります。社会福祉を学ぶ私たちにとっては、どちらも大切です。

紹介作品：石坂啓（1999）『アイ’ム ホーム 上・下』小学館

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考サイト：国立障害者リハビリテーションセンター「高次脳機能障害を理解する」
http://www.rehab.go.jp/brain_fukyu/rikai/　（最終確認 2022.05.13）

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 18～

＜児童福祉司の必需品＞

杉江　太朗

～警察官はかっこいい～

警察官は子どもの憧れの職業である。トミカでもパトカーは人気だし、ポリスステーションなるおもちゃも発売されている。児童相談所の公用車がトミカになって発売されるなんてことはこの先ないだろうし、「児童相談所ステーション」なんてものがおもちゃとして登場することは想像も出来ない。

私も、仕事で警察官と出会うが、確かにかっこいいと思うときがある。そしてそれは、本庁勤務の警察官ではなく、交番勤務のお巡りさんの方が余計にそう見える。その理由を考えると、やはり、あの服装や、腰回りの銃や警棒や手錠など、いわゆる「The 警察官」という恰好をしているからだろう。

ということで、警察官の格好にあこがれた私が、この仕事を続ける上で、持っておくと便利な物について紹介をしていこうと思う。

～懐中電灯～

暗くなった事件現場、工場の跡地など、警察官がすっとどこかから懐中電灯を出し、先を照らす場面がイメージできるだろうか。広くて照らすというより、ポイントを絞って照らすもので、細いフォルムのものが良い。持ち方は、当然あの持ち方である。（小指が照らす方を向く）テレビの見すぎと思うかも知れないが、実際に一緒に訪問した際に、暗くて見えない表札に向かって、警察官がそうやって照らしたのである。

次の日、私は懐中電灯を買いに行った。長さ 15 センチくらいで、ポケットに収まるサイズである。家庭訪問に行って、表札が見えないときや、暗い中で地図を見るときなんかに重宝している。さらに、職場に戻るのが遅くなり、もう既に皆が帰宅してしまった真っ暗な職場に入るときにも便利である。この先、事件現場を照らすような体験がないことを祈っている。

～メモ帳～

警察官が聞き込みをするときに持っているようなアレです。これもポケットサイズを持ち歩いていると、ふとしたときにメモが出来て便利。ペンともセットで持っておく方が良い。私は、メモ帳のペー

ジが開きやすいようにそこにペンを挟んでいる。聞き込みをするということはほとんどないが、家庭訪問した先で、立ち話しているときにもすぐに出せるし、例えば車のナンバーとか、洗濯物が干されているかとか、玄関の周りの様子などをメモするときにも、カバンの開け閉めする間もなく、すっと取り出し、さっと書ける。ただ、メモ帳そのものを落とさないように注意が必要である。この前、警察官に出会ったとき、その警察関がメモ帳に紐をつけて落とさないようにしていたのを見た。なるほどと思い、真似をしたいと思ったが、その紐の先はどこに繋がっていたのであろうか。制服などない私の職場。そのまま洗濯してしまわないか心配になった。

～日傘～

警察官は、良く、電柱の陰で容疑者の動きを見張っている。警察ドラマでは良く見られる張り込みの場面である。あんパンと牛乳が必須。児童相談所ではどうかと言えば、実は、張り込みをするということがたまにある。それでもまぁ、テレビで見る警察ほどではないにせよ、夏場は暑い。訪問するときに、駐車場が近くにあれば良いが、少し歩かないとダメな場合など、炎天下で歩くことによる熱中症の心配もある。そこで役に立つのが折り畳み式の日傘である。すっと取り出し、ばっと開く。それだけで日陰を確保することが出来る。家庭訪問した先で、「もう少しで帰ってくると思います」「ちょっと待ってもらえますか」と言われ、家の前で待たなければいけない状況でも、少しは体力の温存に繋がるかもしれない。警察の人は張り込み中、暑くないのだろうか。

～アルコール除菌～

この辺りから、警察とは関係がなくなってくる。私は、手ピカジェルをリュックのチャック部分につけている。このご時世、家庭訪問をしたとしても、新型コロナウイルスを懸念され、訪問を快く受け入れてもらえない場合がある。また、感染予防の観点からも、いつでも除菌が出来る状況というのは必然であろう。家庭訪問をした先で、中々水道を借りるわけにはいかない。しかし、親が少しその場を離れ、尚且つ赤ちゃんが泣いてしまったときなどに、急に抱っこするような場面もあるかもしれない。そんなときにさっと消毒が出来ると、１００％ではないだろうが、そのまま触れるよりかは安心ではなかろうか。

私は、チャイムを鳴らす前に除菌を行い、玄関を開けてもらうまでの間に、アルコールを手に擦り込むようにしている。そんなことをしながら、少しでも感染対策に繋がればと思っている。そしてこれは、あまり言いたくはないのだが、敢えて擦り込む姿を家主が玄関を開けるタイミングで行うようにしている。これは、除菌

をしています、これだけ感染対策していますよというアピールも兼ねているのかもしれない。

～スマートフォンを車で見やすくするためのアレ～

名前がわからないが、車のクーラーの通気口にぶっ刺して、スマホを固定するアレである。私の職場の車にはナビがついていないため、スマホが必須である。当然、スマホを持ちながら運転するわけにはいかず、どこかに固定をしたいが、仮に落としてしまったときには、事故などにも繋がりかねない。私は性格的に、運転中に何か物を落としてしまうと、なくならないとわかってはいながらも、気になって仕方がない。そのことに気を取られ過ぎると事故にも…。そのために、スマホを固定して、ナビのように使えるとそのリスクを軽減することが出来る。えっと、名前は何というのであろうか。

～デジタルカメラ～

このご時世にデジタルカメラを持ち歩く人は少ないのかもしれないが、仕事中、私は、何か写真に撮りたいと思った場合、スマートホンではなく、デジタルカメラで撮影するようにしている。スマートホンダと便利で、確実に持っており、さらに画質も良いというメリットが多いのであるが、個人情報を含む写真を一時的であったとしてもデータで保存することが不安なので、データを空にしたデジタルカメラを使用し、職場に戻ったらデータを移行するか、写真で打ち出すかなどしてデータを保存しないように心がけている。

～便せんと封筒～

訪問した際に留守の可能性がある。施設に子どもに会いに行ったが出会ってもらえない場合もある。そんなときに役に立つのが、便せんと封筒である。ちなみに、封筒は職場の住所や電話番号が書いた公用のものと、無地のものを準備している。公用の封筒の方が、折り返し連絡をもらったり、誰からの手紙なのかわかりやすいとは思うのだが、封筒に児童相談所と書かれていることで、気分を害してしまったり、児童相談所からの手紙が届いたと他の家族に見られたくなかったりするかもしれない。なので２種を準備している。便せんは、持ち歩くことを忘れてしまったり、カバンの中で折れてしまったりすることもあるので、白紙の用紙を常にファイルに挟んで持ち歩き、便せんの代わりにすることもある。

～翻訳アプリ～

これは、持ち物ではないが、スマホにインストールしておきたいものである。私は日本語しか話せない。それでも仕事から外国籍の方に出会うこともある。そんなときに常に通訳の方と同行できるかと言えばそうではない。また、中学、高校、

大学と英語を扱ってきたもののほとんど話せないように、私が話せるようになることを目指すのも無謀である。そんなときに役立つのが翻訳アプリである。私は、Google 翻訳をインストールしている。たいていの外国語に対応しているので便利であるし、あらかじめ使う言語がわかっている場合は、翻訳アプリをスクショしたものを印刷し、相手に伝えたいことをその方の言語で見せて、その反応を見ることもできる。

～とにかく楽しむこと～

仕事は楽しんでナンボである。普通の懐中電灯を使うより、警察官が持っているような懐中電灯を、あたかも警察官のように使う方が楽しいに決まっている。今回、扱った物は、あってもなくても、それほど大きな影響を与えるものではないだろうが、少なくともそれを持つ児童福祉司である私は、この仕事を辞めずに続けられているのである。当然、ここに出た物を持ったからといって、持った皆かがそれぞれの仕事を続けやすくなるかと言えば、そうではない。しかし、殺伐と仕事を続けるくらいなら、こんな風に、自分の持ち物でその空気を少しでも和らげる工夫をしてみてはどうだろうか。私の、対人援助学マガジンでのテーマは『余地』である。物事には「余地 - 遊び」が必要である。仕事の質を高めるため、仕事のモチベーションを上げるため、出来るところから始める１つとして、自身の持ち物に遊びという余地を加えてみてはどうだろうか。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

革靴 —16 歳—

♪♪♪

松岡園子

「忘れてた……」

部屋に入ったゆりの足元には、襟に折り目がしっかりと付いた白衣が畳んで置かれている。ゆりの働く給食会社では、月曜から使っていた白衣を毎週土曜に持ち帰って洗濯することになっている。

ゆりは帰宅してすぐに自分の部屋がある 2 階に向かったが、白衣を見つけると 1 階に駆け下りた。日が長くなってきているから、夕方の 6 時でも窓からの光で階段を進むことができる。台所の明かりを確かめて、戸をゆっくりと引く。

「ただいまぁ、白衣、洗ってくれたん？」

「明日、持っていくんと違うの？」

ダイニングテーブルの前で粉薬の袋を口元にあてていた夏子の手が止まる。

「そうやけど」

今日の日曜スクーリングのことが気になっていて、朝のうちに白衣をリュックから出すのを忘れていた。頼んでなかったのに。1 年前の夏子の姿からは考えられないことだ。

ゆりと夏子が 2 人暮らしになったのは、祖父と祖母が立て続けに亡くなった 5 年ほど前からだ。その頃から、夏子が誰もいない部屋で独り言を話すようになった。ゆりには見えない誰かと話すこと以外、何もできなくなってしまった夏子と、小学校を卒業したばかりのゆりを見かねた親戚は、神戸で暮らしていた 2 人を奈良の自宅へ引き取った。まもなく、ゆりは児童養護施設に入所し、夏子は様子をみて入院するかもしれないと聞かされた。夏子と離れて暮らすことへの同意ができないまま、児童養護施設へ入所したゆりだったが、夏子と暮らしたい一心で施設を数回抜け出した。その後の話し合いの末、夏子と神戸の家へ戻ってくることができたが、独り言を話し、家事もできなくなった夏子との生活は大変なことが多かった。親戚から見放されるような形で戻ってきたため、身内に頼ることはできなかったが、地元の友達やその家族、近所の人達が支えてくれたおかげで苦しい状況を乗り切った。ゆり

は中学卒業後、働きながら定時制高校へ通う道を選択し、夏子も福祉作業所に通うようになり、大変だった状況も落ち着いてきたように感じていた。
「学校はどうやった？」
　空になった薬袋を半分に折り、椅子から立ち上がった夏子と目が合う。いつもより、背筋がまっすぐ伸びているように見える。
「今日は体育があってん。なんか日曜スクーリングがあったら、休む間ないわ」
　ゆりは、夏子が座っていた椅子の向かいに腰かける。
「その分１年早く卒業できるんでしょう？」
「そうやけど、忙しいわ。通信制ってレポートもあるし」
「4 年でもよかったんと違うの？」
　夏子とこういう会話をしていると、5 年前のことが嘘のように感じられる時がある。同じ人なのに、こんなに変わるものなんだろうか。その日調子が良いか悪いかと毎日恐れていたことも、幻だったように感じられる時がある。それとは対照的に、今の自分の生活を自分で選び、創ってきたことは生々しく感じられる。
「3 年で卒業がいい。通信制の単位を合わせたら、定時制でも昼の子と同じ時に卒業できるし」
　１年でも早く卒業したい。卒業して、もっと働きたい。
　中学生の時よりも選択肢が格段に増えた気がする。働くかどうか、どこでどれだけ働くか。学校に通うかどうか、何を勉強するか。
「全然、家におらんよなぁ」
　昼の仕事と夜の学校、日曜のスクーリング。中学校の時みたいに、気分の落ち込んだ夏子のことが心配な時があっても、家に居られないことも多い。でも、なんとかなっている。
「あ、昼間にね、屋根の修理した方がいいって言う業者の人が来たのよ」
　夏子の声が低くなった。
「え？　なんて？」
「屋根を見させてくれって言うから、上がってもらったんやけど、傷んでるところがあるらしいのよ。修理してもらおうかと思って」
「で？　どうしたん？」
「仮契約書にサインしたよ」
「いくらかかるん？」
「50 万ぐらいかかるって」
「えー！　それは高すぎるんと違う？」
　こめかみのあたりが熱くなる。
「ちゃんと調べたん？　すぐサインしたらあかんって！」
　自分の声が大きく乱暴になっているのがわかる。
「でも、すぐに修理が必要って」

「実際に見たん？　連絡先教えて」

夏子が隣の部屋から白い封筒を持ってきた。中のクリアファイルには、確かに金額が書かれている。さっきは熱かったこめかみが、今度は氷を当てたようにしびれてくる。時計を見ると、もうすぐ7時になるところだった。

「工務店か。もう閉まってるかな、明日かな」

ゆりは、受話器を取り、書かれている電話番号を指でなぞりながらボタンを押していった。契約書にサインをしたから、もう決まってしまうのだろうか。払わなくてはいけないのだろうか。ボタンを押す手が震える。

呼び出し音が3回、4回、5回……と耳の奥で鳴り続ける。あと1回鳴らして切ろうかと思った時に、呼び出し音が途切れた。

「あ……今日、屋根の修理で来てもらった吉田です」

「あー……はいはい、吉田さんね、どうしました？」

想像していたよりも高くて細い、男性の声がした。

誰も電話に出ないと思っていたから、次の言葉が出てこない。

「えっと、母が契約書にサインをしてしまったっみたいなんですけど、ちょっと病気で……。よくわかっていないと思うので、契約を取り消すことはできますか？」

背中にじわりと汗を感じる。怒られるんじゃないだろうか。太鼓をたたいているように胸で大きな音が鳴っている。

「え？　病気なの？　ちゃんと話してくれたけど」

「ちょっと……自分で考えるのは難しいんです」

なんて説明したらよいのかがわからない。夏子だって今は回復してきているのだから、話している工務店の人も違和感を感じなかったはずだ。それなのに、子どもの声で電話をしてきた自分の話を信じてもらえるのだろうか。

「そうなの？」

沈黙が30秒ほどあったように思う。

「他に話ができる人はいないの？」

こんなこと、誰に相談するんだろう。誰かに相談して決めてもらうことなんだろうか？周りの人の顔がまぶたの裏に思い浮かんでは消える。考えているけれど、言葉が出てこない。早く何か言わないと。

「うーん、まあ……そっか、わかりました。じゃあ、今回は契約をいったん取り消しますから、お話できる人がいたら、こちらに電話もらえます？」

ため息の混じったような困ったような声に聞こえたが、取り消しますという言葉で、ゆりの頭の中にあった大きな塊がすっと溶けたような気がした。目の前に覆いかぶさっていたグレーのカーテンが一気に開かれ、白い光が差し込んできた。

「すみません……」

受話器を置くと、ゆりは吐く息とともにその場にへたり込んでしまった。膝の内側から冷

たさが伝わってくる。背中の向こうからは、夏子の視線を感じる。
「取り消してくれるって」
　ゆりは背中を向けたまま言った。
「屋根は大丈夫なの？」
「わからんけど、今のところ、何も困ってないやん？　たまたま通りがかりで来ただけやと思うし」
「そうかな……」
「これからは、修理の人とか、セールスの人が来たら『家族に相談します』って言って、いったん帰ってもらうようにしたら？」
　夏子は調子も回復してきてまともに話ができるようになったが、何でも信じてしまったり、恐怖心があおられて、お金がかかることでも契約してしまうのでは困る。
「昼間、私は家におらんしなぁ……」
　ゆりはしばらく工務店の契約書を見つめていた。
　セールスの人が来て、夏子がひとりなのが困る。来た時にもうひとり誰かがいたら……。
「あ、そうや」
　座り込んでいた台所の床を勢いよく押して立ち上がると、ゆりは玄関の方へ向かった。外はもうすっかり暗くなっている。木製の下駄箱の扉をスライドさせ、1 番下の段をのぞくと、黒くて大きな革靴の先が顔を出している。引っ張り出して甲の部分に息を吹きかけると、ふわりと埃が舞った。持ち上げると、見た目よりも重い。
　ゆりは革靴を、たたきの真ん中へ置いた。
「それ、お父さんのよ。　出しとくの？」
　背中の方から夏子が訊く。声の大きさから距離を感じる。
「これ置いといたら、家に男の人がおるって思われるんと違う？　この家に女 2 人だけって気づかれん方がいいやん」
　おじいちゃんが守ってくれるって。
　お金を稼げば増える。働いてお金を増やすことは楽しい。
　でも、稼いでいるだけではダメなのか。
　お金を守ることをしなければ、一瞬で無くなってしまうことだってある。お金持ちになりたいわけじゃない。でも、お金が無いことで、誰かのお世話になったり、言いなりになったりするのはもう嫌だ。
　そうやんね、おじいちゃん。
　ゆりは、革靴の内側の縁を左右いっぺんにつまみ、夏子の青いサンダルの横に置き直した。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。
　実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第１７回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

――きょうだい間移植(1)　姉の病苦を知らなかった弟の罪悪感　――

一宮茂子

1．はじめに

家族社会学では、生体肝移植のドナーは自発的意思で家族愛の名のもとにとドナーになると指摘しています［武藤 2003］。本稿の事例も同様に、家族愛と自発的意思でドナーになったのですが、生体肝移植は、それだけでは治まらないさまざま問題が術前、術後、それ以後も次々と顕在化する大きな出来事として語られています。

本稿の事例は弟から姉へのきょうだい間の移植であり、両者はともに結婚して家族がいました。弟は自発的意思で姉のためにドナーを決断したのですが、妻にはドナーを決断するまでのプロセスを一切知らせず、相談もせず、ただ「姉のドナーになる」ことの結果、結論しか伝えませんでした。妻は幼子をかかえた状況で、夫に万が一の事態がおこる可能性がゼロではないため、今後の生活が不安だったと思われます。そのため夫がドナーになることをめぐって移植前から夫婦喧嘩が絶えず、夫婦関係に亀裂、摩擦、軋轢が生じて、その後はある意味夫婦間では触れてはいけないアンタッチャブルな出来事として移植前から移植術後、何年にもわたって続くことになりました。

本稿では移植前、移植術後、移植後数年以上経過した時間軸において、ドナーである弟とその家族の関係性、レシピエントである姉夫婦とその家族の関係性、両親など移植にかかわった人たちの関係性や生き様を、複数回に分けて分析して紹介します。

2．事例紹介

血液型がＢ型で弟である宏さん（仮名：30 歳代）は、妻と幼児２人の４人家族で関東地方に居住していました。血液型がＢ型の姉（40 歳代）は、夫と思春期の子ども３人の５人家族であり、九州地方に居住していました。両親は高齢ですが健在で四国地方に居住していました。このように移植にかかわる家族はそれぞれが遠方に住んでいたのです。姉は肝臓がん術後に再発して余命が今年いっぱい（９ヶ月）と告知を受け、死の恐怖と不安をかかえひとり苦悩していました。その影響で姉夫婦も家族も関係性が悪化し、思春期の３人の子どもたちは荒んでいきました。宏さんは遠方に居住していたこともあり、このような姉家族の状況をまったく知らなかったのです。再手術予定の話がでたとき宏さんは姉家族を訪問して、その変容を目の当たりにして驚いています。宏さんは、姉家族を立て直して元に戻す責任を感じて自ら申し出たのが生体肝移植ドナーでした。姉の夫はＡ型のため血液型不適合となり当時の医療水準では移植できなかったのです。その後、きょうだい間

移植の話はトントン拍子に進んだのですが、宏さんは妻に「姉のドナーになる」ことを独断したうえで、その結果しか伝えませんでした。宏さんは、妻は姉のドナーになることに反対できないと考えていたのです。なぜならば余命告知をうけた姉の救命には、移植しか選択肢がなかったからです。そのためドナーを独断した宏さん夫婦間に軋轢が生じ、移植後も長年にわたって修復困難な関係性が続くことになりました。

3. 〈勝ち組〉である姉家族の破綻

宏さんは遠方に住んでいた姉家族を次のようにイメージしていました。姉夫婦はともに医療者同士で結婚しました。結婚後の夫は医療者として高収入であり現役ですが、姉は退職して家庭にはいりました。結婚後は 1 戸建ての家を建てて、3 人の子供にも恵まれました。そのため宏さんは、姉家族は「絵に描いたような幸せな家族」との語りから、姉家族は宏さんの自慢の家族だったと思われます。しかし、姉が肝臓がんになり家出をして、夫婦の絆が途切れ、子ども達がすさんでいく様子を見ると、宏さんから見た姉家族は「成功した家族であり、幸せな家族であったはずが、目をつぶると音を立てて崩れて行っているというのが分る状況」になっていたのです。

4. 長男である弟としての責任

宏さんは姉家族が遠方に居住していたこともあって、これまであまり訪問する機会もなく、姉家族が破綻している状態になっていることは全く知らなかったのです。そのため宏さんは 2 人きょうだいの弟ですが、長男として責任を感じていたのです。それは以下の語りからうかがうことができます。

> 宏さん：「自分が姉を元気づけてやらねばいけない。もとの生活に…もどす何らかのことを自分がやらんとイカン。このままいくと当然（姉は）離婚して、家族がバラバラになる。姉は世捨て人になって、どこかで死んでしまう…ここで何とかしとかないと…という気持ちがどこかにあった」

その後の宏さんは、姉の夫と連絡をとりながら姉の治療に積極的に参加するようになりました。

5. 家族を巻きこんだ姉の病状と苦悩

姉は母子感染により B 型肝炎のキャリア(1)であることが 20 歳代で判明していました。40 歳代になった姉は、肝臓の病状が進んで肝臓がんとなり手術を受けました。自ら文献を調べてその後の経過を把握した結果、「肝臓がんは、たとえどのような治療法を選択したとしても、全く再発を認めないで経過することは非常にまれであることが、周知の事実となっており、他の消化器癌に比し根治性に乏しい特徴を持っている」ことがわかりました［是永 2003］。

(1) キャリアとは肝炎ウイルスを体内に抱えている状態をさします。

このようなネガティブな情報を知り得たことが姉に悲観的な感情をもたらしたと思われます。そのため肝臓がんになったという現実を知ったときの姉は「前向きに生きるのをやめて過去に戻っている」ように宏さんには見えたそうです。なぜならば、姉は「なぜ自分ががんになったのか」「がんになったのを発見できなかったのはなぜなのか、それは夫の責任だ」というようにがんになったことを受け入れられず怒りを感じていました。その後の姉は、がんの再発の不安におびえながら自分のことで精一杯で家出をしたのです。たぶん姉はひとりになって、精神的にゆっくりできる場所が欲しかったのでは？と思われます。

姉が家出をしたため、母親は 3 人の子ども達の世話のため四国から九州に泊まり込みでやってきました。宏さんや姉の夫や両親は、家出した姉の行方がわからず心配して探し回っていました。そのうちに姉の居所がわかり、宏さんは訪ねていきました。その当時、家族全員が姉をまるで〈腫れ物〉に触るような扱いをしていたため、弟である宏さんは「人に迷惑ばかりかけて心配ばかりかけてナニシトルンヤ！！」と姉の言動をきつく諫めたのです。姉は「私の気持ちがわかるはずがない」と反論して喧嘩になりました。また父親も四国から出て来ていたので、宏さんは家出した姉にたいして「親父もなんか言え」と説教したところ「俺の気持ちがわかってたまるか」と父親とも喧嘩になったそうです。喧嘩はよくないとわかっていても、宏さんの語りからは、家族がこうして喧嘩したのも家族の皆が姉を気遣っていることの証しだと思えます。

6. 肝臓がんの再発にたいするインフォームド・コンセント

肝臓がんの手術をしてから 1 年後、姉が最も恐れていた肝臓がんが再発していることがわかりました。宏さんは、それまでの姉が肝臓がんの再発を恐れながら、さまざまな苦悩をひとりで抱え込んでいたことを知ったため、今回は姉のそばで一緒にインフォームド・コンセントを受けるつもりで参加していたのです。

この席上で、医師は「明日は手術をするのではなく化学療法（抗がん剤投与）で頑張っていきましょう」との説明だったため、姉は手術ができないほどがんが進行していると捉えて錯乱状態となりカンファレンスルームを飛び出しました。部屋に残った宏さんは医師とのやり取りで、今後の姉の治療方針は化学療法だと理解したうえで姉の余命を聞いたところ「長くて今年いっぱい（約 9 ヶ月）」と知ったのです。宏さんは、はじめて姉の治療は延命治療として化学療法を行うと認識したのです。このような治療方針について姉の夫は当然知っていましたが、宏さんや姉には言えず秘匿にしていたのです。

錯乱状態になって部屋を飛び出した姉は、「人を恨み、憎むしかなく、感謝という気持ちの余裕は全くなかった」と宏さんは語っています。しかし、もしかして自分が姉のような立場におかれたら、負の感情を爆発させて葛藤から解放されるような行動をとったかもしれません。これは心理学で「カタルシス効果(2)」と言われていますが、その後の姉はな

(2) カタルシス効果とは、マイナスの感情を口に出すことでそれらの苦痛が緩和され、気持ちが軽くなる現象のことです。

んとか落ち着きを取り戻したのです。

7．実母の苦悩

この場面で「精神的に一番辛かったのはおふくろかなぁ」と宏さんは語っています。なぜならばB型肝炎である母親から生まれた姉は、B型肝炎ウイルスに感染してのB型肝炎のキャリアになっていたことを、母親は知っていたからです。そのため母親は娘がB型肝炎から肝臓がんになって手術後に再発して苦悩している姿をみると、母親として責任を感じて、いたたまれない気持ちになったと推察します。この時点で母親ができることと言えば娘夫婦や子どもの育児、家事の世話がほとんどだったと思われますが、四国から泊まり込みできた母親の家事介入は娘の夫や子ども達には、これまでは姉である母親が家に不在であったことから、いつにもまして心強い味方になったと思われます。

8．弟がドナーになった理由

再手術のインフォームド・コンセントで姉の余命は9ヶ月と告知を受けました。これまでの宏さんは、1回目の姉の手術の時はインフォームド・コンセントにも同席しなかったし、術後の経過も語っていません。その姉にたいして弟であり長男としてその役割を十分果たしていないことを自覚していました。宏さんは九州から関東へ帰路につく飛行機のなかでいろいろ思いをめぐらせた結果、姉の治療は延命のための化学療法ではなく、根治療法として移植治療ができないか、それには自分がドナーになれないか、と考えて義兄（姉の夫）に電話で尋ねたのです。

宏さんは、医学的知識は皆無でしたが、「移植」という言葉は知っていました。しかし、ドナーの肝臓は一部取り除いても再生することは知りませんでした。また移植には血液型が重要でした。移植が開始された当時は血液型一致移植か、適合移植[3]しか行われていませんでした。義兄自身は血液型が全く異なる不適合移植[4]になるためドナーを断念していたのですが、その結果を宏さんは聞いていなかったようです。その義兄が「誰がドナーになるのか」なんて絶対言えないことだと宏さんは認識していたのです。宏さんきょうだいの血液型はともにB型でしたので血液型一致移植となります。義兄の医学的知見により「ミラノ基準」もクリアして宏さんがドナーとなって姉に移植することは可能であることがわかりました。ミラノ基準 とは肝細胞がんの治療において 肝移植 が適切かを判断する基準の一つです。 1996 年にイタリアのミラノ国立がん研究所の研究チームが発表しました。肝細胞がんに対する肝移植では、「肝臓のがんが一つなら直径 5 センチ以下」または「がんが 3 個以内で直径 3 センチ以下」の場合、肝移植が適当としています。わが国の保

[3]適合移植とは、問題の少ない血液型の組み合わせの移植である。具体的には血液型がO型→A/B/AB型、A/B/O型→AB型の移植である。

[4]不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植であり、具体的には血液型がA/B/AB型→O型、A型→B型、B型→A型、AB型→A/B/O型の移植である。血液型不適合移植は、近年の進歩により経験をつんだ施設 での成人症例の成功率が80%にたっしているので禁忌にはならない［江川・上本 2007］。

険適用基準にはこの基準が明記されており，さらにその判定は移植実施日前 1 カ月以内のダイナミック CT で判断され、再発肝がんであれば判定日が最終治療から 3 カ月以上経っていなければならないと規定されています［田辺 2009］。

ようするに医学的見地から見ると、宏さんは姉のドナーに適応していることが判明したのです。

9．弟の立ち位置から見た家族愛

通常、夫であり、父親でもある宏さんの愛情の優先順位は、まず自分の「生殖家族」に向けられるように規範化されています［春日 2002］。しかしドナーを独断したときの宏さんの愛情は、生殖家族である妻よりも定位家族である姉を優先した結果となっていました。この時点までに宏さん自身がドナーになることを独断せざるをえない言い分があったはずです。しかし、宏さんは、その部分を全て割愛して言語化せず、妻には結果、結論しか伝えませんでした。

一方、妻の立ち位置から見ると、夫の言い分は当然、唐突で理解しにくい内容です。妻にしてみれば「姉にも夫がいるのになぜあなたがドナーにならなきゃいけないの？」と思ったのではないでしょうか。しかし妻はこのようなことを夫にたいして言語化して聞いた語りはありません。夫である弟もまた一切弁明していません。宏さん自身は、自分が「姉のドナーになることに妻は反対できないはずだ」と思っていたのです。なぜならば宏さんの妻が夫のドナーに反対して移植が行われなければ姉は死亡するのですから、当然、妻は反対できないと思います。このようなことは、宏さん自身は織り込み済みだったのですが、何の説明もなかったため宏さん夫婦間にイザコザが生じるのは目に見えていました。

この場面で、もし宏さんが次のように妻に説明すればどうなったでしょうか。それは「姉の病状の悪化や姉の家族関係が今まで以上に歪んでいる。それには姉を助けて家族を元に戻せば可能だと思う。そのためには移植が必要で、それには血液型が同じ自分がドナーになるしか方法がない。そのぶん妻や子どもにしわ寄せが行くと思うが、なんとか協力してくれないか」と妻にあらかじめ説明と依頼をすれば、おそらく妻は理解してくれたのではなかろうかと推察します。

宏さんは、姉が余命告知を受けるほど苦しんでいたのに、弟としてその役割を十分果たしていないことに自責の念がありました。また肝臓がんが再発して余命告知を受けた姉が、かかえきれない苦悩や不安をひとり背負っていたことも知りました。そのため宏さんはなんとか姉を助けなければ一生後悔すると思ったようです。

それほどまでに移植前の姉に対する気遣いがありました。しかし、この場面では、宏さんの妻に対する気遣いは語られていません。宏さんはバラバラになりそうな姉家族に比べて、彼自身の家族は日常的にはこれといった大きな問題もなく穏やかに過ごしていたのではないでしょうか。「ドナーになる」と自己決定したのも、妻に「結果、結論しか言わなかった」のも、会社員として仕事のことは「どうでもよかった」と思えたのも、自らの家

庭や職場が安定していたからではないのでしょうか。自らの足元がぐらついていたのでは、姉家族を助けるゆとりすらなかったと思われます。だからこそ弟は姉を救命することにエネルギーを注ぐことができたのではないでしょうか。一方ドナーの妻は、夫の愛情を自分たち家族と姉と比較すると、姉にたいする愛情が深くて濃ゆい反面、妻には愛情が浅くて薄いと思われるようにあきらかな差があると感じていたと思われます。夫婦喧嘩の一因はこのようなことも関係していると推察されました。

次章からは移植手術について述べますが、それは第 18 回の対人援助マガジン第 50 号で紹介いたします。

10.文献

江川裕人・上本伸二，2007，「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.

春日キスヨ，2002,『介護問題の社会学』岩波新書.

是永美恵子，2003，『生体肝移植を受けて――癌告知から八四〇日の闘い』光文社新書.

武藤香織，2003，「『家族愛』の名のもとに――生体肝移植と家族」『家族社会学研究』14(2): 128-138.

田辺稔，2009，「肝移植：内科医のための基礎知識」『今日の移植』22(2): 151-160.

フリースクールでの SW 実践を考える③

高名　祐美

なおきくんは現在小学校３年生。集団の中で過ごすことが苦手のようである。「教室にはあまりいなかったよ。校長室によくいたんだ。」と話してくれる。

小学校に入学した当初は通学していたが、遅刻することが多くなり、学校に行かずに家で過ごす日が多くなっていった。そして、２年生の冬休み明けからは登校しなくなった。３年生になった今は、自分の好きな授業がある曜日だけ登校している。

フリースクールには、３年生になったこの４月から通ってきた。体験利用をした日に、「ここは楽しい！もっとここに居る。」と家に帰ろうとしないくらいに、気に入ってくれた。そして利用が始まり、ほぼ休まず週２回通ってくる。「フリースクール、楽しい！」と可愛い笑顔で感情表現してくれる。

自閉スペクトラム症と診断されているなおきくん。小柄で、口達者、長髪で（散髪を嫌う）イケメンくんである。興味があちこちにうつりやすく、ひとつのことを続けることはむずかしい。自分のやりたいことができるまで主張し続ける。お母さんの言葉をかりれば「空気が読めない子」。相手の感情を思いやることや、自分を押さえて人に合わせることが苦手である。公園に向かってみんなで歩いているとき、突然立ち止まって動かなくなり驚いた。その一方でルールのむずかしいゲームを説明書を読んですぐに理解し、人に教えることができる。IQ は高く、一度聞いたことはしっかりと記憶している。

＜なおきくんと家族＞

両親と保育園年長組の弟と４人家族。数年前（入学前）に家族で他県から移住してきた。この土地には両親ともに縁はない。なおきくんは「こんなところに来たくなかった。友達もいない」と話す。お父さんは、自営で環境に優しいグッズを作って販売している。現在の自宅は友人から譲り受けた古民家で、その家をエコ重視したリフォームを繰り替えしている。その様子を動画に編集して Youtube にアップしている。その再生回数はなかなかの数字だ。

お母さんは、ヨガの講師。自宅で教室を開いている。なおきくんは、お母さんのことをあまりよくいわない。「お母さんはすぐにイライラして怒るんだ」と。

弟は保育園児。なかなかやんちゃで世話がやけるらしい。なおきくんが家族のことを

語るとき、どこか寂しそうな表情をみせる。そんな家族と、海の近く、自然あふれる土地でなおきくんは暮らしている。「引っ越しなんてしたくなかったのに」とうつむいて言う。

＜なおきくんにとってフリースクールという居場所＞

フリースクールに特別決まったプログラムはない。子どもたちにやりたいことを聴き、管理者と相談しながらプログラムをつくっていく。なかなか決まらないことも多々。主体性を大切にしつつ、できること、できないことを伝えていく。

先日なおきくんの希望で、「クレープづくり」に取り組んだ。生クリームとフルーツを巻き込んだ甘いクレープをつくりたいと。つくるためにはどんな準備が必要か、材料はなにか、つくる手順はどんなものか。まず自分で調べて、スタッフと相談する。そんな打ち合わせを数回行った。そしていよいよ当日を迎えた。

その日はフリースクールの登校はなおきくんひとりだった。一人でもクレープをつくりたいとなおきくん。「ひとりで頑張る！」と意欲的で、いつもにもまして、テンションが高い。自分で作った計画に沿って、手順をすすめる。集中が持続できないので、手順を小刻みにする。そしてスタッフの声掛け・サポートで張り切ってクレープ 18 枚、焼き上げた。「見て、見て。僕が全部焼いたよ」と誇らしげにみせてくれる。

次は中身だ。生クリームを泡立て、大好きなイチゴとバナナと缶詰の黄桃をはさむ。早く食べたくてしょうがない。「ちょっとだけ味見していい？」「これ失敗したから、食べちゃおうか」と隙あらば口に入れようとする。「全部できたらみんなと一緒に食べよう」「みんなで食べると絶対おいしいよね」と何度も声掛け。作り上げるまで、食べたい気持ちもなんとか抑えることができた。

いよいよクレープが完成。仕上がりは少々不格好だったけど、スタッフとそろって試食して「うーん！最高！」と満面の笑みを浮かべる。私も笑顔になる。なおきくんとの関わりにむずかしさを感じたこと、管理者とぶつかったことが、吹っ飛んでいく。

そうだ、これなんだ。子供が笑顔になって、心地よさ、やりがいを感じる時間を過ごせる。「楽しい」と思える。そして次なるやりたいこと、自分の希望を語ること。それができる場所。そんなフリースクールを目指したい。

ソーシャルワーカーとして、地域につないでいきたいと焦っているのは私だと気づく。課題ばかりが浮かんでくるが、大切なのはなおきくんのことを理解すること、ここからだ。私となおきくん。フリースクールでの出会い。なおきくんが自分の強みをみつけて、フリースクールで成長してくことができるよう次のアクションを考えていこうと思う。

かけだ詩⑨

そだちと臨床研究会　川畑（かわばた）　隆（たかし）

でも　でも

喧嘩したっていいんだよ
仲良くできないときだってあるもんね
だってあなたはとっても腹が立ったんだから

でも
喧嘩しちゃダメ　仲良くしなくっちゃ
って言われるよね

でも
喧嘩しちゃうよね　しょうがないんじゃない？
だって嫌なときは嫌って言えってねえ

いろんなこと言われるから
どうしたらいいかわかんないときってあるよね
ホントたいへん

仮説

子どものことってわからない
もちろん
おとなのこともわからないけど
子どものことってわからない

でもわかったように言う人はけっこういる
私もわかったように言っている
ただし、わかったと言っているのではなく
そのように考えてみたらどうかと言っているだけだ

真実がわかるのは神様だけだとして
真実がわからなかったらお手上げかというと
そんなことはない
もしかしてこうじゃないだろうかと考えて
そのようにやってみて少しでもいい方向に進みだしたら
その考えは役に立ったことになる

役に立ったことを積み重ねてみる段階で
子どものことがわかったと言ってしまうのは
そしてそれを聴いた人が信じてしまうのは
（尚早か早尚かいつも迷うけれど）時期尚早

心配するのは
「わかった」と聞いたことに疑いをもたず

自分自身で考えることがおろそかになること
「わかった」ことを一方的に子どもに当てはめ
役に立ったかどうかの確かめがおろそかになること

「私の言ったことは信じないでくださいね」
子どもや家族のことについて話したあとに
私がよく付け加える言葉
信じるように話しておいて信じるなとは如何か
その戸惑いと怒りの表情が納得に変わるまで
伝えたい「わからない」という前提の大切さ

身ぶり手ぶり

身ぶり手ぶりが多い
自分には見えなかったが
気になるくらい
落ち着きがなかったらしい

何に落ち着きがないんだろう
話が伝わらなかったらと
心配なんだろうか
それでこうこうこうなんだよと

言葉に任せられない
言葉に込められていない
言葉が言ってるんじゃないんだよ
私が言ってるんだ

踊ってるようだって
それでもかまわないけどね
いっそのこと
踊ってやるか

踊ったら踊りになるじゃないか
そうしたいわけじゃなくて
そうだよ　私や
落ち着きがないんだよ

目的

ソーシャルワークも
心理臨床も
児童指導も
虐待防止活動も

そして
政治も
経済も

法律も
目的ではなく
手段

目的は　人が
今より厚い幸せを
少しでもいいから
手に入れること

手段が
目的にならないように
目的を
忘れないように

コンサルタント

「言いました」
なんてとんでもない
「言わせていただきました」
です

「思いました」
も駄目でしょうかって？

「思わせていただきました」
に越したことはないでしょうね

「頑張って結果が出せてよかったです」
それは言ってもかまいませんが
「支えてくださった方々のおかげです」
これを前面に押し出してくださいよ

起きたことの丁寧な説明
はもちろんのこと
「子どもたちの心のケア」
には必ず言及してくださいね

「しっかりと」は使われすぎですが
決意を伝える言葉はほかに浮かびません
謙虚でないのは隠しても出てしまいますが
せめて上から目線の言葉は避けてください

いいですか
わかりましたね

固定観念

弱い人がいてもいい
強い人がいるように
でも人にもっと弱くとは言わない
もっと強くとは言うけれど
強い人がいてよいほどには
弱い人にはあまり
いてほしくないんだろうか

強い人は放っとけるけど
弱い人は守らなきゃならない
面倒だから
あまりいてほしくないんだろうか
自分一人のなかにも
強いところと弱いところがある
やっぱり弱いところは面倒なのか

強いところは
弱いところの後を押してくれる
たしかに足し算の頼もしい助っ人
でも弱いところは
強いところを引き止めてくれる
引き算の目立たないつっかい棒
面倒見のよさはかわらない

強いところと弱いところ
強い人と弱い人
どちらが強くてどちらが弱いんだろう
これは簡単なことじゃない
強いとか弱いという言葉は
この際
捨てたほうがいいのかもしれない

教訓

奈良公園で
鹿にせんべいをやろうとしたら
ベビーカーの長女が
せんべいを指さして泣き出した
あたしが食べるのおー

夕食で
カミカミしながら寝入る次女
頬っぺたの膨れた寝顔から
薄目が開いて再びスイッチが入り
またカミカミが始まる

十津川村の吊り橋で
新妻は渡り切って新夫（おっと）を待つ
新夫は足が凍りついて座り込んだ

察知した新妻が駆けつけ手を差し伸べる
新夫はこの人について行こうと思った

人はそれぞれの事情を抱えている
また人はありのままに生きるのが基本だ
そして人は究極に至って真実に迫ることができる

夕方

一日は夕方から始まったのだそうだ
暗闇を準備する段階から仕掛けは始まり
夜のうちにエネルギーをためこむ
陽に照らし出されたステージでのショータイム
そして演じ終えた人々は帰路に着く

一日の終わりと始まりを繋ぐ夕方
目立たぬ裏方として
人々を迎え入れ　そして送り出す
そうか　夕方の仕掛けとしては
夜はもう作戦のうちなのだ

夕方のあの侘しさと寂しさ
とくに秋から冬にかけてのセピア色
お酒のおかげかもしれないが
景色が暗闇にかわると腹がすわる
いや　そうじゃない
灯りを点けるから立ち直れるのだ
そして　目を閉じて眠ることによって
怖ろしさを封じ込めるのだ

昨日を生きた安堵と今日の不確実さへの不安
夕方はその両方をもろに持ってくる
朝には二度と飲むまいと思ったお酒が
夕方には欲しくてたまらなくなるはずだ

一日は前日の夕暮れから始まった…堀井令以知著『ことばの由来』二〇〇五　岩波新書　一一三頁

⑨了　二〇二一年六月六日

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たちのリアル－

～　育休でイノベーション　～

9

たまむら　ふみ

玉村　文



ちょうど 1 年前の 2021 年 4 月に出産しました。人生で二度目の産休育休では、コロナ禍ということもあって、産院では個室で面会禁止、子育て支援拠点も休館など、自宅で過ごす時間が長くなりました。一度目の産休育休でも他者とかかわる機会が減少することで閉塞感をもち、言葉が出てこなくて会話ができにくくなったという経験がありました。そのため、自宅中心の生活ではあるものの、社会との接点を求めていました。そんなときに、出会ったのが、乳幼児のおもちゃを作っている株式会社ピープルが実施するプロジェクト「育休イノベーションズ」（以下、育休イノベ）です。この育休イノベは、育休中に商品開発体験ができるというもので、子どもと過ごす日常から生まれるアイディアをカタチにできるという、まさに育休中だからこそできる体験となりました。今回は、商品開発の体験を紹介するのではなく、活動を通じて感じた気づきとして、①「困った」はチャンス（子育てがパワーアップする要素に）②チームのちから、③わたしが大事にしたいこと、についてまとめたいと思います。

＃育休イノベの活動

育休イノベの活動とは、オンラインツールを使って、全国のママたちと子育て中の出来事をシェアしながら、「困った」を解決するアイディアを練り、商品化までを体験するという半年間のプロジェクトです。5、6 人が 1 チームになり、アイディアとグッズをプレゼンすることがゴールで、最終的には株式会社ピープルが商品開発を引き継ぐという流れです。全体の運営はピープルのスタッフの方が担当され、各チームには運営スタッフとチームメンバーの架け橋となる、LF（ラーニング・ファシリテーター）という役割が置かれました。LF も同じ育休イノベに登録したママの中から、チームビルディングに興味のある方が中心に立候補で選ばれました。

毎週木曜日の午後２時間を全体会として、商品開発のレクチャーや進捗の確認、社員さんからのフィードバック、プレゼン準備や発表会の時間でした。また、節目にはキャリア講座を企画していただいており、この育休イノベという活動を仕事復帰の準備にもなるようなしかけが施されていました。全体会以外の日程を取ってチームミーティングを行い、また、グッズの試作や実験、アンケートやプレゼン準備もしていたので、





毎週 2、3 日間はこの活動に時間を使っていました。チームのオフ会もしたり、ママトーク日が設けられていたりと、ママ同士で交流する時間もありました。

イラストレーターのかめさんが、この活動をイラストにまとめてくれています。このイラストにも描かれている通り、運営スタッフからは、「わくわく最優先」「トライ＆エラー」「つっこまれビリティ」「つかれたら休もう」は全体でシェアする価値観として、何度も提示されました。

＃「困った」はチャンス、子育てがパワーアップする要素に

この活動を通して、最も影響を受けたことは、物事の捉え方をリフレームすること、特にポジティブに捉えることでした。名付けてポジティブ変換力です。それは、日常生活で子育てをしていることが武器になる、という体験から得られたと思います。武器になるとは、それはつまり「困った」ことに直面することが多く、その困ったことを試行錯誤しながら解決させ、また解決までいかなくても軽減させていくことが日常だからこそです。わたし個人だけの生活なら、そこまでたくさんの困りごとに直面しない環境です。わたしのコントロール外の、しかしケアを要する子ども達の存在は、日々の成長を見せてくれながらも生活上の困難さも同時に持ってきてくれるのです。

これまで子育てしながら働くことは、同僚の負担になる、迷惑をかけることが多いというネガティブな想いを持っていました。子どもの病気で仕事を休んだり、行事で休んだりと。子育て期はどうしても仕事を休みがちになってしまうことから罪悪感をもっていました。その考えがこの活動に参加したことで、子育てしていることがパワーアップの要素になるという視点をもらいました。

＃子育て神話

育休イノベで、困ったことやネガティブなことをポジティブに変換していくリフレーミングの視点が得られたと書いてきました。それは、子育てで当たり前とされてきたことが、実はそうではなかったという「子育て神話」への気付きでもありました。パパも参加したパパ会では、パパママ両者が感じている「子育て神話」について出し合いました。例えば、母乳が 1 番良いという母乳神話、自然分娩が 1 番良いという分娩神話や、「寝かしつけはママじゃないと」という役割分担まで、思い込みも含めた共通する価値観や違和感が出されました。パパからは、「ママの言うことは絶対服従」というエピソードも聞き、それはうちにも当てはまるなぁと自己を顧みて反省することもありました。

＃対人援助の視点

日常のちょっと困ったことや課題を、ア

イディアやものづくりを通して解決するアプローチは、対人援助の仕事でもあると感じました。

売れる商品を作るという前提よりも、テーマを深掘りしてその背景にある子どもや社会への想いを言語化していく、そこに解決を見出すことで結果的に商品になるというプロセスを経ていきました。これはアウトプットが異なるだけで相談援助と同じプロセスだと思います。例えば、いまの困っていることを課題として設定し、どんなミライだと笑顔になれるのか想いを出し合ってミライを描くと説明するとわかると思います。

相談援助と少し違う視点といえば、「新たなアウトプット」にこだわるところです。つい具体化できそうなアイディアを優先して考えたくなってしまいましたが、運営スタッフから「カテゴリーイノベーション」や「ムーンショット」などの概念を提示され、技術的に可能かどうかはさておき、いまないものを生み出すためにどんなミライを迎えたいのかを徹底的に想像しあいました。

＃チームのちから

育休イノベの活動は 5、6 人が 1 チームになって半年間を一緒に活動します。チームメンバーは運営スタッフが事前に決めていました。各チームには運営スタッフとメンバーをつなぐ LF（ラーニング・ファシリテーター）という役割が置かれていましたが、それ以外の役割は毎回チームで話し合って決めていました。

チームメンバーは、産休育休中の母親ということが共通点で、それ以外は年齢も住んでいる地域も、そして職種も異なる方々ばかりでした。わたしが入っていたチームは、東京都、神奈川県、高知県、山口県在住で、第一子の産休育休中が 3 名、それ以外が複数育児での育休中でした。メンバーの職業も IT 系、保険代理店勤務、看護師など、それぞれの背景は異なりました。

そんなメンバーと半年間活動をしていくのですから、それぞれの価値観や考え方の癖などは異なります。もちろんこの育休イノベで初めて関わることになったメンバーですので、お互いに知り合っていきながらプロジェクトも進めていくことになります。ですので、最初に「行動指針の確認、ルールづくり」の機会を持ちました。例えばわたしが所属したチームでは、「土日は稼働しない」「敬語禁止」「家庭優先」「休んだメンバーが復帰したら“おかえり”と迎える」ことをルール化しました。行動指針については、全体で共有されていた①ワクワク最優先、②トライ＆エラー、③つっこまれビリティ、④疲れたら休もうというものです。これらのルールや行動指針は、過度なミーティングを抑制したり、休みやすい環境づくりに役立っていました。

そして、毎回の活動日には、チーム活動の前に「チェックイン」の時間を持っていました。毎回の話すテーマは担当するメンバーが決めますが、自分達の状況や思っていることを共有する時間です。例えば、わたしが入ったチームの共通点は「糖質が好き」だったので、「最近オススメのお菓子」を話したり、「出産の思い出」「夫との出会

い」など、プライベートな体験などが話題に登って盛り上がったりしました。それが「和み要素」となりチーム運営に効果的だったと、後から振り返って思います。相手のプライベートを知っておくことで、自己開示がしやすくなり、「最近夜泣きで眠れなくって」など相談に近いつぶやきが、ため息とともに吐き出される場にもなります。メンバーは共感的に関われる立場でもありますし、作業上の配慮もできます。「無理しなくて大丈夫よー」という言葉が交わされ、復帰してくると「おかえり～」と言い合う、そんな関係性が築けていきました。

子育てをしている当事者同士だからこその連帯感もありましたが、①ルールや行動指針づくり、②自己開示などは仕事上のチーム作りにも応用できるものだと思います。よい関係が築けたからこそ、活動が終了したあともオフ会を企画しておしゃべりの時間をもったり、LINE グループを作ってつながりを保ち続けています。

＃子どものために、

わたしが生き生きと働くこと

最後に、この育休イノベの活動を体験して、子育てしながら働く母親として大事にしたいことを表明したいと思います。それは、わたしのご機嫌はわたしがとる、をスローガンに、子どものためにわたしが生き生きと働くことを行動原理にしようと思います。「子どものために」という部分は、平日日中を中心に、経済的な基盤を維持しつつ、社会とのつながりを示すということを、「わたしが生き生きと働けているか」については、やりがいを感じているか、自身の成長を感じられるか、それは社会に貢献するものなのかという要素を確認していこうと思います。改めて自身の大事にしたい価値観についても確認できた活動でした。

HITOKOMART No.9

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

『獅子の子落とし』は実際には無いのだと聞いた。
昔から子供を厳しく育てることの例えに使われて来た有名な話だが、若干の共感部分はあるものの、現在の感覚ではやはり『児童虐待』という事になるだろう。
私は8歳の頃に父親が蒸発したことから実際には母子家庭として育った。
家族を捨てた父に厳しく躾けられたことは全く無く、記憶の中にある父はとても子煩悩だった。
野球や漫画や図画工作や昆虫採集など多くの豊かなシーンがいつも父の記憶の中にある。
今の私を形成する核となる要素は父親から与えられたものが多いように感じる。
そう考えると父の蒸発は私が必ず這い上がってくることを信じて崖から突き落したのかもしれない。
何くそ、あなたの見捨てた息子はこうしてその不幸をバネにしてアナタよりも立派に育ちましたよと、いつかは見せつけてやるのだと思わせてくれたのは、まさに『獅子の子落とし』だったのではないかと思ったりするこの頃である。



バンジージャンプ　（F30号・部分）



F-50号

呼　吸

サン・テグジュペリの『星の王子さま』を最初に目にしたのは大学４年生の頃だったと思う。
ちょうど家内と付き合い始めた頃で、デートの時、彼女はいつもこの本を携えていたのを覚えている。
「この本には素敵な言葉がいっぱい詰まってるんよ」
そう言われたが当時の私は興味を持つことはなかった。
それはお世辞にも上手とはいえない素人っぽい絵がその一因だったように思う。
それをきっちりしたカタチで読んだのは、それから４０年近く経ってから、家内が肺癌で５９歳で他界した後だった。
　『大切なものは目に見えない…』
星の王子様の巻頭に『象を飲み込んだウワバミ』の絵は読み手の感性を測るようにして登場する。
子どもの描く邪念の無い絵の本質を鋭く突いて、大人になるにつれどんどん失われて行く感覚の大切さを語りかけるのである。
これはどこかでヒトコマ漫画の世界に通じる感覚なのだが、意識して描こうとすると、明らかにわざとらしかったり、あざとい表現に見えてしまうものなのだ。
伝えたい想いをぐっと溜め込んで、一気に吐き出すエネルギーが大切だなと思う。
「お父さんは素敵な言葉をたくさん知っているのねエ…」
家内が死ぬ前にベッドの上で私に言った言葉が14年経った今も忘れられない。



地球のヒラキ

「腹を割って話す」と言う表現は和解や融和のスタートラインのイメージだ。
それはお互いが歩み寄って問題の解決に向かうという希望を感じさせる。
何事も話せば分かり合えると学校では教えられて来た。
それでも人類は数え切れないほどの失敗を経験し、その都度成長してきたと思っていた。
しかし、今の世界の状況はそれが思い違いであったことを思い知らされている。
メルカトール図法は丸い地球を平面で表現する描き方だがこんな姿になってはいけない。
地球はやはり限りなく丸く収まる物でなくてはならない。



F-30号

鳩を放つ

繋がりを求めて

ノアの方舟はクリスチャンでなくてもよく知られている話だ。海外の一コマ漫画のモチーフとしてもよく使われる。

私は小学生の時、通っていたプロテスタント系の日曜学校で、若い牧師から聞いた時の事を鮮明に覚えている。

中学生になって見た70ミリ映画ではリアルな映像場面に牧師から聞いた話のイメージがぴったり重なって、大阪ミナミの映画館で、上映中に思わず大きな声をあげてしまった思い出がある。

神が乱れた人間世界をリセットするため、大洪水を起こして地上の全てのものを水中に沈めた後、周囲の状況を知るためにノアは船上から空に鳩を放つのだが、今ならさしずめスマホ片手に、世の中の動きを観察する姿が目に浮かぶ。

しかしよく考えると、世界が海の底に沈んでしまったなら繋がりっこないよなア…

名　刀

当たり付きのアイスキャンデーとの出会いは小学１年生の頃である。
『ホームランバー』というのが正しい商品名らしいが当時は『ホームランキャンデー』と呼んでいた。
その頃の価格は１０円だったと思う。
バーにはホームランの他に単打・２塁打・３塁打の焼き印があって、１点入るともう１本もらえるという野球仕立てである。
現在はいろんな関連商品にも使用されているらしいが、表示は単に『当たり』だけになっているように思うがどうなんだろう。
最近は多種多様なアイスクリーム商品が売られていて、見かける事も食べる機会もあまり無くなったが、あまりしつこくないシンプルな味が好きである。
そしてこの漫画を書いた後、何よりも驚いた事は、このメーカーが『名糖』という会社であったという事である。



F-30号

窓



F-30号

イスラムの女性が着ている目の部分だけしか見えない服を『アバヤ』と言う。
頭から被るだけのスカーフ風の布は『ヒジャブ』というらしい。
我々の目には奇異に見えるこの衣装を昔から多くの漫画家はモチーフにしてきた。
一般的な民族衣装とは違って、戒律とされる宗教的な決まり事には第三者が安易に踏み込む事は出来ないが、ビジュアルとしては人間の様々な心理や立場を表現するのによく使われてきた。
『目は心の鏡』『目は口ほどにモノを言う』『目からウロコ』などなど、目を使った諺もたくさんあるが，いずれも身体の中でそれが一番に心を表すパーツである事を物語る。
イスラム圏では女性が運転免許を取る事が出来ない所も多いと聞く。
女性の見ている世界が極端に制限されている事は明らかだが、彼女たちが見る事の出来る世界もこのミラーほどだけのような気がする。

転機と偶有性

土元 哲平

はじめに

私たちは、新しい環境や人間関係が始まろうとするとき、将来を思って不安に感じることがある。未来の自分がどのような生活を送っているのか、どのようなことを考えているのか、他者とうまくやっていけているのかといったように、私たちの人生やキャリアは、常に「未定さ」とともにある。とりわけ、人生の転機のような出来事は、思いがけず生じることがあり、事前に予測して対応できるようなものではない。キャリアにおける「未定さ」は、「**偶有性**」（コンティンジェンシー, contingency）と言い換えることができる。偶有性という概念は、社会システムについて論じる際に、社会学者のパーソンズ（Persons, 1951/1974）やルーマン（Luhmann, 1984/1993）も重視したものである。ルーマン（Luhmann, 1984/1993）は、偶有性を以下のように説明している。

> コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不可能でもないものである。したがって、ことがらが現にある（過去にあった、今後あるであろう）あり方は、そのようにあることが可能であるのみならず、またそれとは別様にあることも可能なのである。したがって、コンティンジェンシーの概念は、現に存しているもの（経験されるもの、期待されるもの、想定されるもの、空想されるもの）について、それとは別様のあり方を顧慮したうえでその特徴を把握している。言い換えるとこの概念は、それぞれの対象を、おこりうる変化の地平において捉えている。コンティンジェンシーの概念は、現に存している世界を前提としているのであり、したがって可能なもの一般ではなく、この現に存している世界というリアリティからみて、別様にありうるものを言い表している。
>
> （Luhmann, 1984/1993, 邦訳, p.163）

サトウ（2012）によれば、contingency という語は心理学では随伴性と訳されているが、科学社会学や脳科学の分野においては、偶有性という訳が定着しつつある。文化心理学の観点からは、偶有性は、私たちの人生径路上の選択は、偶然でも必然でもなく、歴史的-文化的な文脈に埋め込まれていること、また、そうであるがゆえに、他の選択をしたり、新たに選択肢を創り出すことも可能であるということを意味する（サトウ, 2012; 安田, 2015）。今回は、このような偶有性と転機の関係について考えたい。

生きられた経験、有意味な経験

本稿では、文化心理学者ブルーナー（J. Bruner）の「意味づけ」（meaning）概念を参考にする。ただし、それに先立って、この考え方の前提となる「経験」の考え方について、現象学的社会学者シュッツ（Schutz,

A.）の『現象学的社会学』（邦訳, Schutz, 1970/1980）に基づき説明する。この「経験」という言葉は日常的に用いられているが、心理学や社会学においては 2 つのレベルで区別されることがある（図 1）。

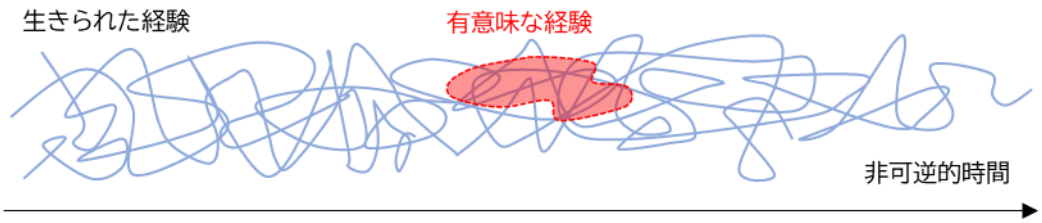


図 1　生きられた経験と有意味な経験

まず、第 1 のレベルは、まさに私たちが「今ーここ」で直接向き合うような経験を指す。私たちは、歩いている時や音楽を聴いているときなど、「今起こっていること」を、特に意味づけをせずに、身体的に感じているような場合がある。このような出来事は、何らかの意味あるものとしてというよりは、すぐに過ぎ去っていく、流れていく経験として感じられる。シュッツは、このような「相互に区別なく融けあっている経過しつつある経験」（Schutz, 1970/1980, p.15）を**生きられた経験**（lived experience）と呼んでいる。

しかしながら、私たちの経験は、すべてが「相互に区別なく融けあっている」経験ではなく、区別され、意味がある出来事である。第 2 のレベルは、このような「互いに区別されたすでに過ぎ去った過去の経験」（Schutz, 1970/1980, p.15）としての**有意味な経験**である。例えば、何気なく聞こえてきた音楽に気づき「この音楽を聴いたことがある」と思ったり、道を歩いているときにふと「この場所は好きだ」と感じることがあるが、私たちは「この音楽」「この場所」というように、特定の経験を他の経験と区別して捉えることができる。ここで、シュッツ（1970/1980）によれば、ある経験を他の経験と区別するや否や、その経験は過去のものとなる。このように、私たちは、はじめは区別されていない「生きられた経験」に対して注意を向ける（反省的注意[1]）ことで、その経験を意味ある、まとまった経験として理解することができる。

意味づけ

ブルーナーの「意味づけ」という考え方は、以上のように、人間が経験を区別し、意味を持たせるという前提の上に成り立っている。「意味づけ」とは、簡潔に言えば「経験の組織化」（organization of experience; Bruner, 1990/2016; やまだ, 2021）であり、**ナラティヴ**（ものがたり）を生成することである。シュッツがいうところの「有意味な経験」を生成するプロセスと類似する。ここで「類似」という表現を用いるのは、「意味づけ」という概念の主眼は、前提や常識、通例性の破壊として定義されるトラブルの発生（＝**例外的事象**）に相対した精神が、どのようにその出来事を意味があるものとして理解可能とするのかという、「混乱と修復のダイナミズム」の探求にあったからである（横山, 2019）。例えば、ブルーナーは『意味づけの諸行為』（*Acts of meaning*）という著書の中で、次のような例を挙げている。

[1] ここでの「反省」は、「自分の行いを反省する」というような、一般的意味とは異なる。シュッツ（1970/1980）によれば、私たちは生きられた経験の流れ（持続）の中では、「今このように」から「今このように」への絶え間ない移行を経験しているが、反省という態度には、そのような経験の流れを「さっきこのようであった」という（過去の）記憶（Erinnerung）に変化させる作用がある。

もし、誰かが郵便局に入ってきて、星条旗を広げて振り始めたら，それを見たあなたと同じフォークサイコロジー[2]を共有する対話者は、あなたの疑問に答えて言うだろう。おそらく今日は自分が忘れていた国民の祝日か何かだろうとか、また、アメリカ在郷軍人会の地方支部が基金募集を行っているのかもしれないとか、あるいはただ単に、旗を持った男は、今朝のタブロイド判の記事に想像力を刺激された、ある種のいかれた国家主義者であると（Bruner, 1990/2016, p.70）

上記の例のように、日常生活の中で「郵便局に入ってきて、星条旗を振る」ということは、常識的には起こりえない。このように既存の常識では理解できない、例外的事象が生じたときに、私たちは、その意味や理由を模索しようとする。このような出来事は、ライフコース上では「**転機**」として生じる。その人にとっての「当たり前」とは大きく外れるような出来事（ライフイベント、対人関係、震災、病気、など）が生じたときに、私たちは生きる意味を探求したり、自分にとっての前提を問い直すといった「意味づけ」が必要になってくる。したがって、転機とはナラティヴである（杉浦, 2004）。

最後に、この「意味づけ」が文化的なものであるという点を強調しておきたい。出来事を意味づけるということは、ものがたりを生成することに他ならない。ものがたりは、ブルーナーによれば「正当とされる文化パターンからの逸脱を緩和し、あるいは少なくとも理解可能にするような意図的な状態を見いだす」（Bruner, 1990/2016, p.71）機能を持っている。ここで意図的な状態とは、主人公（上記では、旗を振っている人）にとっての信念、欲求、希望などである。つまり、あるその出来事がその人（集団）にとっての規範や習慣（文化的な産物）から逸脱している場合に、それが例外的な事象、驚くべき出来事としてみなされるのである。このように人間の意味づけは、個人の意図的な状態だけでなく「文化」とも深く関わっていることから、ブルーナー（1990/2016）は、意味を中心に据えた心理学（文化心理学）の重要性を強調した。

偶有性と転機

さて、偶有性と転機との関係を考えたい。転機においては、「予期せぬ出来事」（白井，2010）や突発的出来事（rupture; Zittoun, 2006）といった、その本人が想像もしていなかった「例外的事象」を含んでいる。

なお、例外的事象と転機との関係については、次のようになる。筆者は、図 2 に示すように、転機を、例外的事象を含むかたちで意味づけられたナラティヴであると考えている。例えば、「受験で大失敗する」ことが例外的事象であるとすれば、そのような例外的事象がなぜ例外的であったのか、どのように理解可能なものとし、乗り越えたのかという「意味づけ」全体が転機となる。つまり、「受験で大失敗する」という例外的事象だけを転機と呼ぶのではなく、その出来事が生起した文脈をすべて含めて転機と呼んでいる。

[2] フォークサイコロジーとは、簡潔に言えば、個人の欲求や信念の体系を指す（Bruner, 1990/2016）。

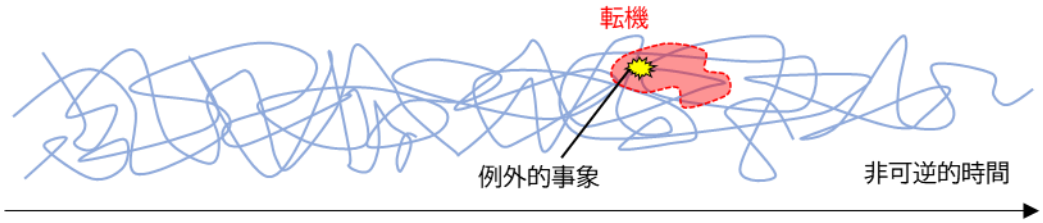


図 2　例外的事象と転機

さて、このような例外的事象は偶然に生じるようなものだろうか。この点について、便宜上、転機を経験した「個人」と、その人に関わる「社会」とのそれぞれから考えたい。

まず、「個人」の側から見れば、ある出来事が例外的事象であると認識できるのは、その人自身である。一般的に転機になるとみなされるような出来事であっても、本人がその経験を「例外的事象」とみなさなければ、それは転機に結びつかないからである（土元・サトウ, 2019）。例えば、結婚が転機になる人もいれば、むしろそれは一つの通過点であって、パートナーとの関係性は大きく変わっていないという人もいるだろう。次に、「社会」の側から見たときには、例外的事象は、文化や社会によって人生径路が方向づけられたことで生じる側面がある（Sato, 2017）。出来事は、私たち人間の関係性の中で生じるため、完全にランダムに生じるのではなく、集合的文化による制約を受けている。くじ引きや抽選のような出来事であっても、「抽選に参加する」という行為や「抽選で何かを決定する」という規範は文化的であるし、当選した結果として得られるもの（賞金や景品、機会など）も、特定の社会によって価値づけられている。

以上から、転機は、ある出来事を認識し意味づける個人と、人生径路をガイドする社会・文化とのあいだで生じる「個人と社会との相互作用」（土元・サトウ, 2019）によって生み出されるという意味で、偶有的な出来事である。「偶然の出会い」「思いがけない出来事」と考えていた経験が、いかに歴史的、文化的な流れの中で生じていたのかを理解することは、メンタリングやキャリア教育においても有用であると考えられる。

引用文献

ブルーナー, J. S. (2016). 意味の復権――フォークサイコロジーに向けて(岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳)(新装版). ミネルヴァ書房. (Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning.* Cambridge: Harvard University Press.)

ルーマン, N. (1993). 社会システム理論（上）（佐藤 勉, 監訳）. 恒星社厚生閣. (Luhmann, N. (1984). *Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt an Main.)

パーソンズ, T. (1974). 社会大系論（現代社会学大系14）（佐藤 勉, 訳）. 青木書店. (Persons, T. (1954). *The Social System*. The Free Press.)

サトウタツヤ. (2012). 理論編――時間を捨象しない方法論，あるいは文化心理学としてのTEA. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路――質的研究の新展開 (pp. 209–243). 誠信書房.

Sato, T. (2017). *Collected Papers on Trajectory Equifinality Approach*. Chitose Press.

シュッツ, A. (1980). 現象学的社会学（文化人類学叢書）（森川眞規雄・浜 日出夫, 訳）紀伊国屋書店. (Schutz, A. (1970). *On Phenomenology and Social Relations*. The University of Chicago Press.)

白井利明. (2010). 人生はどのように立ち上がるのか――「予期せぬ出来事」 に着目して. 心理科学, **31**(1), 41-63.

杉浦 健. (2004). 転機の心理学. ナカニシヤ出版.
土元哲平・サトウタツヤ. (2019). 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. キャリア教育研究, 37(2), 35–44.
やまだようこ. (2021). ナラティヴ研究――語りの共同生成（やまだようこ著作集第 5 巻）. 新曜社.
横山草介. (2019). ブルーナーの方法. 渓水社.
安田裕子. (2015). 未定と未来展望. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編――複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp. 41–45). 新曜社.
Zittoun, T. (2006). *Transitions: Symbolic Resources in Development*. Information Age Publishing.

バックナンバー

- 土元哲平. (2021).「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育（キャリアと文化の心理学（7））. 対人援助学マガジン. 48. pp. 267-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/51.pdf
- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf
- 土元哲平. （2021）. 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf
- 土元哲平. （2021）. 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf
- 土元哲平. （2021）. オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf
- 土元哲平. （2020）. 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf
- 土元哲平・サトウタツヤ. （2020）. 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf



『新潟水俣病概論Ⅰ（歴史）』

退院支援研究会　本間　毅



【熊本から新潟へ】

水俣病は、酢酸エチルの原料のアセトアルデヒドを生産する過程で発生するメチル水銀を、無害化せずに海や河川に放出し続けた結果、食物連鎖によって魚介類に高濃度に蓄積し、それを食べた人々に引き起こされた健康被害で、その名称は、「憑きもの」や「祟り」とまで言われた「水俣奇病」に由来する。

明治半ばまでの熊本県水俣地区の主な産業は塩田による製塩であったが、日露戦争の財政赤字を補填するため、1905（明治38）年に政府は塩の専売制を施行した。10万坪あまりの塩田跡地は、強い塩分のため耕地に転換できず、1906（明治39）年、帝国大学工科出身の野口遵（のぐちしたがう）が「曾木電気」を起こすと、水俣の有力者達はこぞって工場を誘致し、「日本カーバイド商会」が設立された。1907（明治40）年、「日本カーバイド商会」と「曾木電気」が合併した「日本窒素肥料株式会社（以下、チッソまたは日窒と略す）」は、戦禍で化学肥料「硫安」の輸入が激減したこともあり莫大な利益を上げた。野口の経営理念は、「労働者は牛馬と思ってこき使え」だった。

富国強兵を目指す殖産興業政策も後押して、1931（昭和6）年に野口の日窒は、肥料会社から有機化学工業会社へと変貌し、昭和電工の森矗昶（もりのぶてる）、日産の鮎川義介（あゆかわよしすけ）と並んで、新興財閥三羽烏と呼ばれた。戦後、海外の工場は閉鎖されたが、1949（昭和24）年には化学肥料に代わって塩化ビニール、プラスティックの原料になるアセトアルデヒド、1952（昭和26）年からそれまで輸入に頼っていたオクタノールなどを工場の主力製品とし、1950（昭和25）年に始まった朝鮮戦争の特需で日本トップクラスの化学工場になった。（石井妙子 2021. pp146-156）

それに先立つ1940（昭和15）年、イギリスの種子消毒工場で4人の作業員が「メチル水銀」の蒸気を吸い込み劇症の中毒を起こし、ハンターとラッセルがその中毒症の詳細を報告して、「ハンター・ラッセル症候群」として知られるようになった。熊本大の武内忠男教授は、死亡例の脳の病理所見（病気によって起こる臓器や細胞の変化）と、感覚障害、運動失調、視野狭窄、聴力障害などの症状が、水俣病のそれと極めて類似していることを見出した。それ以前にもメチル水銀中毒症は、1865年に英国で3例、1916年にはドイツの工場でメチル水銀に汚染された排泥に触れた従業員がメチル水銀中毒症を発症したため、排泥を地中に埋めたとい

う報告があり、1932（昭和 7）年頃には、日本でもメチル水銀中毒症の発生は予見可能であった。（花田昌宜 2017.p6）

チッソはメチル水銀を含む工場排水を、1932（昭和 7）年から不知火海に放出し始めた。異変はまず動物の間で起こり、カラスは干してあった漁網につっこみ、猫がよだれを垂らし踊り狂い海に飛び込んだ。1950 年代前半、チッソ工場の生産量が増えるにつれて海の汚染は進み、多くの魚が海に浮かび、貝や海藻も育たなくなった。（佐高信 2013.pp17-18）

1956（昭和 31）年 5 月 1 日、「チッソ水俣工場付属病院」の細川一（ほそかわはじめ）院長は、小児科の野田兼善（のだかねよし）医師の報告を受け、5 例の原因不明の中枢疾患患者を保健所に報告した。5 歳の女児は歩行ができぬほど足が曲がり、言語障害と激しい痛みを伴う痙攣に苦しんでいた。「下の妹にも同じような症状がある」、「近所にも同じような子供がいる」という母親の言葉に細川一医師は驚いた。5 月 28 日には水俣保健所、チッソ付属病院、水俣市立病院、水俣市医師会、水俣市衛生課からなる「水俣市奇病対策委員会」が発足した。国民皆保険制度以前でもあり、細川医師たちはこの奇病は伝染病ではないだろうが、まず入院費がかからない避病院（ひびょういん）（伝染病患者の‘隔離病舎’）に入院させ、しかる後に熊本大学に「学用患者」として転院させる手続きを始めた。（石井妙子 2021.pp159-162）

熊本大学の原田正純（はらだまさずみ）医師が診察した K 君兄弟には、同じ症状（手足のしびれ・言語障害・歩行障害・手指の動きが拙劣）が見られたが、兄は魚を食べたので水俣病だが、K 君は魚を食べていないので脳性麻痺だと母親は言われていた。しかし、K 君の父親はわずか 23 歳で同じ症状で亡くなり、K 君を妊娠している間、家族で魚を食べていたので、お母さんは K 君も水俣病だと思っていた。当時の医学的常識では、胎盤は有毒物質を通過させないとされていた。胎児性水俣病は、人類で初めての経験であった。（原田正純 2016.p9）原田によれば、当時の日本の脳性麻痺の発生率は 0.2～0.5％であるのに対し、水俣病多発地区では先天性の障害児は 7.0～9.0％で、流産・死産率は 15.1％であった。（野澤淳史 2020.p164）

1950～60 年代、未だ冷蔵庫は普及しておらず、魚が沢山捕れれば近所で分け合い、妊婦は産後の肥立ちが良くなると言われ沢山の魚を食べた。原田医師自身が確認できた胎児性水俣病患者は 64 人であった。（原田正純 2016.p16）

水俣病の「病因物質」がメチル水銀であると究明できていなくとも、「原因食品」が不知火海の魚介類であると推定された段階で、食品衛生法を急ぎ適用すべきであった。同じ弁当を食べた人達に食中毒が発生したら、弁当業者は弁当の製造・販売を即刻中止し、保健所が原因食品と病因物質の究明を急ぐのは自明である。

岡山大学の津田敏秀（つだとしひで）医師によれば、食品衛生法では原因食品、病因物質、原因施設（企業）の 3 つを明確にわけており、原因食品が明らかになった時点で行政は対

応しなければならない。病因物質の特定は、対策を講じる際の必須条件ではない。奇病発生直後から、熊本大学の研究班は「汚染された魚介類」が原因食品であることを明らかにしていた。水俣湾では昭和 20 年代から鯛やエビ、イワシ、タコがとれなくなり、昭和 26 年頃から、しばしば大量の魚が浮上して、漁民たちは「チッソの汚悪水」と呼んでいた。新潟でも1946(昭和 21)年頃から、「鹿瀬(かのせ)の赤水」や「昭和電工の毒水」が流れてくると魚が捕れなくなると言われていた。このような事態を受けたら即刻、食品衛生法が適用され、県衛生部と県警がただちに原因施設に立ち入り調査をするべきだが、警察が取り締まったのは、熊本でも新潟でも実力行使に踏み切った漁民だけであった。(齋藤恒 2018.pp61-62)

1956 (昭和 31) 年に「もはや戦後ではない」と経済白書に謳われ、日本は国策として工業立国を目指した。チッソは 1951 (昭和 26) 年に生産過程を変更した結果、メチル水銀の副生は増え、食物連鎖により魚介類の水銀蓄積も増える一方だった。同年 11 月から熊本大学研究班は、猫に水俣湾の魚を与え 1 ヶ月後に水俣病を発症させ、保健所長も同様の実験を行ない、早いもので 7 日後に発症させた。水俣湾の魚介類がこの奇病の原因であることは疑いようがなかった。(石井妙子 2021. pp172-175)。同月、熊本大学研究班は第 1 回研究会を開き、「本疾患は伝染性の疾患では無く、ある種の重金属による中毒症で、その原因は水俣湾内の魚介類の摂取によるものである」と発表した。1957(昭和 32)年 2 月には「水俣湾の漁獲禁止か食品衛生法適用が必要」と確認、熊本県は水俣湾漁獲物の販売禁止を検討し、7 月には「熊本県水俣奇病対策連絡会議」が食品衛生法適用を決定した。ところが、食品衛生法は知事の権限で適用できるにも関わらず、厚生省に相談がなされた。当時の橋本水俣市長は、「食品衛生法は、結果的に漁獲禁止を意味するものであり、漁業関係者への補償問題が発生する。新聞発表前に何ら打ち合わせのないのは遺憾である」と連絡会議に抗議し、水上副知事も厚生省からの「食品衛生法は適用できない」という回答を希望していたのか、厚生省公衆衛生局は、「水俣湾特定地域の魚介類を摂食することは、原因不明の中枢性神経疾患を発生する恐れがあるので、今後ともなされないよう指導されたい。ただし、水俣湾特定地域のすべての魚介類に対して食品衛生は適用できない」と通達してきたが、水俣湾は豊かな漁場で、住民は魚に依存して生活している人たちである。水俣病と分れば漁師や鮮魚商さえも、村八分にされかねず、チッソや行政との間だけではなく、収入が途絶えた被害者同士の溝も深まった。国は住民の健康を無視し、あからさまに大企業を擁護したのである。(齋藤恒 2018.pp62-63)

1959 (昭和 34) 年 10 月、県漁連の漁民総決起大会が水俣市で開かれ、チッソに対し、操業停止と水俣湾および水俣川排水溝の沈殿物除去、漁業被害補償と患者見舞金を要求した。チッソ側は交渉を拒否し、漁民を鎮圧するため警官隊が出動した。同じ頃、熊本大学研究班のメチル

水銀原因説を自ら確認したいと思ったチッソ付属病院の細川医師は、工場排水を猫のえさにかけて実験を続けていた。「400 号」と名付けた猫が水俣病を発症したため技術部長に報告したが、11 月 3 日以降、チッソは細川に対しこの実験を禁じた。

同 11 月 2 日、自民党議員らの国会調査団と寺本廣作県知事が水俣を視察。これに呼応するように、2 千人の漁民が再結集し国会議員団に陳情を行った。その後、穏やかにチッソ工場長に決議文を渡して交渉する予定であったが、チッソ工場長が面会を拒否したため、漁民は工場に突入し警官隊はこれを攻撃した。

当時の岸信介内閣はチッソ擁護の立場をとり、池田勇人(いけだはやと)通産大臣は「水俣病の原因であるメチル水銀がチッソ水俣工場から流れ出していると結論するのは早計である」と発言し、渡辺良夫厚生大臣を叱責した。政府は厚生省の「水俣食中毒特別部会」を解散させると、経済企画庁が「水俣病総合調査研究連絡協議会」を発足させ、メチル水銀原因説を批判した。最終的に支払われた見舞金は、「死者弔意金 30 万円と葬祭料 2 万円、成人患者年金 10 万円、未成人患者年金 3 万円、死者には発病から死亡までの年数に生存者に準じた年金額を乗じたもの」で、これは「水俣病は当工場とは無関係だが、患者達が気の毒なので隣人愛として、水俣病と認定された人に対して見舞金を出す」という趣旨で、第５条には「将来、水俣病が工場排水に起因すると決定した場合においても、新たな保証金の要求は行なわない」という、のちに司法の場で「公序良俗に反する」と評された但し書きがついた。調印の翌日には、工場に乱入した漁民のうち、55 人が起訴され、「チッソに楯突くものはここまでされる」という恐怖を人びとは感じた。（石井妙子　2021. pp176-182）

通産省が設置を指導した汚染除去装置（サイクレーター・セディフローター）は、1959（昭和 34）年 12 月の竣工記念式典では、住民に対し「工場の排水は水俣川よりきれいで水俣病の原因ではないが、念のために設置する」と説明され、吉岡社長がサイクレーターを通過し浄化したとする水道水を来賓の前で飲み干して見せた。

これらの一連の工作や隠蔽により、1959（昭和 34）年をもって、熊本の水俣病は「一応、解決したこと」になった。しかし、宇井純氏によれば、1959 年以降もチッソと昭和電工鹿瀬工場ではアセトアルデヒドの増産は続いていた。（齋藤恒 2022.3.18.講演）

1960（昭和 35）年 4 月 12 日、経済企画庁主管の水俣病総合調査研究連絡会議の第２回会議で、東京工業大学の清浦雷作(きようらいさく)教授は、「水銀汚染地区は日本の各地にあるが、どこにも同様の患者は出ていない」として、「腐った魚に由来するアミン中毒（有毒アミン説）」を発表、東邦大学の戸(と)木田菊次(きだきくじ)教授もこの説を支持し新聞に大々的に報道された。漁民達は何故、自分たちが腐った魚を食べなければならな

いのか、だいたい海中に腐った魚は泳いでいないと憤った。また、「水俣病の原因は敗戦時に旧日本海軍が不知火海に廃棄した爆薬」であると、日本化学工業協会の大島竹治（おおしまたけはる）専務は、終戦時に米軍も関わった爆薬処理の事実に反する発表をした。さらに日本化学工業協会は、1960（昭和35）年4月8日に田宮猛雄（たみやたけお）日本医学会会長を委員長に据えた「田宮委員会」を設立し、徹底してメチル水銀原因説を否定した。同10月熊本大学研究班は、住民の毛髪で水銀値が測定できると考え県衛生研究所に要請し、不知火海沿岸住民を対象にした毛髪水銀調査を行なった。千人ずつ3年に渡る調査で毎回高い水銀値が認められたが、県は3年間でこの調査を打ち切り、厚生省は熊本大学医学部の研究費を削減した。（石井妙子　2021. pp185-189）

1967（昭和42）年に成立した「公害対策基本法」により、「生活環境の保全については、経済の健全な発展との調和を図る」と規制策が打ち出されるが、現実には経済成長が生活環境の保全に優先された。1968（昭和43）年の年頭、裁判で係争中の「新潟水俣病被害者の会」が熊本を訪問すると、チッソ第一組合は8月に水俣病の発生を止めることができなかったとして「恥宣言」を出す。同年9月、水俣病は公害であると漸く国が認めたころ、医師会や農協など50団体からなる「水俣市発展市民会議」は水俣病の病名変更をスローガンに掲げた。1969（昭和44）年12月に開かれた「公害の影響による疾病の指定に関する検討委員会」で、政令に盛り込む病名としては、「水俣病」を採用すると決まった。この地域で起きた食物連鎖によるメチル水銀の蓄積という発症メカニズムが他に類を見ず、既に国内外で通用していることが理由だった。（原田正純　2016. pp7-8）

1970（昭和45）年11月に臨時招集された第64回国会は「公害国会」と呼ばれ、「廃棄物処理法案」「人の健康にかかわる公害犯罪の処罰に関する法律案」「水質汚濁防止法案」など14に及ぶ公害関連法の改正と新法の制定が行なわれた。（遠藤邦夫　2021. p49-50）

【新潟水俣病と齋藤恒（さいとうひさし）医師、そして私たち】

＜前書き＞

これから新潟水俣病に係わる出来事を時系列に紹介し、その公表以前から2022（令和4）年の現在も、臨床や研究のみならず、患者や家族への個別的な支援と、補償や社会福祉に関して建設的な働きかけを続けている斎藤恒（さいとうひさし）氏というひとりの医師の活動を通し、私たちは対人援助職として地域社会や環境とどう係わるべきか考えてみたい。

齋藤医師は1930（昭和5）年に9人兄弟の8番目として新潟で生まれた。中学2年生の頃は、特攻隊が「軍神」として崇められ、3学期になると魚雷工場に動員されていたが、6月からは毎晩のように空襲警報が鳴り渡り、防空壕に駆け込まない

日はなかったそうだ。1945（昭和 20）年、新潟中学 3 年生の 8 月 15 日に日本は敗戦を迎える。齋藤は、その後の旧制高校時代が大好きだった。学校の勉強以外に沢山の本、文学のみならず哲学、特にマルクスやエンゲルスを読み、映画も見た。1949（昭和 24）年頃、職場や学校でもレッドパージがおこなわれ、学生運動が全国的に急速に盛り上がり始めた。1955（昭和 30）年に新潟大学医学部を卒業する際、学生時代にお世話になった解剖学のM助教授に贈られた言葉は「Methode と Methodik」であった。つまり、「方法（目標にたどり着くための道筋）と方法論（唯物弁証法を介して方法自体を見直す）」という意味である。

2022 年 5 月 7 日、対人援助学会第 14 回大会の主題である「新潟水俣病と私たち」について問う私と丹羽恵子医師に、齋藤医師は「私は水俣病に取り組み、学びながら、いつの間にか 90 歳になった。臨床の一線は退いたが、漁民部落の問題や水俣病の認定問題など、熊本や新潟の人たちに支援を求められると、まだまだ卒業するわけにはいかないと思う。」と述べ、莞爾として笑った。

＜カーランドの勧告＞

アメリカの国立衛生研究所（National Institutes of Health: NIH）疫学部長のカーランドは、1960（昭和 35）年、『World Neurology』誌に 8 つの勧告文を発表した。その前文に、「我々は、水俣湾と同じような状況が発生するかも知れない他の地域について、建設的な勧告を行うに足る情報がすでに存在すると考える」とある。

その勧告の要旨は、

第 1 条：水俣湾産の魚介類は現在もなお有毒であることを示す根拠があり、この魚介類の安全性が適切な動物実験によって確かめられるまでは、漁獲禁止は強制され続けるべきである。

第 2 条：水俣湾から少し離れた場所の漁民や家族に新たな患者が発生して住民に不安を引き起こしていることが判明した。湾内から遊泳してきた自由回遊性の魚を摂取したためと思われるが、これらの患者の診断と調査を行なうべきだ。

第 3 条：水俣湾の魚介類の生態系を詳細に調査するべきだ。

第 4 条：魚介類の体内での中毒物の正確な科学的形態と、この形態に変化するメカニズムを解明する研究が必要である。

第 5 条：水俣湾の海底、特に水銀が集中していると思われる廃液排水管及び以前の配水管付近から、水銀を含むシルト（沈泥）を除去する場合、シルトの上層部分を浚渫し陸上の安全な貯留地域に移す作業が必要である。

第 6 条：塩化ビニールの粗製品を純化する方法として、洗浄法の代わりに乾留法を用いるべきだが、水銀も空気汚染部室だから、乾留法においても大気の安全基準を超えない安全対策が必要だ。地域の公衆衛生局は使用済み触媒

からの水銀の再利用を、未実施のプラントに勧告するべきだ。再利用においても水銀の使用量を減らす代替の化学処理法を探すべきだ。

第7条：今後さらに患者発見に努め、疫学的調査を行ない、海や海底のサンプルの水銀その他の有毒物質を化学的に測定する努力を日本およびその他の国のビニール・プラントでも継続する必要がある。

第8条：各種のキレート剤を急性中毒期の動物に投与する実験によって得られたデータは、今後仮にヒトで新患者が発生したときの早期治療に役立つと思われる。

1960（昭和35）年当時にこの勧告を遵守し、食品衛生法が適用されていれば、患者発生も少人数に終わり、完全補償を行っても企業の出費は少なく、第二のメチル水銀中毒症である新潟水俣病を予防できた可能性がある。

1988（昭和63）年、熊本で「水俣病国際フォーラム」が行われたとき、カーランドは、30年近く経っても漁業規制が完全規制ではなく、漁民たちの自主規制に留まっていることに驚き、これからでも完全規制にするべきだと述べた。さらに、水俣病問題における疫学の重要性について、「疫学は疾患がどの地域に起こるかなどを統計的に比較し、論理的に推論して、その機序を解明するものである。中毒症ならば原因物質の曝露を受けた集団と曝露を受けていないコントロール地区を比較し、相対危険度、あるいは死亡率を調査するなら標準死亡率の関連性の程度を見ることもできる。環境汚染においてはまず疫学、特に相対危険度が重要である。その結果を実験班に提供し病理学的研究をしてもらう必要がある」と説いた。また、「ある症状が、メチル水銀が原因物質である場合の特異的症状と疑われるとき、曝露の有無で統計学的に有意な差が出ていることを示す必要がある」と研究論を提示した。（齋藤恒 2018. pp57-60, 2022.5.7.講演）

相思社理事の遠藤も、理想的な水俣病対策を以下のようにまとめている。

（一）．病気になる原因が想定された1957（昭和32）年、①魚介類の捕獲禁止、②魚介類の摂取制限、③原因物質排出の可能性が高い工場の排水一時停止、④原因の多角的調査、⑤周辺の人々すべての健康調査を行う。

（二）．水俣病の原因物質が確定された1959（昭和34）年には、①メチル水銀中毒症と名付け、②工場の排水停止、③被害者への経済的支援、④原因の科学的解明、⑤同様の被害が予測される水銀使用の他の工場の排水を停止する。

（三）．メチル水銀の出自が解析された1963（昭和38）年には、①被害者への謝罪と補償、②被害地域への支援、③治療方法の研究、④水俣病の多角的な調査・研究に着手する。

（遠藤邦夫 2021.pp136）

＜新潟水俣病公表から＞

1964（昭和 39）年 6 月に発生した新潟地震の直後、新潟の医療機関は非常態勢をとって被災した住民の診療にあたった。そのとき勤労者医療協会沼垂（ぬったり）診療所の齋藤恒所長が阿賀野川河口付近の農村部落を担当したことから、不思議な病気がこの地域に散発していたことが徐々に明らかになる。同年の暮れには、阿賀野川松浜橋付近で、ニゴイ・ウグイ・サケなど大量の魚の浮上が報じられた。（宇井純 2014. p110-116）

阿賀野川は、福島県の猪苗代湖、裏磐梯の檜原湖・秋元湖などの豊富な水源が有り、尾瀬沼に発する只見川と合流して新潟県に入り、越後山脈を貫流して日本列島を横断するように日本海へ注ぐ。長さは 210km で日本 10 位であるが、水量は新潟の信濃川や北海道の石狩川と肩を並べる大河である。三尺ではなく「三寸流れれば清い」と言われるほど澄んだ水流には沢山の魚介類が育ち、沿岸には昔から漁師や砂利取り業者など、川に依存した生活を営む人が多くいた。上流の岩は庭石などに、中流の砂利や下流の良質な砂は塩分が少なく貴重な土木建築資材になり、河口部の川幅は約 500 メートルに及び、両岸には 2000 名を超える漁民がいた。（齋藤恒 2022.3.18.講演）（関礼子 2003.pp158-162）

1965（昭和 40）年 1 月に新潟大学病院へ入院した 39 歳の男性の症状は、水俣病に類似し、さらに同様の患者が運び込まれていた。チッソ付属病院を退職し故郷の愛媛県で暮らしていたチッソ付属病院長の細川一医師は、東大工学部助手の宇井純に連れられて患者を見舞い、水俣病に間違いないと確信した。新潟からの帰路、細川医師はチッソ本社に立ち寄り新潟訪問の結果を告げ、今からでも「猫 400 号実験」の結果をすべて明らかにすべきであると会社の幹部に迫ったが、チッソの幹部は細川医師の提言を無視する。（石井妙子 2021. p193-196）

同じく 1965（昭和 40）年 1 月、東大助教授だった椿忠雄（つばきただお）医師が、神経内科を新たに開設する準備で訪れた新潟大学の脳外科病棟で 31 歳の男性患者 K.I（①）を診察し、その臨床症状と毛髪水銀値 320ppm からメチル水銀中毒症と診断した。さらに、② T.K 19 歳男性、③ K.O 28 歳男性、④ U.M 62 歳男性の 3 名を同じくメチル水銀中毒症と診断した。5 月 29 日、新潟大学神経内科の教授に就任したばかりの椿忠雄らは、第 12 回日本神経学会関東地方会でこの 4 例を報告し、5 月 31 日に新潟県にメチル水銀中毒患者の発生を伝えたが一般への公表は控えた。（齋藤恒 2022.3.18.講演）（関連年表 2021.p48）

この頃、阿賀野川べりを車で走っていた齋藤医師は、普段は用心深いはずの大型魚が容易に釣れる、と聞いた釣り人が立錐の余地もないほど集まり、近くには飲食ができる露店も出ていることに驚き、阿賀野川流域で起こりつつあることを皆に伝えなければならないと思った。この異変を聞きつけた新聞「赤旗」の山本記者の訪問を 6 月 11 日に受け、翌 6 月 12

日には新潟大学神経内科椿忠雄、脳外科植木幸明両教授と新潟県衛生部による公式発表が行なわれた。その僅か 2 日後の 6 月 14 日には、新潟大学神経内科・脳外科、保健所が協力し「阿賀野川下流域第 1 次戸別訪問調査」（いわゆる第 1 次一斉検診）が始まった。6 月 16 日に椿・植木両教授、北野県衛生部長が「断定はできないが中毒経路は阿賀野川の魚と推定される」と発表、調査対象は 6 月 21 日に日本ガス科学と昭和電工鹿瀬工場に絞られた。7 月 8 日、齋藤医師の呼びかけで水俣病の学習会が開かれた。新潟大学神経内科の広田医師は水俣病の臨床、同公衆衛生の滝沢医師は熊本大学の水俣病原因究明の取組み、そして桑原史成の写真集「水俣」を引用して、生活に困窮した漁民達とチッソの紛争について話した齋藤医師は、参加者達の推薦で「民主団体水俣病対策会議（民水対）」の議長に就任した。民水対の活動の四つの柱は、①原因の早期究明、②被害者に対する完全補償、③2 度目の水俣病を発生させた政府の責任を問う、④類似の公害患者と支援者との連帯である。8 月 18 日の第 1 回の対県交渉には、新日本医師協会の久保全雄（くぼまさお）医師が応援参加した。久保医師は、1961（昭和 36）年当時に日本で流行していた「急性灰白髄炎（ポリオ）」の生ワクチンを旧ソ連から輸入して、我が国のポリオ撲滅に貢献した医師であり「患者を中心にした自治体闘争」の重要性を説いた。1965（昭和 40）年 1 月には、新潟でもメチル水銀中毒と判明している患者がいたのに、6 月 12 日まで公表が遅れた理由を県に糺したところ、北野県衛生部長は、「行政には社会秩序を保つ責任が有り、対策がはっきりしないまま発表すれば混乱を招く。椿教授からメチル水銀中毒発生の報告を受けたのも 5 月 31 日だった」と答えた。その場にいた、弟を亡くしたばかりの K さんは、その回答に納得できず、椿教授に面会を求めた。県交渉を終えた齋藤医師は、K さんとともに椿教授のもとへ向かった。椿教授は、「1 月に最初の患者を発見したとき、3 つの原因（水銀農薬、皮膚治療薬、工場排水）が考えられた。水俣病なら他にも患者さんはいるはずと考え、5 例まとまってから公表するつもりだった」と答えた。齋藤医師は、同じ医師として椿教授の回答を理解できたが K さんは納得せず、「3 つの原因が考えられたのなら、何故その通りに公表しなかったのか。川魚が危険だと分っていたら、弟に好物のニゴイの刺身は運ばなかった。弟は死なずに済んだのではないか」と言い涙を浮かべた。K さんの家族は 6 人全員がメチル水銀中毒症の犠牲になった。齋藤医師もこうして嘆き悲しむ人々を見て、県や省庁の対応に疑問を深めるようになった。（齋藤恒 2018. pp72-75）

熊本を参考に、同年 7 月から毛髪水銀値が 50ppm 前後から 200ppm 以上の妊娠可能な女性 78 人に対して受胎調節指導が行なわれた。7 月 3 日、新潟市水銀中毒対策本部は、高水銀量の女性には人工妊娠中絶処置、妊娠可能で毛髪水銀が 50ppm 以上のものは希望者に対して治療（詳細不明）、1 歳未満の子供で母親が高水銀の場合は母乳を人工栄養に切り替えるという決定をした。7 月 26 日には受胎調節等の

訪問指導と健康管理の計画を立案、7 月 28 日から 16～49 歳の妊娠可能な婦人(5,366 人)、妊産婦(669 人)、乳児(485 人)に健康調査が行なわれた。(関礼子.2016.p149) 8 月 18 日、支援組織である民水対は県との交渉の場で、「胎児性水俣病については、県と市の負担で母体への対策を実施するとともに、乳児患者が出た場合は県と市で養育の用意があるかどうか明らかにせよ」という申し入れをしている。第一次訴訟で、1967 (昭和 42) 年まで行われた受胎調節指導により肉体的・精神的苦痛及び生活上の不利益を被ったことを理由に、昭和電工側に慰謝料を請求し、人工妊娠中絶を受けたものには 33 万円、不妊手術を受けたものには 55 万円を支払うことが命じられた。熊本の経験を教訓に行われた新潟の受胎調節は、患者発生予防を第一の目的と捉えていた。(野澤淳史.2020. p126-128)

1965 (昭和 40) 年 9 月 8 日、厚生省は臨床・試験・疫学の三班からなる「新潟水銀中毒事件特別研究班」を発足させた。9 月 18 日、臨床班の椿教授らは患者の毛髪の水銀濃度と猫の死亡状況の調査から、阿賀野川は新潟地震の前の 1963(昭和 38) 年には汚染されていたと報告。1959(昭和 34)年 1 月、昭和電工裏のカーバイド残渣捨て場が崩れ、河口まで大量の魚が斃死して阿賀野川漁協に 2400 万円の補償がなされた記録もあった。漁師たちの言うとおり、阿賀野川の汚染源は昭和電工鹿瀬工場であった。1966(昭和 41)年 3 月、厚生省の「新潟水銀中毒事件特別研究班」の三班合同会議が開かれ、厚生省の館林環境衛生局長が議長を務め、科学技術庁や通産省、経済企画庁、農林省、水産省の参加もあった。疫学班は「汚染源は昭和電工鹿瀬工場である」と全会一致で結論していたが、各省庁の事務官から議論が百出し、熊本と同様にオブザーバー出席をしていた通産省から、同工場を汚染源とする資料が不十分だと横やりが入り、疫学班の研究費は 3 月で打ち切られた。

1967 (昭和 42) 年の新潟水俣病第一次訴訟で、原告側は昭和電工の排水が原因であると主張したが、昭和電工側の横浜国立大学北川徹三(きたがわてつぞう)教授は、1964 (昭和 39) 年 6 月の新潟地震で被災した信濃川河口の農薬倉庫から流出した農薬が日本海に流れ出て、「塩水楔」(比重が重い海水が楔所に川を遡上する現象) となったことが原因であると主張し、通産省もこれを支持した。しかし、証拠とされた航空写真の日付と被告側主張の矛盾により農薬説と塩水楔説は完全に否定された。(関礼子.2016.pp149) 航空写真判読専門家の西尾氏によれば、農薬と称された部位は海上に流失した油と思われ、白黒写真で白く映っている部分はカラー写真で見ると七色の縞模様に光り輝いていた。その範囲は海上にとどまり、阿賀野川にさかのぼる様子もない。(宇井純.2014.pp122-124)　また、地震直後の農薬倉庫は 7 つあったが 6 つは全く浸水せず、残り 1 つは強固な外壁が施錠され、流失の事実はない。港にあった約千トンの在庫農薬は、運送会社と自衛隊により完全に撤去され、登記された農薬の袋があったとされる阿賀野川の泰平橋付近では誰も農薬は投棄していなかった。とり

わけ、メチル水銀を含有する農薬を保管していた倉庫は地震で損傷を受けておらず、仮に航空写真で白く映っているものが農薬だと仮定すると全保管料の数倍の量に相当すると推測され、農薬説は矛盾に満ちていた。(宇井純. 2014. pp125-127)

6 月 3 日、「新潟県水銀中毒対策本部」の医師でもある新潟県副知事の君健男本部長は「水俣病被災者の会」会長の近喜代一氏に、県が昭和電工に患者の補償を斡旋するから「民水対」と手を切るように要請した。1965（昭和 40）年の年末手当を地元豊栄市から貸与され、患者代表の近喜代一氏は、「患者組織を作る意味がよくわかった。年末に患者家族を含めて 47 名で 4 つの柱を確認したので、正式に民水対に加盟する。」と言った。近さんの父親は、戦前の「木崎小作争議」(1922 年に新潟県木崎地区で起こった日本三大小作争議に挙げられる農民運動。地主から小作料を払い耕作しても耕作権を認められなかった小作人が、地主に対して小作料の減免や条件改善を求めて起こした)に参加して投獄された。小学校の校長先生が、喜代一氏に辞書を引いて漢字を覚えるよう諭した日記の、「おぼれる者は、藁をもつかむ心境になる」とした顛末は、第一次訴訟の法廷にも提出された。近さんが、漁獲制限と体調不良を理由に生活保護を申請すると、市の担当者から「あなたの家にはテレビや漁船がある。娘を高校に進学させようとしている」と言われた。近さんの娘は優秀だったが、体調が悪く伏せりがちなのに進学をあきらめ就職した。近さんは悔しくて涙が出た。
（齋藤恒. 2022. 3. 18. 講演）

また、新潟県下越地区には「与茂七裁判」の言い伝えがある。江戸時代の新発田藩で、義人・与茂七が地主の不実を訴えたところ、市中引き回しのうえ磔獄門になった。死を前にした与茂七は「貧乏人は理があっても裁判に訴えるな」と言ったという。長いものに巻かれることは庶民の生きる知恵であったのだろう。
（関礼子. 2003. p117）

1966（昭和 41）年 6 月 4 日の合同会議総会で、民水対は患者団体をいくつかに分け、企業側と安易な妥協はしないよう説得した。この年の 2 月に起きた、羽田沖の航空機事故で死者 133 人に一人あたり 1,000 万円が補償された。県主催の「新潟水俣病補償委員会」は 1 回開催されたのみで、その後の交渉はもたれなかった。民水対の齋藤恒議長と坂東・片桐弁護士は、裁判に向け準備を始めた。厚生省の舘林環境衛生局長から、北野県衛生部長に「5 千万円を出すから新潟水俣病問題を一切終わらせるように」という連絡があり、北野衛生部長が「それは無理な話だが 1 億円なら努力してみる」と返答すると、それ以来返事がなかったことが数年後に判明した。(齋藤恒 2018. pp80-86)

1967（昭和 42）年 6 月の新潟第一次訴訟では、原告側の新潟水俣病被害者たちは、あいまいこの上ない政府認定の因果関係の立証と、企業側の過失責任の存在を主張するという困難な課題を選んだ。弁護団の熱心な努力により裁判史上まれにみる科学的な準備書面が用意され、裁判は患者ら原告側の主導のもとに進行し、双方の主張の説得力には歴然たる差があった。6 月 12 日の第一陣の患者 3 家族 13

人から第八陣 34 家族 77 人まで増え、続く四日市公害訴訟（1967 年 9 月）、イタイイタイ病訴訟（1968 年 3 月）、熊本水俣病訴訟（1969 年 6 月）に影響を与えた。新潟では、4 年後の 1971（昭和 46）年 9 月 29 日に原告が勝訴、公害事件では被害者の立証責任は軽減され、企業は住民に被害が及ぶ場合は操業の短縮や停止を含む、高度の注意義務が求められるようになった。（関礼子 2016. p30）

1967（昭和 42）年 6 月の第一次訴訟後の補償協定をめぐって　新潟水俣病患者は、訴訟には勝利したが、判決による保証料が一定ではなく、補償協定を結ぶ必要に迫られていた。7 回にわたる自主交渉では、県評傘下の労組員と患者たちで会場は満杯にはなり整然と交渉が行われた。特に注目されたのは医療保障で「水俣病に対する医療を無料にする案」では、水俣病の患者はちょっとしたことでも大学病院への受診を勧められてしまうので、水俣病（疾病）に対する補償ではなく、対人補償にする必要があった。（齋藤恒. 2022. 3. 18. 講演）

1968（昭和 43）年 1 月、第一次訴訟を係争中の新潟の患者と齋藤医師ら支援団体が水俣を訪れ、患者相互が交流したことで、長い間孤立していた水俣病患者と、それを同情しながらも傍観していた水俣市民は衝撃を受け、水俣に「患者の心をわが心とする」市民組織が生まれた。9 月の政府見解発表で、責任を認め患者宅を詫びて回ったチッソ江頭社長だが、新たな補償請求には応じず、厚生省公害部長はチッソの作成した文面の仲裁依頼状をそのまま患者側に渡し承諾の署名を求めた。この仲裁工作をのむか否かで患者組織は紛糾し、1969(昭和 44)年に一任派は訴訟派と袂を分かつことになる。(宇井純 2014. p104-105)

＜認定の変遷＞

1971(昭和 46)年の環境庁事務次官通知では「公害に係る健康被害の救済に関する特別措置法（救済法)」の趣旨から、有機水銀に汚染された魚を多食し、水俣病に特有の症状のいずれかを有し、その症状が他の原因ではない場合は水俣病と認定する「疑わしくは認定」という方針が示された。患者の迅速な救済を第一に考える環境政策の推進を背景とし、補償協定は裁判原告以外の患者救済のために、水俣病と認定されれば補償協定が適用され、速やかに補償される枠組みができた。1973（昭和 48）年 6 月 21 日、認定患者の会「新潟水俣病被災者の会」と支援者の「新潟水俣病共闘会議」が、昭和電工との間で保証協定を締結。死亡者と重傷者に 1500 万円、そのほかの認定患者に 1000 万円、生存患者に物価スライドによる年金が支払われることになった。1969（昭和 44）年の「公害に係る健康被害の救済に関する特別措置法」(救済法) から、1973（昭和 48）年の「公害健康被害の補償等に関する法律」(公健法) で流れが変わり、1974（昭和 49）年には認定申請を棄却される患者が急増、1972（昭和 47）年には認定申請棄却件数は 385 申請件中 7 件（2%）だったが、1973（昭和４８）年は 518 申請件中 43 件 (8%)、1974 (昭和 49) 年は 243 申請件中 145 件 (60%)、1975 (昭和 50）年は 215 申請件中 207 件（96%)、

1976（昭和 51）年は 208 申請件中 207 件（99.5%）に上った。1977（昭和 52）年の椿忠雄氏がとりまとめた環境庁環境保健部長通知、「後天性水俣病の判断条件について」で認定基準が「複数の症状の組み合わせが無ければ水俣病と認定しない」と厳格化されると、遅れがちだった認定審査が一挙に進み、棄却件数が大幅に増え、その後は申請件数が激減した。さらに、1978（昭和 53）年の環境庁事務次官通知「水俣病の認定に係る業務の促進」では医学的に水俣病である蓋然性が高くなければ認定しないという方針に変わった。（関礼子. 2016. pp31-33, p204）

新潟水俣病の補償をめぐり生起してきた紛糾を回避し得たであろうひとつのシナリオは、昭和電工の補償能力の有無に忖度せず、1971（昭和 46）年の事務次官通知を存続し続けることであったと思われる。国の意を受け椿忠雄氏が心配したほど昭和電力の財源は限界とは程遠いものであったことは、米国で起こした「L トリプトファン」食品公害事件の賠償額 2085 億円を見れば明らかである。(飯島伸子 2006, p212)

1973(昭和 48)年 5 月、熊本大学水俣病研究班が汚染地区と比較するために選んだ天草郡有明町以外に、宇土市、三角町、大牟田市、山口県徳山湾沿岸の新南陽市で定型的な水俣病に見られる症状を持った人が見つかり、これが「第三、四、五の水俣病」として報道されると全国に水銀パニックが起きた。新潟県内でも上越地区の関川水系で新たな水俣病の発生疑惑が生じた。関川水系は明治時代に水力発電所が建設されると、農業用水以外に発電用水、工場排水の最終的な排出先としても利用されるようになった。当時の上越地区や新井市は「公害のデパート」と呼ばれ、1973（昭和 48）年 7 月の新潟県環境局の資料でも関川には昭和電工鹿瀬工場を凌ぐ水銀が排出されている。1969（昭和 44）年の段階で宇井純氏は、「第 3 の水俣病発生の恐れがある地点として新潟県の関川沿岸を明記する」としている。同地区に新潟大学の椿忠雄教授を招き、「水俣病類似患者」と疑われた 13 歳～63 歳までの 11 人のうち 10 人を診察した結果、「精密検査を必要とする人は一人もいない」という回答で、椿教授は「関川水俣病」を否定した。その 3 日後、斎藤医師が上越市を訪れ、椿診察を受けた一人を含む 7 人の「水俣病類似患者」のうち、二人の患者を「水俣病類似の症状を呈している」とした上で、「関川は PCB などの複合汚染もあるようだし、早急に汚染の実態を調べるべきだろう」と述べた。

後日、斎藤医師が行った健康被害住民健診では、42 人の川魚多食者のうち 16 人が水俣病類似の症状があると診断され、16 人中 8 人が 2 家族 4 人ずつの家系被害を被っており、2 件で猫が狂死、1 人は無機水銀中毒の合併が疑われた。関川は水量が少なく悪臭や色調変化は恒常的であるが、職業的な漁師が阿賀野川より少なく、被害の地域集積性が明らかではないためか「関川水俣病（関川病）」は否定されることとなった。

＜地域集積性と家族集積性の調査＞

1977（昭和 52）年、認定が厳しくなり

始めたある日、安田町に住む大工のHさんが、数人の水俣病と思しき患者さんを伴い斎藤医師を訪れた。Hさんは、「東京のチッソの前で座り込みをしていた自主交渉派の川本輝夫さんに『新潟にも認定されずに困っている人はいるはずだ。あなたはその人たちのために闘った方がよい』と言われて安田に帰ってきました。でも、地元の人たちにはあまり歓迎されなくて」と苦労話を聞かせてくれた。町長に掛け合っても安田町では検診の予定が立たないそうだ。Hさんが問題にしている安田町の千唐仁（せんとうじ）地区は、阿賀野川河口から30km上流に位置し、戸数98戸、人口は541名で、漁師や砂利採取で船を持つ家は85戸（86.7%）で、船を持たぬ専業農家が9戸、ほかの4戸は商店とサラリーマン家庭であるが、農家は新鮮な野菜と川魚を交換し、商店とサラリーマン家庭も親戚や知人から川魚を購入したり、分けてもらったりして動物性蛋白質は川魚に依存していた。斎藤医師は87名を診察し、85.1%に平衡障害（バランス不良やふらつき）、69.0%に四肢の感覚障害、58.6%に協調運動障害（幾つかの筋肉を使って、滑らかな動作を遂行する）、11.5%に口囲の感覚障害を確認した。さらに四肢感覚障害は18家族に認められた。

斎藤医師は、さらに1965年6月～2018年末までの期間にメチル水銀の曝露があり、中毒症に特徴的な四肢や口囲に感覚障害のある、阿賀野川の河口から鹿瀬町までの阿賀野川に接した集落患者を集計して有病割合を調査した。対照の非曝露群は、熊本大学内科の熊本講師による同県M町の60歳以上の住民1270名で、四肢末梢の感覚障害例は3名（0.2%）であった。結果、阿賀野川の昭和電工排水口より下流の70集落中、メチル水銀の影響で四肢末梢の感覚障害が引き起こされた蓋然性が、50%未満は2集落に過ぎず、68集落は50%以上であり、そのうち39集落は90%以上であった。河口から鹿瀬町までの全体の蓋然性は95.7%であったが、環境庁は50%以上の水俣病（メチル水銀中毒症）らしさがあれば（公健法で）認定すると述べている。

さらに、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」（特措法）に申請する、2010（平成22）年6月～同12月末でメチル水銀中毒症と診断した40代以上の92名（男性37名、女性55名）の家族集積性について調査した。「ご家族に水俣病患者さんはいますか？」と問うと、他界した人を含め認定患者がいると明言したのは13例で、地域集積性と同様に、濃厚な「家族集積性」が認められた。この「地域集積性」と「家族集積性」は、メチル水銀中毒症（水俣病）の特徴である。（齋藤恒 2020.pp9-24）

＜司法と行政＞

「有機水銀により汚染された魚介類の摂食歴があり、四肢や口囲のしびれ、言語障害、歩行障害、求心性視野狭窄、難聴など単一の症状があれば認定の要件にする」という、1971（昭和46）年事務次官通知による認定患者増大もあり、補償費が膨らみチッソの倒産は現実化していた。環境庁は、1977(昭和52)年、症状の組み合わせを要件とする「昭和52年判断

条件」へ変更し、認定基準を厳格化させることで対応した。これは、発症してからの期間や個々の患者の重症度が異なる熊本と新潟の、言い換えればチッソと昭和電工の経済基盤と賠償責任の足並みを国が揃えたとも言える。1982(昭和 57)年、水俣病であることの確認と損害賠償を求め、認定棄却や保留を繰り返された患者たちは「新潟水俣病被害者の会」を組織し、昭和電工を相手取り「水俣病第二次訴訟」を提訴した。被害者の会会長の五十嵐幸栄さんが住む津島屋から多くの住民が二次訴訟原告に加わり、「公害は終わった」という社会的な風潮の中で提訴されたため、一次訴訟や補償協定締結の時のような世論の後押しもなく厳しい展開を強いられた。(関礼子 2016.p204)

1992 (平成 4) 年の新潟第二次訴訟の判決で、原告 91 人中 88 名は水俣病であると認められた。新潟水俣病発生の公式発表から 30 年、1995 (平成 7) 年に新潟水俣病問題は、熊本の水俣病問題とともに村山富市政権下に政治解決が図られた。原告たちは、苦渋の選択の末に政府の最終解決案を受け入れ、昭和電工と解決協定を結び、1996 (平成８) 年に二次訴訟は和解した。1995 (平成 7) 年政府解決案の水俣病補償は、熊本県が県債を介してチッソに融資、国が県の資金を調達していた。(石井妙子.2021.pp343-344)

1988(昭和 63)年に熊本で行なわれた「水俣病国際フォーラム」で、「水俣病におけるチッソの責任」と題して講演した宇沢弘文氏は、PPP(汚染者負担 Polluter pays Principle)の問題に加え、熊本県がチッソのために県債を発行し、国がその資金をまかなったことを強く批判している。「一企業の犯罪に対して県債を発行して、それを国とともに救済することは前例のない異常な措置である」と述べた。PPP は OECD (経済開発協力機構) が 1972(昭和 47)年 5 月 26 日に採択した環境政策に対する指導原則で、「汚染者に発生した被害のすべてを支払わせる」とする国際的な取り決めである。水俣病について、宇沢弘文氏は「日本における数多くの公害問題に共通した、非人間的、被倫理的、非論理的性格を象徴している」とも述べ、日本経済の置かれている状況は、新古典派経済理論の考え方と一脈通ずるものがあると強く指摘した。つまり、富裕国ほど貧困に苦しむ者の多い格差社会に進んでいると危惧していた。(斎藤恒.2015.pp171-181. 2018.pp70-71)

国は増大する未認定患者の対応(補償)を迫られ、1995(平成 7)年から 1996(平成 8)年にかけ政治解決を目指す。棄却処分を受けた人のうち一定の症状を持つ人に行政が医療費と手当を出す「総合対策医療事業」がその基盤で、それに加えて「国・県の加害責任は認めず、対象者を水俣病と認定しない」ことを前提にチッソが一時金として 260 万円を支払い、国や県は水俣病救済が遅れたことを謝罪するという内容で、当時の与野党とも支持し翌年にかけ訴訟や認定申請を取り下げることを条件に受付と受給者判定が行なわれた。(緒方正美.2016.p265)

閣議了承された水俣病政府解決の際の首相談話では、国の行政責任には言及されなかった。1996 年から半年間の申請期間が設けられ、申請が通った人には医療

手帳が交付され、約 1 万人がこの解決策を受け入れた。2009（平成 21）年「水俣病被害者の救済および水俣病問題の解決に関する特別措置法（特措法)」が施行された。約 3 万 2 千人の適用者たちは、一時金と被害者手帳を手にし、被害者団体に団体加算金として 31 億 5 千万円が支払われた。(石井妙子. 2021. pp343-344)

和解の道を選ばなかったチッソ水俣病関西訴訟団が 2004(平成 16)年に最高裁で勝訴し、判決では 1960(昭和 35)年以降、国と熊本県が規制権限を行使しなかったことの「不作為」の違法性が認められ、公式確認から 50 年で水俣病拡大に対する行政の賠償責任がはじめて確定した。しかし判決後ただちに、環境省は「昭和 52 年判断条件」の見直しは行なわないと明言し、行政と司法の二重基準の問題が発生、認定審査会は機能停止に陥った。またチッソに加え、国と県に対して水俣病であることの確認と損害賠償を求めて、2007(平成 19)年 5 月に「水俣病第三次訴訟」が全国展開され大規模化した。(野澤淳史. 2020. pp18-19)

Y さんのお母さんは認定患者だが、2005 年沼垂（ぬったり）診療所の関川智子医師より水俣病の可能性があるという内容の手紙を受け取り、認定申請をするが二度棄却される。2007（平成 19）年、「新潟水俣病阿賀野患者会」結成と同時に Y さんは会長に就任し、2009（平成 21）年には、国と昭和電工を相手取り「ノーモア・ミナマタ新潟全被害者救済訴訟」を提訴し、27 名の原告団代表になる。新潟水俣病に認定された患者は、加害企業から医療費全額や各種手当が補償給付される。新潟水俣病の認定患者は「新潟水俣病患者受診証」、認定はされていないが「水俣病総合対策事業」や 2009（平成 21）年の「水俣病救済特別措置法」(特措法) で救済された人は、医療費の自己負担分や療養手当などが支払われる。「医療手帳」、「保健手帳」（特措法後に「水俣病被害者手帳」に切り替え)、「水俣病被害者手帳」があり、手帳の種類により給付内容は異なる。(関礼子. 2016. p66, p99 ）

国は 2009(平成 21)年 7 月に「水俣病被害者の救済および水俣病問題の解決に関する特別措置法(特措法による第二次政治解決)」を成立させ、1995(平成 7)年の第一次政治解決と類似の対策を 2010(平成 22)年 5 月～2012(平成 24)年 7 月にかけて実施したが、同年 11 月チッソは事業再編計画を環境省に提出、翌年の 4 月には JNC という 100%出資の子会社を設立して液晶製造などの事業を移し、本社は水俣病保証に関する業務のみを行なう体制にしたが、JNC は水俣病に関しては免責される。特措法の対象からも漏れ、医療費自己負担分を補助する手帳さえ受け取ることができなかった 9 千人の人たちや、対象地域外の住民や年齢による線引きで申請できなかった若い世代もいる。
2013(平成 25)年の認定棄却処分の取り消しと認定義務づけを求めた行政訴訟では、最高裁で原告側が勝訴し、判断条件に当てはまらなくともメチル水銀への暴露歴や生活歴等の疫学的事実を踏まえ認定を認めたが、環境省はやはり「昭和 52 年判断条件」の妥当性を主張した。

特措法による救済の申請窓口はすでに

締め切られているため、新たに救済を求めるには公健法に基づく認定申請か、長い期間を要する裁判しか残されていない。認定申請で棄却ないし保留された人が裁判で勝訴すると、それを契機に新たな認定申請者が急増する。判決では同時に「昭和52年判断条件」が批判・否定されるが、国は基準を見直さず「水俣病とは認定できない」が四肢に感覚障害があるものへの救済という形で、認定患者への補償とは切り離し政治的に解決する。そこから漏れたり和解を拒否したりする人たちが裁判を起こし、長い時間をかけて勝訴するが、国は判断条件を見直さない。これの繰り返しが続く限り水俣病問題は終わりを迎えない。（野澤淳史. 2020. p35）

＜マイヤーズ教授からの手紙＞

新潟水俣病が公表され40年経過した2002（平成14）年10月に、アメリカ・ローチェスター大学の小児神経学教授で、特に水銀問題を専門とするマイヤーズ教授が新潟の齋藤医師のもとを訪れた。彼は椿教授と熊本大学の入鹿山且郎（いるかやまかつろう）教授の英文著書から、新潟では毛髪水銀が50ppm以上の母親から生まれた子供が13人もいることを知っていたが、その子供たちの経過を観察した文献が日本にないことを知ると大変に驚いていた。学会終了後、マイヤーズ教授らに、「あなたたちの研究は重要で理解できる。これからも継続してほしい。だが、これまでの日本の発表は水俣病がメチル水銀中毒であるにもかかわらず、中毒という考え方が欠けている。胎児性水俣病が、重症例1人だけとは考えられない。水俣病という世界の学者に理解しがたい病名が、いつまでも使われているのはなぜか。最初、水俣奇病といわれたことは理解できるが、メチル水銀中毒症と分かった時点で『熊本や新潟のメチル水銀中毒症』とすべきではなかったか。水俣病の診断基準（判断条件）で、メチル水銀中毒に最も一般的にみられる感覚障害を重視しないのはなぜか。中毒は自殺目的で毒物を摂取した人以外、本人に責任はない。しかし患者がなぜ、患者であることを隠して生活しなければならないのか。日本は文化水準が高い国だと思っていたが、2回までも大規模なメチル水銀中毒を起こしながら、行政も学者もこのような態度をとるのは理解ができない」と厳しい指摘を受けた。

マイヤーズ教授から帰国後のお礼とともに、「高い毛髪水銀値の母親から生まれた人たちの調査をして、2003年11月に開催されるセーシェルの国際会議で発表してほしい」と依頼を受けた。調査対象者は、回答を渋る方が少なくなかったが、アンケートに対しては「頭痛やめまいを生じやすい」、「学校では1時間じっと座っていられなかった」、「先生に落ち着きがないと言われた」、「特殊学級に入っていた」、「手足がしびれる」といった回答があり、汚染が強くとも影響がまったく認められないものや、メチル水銀の影響が強いもの、その中間があり大卒者、教師や看護師、IT系の仕事についている人もいた。（斎藤恒. 2018. p9-14）

斎藤医師は2011（平成23）年にも小学生時代の自覚症について調査を行い統計学的な検証を加えた。小学生時代に、①

ブランコで気持ちが悪くなる、②マット体操の転回で気持ちが悪くなる、③走るのが遅く急ぐと足がもつれて転んだ、④1時間の授業で座っていると気持ちが悪くなる。これら4項目のメチル水銀曝露群での出現割合は、コントロール群と比べ優位に高く、オッズ比は、①12.4、②32.2、③9.6、④43.2といずれも1より高かった。これらの症状は10歳以下の発症例で顕著だった。原田らは（原田正純,田尻雅美：小児性・胎児性水俣病に関する臨床疫学的研究.「社会関係研究」.14(1).2009.pp1-6）ニュージーランドの報告で、妊娠期にメチル水銀汚染魚を胎内で摂取した子供たちは、学力テストや心理、行動、言語、知能テスト（WICS）において有意な差があるとしている。（齋藤恒2019.pp3-18）

【あとがき】

遠藤は、水俣病の歴史を1956(昭和31)年に熊本で公式に発表されてから、被害者と加害者の二項対立の闘争が続き、加害企業であるチッソや昭和電工とそれを擁護する立場をとった県や国に対する水俣病発生の責任追及と被害者の補償が中心課題だった時代から、1991（平成3）年の「中央公害対策審議会答申」以降、被害者への補償と地域再生が並列する時代になった時代の大きく二つに分けている。（遠藤邦夫.2021.p9）水俣病の失敗の経験を活かす道として、一度壊れた人間同士、人と地域に代表される社会や環境との関係を修復しつつ、そこに生きる人々の暮らしの質を向上させ（船などの大切な縄を結びなおす、「もやいなおし」と呼ばれる)、それを教訓として残すことが私たちの新たな課題となった。

水俣病である自らを否定して生きようともがき苦しんだ青春時代を経て、水俣病被害者の緒方は、苦しい出来事や悲しい出来事の中にある、幸せにつながる出来事に気付くには、その出来事と正面から向かい合うことが唯一の方法であると教えてくれた。(緒方正美.2016.pp200-201)

メチル水銀でも放射性物質でも、海に流せば薄められて無害になるという考えは間違っている。風評被害どころか、新たな被害を世界中に広めてしまうことになりかねない。「専門家」が唱える濃度や半減期という言葉は、自然現象のわずかな側面しかとらえていないことを忘れてはならない。水俣病に限らず、単なる風邪や腰痛でも、私たちは体全体でその大変さを受け止めている。そして、家族や職場、学校など私たちを取り巻くものと影響しあう。時には厳しく、時には優しく労わるように。

「水俣病では、科学的な方法で根拠や事実を積み重ねることで正しい病態が明らかになり、被害者たちの憤怒や悲しみにも近づくことが出来る。量から質が生み出されると信じることが大切だ」と斎藤医師は言う。齋藤医師は、新潟水俣病公式発表の前年、1964年6月の新潟地震では翌朝から全国の民医連・勤医協関係者や医学生の先頭に立ち、被災者達の救援活動に当たった。2021(令和3)年3月、漸く水俣病患者さんの診療から引退したが、青年のころ法学者「末川博」の講演を聞き、今でも忘れることが出来ないほ

どに感銘を受けた。末川博の言葉、「未来
を信じ、未来に生きる」は、そんな齋藤
医師にこそふさわしい。

【引用文献】

1. 原田正純：いのちの旅　「水俣学」への軌跡 .岩波現代文庫, 2016.
2. 石井妙子：魂を撮ろう　ユージン・スミスとアイリーン・スミスの水俣. 文藝春秋. 2021.
3. 関礼子ゼミナール：阿賀の記憶、阿賀からの語り　語り部たちの新潟水俣病. 新泉社, 2016.
4. 関礼子：新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域. 東信堂, 2003.
5. 原一男＋疾走プロダクション：水俣曼荼羅制作ノート. 皓正社, 2022.
6. 宇井純：原点としての水俣病　宇井純セレクション１. 新泉社, 2014.
7. 花田昌宜ほか編：いま何が問われているか　水俣病の歴史と現在. くんぷる, 2017.
8. 佐高信：原田正純の道　水俣病と闘い続けた医師の生涯. 毎日新聞社, 2013.
9. 緒方正美ほか：水俣・女島の海に生きる　我が闘病と認定の半生. 世識書房, 2016.
10. 野澤淳史：胎児性水俣病患者たちはどう生きていくのか　〈被害と障害〉〈補償と福祉〉の間を問う. 世識社, 2020.
11. 齋藤恒：新潟のメチル水銀中毒症　その教訓と今後の課題. 文芸社, 2018.
12. 齋藤恒ほか：メチル水銀中毒症(水俣病)の自覚症、舌振り試験及び家族調査について. 水俣病研究. 第 9 号, 2019.
13. 齋藤恒ほか:新潟･阿賀野川流域メチル水銀中毒症例の地域調査. 水俣病研究. 2020.
14. 齋藤恒：メチル水銀中毒問題と宇沢弘文氏の考え方. 現代思想. vol43-4, 2015.
15. 齋藤恒：新潟メチル水銀中毒症への取組みと課題（講演）. 2022. 3. 18
16. 遠藤邦夫：水俣病事件を旅する. 図書刊行会, 2021.
17. 飯島伸子　舩橋晴俊編：新潟水俣病問題　加害と被害の社会学. 東信堂, 2006.
18. 椿忠雄ほか：水俣病患者に見られる強調運動障害の定量的解析.　水俣病検診・審査促進に関する調査研究(昭和 52 年度環境庁公害防止等調査研究委託費による報告書). 1978. 3. 31
19. 新潟県作成新潟水俣病関連年表（関連年表）：未来へ語り継いで～新潟水俣病が教えてくれたもの～. 2021 改訂版

川下の風景⑥
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【蛍】

今年は梅雨入りが早いのか、やや不安定な天気が続いた。まもなく蛍が川面を飛び交う季節になる。私は山間部に暮らすので、少し歩けば蛍が生息する川べりを散歩することも出来る。地域の環境保全活動の甲斐もあって、田圃の畦道を行けば、ちらほらと蛍が飛び交う地域も増えているようだ。それでも、私が幼少期の頃に比べれば、この地域で見られる蛍の数は減少している。そもそも田園風景が住宅地に変わり、川はアスファルトの下を通るようになったので、自然風景が少なくなるのは当然だと言える。蛍を見て思い出すのは、昔、祖父に連れてもらった風景だ。今よりもずっと街灯の数も、家々の明かりもなく、真っ暗な田圃の畦道を、懐中電灯の僅かな灯りだけで歩いた。蛙の大合唱の中を行くのである。すると、いつしか辺り一面は蛍の群れ。小さな光が、あちらこちらと飛び交う姿に、幼少の記憶が比較的鮮明に残っている。宮本輝が描いた『蛍川』の世界がそこに広がっていた。

「ぼん、ぼん」と幼少の私を呼ぶ姿は、如何にも田舎の爺さんという風情だった。どんな仕事をして、どんな生活を送って来たのか、その頃は興味も関心も持たなかった。記憶にあるのは、そう、火鉢。冬の寒い日に、火鉢を共に囲んで餅を焼いてもらった。あまり多くを喋る人ではなかった。深く刻まれた皺を、更に深くして、ニコニコ笑っているような人だった。手が大きく、ガサガサで、今思えば、如何にも畑仕事をしてきた、そんな苦労の手をしていた。よく二人でプロレスを見た。あの頃は、テレビのゴールデンタイムでプロレスをやっていて、それを夢中で見ていた。父は「プロレスは、やらせだから」と笑っていたが、アントニオ猪木やタイガーマスクの雄姿を「やらせ」と否定されて、祖父に「あれは真剣やな？」と必死に同意を求める、そんな光景も覚えている。

そんな祖父も、私が中学３年の時に亡くなった。晩年は認知症を長く患い、最期は病院で亡くなった。昼夜逆転で、夜中に言葉とも叫びともつかない声で唸り、父が風呂に入れようものなら、爪を立てて抵抗していた。部屋は便の匂いで満ち、思春期真っ只中の私は寄り付くこともしなかった。介護をしていた祖母は、よく祖父を叩き、細くなった腕は痣だらけになっていたが、介護する祖母の腕も、力いっぱい握られ、引っかかれた傷が絶えなかった。葬儀の後、火葬場で骨を拾う際に、足の骨がしっかりと残されていた。それを見た父は、「歩くのが早かった。親父には付いていけなかった。京都まで歩いて行ってたもんなぁ」と語った。そんな祖父の墓は、私の姉と共にある。私が生まれる前に、姉は僅か２歳で亡くなった。その墓に祖父も埋葬されるのだが、両墓制の風習があって、三昧にも骨を埋めると言う。父と二人、スコップを持って墓穴を掘り、そこにも骨を埋め、盛り土をして墓石を置く。祖母の時はしなくなったが、当時はまだしていた。蝉が鳴き、蚊が飛び交うそんな季節だった。

【戦争の風景】

祖父も祖母も、戦争の話はしなかった。ただ、物は大切にした。我慢強かった。祖母は、腰が90度に曲がっても、自分のことは自分でしていた。私の記憶では、祖父母は裕福な家庭ではなかった。田舎の出なのに、借家住まいだった。

田圃も無い。畑は借りたもの。車は無く、古びたスーパーカブが１台。土間があって、かまどで炊事をしていた。やがて、道路が出来ると言われて立ち退きになり、私たち一家と同居するようになった。小学校の頃、宿題で“昔のくらし”を調べることになった。こういう時、祖父母と同居していると助かった。祖母は、洗濯板やモンペを持ち出して、貧しい時代の暮らしについて教えてくれた。興味や関心というより、宿題だから話を聞いていた。

私が福祉の仕事に就いた頃は、まだ明治生まれのクライエントと出会うことがあった。集団疎開や戦後の集団就職の苦労など、戦中戦後の風景に触れることがあった。

そのクライエントは、満州から引き揚げてきたという。生まれて間もない長男を胸に抱え、死に物狂いで日本に帰って来た。当時、確か 100 歳になっておられただろうか。歯は無いが、食べても元気、喋っても元気。両足できちんと歩いて、デイサービスに通っておられた。当時の乳飲み子であった長男夫婦と共に暮らし、高齢期の余生を楽しんでおられた。粘土細工で花を作り、いくつか持たされたことがある。「米津さん、これは枯れないからね。適当に捨ててね」と言われたが、その小ぶりの花は、未だに我が家で咲いている。デイサービスでは塗り絵や歌を楽しみ、それを自慢げに見せてくれる。いまでこそ、そういうデイサービスの機能は少なくなった。世代も変わり、ニーズも変わってきたし、制度の変化もある。それでも、このクライエントがここまで楽しめたのは、やはり苦労の時代を過ごし、今はただただ平和に日々を暮らし、食べる物にも困らない、そんな当たり前の生活を謳歌しているからだ。

別のクライエントは沖縄で生まれた。第二次世界大戦後、南米ボリビアへ兄弟と共に渡った。ボリビアの開拓は想像以上の苦労だった。険しい山々には、思うように重機も入らず、人手で木を伐り、根をおこし、開拓を広げていった。言葉も文化も、食べ物も違う異国の地。例え兄弟と一緒であっても、母国、故郷を離れて暮らす苦労は沢山あった。その後、彼は帰国したが、沖縄には戻らなかった。先に帰国していた兄を頼って、この地に暮らすことにしたという。沖縄生まれ、ボリビアでの生活も長く、帰国してからもその訛りがなかなか抜けず、話し言葉が聞き取りにくい。手はガサガサ、ゴツゴツ、長く日に焼けた顔が、この地の人々と異なる風貌を醸し出した。集合住宅の共有スペースに勝手に作物を植えて怒られ、部屋の窓から野菜のヘタを投げ捨てて怒られ、周囲と上手く関係を築くことも無いまま老いてきた。生涯独身。いや、ボリビアに置いて来た家族があったんだろうか。あまり過去のことを語らない彼とはコミュニケーションに苦労した。デイサービスに行くと、決まった場所でいつも雑誌を読んでいる。花や作物のことが載っている雑誌らしい。人の輪には入らない。喋る言葉も少ない。それでも、決まった曜日に出掛けて行くのは、そこが居心地の良い場所なのだろう。何もしなくて退屈そうだ、と周囲が思っているのは勝手な解釈で、それが彼なりの社会との接点を紡ぐものだと思った。

私の知らない戦争の風景は、映画や書物、そして今も続く紛争や戦争のニュースだけではない。

2022.5.21　米津達也



miho Hatanaka,

人が深く眠っているとしても、その顔をじっとみつめることは通常、あまりない。しかし赤ん坊が眠りについているとき、時を忘れてその顔をみつめることがある。それは“人が生きていること”の観察のようでもある。
今回は、娘の子のそれに纏わる話と、一編の詩を。

【第６話　“無遠慮に”みつめる】

　冬に出産をした娘の産後の手伝いに行っていた時期、実家に滞在していた私は一度、母を伴って娘の家に行ったことがあった。遠方に暮らすのは私だけなのである。母はこの２年ほどの間にすっかり出不精になって、天気の良い日に出かけようと誘ってもなかなかうんと言わないようになっていた。この日も私の説得に何とか応じ、朝食を済ませてバスに乗って出かけた。そのような具合だったので、母は娘もいっしょに昼食を済ませたらすぐにでも帰ると言い出すだろうと思っていた。ところが結局、日も暮れて私が娘夫婦の夕飯の支度を整えてしまうまで、母は娘の家にいた。３人ともが、何をするわけでもない、赤ん坊が寝ている間に大人は食事やお茶を淹れる程度である。その間に娘は授乳をしたり少し横になったりし、私は台所のことをして、母は時々、椅子に座ったままうつらうつらと舟を漕いでいた。そしてそのほかの多くの時間、母はコットのなかで眠る赤ん坊をただじっとみつめていた。
　私が妹を伴って訪ねた時には、二人して赤ん坊の顔をのぞき込みながら「ごそごそ

してるえ。もう起きるんちゃうか？」、「ちょっと、〇くん（娘のパートナー）のお母さんにそっくりと思わへん？」、「見て、この、服のぶかぶかさがかわいいやんな」、「お姉ちゃん（私のこと）の子どもたちもこんなんしてたやんな。懐かしい～！」、「いや！ 目ぇ開いたわ！」などなど…。赤ん坊は一挙手一投足にコメントされて、もしも彼女にモノ言う言葉があったなら、「何を好き勝手なことばっかり言うてんねん！」とでも言いたいところであろう。上から覗きこむ大きな顔こそ「どうやねん」、である。しかしこの日は、ただ静かであった。母は時々、口に手をあててくすくすと笑い、またじっと赤ん坊の顔をみつめ、そして短い時間、涙を流した。

「幼稚園にいって、小学校に入って。〇ちゃんが大きぃなる姿を、いつまで見られるやろうなぁ」

「ほんまやね」

母とふたりで赤ん坊の寝ている顔をみながら、私でさえそのように思うのにと、母の生きる残りの時間のことを思った。母はまた、「不思議やなぁ、いつまででも見てられるなぁ」と言った。それは母にとってだけではなく赤ん坊にとってもきっと大切な時であり、慈しみ、いとおしむ大人の存在と赤ん坊の双方に、みえない“何か”を育む時であろうと思った。モノとしての何かを産み出すわけでもない。瞑想のようでもある。そのような空気のなかにいて赤ん坊は、環境として実際に守られもしていて、ゆったりとした安心に包まれている。妹曰く、「人の一生のなかでこんなに無遠慮にじーっと人から見られることってないやんな」という言葉通り、そこが世界の中心であるかのようだ。

そういえば、と思い出したことがある。父が亡くなる最期の時間、やはり私は父の顔を“無遠慮に”見つめていた。看取りの最期の一呼吸を、父は「すっ」と小さく吸ってそのままいのちを終(しま)ったが、そのあまりにもシンプルなわかりやすさが神々しい感じさえして、私は思わずほほえんでいた。息を吸って、吐く。吐いて、吸う。産まれてからずっと、その繰り返しで生きてきた。そしてそれが止まれば、いのちの時間はそこでおしまい。

「人は死んだら、ほんとうに、もう、二度と、息をしないんだ」

そんな当たり前のことを、父は教えてくれた。

娘の子はこの先、この単調な動作を何度繰り返すことだろう。果てしないことのようにも思える。そしてその動作といっしょに周りの者の気配を吸い込んで、この子は育ち生きていくのだ。“無遠慮に人の顔をみつめる”ことは人が生きることのシンプルな仕組みを教えてくれる。どうぞこの子が、よい香りのする、澄んだ空気のなかで育っていきますように。誕生して初めて獲得した“呼吸する”という仕事が、機械的な意味での作業としてだけではなく、豊かに心を育むものであるようにと願う。

【花】

庭に
植えっぱなしの
ハーブや　こぼれ種で咲く　花

でも時おり
花屋で　花　を。

　　冬に、ラナンキュラスの鉢植え

真っ赤な色に惹かれた。

次々に花が開き
今ではすっかりと　枯れて　しまって

　いのちはもう　亡い　かのよう。

それでもその黄色くなった　立ち姿　が美しくもあり
　　赤い花　未だ　そのままにして
ながめている。

　球根には
　つぎの　華　を咲かせる
　いのちが蓄えられている



flower

福祉教育への挑戦(6)

「高等専修学校に入って良かったことは？」

髙井裕二

「勤務先の魅力ってなんだろう」

私は多くの人に福祉に関心を持ってもらうことをミッションとしていますが、合わせて高等専修学校が中学校卒業後の進路としてもっと広がってほしいとも考えています。そこで、今回は非常勤先の A 高等専修学校(以下、A 校)の生徒を対象に行った簡単な自由記述アンケートをもとに高等専修学校の魅力についてご紹介します。

「アンケート」について

非常勤先の A 高等専修学校(以下、A 校)の授業にて、「A 校に入って良かったことは？」というアンケートを取ってみました(結果の使用や公開について所属長及び生徒たちの同意を取っています)。2018～2021 年度に入学した福祉コースの生徒の 2 年生時、92 名を対象に実施し、72 名の回答がありました。福祉コースの生徒を対象とすることで福祉への言及も見られるかと期待しました。

アンケート結果を全てデータ化し、テキストマイニングのソフトである樋口(2020)の KH コーダーにて分析を行ってみました。論文ではありませんので、詳細なデータクレンジングは行っていません。

頻出語の抽出、共起ネットワークを作成し、キーワード前後の文脈を確認する KWIC((Key Word　in Context)を用いながら、A 校に入って良かったことを整理していきました。

頻出語から見た「良かったこと」

頻出語を見てみると「先生」が最も出現回数が多く、「優しい先生が多い」「福祉の先生がみんな優しい」といった回答が見られました。福祉職ではなく、教員として来ていますので、しっかりとした指導を行う必要がありますが、それでも福祉の先生が優しいと感じてもらえることは福祉専門職としての態度が滲み出ているのかなと嬉しく思います。

「友達」については「友達ができた」「中学校時代よりも友達ができた」との回答が多くみられ、中学校では不登校傾向だった生徒も A 校に来て友達を作ることができているのかもしれません。その他、「福祉」では「実習で利用者から感謝の言葉をもった時に福祉を学んで良かった」、「福祉が楽しいと思った」のように学校生活を通して福祉コースを選んで良かったという肯定的な意見が多く見られました。また、A 校の福祉コースでは介護職員初任者研修の資格が取れることから、介護について学ぶとともに資格を取得できることに魅力を感じていることが伺えます。

表 1　頻出語(出現回数 3 回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
先生	19	介護	4
友達	18	楽しい	4
良い	14	行く	4
優しい	13	取れる	4
思う	12	専門	4
福祉	10	多い	4
学べる	7	綺麗	4
人	7	クラス	3
たくさん	5	トイレ	3
学校	5	今	3
教える	5	資格	3
好き	5	実習	3
明るい	5	分かる	3
		勉強	3

教員の魅力、専門性の魅力(共起ネットワークから)

次に単語同士の関連性を見る、共起ネットワークを紹介します。図 1 は先ほどの頻出語と共通する部分が多いですが、色で分類されているものを見ると、友達が多くできたという「学内の友人関係」、学校行事、相談に乗ってくれる教員の存在といった「学校生活」、トイレや教室が綺麗といった「学校設備」、経験豊富な教員や専門職から専門的な知識を学校や施設で学ぶことができるという「専門志向」、クラスの生徒同士の仲がいいという「クラス環境」などを考えることができます(ラベルを考える際のネーミングセンスがないので、もっと良い表記があるかと思います)。

図 2 は入学年度を外部変数として抽出した共起ネットワークです。年度による差も若干見られるものの、「学内の友人関係」「専門志向」は共通した傾向と考えることができます。高等専修学校は小・中学校時代に人間関係で躓いている生徒も多く、A 校に来て多くの友達ができて良かったというのは、大変興味深く、学校としてどのような工夫をしているのか、もっと調べてみたいと思います。また教員をはじめとした大人に対する不信感を持って入学してくる生徒も一定数おり、そのような生徒とも一定の関係性を作ることができているのかなと感じます(もちろん、アンケート実施者が教員ということも留意する必要はあります)。教員の生徒に対する言動が生徒の言動にも影響するでしょうから、教員の立ち振る舞いから福祉の魅力を一層伝えられたらと考えています。また資格取得を含め、専門性を持った教員から福祉を学ぶことに意義を感じている生徒も一定数いることが実感でき、専門性を感じてもらえるように身を引き締めなければと思います。

図 1　全体の共起ネットワーク

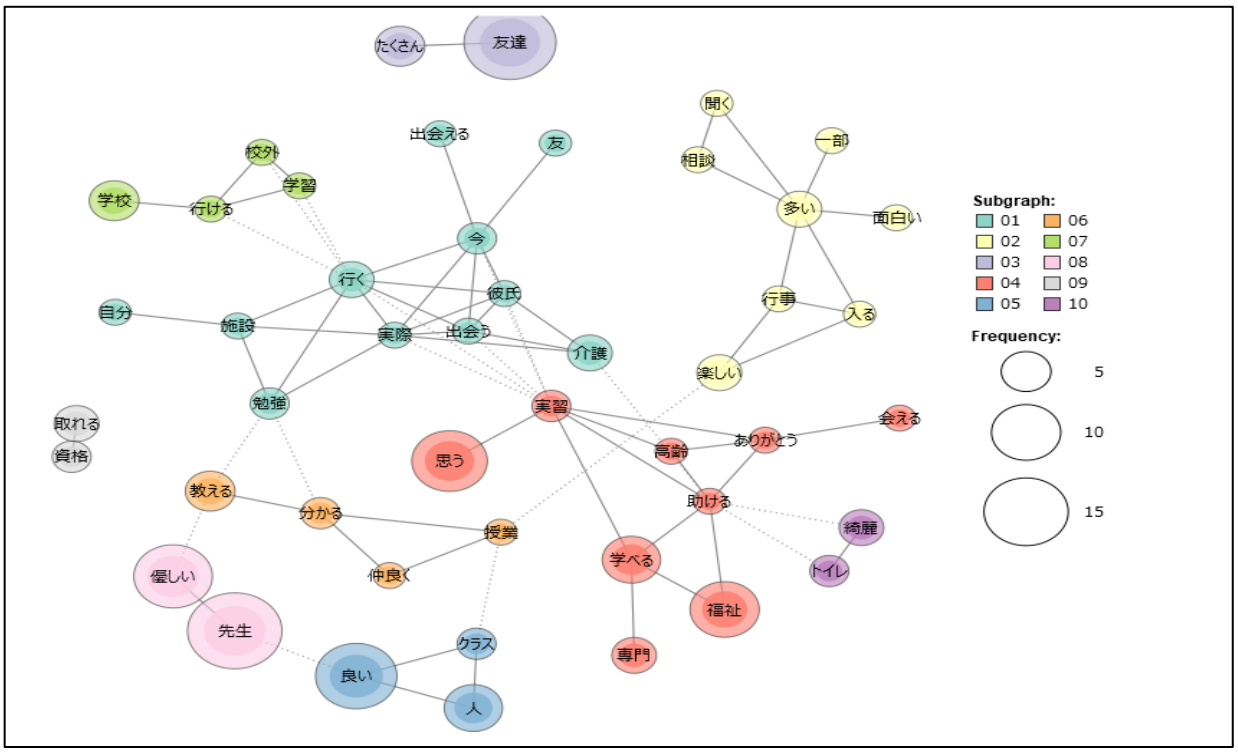
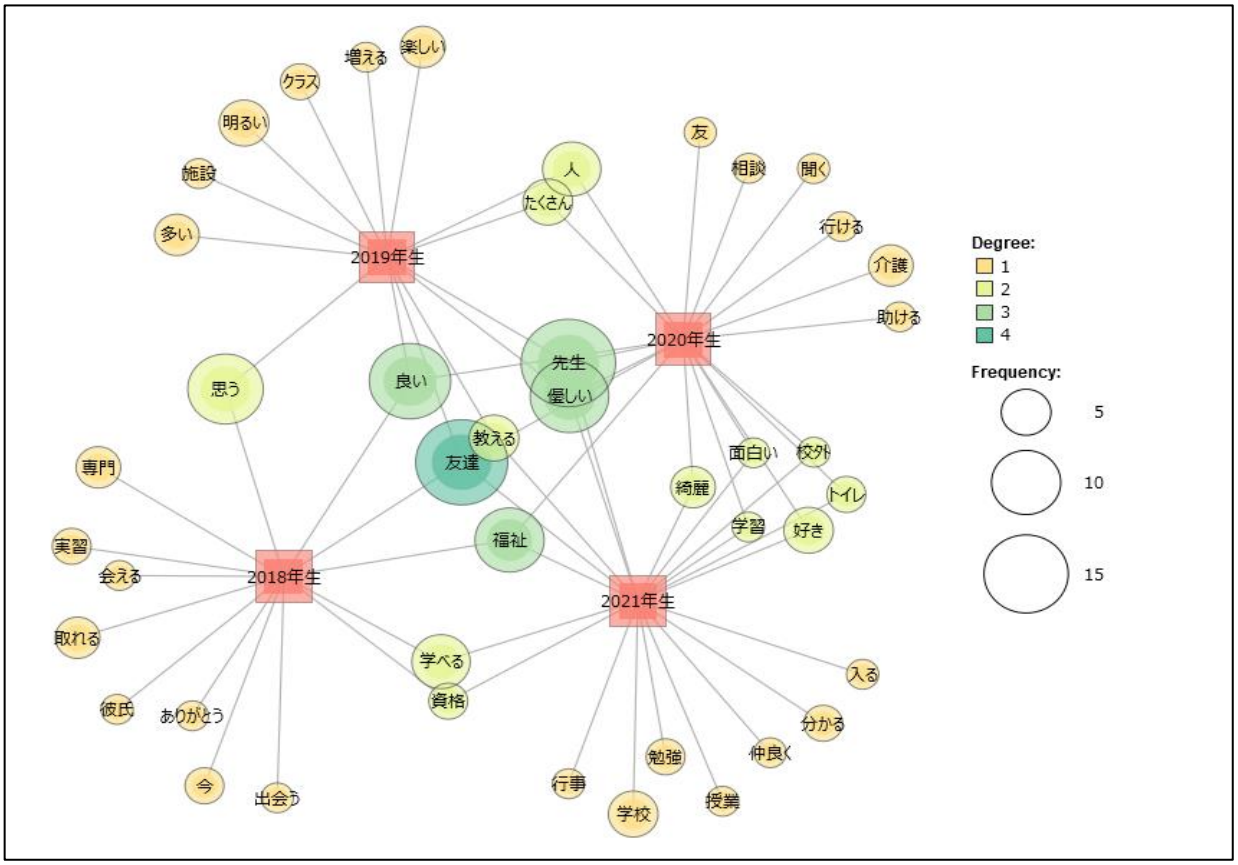


図 2　入学年度別の共起ネットワーク



参考文献
樋口耕一(2020)「社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-第 2 版」(ナカニシヤ出版)

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 6 回：第 1 章–その 6–

「対人援助と本の邂逅」

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

リブートする一冊をご紹介して

前回までの内容でお示しした通り, 2 年前の対人援助学会 2020 年次大会における企画ワークショップ,「対人援助実践をリブートするこの 1 冊」において，小幡知史先生，二階堂哲先生，そして私, 渡辺から,「この一冊」として以下の本をご紹介致しました。

【小幡知史の推し】
・ジョン・ベイリー(著), メアリー・バーチ (著), 日本行動分析学会行動倫理研究会 (翻訳)（2015） 行動分析家の倫理—責任ある実践へのガイドライン　二弊社
【二階堂哲の推し】
・P．A．アルバート （著）,A．C．トルートマン（著）, 佐久間徹（訳）,谷晋二（訳）,大野裕史（訳）(2004） はじめての応用行動分析　二弊社
・ウ・ジョーティカ (著), 魚川 祐司 (翻訳)（2016） 自由への旅 マインドフルネス瞑想 実践講義　新潮社
【渡辺修宏の推し】
・佐々木閑，大栗博司（2016）， 真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話　幻冬舎
・佐々木閑（2013）， 科学するブッダ 犀の角たち　KADOKAWA

2020 年次大会は，当学会初のオンライン開催ということもあり，発表する我々にとって「語りやすい」「伝えやすい」とはいえず, また, 参加してくださった方にとっても「伝わりやすい」といえるものではなかったかもしれません。ただそれでも, モニター越しに本を推していく中で, まず私達自身がいろいろと気づきを得ることができました。「語る行為そのもの」が, その本を読んだことの反芻となったような気が致します。

そこで得たいくつかの気づきについては, また次の機会において, 発表者それぞれが語らせて頂きたいと思っております。まずは, 当時, 企画ワークショップに参加してくださった皆さまに, 心から御礼申し上げます。ありがとうございました。今度はぜひ, あなたの推しの一冊をご紹介してくださいませ！

対人援助実践のために本を読みはじめる

さて，振り返ってみますと，このように本と親しむようになったのは，特に，対人援助実践にまつわる内容の本を読むようになったのは，まさに私自身が臨床家として実践に関わるようになってからです。その大きなきっかけについては，本シリーズ，第 1 章その 1「かくも，対人援助の理想と理念は現実につぶされる」（対人援助学マガジン第 45 号）に記した通りです。そのようなきっかけを経て，よりよい援助者となり，よりよい援助実践を行えるようになるために，時に，なんとなく本を手に取り，時に，むさぼるように本を読みふけるようになったわけです。そして，ある時から，「いつ」，「なんの本を読了したのか」ということを記録するようになりました。

記録をはじめたのは，確か 1999 年の初頭でした。翌年の介護保険制度施行を直前に控え,まさに福祉サービスの抜本的な改革がすすもうとする，我が国の社会福祉業界が右に左に大騒ぎしていた頃です。

あれから 24 年，その読書記録は途切れること無く続いております。ただ，その初期（1999 年から 2006 年）の頃の記録が保存されていたノートパソコンがクラッシュしてしまったので，今ではなにをいつ読了したのか，確認ができなくなっております。確か，バックアップデータがあるはずなのですが，それはフロッピーディスクの中に眠っており，私に手元のパソコンでは開けなくなっております。

1999 年は,確か 38 冊を読了したとおぼえております。当時は，松下幸之助，中谷彰宏，ナポレオン・ヒル，松原泰道らの著書を手に取り，その内容を読んで，胸をうたれたような記憶があります。

そして，現在確認できる記録（冊数）をみると，2007 年以降は，次のようになっております。

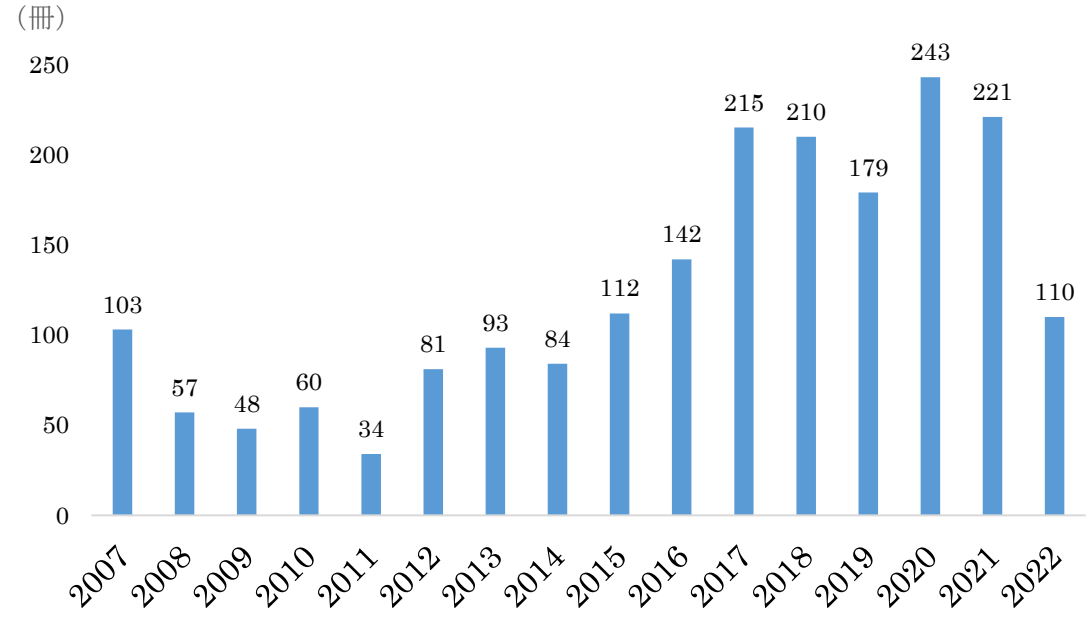


図 1　年別読書数

2007 年, 103 冊。
2008 年, 57 冊。
2009 年, 48 冊。
2010 年, 60 冊。
2011 年, 34 冊。
2012 年, 81 冊。
2013 年, 93 冊+143 冊。
2014 年, 84 冊+127 冊。
2015 年, 112 冊。
2016 年, 142 冊。
2017 年, 215 冊。
2018 年, 210 冊。
2019 年, 179 冊。
2020 年, 243 冊。
2021 年, 221 冊。
2022 年, 110 冊（2022 年 5 月 13 日現在)。

2013 年と 2014 年の表記が「+〇〇冊」とありますが，これは当時，英語の勉強のためにと英絵本を読み始めて，それを別カウントしていたためです。しかし，絵本を読書にカウントすることに疑問を感じて, 2015 年からカウントを止めてしまいました。したがって，2013 年は 93 冊, 2014 年は 84 冊が正しい読書記録となります（図 1 参照)。

なお，「どんなジャンルの本を読んできたのか」といったことや，「そもそも具体的な書籍タイトルは何か」ということを整理しようとすると，莫大な時間がかかってしまうので，これまた断念致しました。また，同じ本を何度か読むということがあっても，別カウントしております。不思議なもので，何度も読みたくなる本もありますし，そもそも，過去に読んだことをすっかり忘れたまま読み始め，「あれ？これ，前，読んだことあるじゃん」と失笑することは，一度や二度ぐらいではすみません。

ただ，「読書は量が多ければ多いほど良い」ということではありません。むしろ，読めば読むほど忘れる量も増えますから，実益性が下がることすらあります。やはり大事なことは，その過程から何を学び，そして対人援助実践にどう活かせるか？活かせたか？ということになるかと思います。その意味で，私はまだ，本当の読書ができていないし，そもそも本当の読書の仕方を，まだ知らないような気が致します。やはり，日々勉強ですね。「自分の立ち位置は，いまだ初学者だなぁ」と思うことがよくあります。

「いまだ自分は，“ひよっ子”に過ぎない…。」

「まだまだ自分は，レベルが低い…。」

思えば，かつてはそのように頻繁に落ち込むことが，めずらしくありませんでした。で

も最近は，（もう立派な「おっさん」にもなったし）　「落ち込む」というより，「まだまだ勉強することがいっぱいあるんだぁ」と，淡々と思えるようになりました。

それをポジティブというのかニュートラルというのかはよくわかりませんが，でも，「学べることがいっぱいある」と感じられることは，すごく素晴らしいことだと思っております。だって，目の前に，「在る」のですから。

手にとって。

目に入れて。

考えて。

動くべきことがたくさん。

－つづく－

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 7 回：第 1 章–その 7–

「いまから・これから・その先」

企画・著：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

いまから

対人援助学会 2020 年次大会における企画ワークショップ，「対人援助実践をリブートするこの 1 冊」を終えて，小幡知史先生，二階堂哲先生，そして私，渡辺の 3 人が「納得・満足」したのかというと，まったくもってそんなことはありませんでした。終えてみて最初に頭によぎったことは，次はどの本を読もうか，あるいは，読むべきかと，いろいろ考え始めただけに過ぎませんでした。また，「うまくレビューできなかった」，「もっと言うべきことがあったのではないだろうか」という疑問や悔いすらあふれてきました。

これから

ただ，そうは言っても，けじめは大事ですから，これまでの 7 回の連載を振り返って，私達 3 人が得た学びや気づきを，ほんの少しだけここに記して，そして，もしできるのならばそれを皆様と分かち合いたいと思います。

・渡辺修宏

私は 2 冊の本を紹介させていただきましたが，その紹介の最中，自分が読んで納得して，感動して，心打たれた本の内容を，『如何に自分がうまく表現できていないのか』と感じました。うっかりすると，単なるテクニカルタームの連発でごまかし，あたかもわかっているフリをしているかのようでした。正直，恥ずかしかったです。でも，これが今の私の力量だと思います。本に書いてあることまま言い放つのではなく，やはり自分の言葉に置き換えて言い伝えられるになりたいですね。なぜならば，それができれば，学んだことを自分の血肉に変えられるのですから。

・小幡知史

私は上述のように，「行動分析家の倫理―責任ある実践へのガイドライン」という本を紹介させていただきました。振り返ると，2020 年の企画ワークショップで自

身の「推し」の本を発表することが決まった時，紹介する本を決めた時，発表用のスライドを作成している時，発表している時，発表後に渡辺さんや二階堂さんがご紹介してくださった本と並べて自身の「推した」本を読み直した時，本連載の執筆にあたって「推した」本を読み直した時，あらゆる場面で大なり小なりそれぞれ違う新しい学びや気づきがありました。それらの学びや気づきがあるたび，その発見に対する喜びを感じる一方で，「なぜ気づかなかったのか」，「なぜ理解したつもりになっていたのか」といった自分自身に対する失望？に似た感情も浮かびました。その中でも特に大きかったのは，「なぜ忘れてた？」というものです。読み返すと非常に重要な記述だったのに，目に止まって付箋まで貼ってあるのに，なぜ忘れてしまうのか…。しかし最近は，その「忘れる」ということもまた，読書の醍醐味の一つと諦念するようにしています。「人は別れるために出会う」という言葉にもあるように，本は忘れるために出会う」くらいの心持ちで，今後も学びを続けていけたらなと思っています。

・二階堂哲

私が紹介させていただいた 2 冊は，読んだだけでは役に立たない本でした。本に書かれていることを実践するなかで，成功や失敗を繰り返し，そして随伴性形成行動という形であまり考えずに自然に行動できるようになるくらいまで，深く「理解」することが大切だと改めて感じることができました。渡辺先生や小幡先生が紹介してくださった本も，私の行動を長期的に変えてくれそうなよい言葉が散りばめられていました。先生方からいただいたヒントをもとに，自分や周りの人達の人生がより良いものとなるように，日々の実践を積み上げていきたいと思います。

今回も貴重な機会をいただき，ありがとうございました。

その先

僭越ながら，私達の３人の振り返りを記しました。

以上で，本連載における第１章を終えます。

次回からは第２章となります。

- つづく -

中国のセクシャルマイノリティ支援　— Ⅲ

劉　強（リュウ　キョウ）
立命館大学大学院　　人間科学研究科

前回まで

前回は、中国のセクシャルマイノリティの支援団体である“Trueself”の概要及び展開する活動の内容を簡単に紹介した。“Trueself”はセクシャルマイノリティだけでなく、彼/彼女らの友人や家族に対して、多様な支援活動を行なっている。今回はその活動内容の一つであるホットラインについて触れていきたい。

ホットラインにおける支援

“Trueself”のホットラインを見つける方法はいくつかある。例えば、当支援団体のホームページからアクセスすることができ、サイト内に電話番号が掲示されている。下記の画像のように、受付時間及び対応するサービスが表記されている。



また、SNSの公式アカウントからでもアクセスできる。いくつかの項目ボタンの中から“ホットライン”ボタンをクリックすると、このような画像が送られてくる。



ホットラインは全国向けのものであり、現在、月曜日から土曜日までは親ボランティアの当直、日曜日は心理カウンセラーの当直になっている。ある若手のボランティア曰く、かつて若者ボランティア（つまりセクシャルマイノリティ本人）もホットライ

ンの受付を行っていたが、現在、その活動は停止となった。その理由は、相談希望者の多くは親ボランティアとの交流を期待していたためである。現在は親ボランティアが電話受付を行う際、必要に応じて若者ボランティアを希望者に紹介することもあるそうだ。

こちらのホットラインの受付時間は毎日午後 8 時半から 10 時半までである。1 人当たりの相談時間はおよそ 30 分前後である。期間中は 1 人のボランティアが待機し、担当は事前に決められている。担当者は日々の相談記録を作成し、担当者間で情報共有を常に行っている。

対応できる内容としては、セクシャルマイノリティの自己受容、セクシャルマイノリティに対しての家族の受容、またカミングアウトする際の相談などである。

相談者の多くはセクシャルマイノリティやセクシャルマイノリティを持つ親である。セクシャルマイノリティの質問の多くはカミングアウトをどうすれば良いか、または自身の恋愛についての相談が多いようで、親の場合はもっぱら自身の体験を話すことに目的がおかれる。

ボランティアが対応する際、相談者の話を共感的な態度で聞き、そしてカミングアウトという出来事を肯定的に捉える。カミングアウトをした、あるいはしようとするセクシャルマイノリティに対して、カミングアウトは単なる一方的な打ち明けではなく、双方的のものであることを強調し、さらにカミングアウト後の親との継続的な話し合いの重要性を強調する。

しかし、限られた時間内では十分フォローできることが難しいから、相談者に個別の連絡先を追加してもらうことに心をかけて話を聞いている。つまり、ボランティアは長期支援に繋げるために努力している。

このような支援はカミングアウトで悩まれるセクシャルマイノリティに相談できる窓口を提供し、また、子どもにカミングアウトされ、周囲に同じ経験を持つ人がいない親にとって、ホットラインを通じて自分と同じ経験を持つ人との出会いは貴重であり、社会的資源と言えるだろう。そして、相談者を今後の支援対象に発展し、支援を継続的提供することにもつながる。

今後の予定

“Trueself”は最近、カミングアウトガイドブックを作成し、販売している。それを取り寄せし、次回に紹介したいと考えている。

島根の中山間地から Work as Life

第５回

ファミコン世代が考える、わが子の「スマホ依存予防」作戦

野中 浩一

ゲームと私

私がテレビゲームをはじめて買ってもらったのは、小学 1 年から 2 年に上がる春休みだった。その当時、鹿児島に住んでいた私であったが、春休みで母の郷である島根に来ていた。そこでどういう経緯かは忘れたが、祖父から欲しいものを聞かれた私は「ファミコン」と答え、祖父と母と一緒にデパートに買いに行った。

任天堂より 1983 年 7 月 15 日に発売されたファミリーコンピュータ。通称ファミコン。定価 14,800 円のこの高額なゲーム機を、祖父は孫である私に買ってくれた。

買いに行ったデパートではファミコン単体での販売はしていないと言われ、「ドンキーコング jr」と「ピンボール」のソフト 2 本とファミコンとをセットにして 24,800 円で販売していた。人気商品に旧作ソフト（定価）をセット売りしている「抱き合わせ」の商法は、まだ幼い私の印象に残った。

ルールのゆくえ

ファミコンを買い与えられた私は、当然のことながらのめりこんだ。まだ高橋名人が「ゲームは 1 日 1 時間」という名言を発する前の時代である。おそらく当時の母は、私にゲームの時間を制限するよう約束したり、約束を破るとどうなるかというペナルティの話をしたはずである。母の性格を思うに、まず間違いない。しかしそこは小学生。母の言葉だけのルールや口約束はまったく記憶に残らず、右から左へと流れていく。

そんな母の注意が記憶に残らない私であったが、当時のファミコンのゲームには子どもたちをゲーム漬けにしない救いがあった。あまりに難しすぎたのである。1 面が始まってすぐ理不尽なほど見えにくい敵の弾にやられる、そんなソフトが少なくなかった。ゲームを遊ばせるつもりがないとしか思えない凶悪なソフトたち。しかし私は、4,800 円のソフト代のもとはとりたい、母に「このあいだ買ったゲームすぐに遊ばなくなったみたいだけど、ムダ遣いだったんじゃないの？」と言わせてはいけないと、辛抱強く戦い続けた。

こうして私は、母が課したであろうゲームの時間制限やペナルティのルールは受け流しながら、より面白いファミコンソフトを求めて、お小遣いアップと新たなソフトを買ってもらう交渉に日々心血を注いでいた。

わが家にスマホがやってきた１

あれから 30 年。そんな私が父になった。そして高校生になる娘にスマホを買う日が来た。なまじファミコン世代として培ってきたデジタル機器との長年の付き合いがあり、スマホやネットの知識をもっているだけに、娘とスマホとの間にどう関与したらいいか、様々な考えが巡る。

ネット利用状況　内閣府の調査より

令和 3 年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」の調査結果（速報）によれば、平日 1 日あたりのインターネット利用時間が 5 時間を超える割合が、小学生で 21.9%、中学生で 35.5%、高校生で 46.0%に上る。この傾向はここ数年で見ても年々増加の一途をたどっている。

加えてインターネット利用の低年齢化も顕著で、通園・通学前の 0～6 歳のスマホ利用時間の平均は 2 時間を超えるとの結果が出ている。子どもをあやしたり、おとなしくさせるために、スマホ等で子ども向け動画やゲームなどが用いられていることが想像される。

一方で、インターネット利用に関する家庭のルールを決めているという保護者の割合は、小学生で 88.4%、中学生で 82.0%、高校生で 65.4%である。しかし一方、家庭のルールを決めているという青少年の割合は、小学生で 77.3%、中学生で 70.0%、高校生にいたっては 39.5%しかインターネット利用についてルールを取り決めていると回答していない。

つまり、親は「しっかりルール決めたよね」と思っているのに対し、子どもの多くは「そうだっけ？」となっている家庭があるようだ。また、ルールを決めていることやルールを認識していることと、それ

が守られていることとは別問題でもある。

わが家にスマホがやってきた２

スマホショップに娘と一緒に足を運び、買いたい機種を決めた。娘は好きなゲーム（プロセカ）ができるスペックならなんでもいいと言う。それならと、毎月の支払いが比較的安価な機種を購入。

契約説明の際、店員さんに「安心フィルターはおつけしますか？」と聞かれ、今後の参考にしたいとの思いから「どんな感じですか？」と聞き返す。すると「正直、ほとんどのアプリが制限されるため、皆さんつけないことが多いです」とのこと。内心、そんな案内でいいの？と思いながら、契約の話を聞きつつ自分のスマホで安心フィルターについて調べてみる。

安心フィルター

「青少年インターネット環境整備法（2008 年制定、2017 年改正)」により、契約する事業者は、保護者が利用を拒まないかぎりフィルタリング機能を有効にする必要性が明記されている。また保護者の側も、インターネットの利用状況を適切に把握するとともに、青少年有害情報フィルタリングの利用等によりインターネット利用を適切に管理し、子どもがインターネットを適切に活用できるよう努めることも記載されている。

安心フィルターを使うことで何ができるのか。簡単にいえば、子どものスマホの利用状況を親のスマホで確認できるとともに、利用を個別に設定・制限ができるのである。

安心フィルターの利点

１．日々の利用時間や利用状況がひと目でわかる
２．利用できる時間を、アプリ、ネット、電話それぞれで設定・制限できる
３．有害と思われるアプリや年齢不相応と思われるアプリを自動的に遮断するとともに、利用できるアプリを個別に決められる

一方で、調べるうちに普及しにくい要因も見えてきた。安心フィルターでは、YouTube や Twitter など有害とはいわないが、背中合わせで危険とつながっているアプリやサイトも制限の対象となっている。

こうしたアプリやサイトは「出会い系被害」「ネットいじめ」「個人情報漏えい」「ネット依存」などのトラブルに巻き込まれる可能性があり、まだネットリテラシーが薄い子どもや使い始めの時期に危険が伴うため、利用するためには保護者が安心フィルターの設定画面で使用許可を出さないといけない仕様になっている。また、こうした設定画面を親自身が ID とパスワードにより管理する煩雑さも、安心フィルターが敬遠されがちになる一因であろう。

多くの親は安心フィルターを使う前に、こうした管理の煩雑さの断片を聞き及び、子どもの利用状況を把握することを諦めてしまうのかもしれない。そして毎日スマホばかり使う子どもに向かって、注意をしたり口約束したりして、その場限りのやりとりをしてしまうのだろう。とふと妄想する。

しかし心理・教育の仕事をしている私は、これまで身近な数多くの中・高生たちが、親が知らないところで年長者とつながった結果の艱難辛苦に遭遇してきた。そうした素性が知れない他人との繋がり（多くの場合、当の子どもたちは心許せる大切な相手と捉えている）は、地元でデバイスを通じてやりとりしているうちは、子どもたちの支えや刺激として機能しているように感じている。他方、中・高生と誰とも知れない年長者との交流が続き会うことになった場合、私の知っている実例ではその半分近くのケースで犯罪まがいの被害が伴い、ひどい場合には本人も家族も長らく立ち直れないほどのダメージを受けることがあった。

わが家にスマホがやってきた３

結果、わが家では安心フィルターを導入した。娘と話し合って、利用制限がかかっているアプリを使いたい場合は私に言ってくれたら制限を解除すること、電話はいつでも使える状態にしてアプリやネットを 22 時以降は使えないようにすること、使いすぎたときは以降 1 週間は使える時間を制限することを約束した。

こうして娘のスマホを購入してはや２か月。平日最大 2 時間半、休日最大 4 時間半以内の利用約束であったが、予想どおり平気でルールを超えてくる。一方で当の娘は、安心フィルターの画面で利用時間を確認するまでは、自分がルールを破るほど長時間使っている自覚がないとのことである。ここに私がフィルターを導入した理由がある。娘は私と同様に依存しやすい体質だと思われ、娘に限らず 1 度スマホやネットへの依存が強まるとドーパミンの作用により自分自身で利用をコントロールすることや回復することが難しいのである。

ドーパミンの欲求、前頭葉の制御

私がスマホやネットで最も怖いと感じていることは、自制が効かなくなるほどに自分の脳をコントロールされてしまうことである。利用時間にせよ、課金額にせよ、自分の認識と実際には大きなズレが生じることも多い。

スマホやネットやオンラインゲームにどっぷり浸かってしまうとき、人の脳内ではなにが起きているのだろうか。ベストセラー『スマホ脳』の中でアンデシュ・ハンセン(2020)は「ドーパミンの最重要課題は、人間に行動する動機を与えること」だと述べている。スマホで新しい情報を得るとき、ゲームでガチャを引くとき、LINE に着信マークがついているとき、SNS に投稿して反応を待つとき、つまり何かを得ることを「期待する」ときに、脳内でドーパミンが出て、抗い難い強い欲求が起こる。パチンコや競馬などのギャンブルも同様で、当たるかもしれないという期待感にやめられない理由がある。

スマホはドーパミンを次々放出させ、人に欲求を引き起こさせる。しかしドーパミンが大量に放出され続けると「もっとドーパミンを出さないと、同じくらいの快楽が得られなくなり、さらに長時間、さらに強い刺激を求めようとする」と岡田(2014)は指摘する。このようにデジタルに依存する生活を続けているとドーパミンが枯渇してきて、何に対しても意欲や歓びが感じられなくなってくる。

また、スマホ、ネットゲーム依存は意欲や歓びを減退させるだけにとどまらず「睡眠障害、注意力、遂行機能の低下、意思決定の異常、うつ状態、社会的機能の低下」といった様々な問題を引き起こす。さらに最近では「記憶力の低下、デジタル認知症、急性斜視」などの症状も問題視されている。

特に問題なのが、こうしたスマホやネットゲーム依存は、子どもの方が強く影響を受けることである。人に分別ある判断をさせ、軽率な判断をしないために衝動のブレーキとして機能している脳の「前頭葉」。この前頭葉は「二十代はじめになるまで完全には発達しない」のである。つまり、子どもは大人ほどに衝動をコントロールできないことが前提であり、依存に陥らないようにするにはスマホやネットを使う環境を大人がどう調整するかが大事である。

こうしたネット依存に早くから警鐘を鳴らし、治療にあたってきたのが千葉県にある久里浜医療センターである。院長である樋口進氏監修の『心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るか』の中で、家族の訴えによるネット依存の行動パターンとして、「ネット時間について嘘をつき、風呂場やトイレ、布団の中で隠れてネットしていた」「止めるよう声をかけたら、人が変わったような目つきで怒鳴り返してきた」「取り上げたら暴力をふるった、あるいは部屋の物を壊した」「部屋から大量のウェブマネーの領収書を見つけた、預金や貯金箱のお金がなくなった」「しばらくネット使用を禁止していたら無気力になり、部屋に閉じこもってなにもしない状態が続いた」などが挙げられている。

なおスマホやネットゲームへの依存のしやすさは、皆一律というわけではない。岡田は、2005 年の寝屋川調査の魚住の分析より、依存リスクが高い要因として『男子、早期開始、多動傾向、集団適応が苦手、偏食、幼い頃の愛情不足、いじめ・孤立、過保護な養育』を挙げている。また、香港や韓国等の調査も参照し『成績不振、家庭内の葛藤の強さ、親との離別、家族の結びつきの弱さ』も依存のリスクを

高める要因であるとしている。

一方でスマホなどデジタル機器やインターネットの良いところは、事実としてのデータがしっかり残って可視化できることである。その利点を生かし、利用時間や使い道の情報を把握し、その事実データをもとに子どもと話し合うことが重要である。なぜなら使っている子ども自身が、実は自分がスマホやネットをどれだけの時間、何に使っているか分かっていないことがほとんどだからである。

わが家にスマホがやってきた４

よく約束の時間を超過してスマホを使っているわが娘。安心フィルターの画面で、スマホをどのくらいの時間、何に使ったのかを一緒に確認し、「なんで自由に使えなくなると分かりながら使いすぎてしまうんだろう」と聞いてみた。すると「スマホを使ってるときには、そこまで使ってる意識がない」とのこと。それならと、スマホをどのくらいの時間、何に使っているか娘自身のスマホで分かるよう「Digital Wellbeing」の機能（※1）を娘に教え、使うよう促した。

まだ経過観察中であるが、「話し合い＋自分で時間を確認できる機能」は利用状況の改善に一役買っているように思う。スマホやネットの使用を制限することも必要ではあるが、それと同時に利用状況を一緒に確認すること、どうしたらいいか家族で一緒に話し合うこと、そしてスマホやネットを使う楽しみや可能性が拡大する未来を提示することも大事だと感じている。

ハンセンは言う。「ほとんど全員が元気になれるようなコツがいくつかある。睡眠を優先し、身体をよく動かし、社会的な関係を作り、適度なストレスに自分をさらし、スマホの使用を制限すること」と。こんな当たり前のことが難しくなっている現代だからこそ、家族が子どものペースメーカーとして寝食を共にし、一緒に身体を動かし、社会的な関係づくりの道筋について親の人生を通じて提示することが、スマホ依存から子どもと子どもの時間を守ることにつながるのかもしれないと考え、ひとりの父親としてトライ＆エラーの日々である。

語句注釈

※1 Digital Wellbeing の機能　フィルタリング・サービスには docomo や au などの携帯キャリアが提供する「安心フィルター」のほかに、アンドロイドのスマホ端末を使っている場合は google 社が提供する「Digital Wellbeing（および google ファミリーリンク）」、iPhone を使っている場合は apple 社が提供する「スクリーンタイム」がある。いずれもスマホの「設定」画面から無料で利用ができ、スマホの利用時間や用途の確認、利用の制限などができる。

引用・参考文献

アンデシュ・ハンセン(2020)『スマホ脳』 新潮社

ダニエル・Z・リーバーマン、マイケル・E・ロング(2020)『もっと！ 愛と創造、支配と進歩をもたらすドーパミンの最新脳科学』 インターシフト

樋口進監修(2017)『心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るのか』 ミネルヴァ書房

岡田尊司(2014)『インターネット・ゲーム依存症 ネトゲからスマホまで』 文藝春秋

内閣府 青少年のインターネット利用環境実態調査
https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/net-jittai_list.html

内閣府 青少年インターネット環境整備法・関係法令
https://www8.cao.go.jp/youth/kankyou/internet_torikumi/hourei.html

かぞくのはなし
きむら　あきこ

第三話　一人暮らし

復活連載３回目は、ジェノグラムからは少し逸れてしまうのですが、転居について記してみようと思います。

このゴールデンウィーク、私は24年ぶりに札幌で暮らすことになりました。これまで、三人の子育てをしてきた町。たくさんの思い出があり、札幌に隣接しつつも、のどかな田園風景はお気に入りでした。けれども、豪雪地帯の冬を一人で越すには少々体力の限界を感じてしまい、転居を決断したのです。

思えば、2年半ほど前、長女、次女が相次いで就職や進学のために、家を巣立っていきました。その後、私の体に異変が起こったことで、事あるごとに、私の一人暮らしは、子ども達に心配されるようになりました。できる限り、子ども達には心配をかけずに生きていきたいと思っていたものの、いつまでも豪雪地帯で一人暮らしは難しいと幾度となく話題にあがりました。二人暮らしをしている娘たちと、もう一度三人で暮らそうか、という話題もありました。娘たちとの暮らしが再開すると、未来ある彼女たちに私の心配を背負わせてしまうような気がして、その選択には至りませんでした。

転居を決意した後の部屋探しには、多少の手間を感じました。住みたいと思える場所、予算に見合った物件を探す。ネット上には、様々な物件情報があるものの、自分の条件を入力していくと、選択肢は限られてしまいます。一度引っ越しをしたら、そう何度も転居を繰り返すわけにもいかないことを考えると、部屋探しも一苦労です。のらりくらりと物件探しをしていたところ、職場の仲間が、休み時間に私の条件にあった物件を探し当ててくれました。早速不動産会社に問い合わせて、内覧をして、私の新居はスムーズに決まりました。職場にも近く、子どもたちの住まいにも近い。比較的田舎の雰囲気をもった静かな地域で新たな生活は始まりました。

一人暮らしは、相手がいないので喧嘩をすることはありません。子ども達は、

時々顔を見せてくれ、私ができないことを手伝ってくれますが、時々のことなので、素直に感謝できます。母親として腕を振るって、たくさんご飯を作ってもてなしたりもできます。本当は、一人暮らしなので、部屋数も必要ないのに、子ども達の帰ってくる場所としてのスペースも欲しくて、部屋も布団も確保しています。あと、10年後、20年後には、今よりももっと縮小した暮らし方になっているかもしれないなぁと考えたりしますが、新しく始まったこの生活を今は楽しんでいます。

そうか・・・10年前、20年前は賑やかだったなぁ、と思い出しました。

家族は増えたり、減ったり、移動したり・・・。転居動機、住まい場所の選択、暮らし方、そのそれぞれに、「家族」の理由があるものです。

おわり

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（1）

高木久美子

1.ご挨拶

コミュニケーション支援の活動をしております名古屋市在住の高木久美子と申します。初投稿です。よろしくお願い致します！

私は、病気や事故の後遺症による四肢麻痺や発語不能、あるいはいわゆるロックトイン・シンドロームなどの、意思表出が困難な方（以下ロックトイン）が書字想起する際の、主に指先からの微細な動き（荷重移動）を読み取り、そのストロークの組み合わせにより何の文字かを判断。その連続の動作により紡がれる言葉を読み取り、対話のパートナーとして、またご家族・ケア従事者の通訳として活動しています。介助付きコミュニケーションの指筆談と呼ばれる技能のジャンルにあたりますが、実践に留まらず、そのメカニズムの解明及び技能のデバイス化、普及・啓発を目的とするところを独自のものとし、「ヨミトリ（名）」、「ヨミトル（動）」、「YOMITOL（英）」、また、デバイスには「ヨミトリ君」の固有呼称を使用しています。

活動はロックトインの状態にあるご本人及びご家族・ご支援者の依頼に基づいて行っているので完全に自発的ではありませんが、支援は基本無料で行っており、日本語のボランティア活動に当たります。

約 30 年間、外国語通訳・翻訳の仕事に携わってきましたが、2011 年の東日本大震災で宮城県の特別支援学校の生徒さんや障害者支援施設の応援・交流活動をきっかけに、意思表出に困難を持つ方、特にロックトインの状態にある方の存在を初めて知り、以来、「あなたの思いを聞きたい」「あなたがわかっていることを伝えたい」という思いで、勉強や実践を始めました。今年でちょうど10年になります。

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことだと思います。
当事者の方々の「自分がわかっていることを伝えてほしい」という願いを何とかして多くの方に届けたいという思いで試行錯誤してきましたが、在野の活動には限界があり、私の発信力も乏しく、その期待に応えられないことがもどかしく、いつも本当に申し訳ないと思っていました。
そんな折、対人援助学会のことを知り、対人援助学マガジン勉強になるなーと楽しみに読み始め、学会員ならだれでも書けますという記載を発見してお心の広さに驚愕・感激し、しかも学会なのに難しい入会資格なく4000円という良心的な年会費で入会できるなんてウヒョー、すみません、一所懸命こつこつやっていると良いことがあると、対人援助学会と天の采配に感謝しながら、ワクワクで入会申込みをした次第です。

今号では、ヨミトリの技能を獲得した経緯の概略と現在の活動について、また、活動を通して感じること、課題点、今後の展望について書きたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

2.介助付きコミュニケーション指筆談との出会いから、その技法の獲得・ヨミトリとしての実践・デバイス化まで

2011 年は、約 30 年間の外国語通訳・翻訳業務、ボランティア活動を経て、諸々の事情で、別の媒体でのコミュニケーション支援の活動を模索していた時期でした。東日本大震災が発生し、当時主宰していた国際交流グループから被災地支援の活動を行いました。

翌 2012 年に、支援活動の一環で、米国からの支援ギフトを宮城県の特別支援学校へ届けたことから同校の生徒さん達と出会いました。重度の重複障害児のクラスで、意思疎通ができない生徒さん達とのふれあいを通し、「生徒さん達の思いを知りたい」という強い希望を持ち、その可能性の模索を開始しました。

2013 年、國學院大學柴田保之先生と重度障害者が主宰し語る「きんこんの会」に参加し、指筆談を初めて見ました。支援学校の元教員の方が脳出血により閉じ込め状態となってから再び意思表出できるまでを追ったドキュメンタリー映画「僕のうしろに道はできる」を知り、同映画の外国語版字幕制作協力を開始し、翻訳作業の調査として、閉じ込め症候群、遷延性意識障害等についての文献に触れました。また、東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の学習会に参加。脳卒中支援NPO法人ドリーム・障害者自立支援団体AJU等でのボランティアを始めました。2014 年から、前年のきんこんの会参加時に知り合った愛知県在住のロックトインの状態にある方のご家族のご好意で、指談の練習をする機会を得て、1 ヶ月に 1 回のペースで定期的に訪問を開始しました。他に、ボランティア活動を通して ALS 患者さんとの交流も始まりました。

試行錯誤の日々から支援・交流のネットワークが広がっていきました。

2016 年頃から、低空飛行ながらも少しずつ読み取る技能が上達。小脳出血の後遺症者の方のリハビリ病院付き添い時の出来事がきっかけで、それまでとは違うレベルで読み取れるようになりました。

その後、徐々に当事者が書字想起する際の微細な動きをキャッチするコツがわかって来て、2018 年から意思表出支援の活動を本格化しました。交通外傷や脳血管疾患により意思疎通できない状態の方の支援に伴い、ヨミトリの固有呼称の使用を開始。ヨミトリの習得を希望される方へのアドバイスを行いました。

2019 年には、重度障害児のデイサービス事業を運営する NPO法人にて、保護者向けのICT機器のアクセシビリティ講座のアシストとヨミトリの紹介を行いました。ヨミトリ支援の原点となった宮城県の支援学校の生徒さん達のことを思い出しながら、成人の中途障害の方だけでなく、子どもさん達の支援にも取り組めたらいいなと思うようになりました。

2020 年 パーキンソン病の進行により 5 年間ロックトインの状態にあった患者さんのヨミトリ支援を開始。同年 NPO 法人ドリーム事務局から、作業療法士で名古屋工業大学にてBrain Computer Interface の研究をされている増尾明氏の紹介を受け、以降、情報交換・研究協力、意思疎通支援に係る活動の助言を受けています。

昨年（2021）は、 一般社団法人 愛知情報教育支援協会代表のIT技術者岡田浩氏の知己を得て、ヨミトリ技能のデバイス化（愛称：ヨミトリ君）に着手。ロックトインの状態にある方々に試作機のテストをしていただき検証・改良を重ね、本年 2 月に意思疎通支援装置として特許庁に実用新案登録を出願。4 月 に登録成り、皆で達成を喜び合いました。

コロナ禍でヨミトリ支援の活動は断続的となっていましたが、間で、サービス担当者会議での通訳も担いました。ロックトイン状態の方の「なんとしてもいきていたい」と書かれた力強いお言葉に、在宅で献身的に介護をされているご家族がたいへん喜ばれ、安心されました。

直近では、 3 月にヨミトリ君活用の応用編として、主に脳血管疾患による後遺症で片麻痺となられた方々にご参加いただいたレクリエーション「ヨミトリ君と麻痺手で遊ぼう♪会」が好評を博し、今月 2 回目を開催します。ヨミトリ君の意思疎通支援は順調に展開中で、当事者の障害の部位・形状、残存運動機能等に応じてスイッチ部分・プログラミング等の調整・改良を継続。論文執筆や学会発表の実績が豊富な増尾氏の助言によりヨミトリ君についての学術的な発表や論文執筆にもぜひ挑戦したく、開発者の岡田氏を筆頭として鋭意準備中です。

一番うれしいことは、ロックトイン状態にある当事者、そのご家族、支援者と共に開発に取り組み、意見やアイデアを出し合いながら、成果を共に喜び合えることです。
一方的にどちらかが支援する、される側でなく、共に取り組む、「ご一緒しましょ！」の理念で、これからも進んでいきたいと思います。

3. ヨミトリの実践の意義と検証、課題

ヨミトリについて、あくまでも個人の見解ですが、これまでの実践を通して得た学びを記したいと思います。

1）主な支援対象者：中途障害の成人（脳梗塞・脳出血等の脳血管疾患及び交通外傷・神経難病による意思表出困難者）

効果・意義

・「言葉が届く喜び」がもたらす生きる意欲・身体機能や意識レベルの向上。
・介護にあたる家族のモチベーションのアップ。
・在宅当事者のケア担当者会議に表出援助者として参加。意識が清明であることを知ってもらうことで、当事者とのコミュニケーションにより積極的に取り組む姿勢を促すことができた。

課題

・家族・医療・ケア従事者の疑問「本当に本人が書いたのか」。
・主たる介護者が知らない情報・想定外の反応が出た際に、認めることができない。
・不随意運動や四肢の強い緊張がノイズとなり、ヨミトリが難しい場合。
・実践者の圧倒的不足（「言いたい時にいてほしい」という当事者の願いに応えられない）
・必ずヨミトリできるとは限らない（ALS で症状が進行している患者さんでまったくヨミトリできなかったケース）。取り間違いも起こる。また、ヨミトリ以前の問題として、体調・メンタル面等に

より当事者が書かないこともある。あるいは同席者があり、言いたいがその場で言えない等。
・書いた言葉が必ずしも本音とは限らない。特に主たる介護者への配慮等。他者と共存して生きる人間の共通の心情であるともいえる。

2)検証協力:脳性麻痺(四肢・眼の動きでイエス・ノー・文字盤ポインティングで意思表出が可能)の 20 代～40代の複数の人にヨミトリを試してもらう。

効果・意義

・日頃タブレット等の使用のみで意思疎通している当事者が、ヨミトリのアシストにより自分でも文字が書けることを知る新たな自己発見と、自力での書字運動への意欲のアップ

課題:

・当事者の書字の経験不足。脳性麻痺の30代女性。タブレットの文字盤(ひらがな)を押して会話できるが、自分で書こうとすると文字が思い浮かべられなかった。インプットなくしてアウトプットなしという思いを強くする。

4.ヨミトリのデバイス化(ヨミトリ君開発)

3. の課題で書いた通り、ヨミトリによって意思疎通が可能になっても、それが人の手を介しての表出であるため、簡単には信じてもらえないことが多いです。指筆談が科学的根拠に乏しいという一部の評価理由で、その実践者が活動の公表をためらったり、家族が指筆談で意思疎通を図っていても当事者のご逝去等でその機会がなくなった後、他者への支援活動に移行せずにそのまま止めてしまう事例等を見てきて、諸般の事情があると思いますが、実践者の圧倒的不足を思うと、社会資源として活かされないことを残念に思ってきました。

ヨミトリについては、そのメカニズムの解明が必ずデバイス化につながると信じ考察を続けてきましたが、長くその機会に恵まれませんでした。そのため昨 2021 年、IT 技術者の岡田浩氏からデバイス化の申し出を受けた時は本当にうれしくて、一人涙しました。披露された試作機はヨミトリの技法の基本である、一方向の選択(タテかヨコ、上か下、イエスかノー)を可視化できる仕組みとなっており、これでヨミトリ支援をしている当事者の方々が他者の介助を受けずに自力で意思表出する一歩を踏み出せるという大きな希望を抱きました。一方、病気や事故による後遺症が重大で、四肢麻痺や発語不能となっている方々の可視化できない指の動きを、果たしてその装置でキャッチすることができるのか、正直、一抹の不安もありました。

不安は杞憂に終わり、パーキンソン病の進行により四肢麻痺となっている A さんは、1 回目のテストにおいて、スイッチ部に手を置く位置や読み取り感度の何度かの調整の後、見事に操作に成功し、いくつかの質問に対する A さんのイエス・ノーの回答は、計測値を表示するパネルではっきりと確認できました。A さんが自らスイッチを操作した証しでした。

いくつかの質問に対する A さんの回答で計測値が一番大きく表示されたのは、横で見守っていた奥様が笑いながら放った「奥さん怖いですか」というユーモアのある質問でした。A さんは他のどの質問より大きく反応し、値を表示するマークはメモリを振り切りました。Aさんの茶目っ気たっぷりの回答に、ベッドを囲んでいた皆が大笑いしました。そしてそのような力の入れ加減の

強弱をAさんが自力でコントロールできたことに、皆、驚嘆し喜びました。Aさんはヨミトリで「とてもうれしい」と書かれました。

ヨミトリでAさんに感想を聞くと、「おすのがとてもむずかしい、すごくちからがいる」とのこと。確認してみるとスイッチに触れる手の位置がずれていたことが判明し、岡田氏がすぐ調節。「いまはとてもかるくおせた」とAさんがコメントしてくれるなど、実際に当事者の方の感想や意見を聞きながら、デバイスの検証・改良ができ、ヨミトリとヨミトリ君の良い連携も確認でき、次のステップに弾みがつきました。

その後、コロナ禍でテストの中断を余儀なくされましたが、Aさん用のヨミトリ君の改良・調整は順調に進み、いよいよ奥様の操作実習と実機の貸出がスタートします。とても楽しみです。

交通外傷のBさんは、受傷から約 20年になります。懸命なリハビリにより、一部自力での食事や、外部からの作業指示に反応できるようになってきましたが、声かけや促しなどの他者からの指示がまったくない状態で作業的な動きをすることにまだ大きな困難がありました。

Bさんは初回のヨミトリ君テストで、多少の手の位置の調整等の後、あっけないほどすぐにスイッチを操作しました。年齢もまだ 40 代前半で、事故前はゲームを好んでやっていたという経験からか、スイッチの押し分けも難なくこなし、ヨミトリで書いてくれた感想は「とてもかるくおせる。どういうしくみになっているの」と、関心がすでにそのメカニズムに行っていて、岡田氏、テストに立ち会ったご両輪を驚愕させました。A さん同様コロナ禍によりテストが中断となっていましたが、直近の支援では、岡田氏自作のPCゲームを見事にスイッチ操作でプレイされ、20余年ぶりのゲーム王復活！と、B さん、同席者皆で大喜びし、当日同席できなかった支援仲間に早速その快挙が報告され、お祝いのメッセージが多数寄せられました。この後、スイッチで文字盤の操作が安定的にできるようになれば、B さんは自分の意思を自力で、言葉で表出できます。展開が本当に楽しみです。

5. ヨミトリとヨミトリ君の今後の展望・願い

ヨミトリを通していつも思うことは、人の思いや考えが他者に見える形でアウトプットされるまでにどれほどのエネルギーと複雑な神経伝達・筋肉の動きを経ているかということです。意思はあっても、それを表す体の動きができない。できないというよりは、表出しているのだけれども可視化されるに至らない、受け手がその表出をキャッチできていない状態といえます。ヨミトリとヨミトリ君にはそれを解決できるケースがあります。もちろん課題はありますが、各分野で活躍される皆様と情報、技能、技術をシェアしつつ、意思表出に困難を持つ方々の語る言葉を伝えていきたいです。当事者の方との間により一層の信頼関係を築くことで、技能と技術の両面から更に一緒に発信していく取組みを続けていけたら幸いです。

ヨミトリの実践に関わることですが、ご家族や支援者からのご本人に関する性格や経歴等の情報は、ヨミトリの大きな参考になります。意思疎通において長い間閉じ込められた状態にあった

方がヨミトリによって言葉が届けられるようになればメッセージが溢れ出るのだろうと思いがちになってしまいますが、必ずしも多くを語られるとは限りません。「言いたいことは特にない」とか「どうでもいい」といった言葉が出ると、ご家族も、せっかく言える機会なのにもったいないと、がっかりされたりします。私自身も「本当は言いたいことがあるのに我慢しておられるのではないか」と思いを巡らしたりしてしまうのですが、必ずしもネガティブな感情や受け身的な心情からの言葉ではないようで、ご家族からよくよくお聞きすると「もともと全然喋らない子だった」とか「お父さんは、いつも、『それでいい』としか言わなかった」など、多くを語らないことが自然な姿であることがわかったりします。必要があればきっと話してくださると思いますし、いつ、どういう状態でなら話せるのかといった配慮も必要です。ロックトインの状態にある方は全介助の必要な方がほとんどで、体調の悪化や事故が起きないよういつも介護者に注意を以て見守られている状態です。安心を感じられながら、ヨミトリでプライバシーについて語られる方もいます。ヨミトリを通して意思が伝えられ、「ここだけの話」ができるという日常感を持っていただけることで、心の安寧や、リラックスした状態からの身体機能の改善につながっていったらいいなと思います。

本投稿にあたり、A さんの奥様がメッセージをくださいました。夫は「進行性の難病ですが、最近の夫の表情や手足の動きには驚くばかりです。ヨミトリやヨミトリ君で意思を表そうとする時、まるで話しながら手を動かそうとするように口もすごく動かしています」。

初めて指筆談を体験した 2013 年からの悲願だったヨミトリのデバイス化が実現し、まだまだ改良の余地はあるものの、大切な人の思いをキャッチする方法を技能と技術の両方から提供できる環境となったことが、当事者の方はもちろん、日々見守り介護されているご家族にとっても大きな喜びと希望になっていることを知り、活動を続けていてよかったとしみじみ思います。

No Promises. Just Possibilities.（確約はない。でも可能性はある）

閉じ込め状態から回復して、現在は啓発活動に従事するイギリスの Kate Allatt氏の言葉です。ロックトインの状態にある方との意思疎通は不可能とあきらめてしまわずに、希望を持っていただきたいです。ヨミトリにトライされ上手くいかず悩まれる方に対し、当事者の方が「思いを知ろうとする、繋がろうとしてくれること自体がうれしい」と書かれたこともあります。

これからも、わかっているのにそれがまだ明らかになっていない方、そしてその思いをなんとか知ろうと、コミュニケーションの方法を探しておられるご家族や支援者の方と一人でも多くつながって、一緒に意思表出に取り組んでいきたいと思います。
ご一緒しましょ！

*****＜プロフィール＞

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体ご一緒しましょ代表。NPO 法人ドリーム理事。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。

【ご一緒しましょHP】https://www.goisshoshimasho.com/



原田牧場
Note
Page 9

原 田　希

先日 祖母が亡くなり、祖母の生前の言葉を思い出すことが増えました。「お母さんが早くに亡くなったあんたらが可哀想やったから、母親みたいに教育は出来ないけど、食べる事だけは困らんようにしたつもり」と言っていたとおり、祖母の言葉は、教育さておきのストレートパンチでした。思ったそのまんま。なぜにそんなことを言う？ナンバー１は「あんたは結婚できひんわ、そんなにひどい顔（アトピー）なんやから」でした。
知ってるし。そんなんわざわざ追い討ちかけて言う必要ある？ イラッとしてまた悪化しそうでした。まあでも、祖母世代の感覚としては真実（器量よしならすぐ結婚できて苦労はしない）なんやろうな。別に結婚は目標にしてないけど、見た目マイナスの分、内面の良さ、能力（技術）、笑顔（笑い）を育てて、自信をつけないとひとりで生きてもいけないなぁ。仕事もやらなあかんし、これは大変やなぁ。と社会人になったばかり、はたちの私は考えました。もし母が生きていたら何と言っただろう？と想像してみます。
「こんな風に産んでごめんね」と言ったかもしれない。「充実した日々を送っていれば自然に治ってくるよ」「見た目は関係ないよ、希ちゃんのいいところを伸ばそう」と優しい言葉で励ましてくれたかもしれない。けど、どうなんかな？ 気休め言うてもなあ。（ 想像の母に失礼（笑）） それに比べて、正味しかない祖母の言葉は、ストレートに突き刺さり傷付きもするが、間違いなく私を奮いたたせる。家族にひとり、こういう人が必要なんだな、と思ってからは、牧場家族にも正味で接しています。

結婚できない、と言われていた私ですが、正味を話して、それでもいいよ！と言ってくれた夫と結婚しました。難儀な体質が遺伝すると思うと耐えられないので、子どもは産まない選択を希望している。けれど、仕事は熱心にやるし牧場は今まで以上に盛り上げるよ、と。女性の役割は子どもを産むだけじゃないと一番わかっている自分が気にしているのはやはり子どものこと、夫の曾祖父が開墾した牧場の先ゆきを思い、全部を話してから、と思いました。恐らく…単純に牧場に人手が欲しかった夫は、いいよ！と即答したんだと思いますが、ずっとひとりで背負ってきた荷物をホイっと持ち上げてもらった気持ちになりました。

田舎は地域のこどもたちをみんなで見守る意識が高い（楽しみにしている）ので産まない。と言うと、なんで？と言われます。子どもは？とたびたび聞かれます。牛になぞらえて、産まなかったら廃用だぞ、と悪い冗談を言う農家のおやじもいます。近いうちに使うでしょう？と余った排卵検査薬を親切でくれた若妻仲間もいました。悪気はなく、みんな子どもを楽しみにしてるんだなぁ。と思います。世の中の「たいてい」からはずれると、説明が大変だなと思いますが、いやな気持ちにはなりません。

自分に子どもはいなくても、地域として子どもの食育を考えたり、基幹産業である酪農と環境をどう残していくか？を考えて実行します。月一で全戸に配布される役場だよりには、小学校、中学校、高校、それぞれのお便りが入っています。今月の行事、先月の授業の様子、地域の人なら誰でも参加していい参観日もあります。地域の文化祭には子どもたち全員の作品が並びます。こんな地域だから私も子育てのはしっこに寄り添わせてもらえています。

夫とは、実質的な子育てはない代わりに、酪農や地域に根付いてくれる人の面倒をみていこう、と話しています。特に道外から来てくれる単身者、私たちとは親子ほど離れている二十代の女性たちです。仕事とは別に、ちょっと愚痴をこぼせたり、ときどき夕食をを一緒に食べて団欒する場所としてコミュニケーションアパートなるものを建て、単なる大家さんをやっています。家庭菜園でとれたものを配布したり、バーベキューをしたり。仕事の時はクールな私の別の顔、大阪のおばちゃんを発揮する場です。このアパートと大阪のおばちゃんカの話はまたいずれ。

そんなことで、祖母からくらった痛いストレートパンチからなんとか奮い立ち、誰とも比べない自分の道、内なる充足感を感じるようになれたこの頃ですが、身内の衝撃的な言葉というのはいつまでも胸に残り、良くも悪くも作用すると思います。他人の言うことならば、私の事をよく知らないくせに、と気にも止めないことでも、身内となれば違う。今となっては、祖母の言葉の意味を聞くこともできませんし、聞いたところで、そんなん言ったっけ？ 忘れたわ、と悪びれもしない気がします。言葉を投げる方はそんなもん。受け取る側が自分のいいように意訳したら生きやすいと思います。

晩年、祖母は「長生きはいいけど、まわりの人がどんどんいなくなるのは寂しいわ。あんたも遠いとこにいるし。実家で一緒におってくれたらなあ、と思うわ。でもこれはただの愚痴やで。ほんまにそばに居てほしいなんてこれっぽっちも思ってへんよ、北海道でいいように暮らしてるやから。ただ愚痴が出るだけ。」と言っていました。
「あんたは結婚できひんわ、そんなにひどい顔（アトピー）なんやから」という暴言も、いつまでもそばにいたらいいよ、と意訳してみます。
ほら、おばあちゃんに抱きつきたくなってきますね！

筆者　原田　希　ハラダ ノゾミ　　1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道へ移住 自身も酪農家に
2017年 北海道農業士に認定　北海道指導農業士の夫とともに、
新規就農者支援や女性農業者向け勉強会のお世話係担当



対人援助学マガジン読書会報告

対人援助学マガジン読書会（第 5 回）実施報告

2022 年 5 月 20 日に第 5 回目の「対人援助学マガジン読書会」をオンライン（Zoom ミーティング）で開催しました。

第 5 回の指定図書は、西川友理さんの「福祉系対人援助職養成の現場から」でした。西川さんの連載はマガジン創刊とともにスタートしており、これまで一度の休載やタイトル変更もなく連載を継続されています。

そんな「福祉系対人援助職養成の現場から」の連載のきっかけや、継続連載の秘訣をお聞きする機会となりました。また、西川さんと同じく専門教育機関で援助職養成に関わっている人や、現場で実習を引き受ける施設側から参加して下さった方もおられ、援助職養成の現場の今について、多面的かつ活発に話し合われる場となりました。。

第 5 回読書会指定図書執筆者：西川友理さん

白鳳短期大学ほか複数の専門教育機関で保育士・社会福祉士等の対人援助職の養成に携わるとともに、現任者向けの福祉従事者研修の講師も務め、広く援助職の養成・教育に関わっている。マガジン創刊以来の連載である「福祉系対人援助職養成の現場から」では、学校での教育から実習にまつわる事柄など、具体的なエピソードとともに援助職養成の現場の悲喜こもごもを伝えている。

（編集部）

◆第 4 回執筆者トークライブのご案内◆

対人援助学マガジン執筆者トークライブ（オンライン）を下記の要領にて開催いたします。

執筆者トークライブは、執筆者と読者が顔を合わせる機会を作るとともに、執筆者の連載テーマについて書ききれない思いや余白について思い切りお話頂く機会を作れたらとの思いで企画しました。フロアとの意見交換も行いながら、“ライブ”での展開と交流を楽しみ、互いに学びを深める機会になればと思っております。

第 4 回執筆者トークライブの話者は水野スウさんです。水野さんは「きもちは、言葉を探している　紅茶の時間とその周辺」と題して、マガジン第 2 号から連載を開始し、週に一度誰でも無料で参加できるオープンハウス「紅茶の時間」やその周辺にあるさまざまな活動に関して連載を続けておられます。その活動の原点である「紅茶の時間」は 30 年を優に超えて継続しています。

対話（平話）を通した平和の実現に向け、各地での出前講話や「わたしとあなたのけんぽう Book」、「たいわけんぽう Book+」の執筆など、幅広く活動をしておられ、2018 年には第 24 回「平和・協同ジャーナリスト基金賞　荒井なみ子賞」を受賞されました。

ロシアによるウクライナ侵攻や、その影響を受けた各国の反応から、人々の日常が脅かされ、平和のあり方が改めて問われています。対話を通して平和を作るという、小さな取り組みを長年続けてこられた水野さんのお話をお聞きし、また参加者の皆さんと対話することを通して、時代の揺れの中にあっても平和を希求する道を探っていきたいと思います。

皆様のご参加をお待ちしております。

期日：2022 年 8 月 19 日（金）　21 時から 23 時

場所：オンライン（参加申し込みをされた方に Zoom の情報をお送りします）

定員：50 名程度（先着順）

話者：水野スウ氏　　連載「きもちはことばを探している」

申込方法：

お申込みはこちらのリンクから参加申込フォームに必要事項を記入して送信してください。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングに参加するために必要な情報をお知らせ致します。

編集部：大谷多加志

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

新規連載が一本、次回からの打診も一件と、相変わらず順調なマガジンの編集長です。

いよいよ次号で 50 号。記念に何か特集でもと考えそうですが、そんなことをするとみんなの負担が大きくなるので、多分何もやりません。このペースで13年目を迎えるまでになってきたのです。

世間はとかくイベント好きというか、お祭り好きです。でもそれをやると「祭りの後」が必ずやってきます。日常を祭りの後にしないためには、祭りをやらないことです。祭りには羨ましいところもあるのですが、日常に勝るものではありません。日常を豊かに、日々が祭りのような華やぎと充実感に充ちていればその継続は実現できます。

長寿化社会に生きる晩年を、孤独な老後などにしないための工夫は、継続という言葉の中にあるように思います。簡単にリタイヤなどを口にするから、素人高齢者になってしまうのです。サッカーのカズのように、昔のスピードやキレは無くなっても、次世代の邪魔はせず現役を続けているのは素敵です。

＊

最近、「若く美しくなったソクラテス」という林竹二氏の古い本（1983年刊）を読んでいます。東北大学退官最終講義や神戸・湊川高校（定時制）での公開授業が収録されています。

私は自分が「ソクラテス・・・」などとタイトルされたものに手を出すイメージは全くありませんでした。哲学に関心を持った青年期もありません。そういう自分で特に問題なく生きてきました。

3．11繋がりの東北の友人達との集まりの中で、このタイトルが何度か話され耳に残りました。魅力的なひびきで、何が書かれているのか想像つかないものでした。Amazon 検索してみると古書で 4000 円以上するものばかりの中、一点だけ500円のものがありました。これが決め手で購入、読めなくても構わないと思っていました。

ところがこれが面白いのです。読みやすそうな湊川高校の公開授業からスタートしたのですが、線を引きたい、意見を書きたいところの山でした。繰り返し読んだり、「そりゃそうなるよ、ソクラテスさん！」と突っ込んでみたり。まさかこの歳で私が・・・、小説とは全く異なった読書体験をしているところです。

編集員（チバ　アキオ）

ヨガの最後には、願うに当然値すると思われる存在や事象の幸せを願う。大切な人、一緒にヨガができたこと、時間を共にしている仲間…。そして、それと並列に「私の苦手な人や私が嫌いな人も幸せでありますように」とも願う。はじめは聞き間違いかと思った。しかし、繰り返しきくうちに、なんだか少しずつ少しずつ納得である。こうして苦手な人、嫌いな人の幸せを願うことで、実際にその思いを軽減できるとした取り組みもあるようだ。確かに「嫌い」と「幸せ」は真逆で、拮抗関係である。打ち消す効果、無効化する効果となり両方は成り立たないという構図もそうなのかもしれない。

そもそもヨガは体をほぐすものかと思ったら、それはただの一部でしかなかった。紀元前からの叡智は「私の苦手な人や私が嫌いな人の幸せ」も願う。こうしたテーマは「結合」であるという。身体と心の統一、大自然と人間の調和。…これは多層的にとらえるシステム論的理解ともよく似ているではないか。対人援助学マガジンも結合の具体化ともいえるのであろう。土に触れる、自然に近い距離で暮らす連載もあることが、またそんな思いを加速させる。

編集員（オオタニ　タカシ）

何となく、編集後記に書いたら良さそうなことを執筆者短信に書いてしまった気もしています。何が短信に書くべき内容で、何が編集後記に書くべき内容か、よくわからなくなってくるというのが、誰にも共感されない編集員あるあるなのかもしれません。

人生 100 年時代という言葉が、編集会議で話題にあがりました。私は今 43 歳なので、ようやく人生を折り返したかどうかという程度ということになります。この 100 年の間に、時代もどんどん変化していくわけで、若いころに身につけた資格や知識を頼りに人生を走り切ろうと考えるのは、もはや非現実的かつ無謀な選択と言わざるを得ないのかもしれません。

何も変わらないものはない、と考えれば、自分自身の役割も変化していくと考えた方が自然です。小学校時代、忘れ物の多さと宿題をやらないことで有名だった私が、

今教職についているというのも、なんだかおかしな感じも巡り合わせです。人に教える、伝えることの難しさと面白さを、失敗と試行錯誤を繰り返しながら味わっている毎日です。

というわけで、読者のみなさま。読者から執筆者への役割代えもぜひご検討ください。必要なのはご自身の意思と決断だけです。ご連絡をお待ちしております！

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻49号

第13巻　第1号

２０２２年６月１５日発行

http://humanservices.jp/

第50号は2022年9月15日
発刊の予定です。

原稿締切2022年8月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

2022年5月、京都国際マンガミュージアムで、緊急展示する「平和への１００の小さな扉」展に、本誌連載中の篠原ユキオから誘われた。彼は50年付き合いのマンガ仲間で、2015年にはニューヨークのギャラリーで一週間ずつの個展をしたこともある。

私も元々はヒトコマ漫画を専門に描いていたのだが「木陰の物語」を描くようになった2000年頃から、徐々にヒトコマ漫画への意欲が減退して描かなくなった。FECOという国際マンガ集団日本支部メンバーなのだが、ヒトコマ中心のそこの活動にも消極化していた。

今回の表紙マンガ、サインをみていただくと分かるが、描いたのは1976年である。「同人誌ぼむ」に「傭兵」シリーズとして描いた一枚だ。雇われた戦場でスナイパーが、故郷の母親に「母さん元気かい？僕は元気だ」と書いた後・・・という作品。

ロシア兵の母親達の思いのニュースが重なった。そして人間はいつまでたっても、男っぽい馬鹿が止められないのだなぁと思った。私は勇ましがる奴が大嫌いだ。

告知

2022年6月1日から一ヶ月間、大阪梅田の商業施設ＮＵ茶屋町プラスで、「平和への１３０枚」展が行われている。そこには平和と家族がテーマの「木陰の物語（掛け軸版２作品）」も展示されている。関西の方、お時間があったら阪急梅田駅２分ほどの場所です。スマホで調べて、どうぞお出かけ下さい。

団士郎　(2022/6/15)